ISSN 1348-8384





Takushoku Language Studies

2021.3

No. 144

拓殖大学 語学研究

2021年3月

第 144 号

目 次
〈論文〉
『漢城新報』日本語面記事の一考察伊藤 知子(1)
Exploring Language Learning Beliefs and Strategies: In Reaction to a CLIL Course ············居村 啓子(23)
Japanese Object Honorification and Agreement ······大野 英樹(43)
発話における指示表現のレトリック性
初級日本語における 「お+漢語」の扱い方について小林 孝郎 (79)
蜃気楼とハーンの宗教哲学先川 暢郎 (97)
死者に捧げる詩の言葉 フィリップ・ジャコテの場合 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
日本人英語教師の英語に対する 日本人大学生の英語観····································
英語の付加疑問文の記述に関する諸問題: 文法、音声、意味の観点から渡辺 勉 (185)

〈研究ノート〉

古文における文の構造の図解…………阿久津 智 (241)

台湾語 "有 + VP"

----「言語主体位相の叙述」説の検証・・・・・・・・・・・浅井 澄民 (257)

〈解題・翻訳〉

翻訳:オネジモ・テオトニオ・アルメイダ著

「ヴェラ・クルース島」から「ブラジル」へ ……浜岡 究 (271)

拓殖大学研究所紀要投稿規則

拓殖大学言語文化研究所 『拓殖大学語学研究』執筆要領 … (305)

Takushoku Language Studies No. 144

Contents

(Articles)
One Considerarion of the Japanese Aspect Article of "the Hansung Shinbo" Tomoko (1)
Exploring Language Learning Beliefs and Strategies: In Reaction to a CLIL Course IMURA Keiko (23)
Japanese Object Honorification and Agreement ······ONO Eiki (43)
Rhetric of Referring Expressions in Speech Utterances — A Pragmatic Perspective —ONODERA Michiko (57)
How to Handle "O + Chinese-Derived Words" in Elementary JapaneseKOBAYASHI Takao (79)
Mirage and Hearn's Religious Philosopjy ······ SAKIKAWA Nobuo (97)
L'ecriture poetique de deuil chez Philippe Jaccottet NAKAYAMA Shintaro (129)
A Survey-based Study of Japanese University Students' Attitudes toward English of Japanese English Teachers
Problems in Describing Tag Questions in English: Their Syntax, Phonetics and Semantics WATANABE Tsutomu (185)

⟨Study Notes⟩

Illustration of Sentence Structure

in Japanese Classics AKUTSU Satoru (241)

U"有"+ VP in Taiwanese ·············ASAI Sumitami (257)

⟨Answer • Translation⟩

Tradução: *De* "Ilha da Vera Cruz" *a* "Brasil", por Onésimo Teotónio Almeida ··········· HAMAOKA Kiwamu (271)

Submission of Manuscript

Instructions for Contributors

『漢城新報』日本語面記事の一考察

伊藤 知子

要旨

『漢城新報』は1895年2月から1906年7月まで朝鮮で日本人により発行された新聞である。日朝二言語新聞で、対象とする読者は日本人と朝鮮人の両方であった。紙面構成は1.2 面が朝鮮語面、3 面が日本語面、4 面が日朝二言語の広告面となっている。今まで韓国では朝鮮語面の記事についての研究はいくつかみられるが、日本語面である3 面についての研究はされてこなかった。現在のところ日本語面の現存が確認されているのは1895年9月9日から97年2月15日までである。本稿ではこの期間の日本語面の全記事を対象として調査した結果を報告する(1)。

キーワード: 『漢城新報』、日本語面、朝鮮語面、政治関連記事

はじめに

創刊時に日本外務省の機密費を得た『漢城新報』は、その後も毎月補助金を受けており、外務省の機関紙的な性格をもっていた。そのために論調は政府と一体化し日本の対韓政策と密接な関わりを持っていた。

『漢城新報』の研究は 1990 年ごろから言論学と新聞学の分野ではじまった。これらの研究は『漢城新報』が「日本の韓国侵略を合理化するための広報機関紙として発刊されたためその内容については批判されて当然」⁽²⁾だという見方が一般的であった。文学の分野で研究が始まったのは 1990

年代後半からであるが⁽³⁾、それらは朝鮮語の1,2面と日朝語の4面の広告のみを対象としており、日本語面である3面については研究されてこなかった。その背景には、韓国人研究者にとって当時の日本語表記を解釈することが困難であることと、朝鮮語面記事に比べ日本語面記事への関心が少なかったことが考えられる。そこで本稿では、これまで研究されてこなかった日本語面の記事を整理し、その特徴について考察する。

日本語面記事の分類

まず、日本語面の全ての記事を、以下の表のように 11 の項目に分類した。

項目	記事数	(比率)	(4)
① 韓国国内記事	255	(4%)	
② 特集	62	(0.9%)	
③ 社告・広告	204	(3%)	
④ 地方通信	193	(3%)	
⑤ 輸出入月表	82	(1.3%)	
⑥ 居留地関連記事	192	(3%)	
韓国政治関連記事	3,152	(50%)	
日本政治関連記事	1,402	(22%)	
海外政治関連記事	519	(8%)	
学校関連記事	167	(2.6%)	
俳壇	76	(1.2%)	

番号がついてない項目の記事は、日本語面と同日の朝鮮語面に朝鮮語で載っているので、ここでは取り上げない。比率を見るとわかるように、それらは主に韓国・日本・海外の政治関連記事であり、全体の80%を占めている。したがって、ここで扱うのは残りの20%ということになる。政

治記事が多いのは『漢城新報』が政治色の濃い新聞であったことを示している。

① 韓国国内記事

韓国国内記事とは韓国の国内で起きた出来事に関する記事である。以下には例として韓国の景気の動向に関する記事を挙げる。

- (1)「泥峴の閉店」(前略) 然るに同種の店数は増殖して金融は滞り且つ韓人の購買も近頃著しく減したるより何れの店も不景気を歎ぢ間には大店にして店を閉し資本を負ふて帰国せんとするものあるやに聞けり(中略)忍耐久しきに持して其信用を得顧客を惹くに至らば相当の収利を見るは照々たるべし唯一時の不景気を以て店を閉さんとするが如きは居留商民の為に深く取らざる所なり⁽⁵⁾
- (2)「商店の散在」(前略) 京城中は廣濶の處なれば一處に集りて競争し売崩の不利益を観るに至らんより各所に散在して大に顧客を引かば 其利益は却て多からん支那人の如きは所々に散点して大に営利を計り つつあればこれに少し倣ひては如何と云ふ人あり⁽⁶⁾
- (1)泥峴は、当時日本人街があった地名である。商店は一時的な不景気で店をやめるべきではないという内容である。
- (2)日本商人は同じ種類の店を連ねて競合するが、それよりも支那人のように離れて店を出すことを考えてはどうかという内容である。

これらの記事は日本商人への注意喚起の意味と、漢城の景気の動向を伝えている記事とも読み取れる。この他に、漢江の洪水、コレラ患者などの災害、伝染病などの記事も見られる。

② 特 集

特集とは、ある特定のテーマについて2回以上連載した記事である。

朝鮮沿海各港誌	1985.9/9, 11, 13, 15, 17, 19, 21, 23, 25, 27, 29
朝鮮第一の米穀輸出港	9/23, 25, 27, 29
朝鮮雑爼	9/25, 27, 29
セダン 25 年祭りドイツ皇帝演説	11/19, 21
在平壌の日本商民	12/23, 25, 27
支那貨幣制度	1986.2/7, 9, 11, 16, 18, 20, 22
新式主鑑八島	4/25, 27
泥峴と南大門	6/30, 7/2
劉麟錫陳情疏	8/29, 31
咸鏡道事情一班(浦監と北関との関係)	9/26, 28, 30
輸入品特別調査	10/6, 10, 11/3, 10

「朝鮮沿海各港誌」は前半が現存せず、目にすることができるのは連載 11回目からである。これは咸鏡道の各港の情報であり地理、気候、人口、 碇泊所、地方物産、附近里敷、風俗などが詳しく説明されている。

「朝鮮第一の米穀輸出港」には、従来釜山が唯一の米穀産出地だったのだが、木浦の開港で木浦が朝鮮で最も米穀の輸出の多い港になったこと、海産物も釜山から木浦に中心地が動いたこと、そして日本人が朝鮮沿海での漁業をする際非常に便利になったということが書かれている。

このような商業関連の記事としては他に「在平壌の日本商民」「輸入品特別調査」がある。「在平壌の日本商民」の内容は、日本は日清戦争の勝利で多くの商業的新天地を開拓したのだが、平壌もそのうちの一つであるから、平壌の日本商人の現実を知り、研究してほしいというものである。「輸入品特別調査」は日本商業会議所で調査報告した要領である。営業者らに参考になるようにと書いてある。燐寸・洋傘・紡績糸・陶器・玻璃

器・絹反物・紙・煙草・木材及板・竹材・銅・石炭などそれぞれ3年間の 輸入品の種類、産出地、販売価格、需要者の用途、需要者の嗜好、輸入販 売の手続き方法、短所と長所、改良すべき部分、需要者の程度と将来の項 目などに分かれている。

「支那貨幣制度」では、清日貿易に従事する人が知っておくべき内容を 紹介している。「咸鏡道事情一班」は布衣遊子という筆者によるもので. 咸鏡道の港湾、明太、砂金、物価、清の商人、商業、流賊などの紹介なら びに浦盬斯徳と咸鏡道との関係について書かれている。

この他に興味深い記事としては「朝鮮雑爼」で、「荒誕奇怪の言は朝鮮 人の好むで伝ふる處なり乃ち聞くが儘に之れを録す」として慶尚道や咸鏡 道の5つの地域の伝説らしきものを紹介している。

その他. 「セダン 25 年祭りドイツ皇帝演説」は 1925 年の普仏戦争の時 のドイツ皇帝の演説した内容である。「新式主鑑八島 | は軍艦の大きさと 製造過程の説明であり、「泥峴と南大門」は日本人街の道路修理について の内容、「劉麟錫陳情疏」は忠清道の義兵将である劉麟錫による乙未事変、 断髪令に対する陳情書の翻訳である。

③ 社告・広告

社告はその名の通り、新聞社から読者へのしらせである。

広告には広告と特別広告の2種類があり、広告は個人の知らせ(火災時 に助けてくれた人への感謝の言葉⁽⁸⁾, 急用で帰国する知らせ⁽⁹⁾, 帰国の挨 拶⁽¹⁰⁾ など)と、店の広告⁽¹¹⁾ として⁽¹²⁾ 使われた。一方、特別広告は居留 民全体の生活の重要な知らせで、大きく4種類に分かれる。

一つ目は京城日本初等学校関連の広告である。内容は初等学校建築寄付 金(寄付者の名前と値段) (13) 寄贈(寄贈者の名前と品目) (14) 入学希望 者の募集(15) などである。この初等学校関連広告が最も多く掲載された。

二つ目は居留民総代役場が伝える各種知らせである。居留地商業会議所

の議員の選挙(投票,結果)⁽¹⁶⁾,歸朝と渡韓の申請要請⁽¹⁷⁾,暴民被害申請要請⁽¹⁸⁾,湯屋取締規則,消防組規則などの規則改定の知らせ⁽¹⁹⁾,渡韓禁止緊急勅令⁽²⁰⁾,開城と開城付近の地方行政許可の知らせ⁽²¹⁾ などである。これは当時在京城1等領事であった内田定槌という人物から伝達を受け、居留民総代役場が広告を出すという形式になっていた。この特別広告は居留日本人全般に重要な情報といえる。

三つ目は行事の知らせである。天長節や招魂祭などの行事の場所と時間が記されている⁽²²⁾。

四つ目は生活上の知らせである。天然痘の流行により居留民総代役場にて50名無料で施術をする⁽²³⁾、夜学会(勉強会)の知らせ⁽²⁴⁾ などである。広告面を上手く活用し、居留民に各種の知らせを伝えていたことがわかる。居留民にとって生活に関する重要な情報であったと思われる。

④ 各地方の通信

日本語面の特徴の一つがこの地方の通信記事である。これには朝鮮国内だけではなく日本の広島も入っている。掲載された記事の数は 193 本であるが一つ一つが他の記事と比べると分量が多く、非常に詳しく書かれている。これは 1896 年 5 月に作成された紙面改良案にそってのことだと思われる。

紙面改良案とは5月29日に日本公使小村寿太郎が日本外務省宛に送付した「漢城新報改良維持ノ企画」という機密文書のことである。『漢城新報』が創刊されて1年しか経たないにも関わらずこのような改良案が提示されたのは1895年10月の乙未事変に加担した『漢城新報』の主要メンバーに退韓命令が下され、新聞が存続の危機に立たされたためだった。

1895 年 4 月の日清戦争終結後、朝鮮ではロシア軍を背景に閔妃が勢力を増しつつあった。それを恐れた日本は、朝鮮公使の三浦悟桜と『漢城新報』の社長安達謙蔵により計画された乙未事変(閔妃殺害事件)を実行し

た。当初三浦は大院君をかついだ訓練隊のクーデターのように偽装しよう と考えていた(25)。しかし兇行現場にはアメリカ退役将軍ウィリアム・マッ クイ・ダイとロシア人技師サバチンが居合わせており、彼らは日本人の犯 行を自国の領事らに報告した⁽²⁶⁾。そこで日本政府は列強対策のために事 件の真相調査に基づいて関係者を処分するという応急対策を講じ⁽²⁷⁾. 乙 未事変に加担した『漢城新報』の主要メンバーに退韓命令を下して広島の 監獄に収監した。こうして新聞は存続の危機に立たされたのである。

改良案に書かれた各地通信に関する記述は以下の通りである。

「各地通信について仁川、釜山、元山、平壌、開城、大邱 各地にお ける種々のできごとを敏活に報道せしめ日. 韓二文共これを登載し当 邦各地の実情網羅のこすなきなり期マ | ⁽²⁸⁾

ここには仁川、釜山、元山、平壌、開城、大邱の各地の知らせを伝え、 日本語、朝鮮語で掲載し、各地の実情を網羅し記録するとあるが、実際 は、仁川、釜山、元山の通信は見られたが、平壌、開城は少なく、大邱は 確認できる範囲では一度もなかった⁽²⁹⁾。そして日本語、朝鮮語で載せる ようにと書かれていたにも関わらず、各地方の通信は日本語面だけで朝鮮 語面には掲載されなかった。通信の内容は商況、主なできごと(行事、行 政、暴動、伝染病)人口、戸数などである。『漢城新報』のメンバーが所 属する熊本国権党の機関紙『九州日日新聞』には『漢城新報』の記事の一 部がそのまま転載されていたが⁽³⁰⁾ この地方通信は朝鮮各地の出来事を一 つにまとめて日本に伝える機能を果たしていたとも考えられる。

各地の通信がみられるなか。1895 年 11 月 2 日から日本の広島からの通 信が掲載されはじめた。その内容は乙未事変で退韓命令が下された『漢城 新報』のメンバーたちの消息を伝えたものである。

見出しが「広島通信」となっているのは 1895 年 11 月 2 日, 5 日, 9 日,

11日の計 4 回で $^{(31)}$, その後は見出しが特にないまま広島の消息を伝える記事が見られた。なお、同じ内容の記事は朝鮮語面にはみられない $^{(32)}$ 。

乙未事変関連の広島の消息は以下のような見出しで送られてきた。

広島監獄内の実況	1895.12.7
三浦子以下	12.25
広島の現在監者	1896.1.8
広島消息	1.16

12月7日「広島監獄内の実況」はほとんど1段の長い分量で、三浦子 爵以下乙未事変関係者の留置されている広島監獄の状態を詳しく伝えてい る。原文は長文であるが、ここでは箇条書きで紹介する。

- ・監室は独房、広さは畳1枚半ぐらい、洗面所と便所がある。
- ·午前6時30分起床,午後6時30分就寝。
- ・本は3巻までという規則があるが、寛大で何冊でも構わない。毎日看 守が来て書信や本などの要請がないか聞いてくれるため相当便宜がは かられている。
- ・毎日運動は15分ずつ、入浴は2日に一回。
- ・食べ物は差し入れが多く望んだものが食べられている。
- ・皆礼儀正しいため、看守の言葉づかいも丁寧である。

この記事の最後の文章が全てを語っている。

「要するに広島監獄署の京城事件被告人に対する取扱ひ振りは至つて 鄭重にして諸種の便宜を与へあれば入監諸氏の身の上は敢て気遣ふに 及ばざるべしと云ふ!

1896年1月8日「広島の現在監者」では広島監獄に入監している者の 名前が表記されている。

「三浦梧樓 杉村濬 岡本柳之助 馬屋原務本 高松鉄太朗 村井右 宗 藤戸与三 馬来政輔 鯉登行文 石森吉猶 国友重章 月成光 萩原秀次郎 佐々正之 平山岩彦 家入嘉吉 藤勝顕 安達謙蔵 松 村龍起 方野猛雄 澤村雅夫 廣田鷹次郎 成相喜四郎 小田俊光 難波春吉 牛島英雄 宮住勇喜 小早川秀雄 吉田友吉 横尾勇太朗 木脇祐則 高橋源治」

このうちの国友重章、佐々正之、平山岩彦、安達謙蔵、牛島英雄、小早 川秀雄が『漢城新報』のメンバーである。社長の安達をはじめとして主要 メンバーが全員朝鮮を離れたのであるから、新聞が存続の危機に立ったの も当然だった⁽³³⁾。

以上で見たように、地方の通信は各地の実情を伝えるものであり、日本 ではこの記事から直接各地の動向を確認していたと考えられる。また『漢 城新報』メンバーの広島監獄での消息を伝える広島通信は京城の日本人関 係者たちに伝達するためのものであったと推測される。

⑤ 輸出入月表

『漢城新報』の日本語面には、毎月中旬にその前月の京城の輸出入月表 が掲載されている。情報の出所は京城商業会議所で、一カ月に多い時は5 回、少ない時は2回掲載された。輸出入統計額が掲載され、そのなかで輸 入と輸出額そして輸入と輸出額が細別されている。例えば輸入日本産、輸 入外国産, 仁川輸入日本産, 仁川輸入朝鮮産, 釜山輸入朝鮮産, 輸出朝鮮 産などのように記載されている。そして価格や輸出入残額を前年度の同じ 月と比較した表、輸出入重要品を前年度の同じ月と対照した表、今月の輸

出入貨物、品目、価格を細別して掲載し、最後に商況という見出しで京城の商況について述べている。またその月の重要行事と気候についても載せている。この統計をみると当時どのような主要輸出品や輸入品があったのか知ることができ、当時の人々の嗜好物もわかる。京城以外では仁川や釜山、平壌の商況も掲載された。

⑥ 居留地関連記事

居留地関連記事とは朝鮮に居留する日本人についての記事である。実際に記事を見るまえに、まず1895年の日本人居留地がどんな様子だったのかを『安達謙蔵自叙伝』(34) を通して見てみよう。

次の文章は安達謙蔵の妻, 雪子が 1895 年 7 月から 10 月までの約 4 か月 間朝鮮に滞在した時の所感録である。居留地について以下のように書いて いる。

「明治二十八年頃、京城の日本人居留地は、市街の南端<u>南山の麓いったい</u>にて、<u>チンコーカイ</u>という名前の町が一筋、それが<u>日本人商店街</u>であった。日本公使館は南山の中部にあり、その辺は<u>和城台</u>と云って公園式の設備があり、<u>種々の興行物</u>などが時々内地より渡り来で賑わしていた。又<u>本願寺別院</u>等もあり、婦人会の催しもあった」⁽³⁵⁾

当時日本人居留地は南山の麓にあり「チンコーカイ」(泥峴)と呼ばれていた。そこには日本の商店街があり、また公園式設備には時々日本から来た興行物を見ることができた。「本願寺別院」では婦人会も開かれたという内容である。

次は『漢城新報』の新聞社の建物についての記述である。

「新聞社の位置は、居留地の西部南山の麓の小高き場所で、公使館と

は七.八丁も離れていたと記憶する。新聞社の建物は、元朝鮮の上流 階級の住居と覚しく、門は壮大なる桜門づくり、邸内は七、八百坪も あるかと思われる広壮の建築で、数十の室あり、廊下あり、庭園あり て、新聞社の業務及び、これに携わる幾十の人々、皆この邸内に起居 していた。自分らの室は、庭内一段高き所に別棟となり、三室の小部 屋があって、一部屋の大きさは畳二枚半敷ほどの、至ってささやかな ものであった。|⁽³⁶⁾

新聞社の位置は日本人居留地の西側。南山の麓にあり、公使館まで7. 8 T⁽³⁷⁾ 程度の距離であったという。新聞社の建物は以前安駒寿の住居で あった。安駧寿は当時度支部協弁であったが、後に度支部大臣に就任した 人物である(38)。建物は寺社にあるような門、数十個の部屋、廊下、庭園、 新聞社で仕事をする数十名がここで起居していたという。大きさは700. 800 坪程度ということで非常に大きい家であることがわかる。

そしてこの文章には、当時の朝鮮人の生活の様子が垣間見られる。

「初秋ともなれば、空の色すぐれてうつくしく、紺青にすみわたる中 を、 雁の幾連れかが北韓山のかなたに渡るを見るころ、 南山の茸狩が 催されるのであった。鮮人は、初茸は採らぬ慣わしとかで其のために や、南山の松林は到るところ茸の香りが鼻を打ち、傘の如き初茸は忽 ち各人の籠にいっぱいになるさま、内地人の夢にも思い及ばぬよう な、山の幸を満喫するのであった。又このころ、畑のとうがらいもい ろいろ採集して、屋上に干してあり、山上より見はるかせば、空の青 さと唐辛の紅さと京城の秋を色どる第一の美観であると、感心したこ とを覚えている。南山にはところどころ清冽の泉わき出て渓の流れを なし、この水は附近いったい住民の飲料水となり、又洗濯の用水とも なっていた。婦人たちは毎朝頭上に洗い物を満載してきて、渓水にひ

たし、棒を以てたたき、洒し是れを附近の芝原などに広げて乾かし、 夕刻また頭上に乗せて家路に帰るを慣わしとしている。夏より秋にかけての毎日を、朝鮮婦人の仕事の大部分は、この洗濯にあけくれるのであると聞いた。」 (39)

初秋となれば茸狩りが行われるが、朝鮮人はその年初めて出た茸は採らないという慣例があり、南山の松の一帯に茸がある光景は日本人にとって国内で信じられない光景だと述べている。そして唐辛子を屋上で乾かす風景も見られる。そして南山の所々に湧水が出て住民らの飲料水となり洗濯用水ともなるのだが、朝鮮の婦人らは毎朝頭の上に洗濯ものをのせてもってきて水につけて棒でたたいてそばの芝生でそれらを乾かし、夕方とりに来るのが習慣だと述べている。

このような当時の日本人居留地の姿を背景として居留地関連記事を見ていこう。記事を整理して「日本人居留民の生活に密着した記事」「居留日本商人のための情報」「各種統計」「朝鮮紀行、風土等の記事」「日本のその他の記事」の5項目に分けてみた。

a 日本人居留民の生活に密着した記事

節分,端午,盂蘭盆會などの行事開催の知らせ,女性演劇,ジャグラーなどの日本一団の朝鮮公演の知らせ,赤痢,天然痘などの悪疫の注意喚起など生活に必要な消息を伝えている。ここに出てきた盂蘭盆會の場所が前述した本願寺別院で開かれた。そして女性演劇の記事は1896年6月から8月に数回に渡りみられ,ジャグラー一団の公演も8月に3回程度掲載された。この公演場所が和城台であった⁽⁴⁰⁾。

b 居留日本商人のための情報

ここで扱うのは朝鮮に居留する日本人商人へ向けて書かれた記事である。

「海外に於ける日本商民 |

(前略) 予輩新聞記者の如きも本国内地に在りては施政の主義方針若 くは其他の事に就き各々其見る所を異にし反眼仇視必死となりて互ひ に相論駁すと雖も其一朝共に海外に出づるに当りては同心協力其論ず る所其報ずる所唯だ其本国及び其同胞の名誉利益を主とせざるべから ず是れ何ぞ予輩新聞記者のみに限らん商業家に於ても亦た此くの如く ならざるべからず本国に在りては各々其の利を争ひ時に相衝突し相搐 排し互ひに其勝敗を決することありと雖も其一たび海外に出で共に商 業を営むに当りては須らく其見る所を遠大にし務めて同胞相互の衝突 を避け依り相接るけ其地に於ける本国商業の拡張を図らざるべからず …予輩は我商が此際此余沢に惰眠せず相依り相援けて益々其歩武を進 め以て此地に於る本国商勢の一大伸張を企図せんことを望む(41)

「昨今の不景気」

(前略) 而して国喪、断髪、地方の不穏は是れ一時の現象に止まり之 れより生ぜし商況不景気は遠からずして挽回の期来るべければ吾人は 我が商人が昨冬我征清軍の遼東半島に冬籠りせし難苦を思ひ能く其蟠 根錯節に堪へ将に来らんとする商勢回復の時機を待たんことを望 tr (42)

引用文「海外に於ける日本商民」は日本商人らがより力を合わせ団結し なければならないという趣旨の内容である。引用文「昨今の不景気」の内 容は今朝鮮では閔妃の国葬、断髪、暴動など状況が良くないが、少し経て ば挽回の機会がおとずれるから日清戦争の時も遼東半島で冬に耐えたこと を思い出し商業の勢力が回復する時期を待つようにというものである。こ れらは新聞記者が直接商人らに訴える口調で書かれているのが特徴であ る。それほど『漢城新報』が商業にも力を入れているといえる。これにつ

いては『漢城新報』の主要メンバーが所属する熊本国権党について知る必要がある。熊本国権党は国権拡張を一大綱領として活動する政治団体である。『漢城新報』の社長安達謙蔵をはじめとし主筆の国友重章、編集長の小早川秀雄、編集委員の佐々木正などは熊本国権党のメンバーである。熊本国権党の機関紙である『九州日日新聞』には本稿でとりあげる期間に以下のような主張を掲載していた。

1895年4月の日清戦争終結後,『九州日日新聞』は朝鮮の独立扶植は日本の義務であり権利であると主張していた⁽⁴³⁾。7月の朴泳鎬内閣の失敗により閔妃勢力が力を増し、10月に乙未事変が起こり、ロシア勢力の台頭が顕著になっていった。日本政府が日露共同して朝鮮を保護するといういわゆる第二期政略をとっていくことに対し、「協同とは名ばかりでロシアの思うままになる」と抗議をしめし、非常に「遺憾」だと述べている⁽⁴⁴⁾。続く1896年5月1日「形を避けて実を収めよ」では、政治上の事で、勢力争いや衝突を避け、もっぱら社会上の各事業に尽力し、その勢力を朝鮮に植え付けていくべきだと主張している。その後11月に露韓合同条約が締結されると、日本は対韓事業の経営を拡張していくべきであるという内容の記事が掲載された⁽⁴⁵⁾。

このように熊本国権党は本稿での対象期間に朝鮮半島での経済的な勢力拡張に尽力していることがわかる。

そして朝鮮各地の商況を伝える記事も多い。

本稿が調査対象としている期間(1895年~1897年)の不景気の原因は科擧の廃止と断髪令の強行、地方暴動のせい⁽⁴⁶⁾だと推測している記事もある。また日本の木綿が1894年から出現し、95年に進歩して主な輸入国である英国、印度を抜いたこと⁽⁴⁷⁾、日本の粗悪品に注意をする記事⁽⁴⁸⁾などからは、当時の日本木綿が好景気であったことがわかる。

このほか商業に関する同業者が居留地で協力を促す集まりも作っていた ことも確認できる。それは商話会⁽⁴⁹⁾、質屋組合。⁽⁵⁰⁾ 仁川商業会議所⁽⁵¹⁾ な どである。

c 各種統計

各種統計は居留民の戸口数, 生死統計, 労働者賃金, 営業別増減比較 表、死亡者病名一覧表などである。これらの記録は当時の記録として貴重 な資料であり、上でみた輸出入月表とともに資料価値がある。営業別増減 比較表は京城を中心として仁川、釜山の統計もあり、京城の戸口数は統計 では各日本の都道府県の区分と十族、平民の各男女数まで記録されてい る。ここでは今回扱わないが労働者賃金などは当時のどのような職業が一 日どのぐらい稼げたのかまた朝鮮語が話せる者、話せない者で等差が生じ るなど興味深い内容も含まれている⁽⁵²⁾。

d 朝鮮紀行. 風土等の記事

朝鮮紀行、風土等の記事とは紀行文である。

記事としては長い方に属する。これらの記事が見られるのは 1896 年 10 月からである。

題目	名前	掲載日時
「朝鮮雑話」(一)		1896.10.6
「唐津県通信」(忠清道)	放浪生	11.22
「地方漫遊談」	放浪生	12.4
「関西紀行」	奨業団員 近藤範治	1897.2.1
		2.4
		2.6

「朝鮮雑話」は各表題が、虎・熊・鷲・小独立国・日人官女となってい る。伝説のようなものを聞いたという形式で掲載されている。この文を日 本語面に掲載した理由は何であろうか。

「唐津県通信」と「地方漫遊談」はいずれも放浪生という筆者が書いた

文でこの文の目的は地方の商況視察だと書かれている。各地方の戸敷、土 人の感情(以前は日本人が泊まろうとすると拒否されたが、最近は少し民 心がよくなったなど⁽⁵³⁾)詳しく書かれている。

「関西紀行」は近藤範治と著者名が書かれている。3回に渡り平壌から 義州までの紀行文を載せたものである。目的は今旅行する人、内地行商者 に参考になればと書いたものと言う。

「朝鮮雑話」以外は商業をする人対象の文であることが確実である。「朝鮮雑話」は朝鮮の伝説でも朝鮮に対する知識を知れば朝鮮人との商売にも 役立つと考え掲載したのであろうか。

e 日本のその他の記事

最後に日本国内の消息を伝える、その他の記事をみておく。

大阪の豪商住友家が最高級の下駄を注文した⁽⁵⁴⁾ という記事,札幌の夫婦が今年 68 回目の結婚,離婚を繰り返した⁽⁵⁵⁾ などたいして意味のない記事も掲載された。

そして「三陸海嘯遭難者弔恤金」という題目で日本の三陸地方で起きた地震被害を伝える記事と居留民らの募金情況を伝える記事も掲載された⁽⁵⁶⁾。1896年11月20日には日本の全国の戸口数が掲載された。そして日本でかまどが改良され発明されたという記事⁽⁵⁷⁾と1897年2月15日の「来客新話」は東京から来た知人が新しい故国の消息を持ってきたので読者に伝えるという言葉とともに日本の経済発展、物価騰貴、日本人が一生懸命仕事をする様子、今の内閣が強固である姿などを伝えている。

全体的に見て、居留民に日本の事件を伝える消息は量が少ないことを感じる。先に見たように日本語面の記事の80%は政治関連記事であり、文化的、社会的な情報がこの新聞には非常に少ないと感じた。

おわりに

『漢城新報』の京城における購読者数は、乙未事変(1895.10.8)前には 朝鮮人 400 名、日本人 174 名、計 574 名だったのが、事変後には朝鮮人 450 名. 日本人 186 名. 計 636 名と増加している。ところが政府の講読禁 止措置が取られると朝鮮人 100 名. 日本人 180 名. 計 280 名と朝鮮人が激 減した(58)。これで見ると京城では200人弱の日本人が購読している。『漢 城新報』1895 年 11 月 2 日の記事に 1895 年 9 月 11 日現在の京城および仁 川の居留民の数が掲載されている。それによると京城男1.018. 女515計 1.533. 仁川男 2.857. 女 1.517 計 4.099 とある⁽⁵⁹⁾。京城についていえば乙 未事変以前は 1.533 人中、174 人つまり 一割程度が購読していることにな る。この一割の購読者はどういう人たちだったのだろう。日本語面の 80%が政治関連記事であり、また特集でも政治的記事が多かったことから 見て日本人購読者は在朝日本人のなかでも知識人ではなかったかと考えら れる。この新聞がそもそも外務省の補助を得て創設され、熊本国権党とい う政治団体の支部的な要素を持ち、乙未事変に主要な社員が参加したこと からも非常に政治色が濃い新聞であったことは明らかである。

特集や輸出入月表、居留地関連記事において商用的な記事が多く見られ た背景にも熊本国権党の存在があった。また各地方の通信には『漢城新 報』の主要メンバーの退韓後の様子と無罪放免を知らせる記事が掲載され たことが注目される。

また配達において地方には仁川 42 部、釜山 12 部、元山 4 部、日本各地 80 部. 各地新聞交換 40 部. 計 180 部が配布された⁽⁶⁰⁾ とある。この部数をみ ると京城以外では日本へ一番多く送っていることがわかる。日本に動向を 伝える機能を果たしている。そして実際に『九州日日新聞』には『漢城新 報』の日本語面記事がそのまま一部掲載されていることも確認している。

日本語面が果していた主たる機能の1つは日本に向けて朝鮮の動向を伝えることであり、もう1つは、1,2面の朝鮮語の記事の原文としての機能だったのではないかと思う。

《注》

- (1) 本稿は延世大学博士論文「漢城新報研究」(2020) の一部を日本語にし、 修正加筆したものである。
- (2) 鄭晋錫, 『韓国言論史』, 나남出版, 1990, p. 150
- (3) 『漢城新報』の文学的研究は以下の通り。

김영민, 『한국의 근대신문과 근대소설 2』, 소명출판, 2008 권영민, 「『한성신보』와 최초의 신문 연재소설」, 『문학사상』, 1997 박수미, 「개화기 신문소설 연구」, 成均館大学博士論文, 2005 설성경, 『신소설연구』, 새문사, 2005

布袋敏博,「二つの朝鮮語訳「経国美談」について」,『近代朝鮮文学における日本との関連様相』, 緑蔭書房, 1998

伊藤知子,「『漢城新報』における日本古典『紀文伝』の受容」『新潟大学東アジア学会』、2010.3、第19号

伊藤知子,「『漢城新報』に掲載された日本小説(『日本名士福富臨淵逸 事』)について」, 『国際韓国文学文化学会サイ間 SAI』2011.5, 第10号

伊藤知子,「『漢城新報』に掲載された『拿破崙傳』の原本および『乙未 事変』との関わりについて」, 『朝鮮学報』 2012.10, 第 225 輯

조혜란, 「한성신보 소재 < 조부인전 > 연구」, 한국고전문학회, 2014 김준형, 「근대초기신문의야담활용양상과고전소설의변모」, 고소설연구, 2014. 37 권

- (4) この表は若干の見落としがあるかもしれない。あくまで全体把握を目的 として作成した。
- (5) 『漢城新報』. 1895.9.17
- (6) 『漢城新報』. 1895.10.15
- (7) この他に特集には「朝鮮開国始末」「日清講和 遼東還付始末書」「朝鮮 半島の地質大勢」「米国新大統領」の4つの記事があるがこれらは朝鮮語面 にも掲載された。
- (8) 『漢城新報』, 1896.4.2
- (9) 『漢城新報』. 1896.4.5
- (10) 『漢城新報』. 1896.5.19

- (11) 『漢城新報』, 1896.4.21, 5.13, 5.19
- (12) 店の広告は4面の広告面に掲載されるのが一般的である。
- (13) 『漢城新報』, 1895.9.17, 10.25, 11.13, 12.1 など。
- (14) 『漢城新報』, 1896.1.24, 2.5, 3.3, 3.21, 3.27, 3.29, 3.31 など。
- (15) 『漢城新報』, 1896.3.27, 3.29, 3.31 など。
- (16) 『漢城新報』, 1895.11.23, 12.1, 1896.1.28 など。
- (17) 『漢城新報』, 1895.10.17
- (18) 『漢城新報』. 1896.3.13
- (19) 『漢城新報』、1896.3.3.1、4.2、4.27 など。
- (20) 『漢城新報』, 1896.5.13
- (21) 『漢城新報』. 1896.5.19
- (22) 『漢城新報』, 1895.10.31, 12.7
- (23) 『漢城新報』, 1895.12.27
- (24) 『漢城新報』. 1896.3.3
- (25) 朴宗根、『日清戦争と朝鮮』、青木書店、1982、p. 249
- (26) 同上, p. 257
- (27) 同上. p. 259
- (28) 金容九, 『韓日外交未刊極秘資料叢書 3』, 亜細亜文化社, 1995, p.81
- (29) 『漢城新報』, 1896.8.19
- (30) 伊藤知子、拓殖大学『語学研究』、「『九州日日新聞』の中の朝鮮通信①」。 第 142 号, 2020.3.25
- (31) ただし11月5日だけ「広島書信」というタイトルになっている。
- (32) ただし 1896 年 1 月 22 日の内容は乙未事変の退韓者全て放免となったと いう内容であるが、これは朝鮮語面にも掲載された。
- (33) 1896年1月22日に掲載された「三浦子爵以下皆放免」という見出しの 記事は朝鮮語面にも掲載された。その内容は以下の通りである。

「昨年十月八日王城事変関係嫌疑者を以て広島の獄に在りし前任韓公使三 浦子爵以下何れも嫌疑不充分にて無罪放免となりし裁き一昨日同地より 電報ありたり |

乙未事変関連の被告人らが全て放免となったことを知らせるため普段よ り大きな活字を用いて掲載されている。

1月24日から2月9日まで9回連続して「謹告」という見出しで佐々正 之本人が掲載した文が日本語で載っている。これは3面ではなく4面の 広告面に掲載された。

「小生儀是迄入監中之處此度証拠不充分に付晴天白日の身と相成候此段在

京辱知諸君へ謹告す」

今まで入監中であったが、この度証拠不充分で潔白を立証することができ京城にいる皆様に謹告するという内容である。佐々正之以外に『漢城新報』のメンバーも全て放免となったにも拘らず、佐々一人だけが個人の名前でこのように広告面に載せたのは、彼とこの新聞との結びつきが格別に強かったからである(伊藤知子、延世大学博士論文「漢城新報研究」第二章 2. 「『漢城新報』関連人物とその役割」参照)。

- (34) 安達謙蔵, 『安達謙蔵自叙伝』, 新樹社, 1960, p. 65-67 参照。
- (35) 同上
- (36) 同上
- (37) 丁・町,一町は約100メートルとして計算可能。
- (38) 安駉寿は安国善の叔父で、のちに安国善は彼の養子になっている。波田 野節子、『韓国近代作家たちの日本留学』、白帝社、2013、p.7-9
- (39) 安達謙蔵. 同上
- (40) この記事の内容は講演場所,講演題目,観客の反応など書かれている。 このうち和城台が出てくる記事は1896年6月24日,8月7日,11日,19 日の各3面である。
- (41) 『漢城新報』. 1896.1.18
- (42) 『漢城新報』, 1896.1.28
- (43) 『九州日日新聞』, 1894年5月23, 24日「朝鮮論」, 5月28日「南北の経 営」, 6月8日「朝鮮の独立布告」
- (44) 『九州日日新聞』. 1896年4月26日「朝鮮局面の一変」
- (45) 『九州日日新聞』. 1898年11月8日「対韓事業発展の機 |
- (46) 『漢城新報』, 1896.1.28
- (47) 『漢城新報』. 1896.5.27
- (48) 『漢城新報』. 1896.2.26
- (49) 『漢城新報』, 1896.1.18 「商話会の創設」
- (50) 『漢城新報』, 1896.2.20「質屋組合成る」
- (51) 『漢城新報』、1897.1.24「当国商人会議所を設けんとす」
- (52) 『漢城新報』, 1895,11.29
- (53) 『漢城新報』 1896 11 22
- (54) 『漢城新報』, 1895.12.13
- (55) 『漢城新報』, 1896.1.8
- (56) 『漢城新報』, 1896.7.16 7.22
- (57) 『漢城新報』. 1896.10.10

- (58) 『駐韓日本公使館記録』, 9, 国史編纂委員会, ソウル, 1988, p. 436
- (59) 『漢城新報』, 1895.11.2
- (60) 同上

(原稿受付 2020年10月16日)

Exploring Language Learning Beliefs and Strategies:

In Reaction to a CLIL Course

Keiko IMURA

Abstract

This study explored adult EFL learners' beliefs in language learning, and their learning strategies in a Content and Language Integrated Learning (CLIL) Course. A survey was conducted among 110 learners in a private university in Tokyo over a period of four academic years. The main finding was that firstly, the learners' beliefs in language learning did not necessary correlate with the actual learning strategy. Secondly, beliefs in analytic learning negatively correlated with learners' language proficiency. Thirdly, experiential strategies correlated with the learners prior learning experience in CLIL and CLIL-like teaching methods, and with learners' confidence and motivation.

Keywords: CLIL, learner belief, learner strategy

Introduction

CLIL (Content and Language Integrated Learning) is a holistic approach which aims to learn both the content and the language (Ikeda, 2017), and has established itself as an international educational provision (Puffer, 2018). As Mehisto, Marsh, and Frigols-Martin. (2008) state, the

learners learn as they use, and use as they learn the target language. It is a student-centered approach where teachers maintain balance between cognitive challenge for learners, and the appropriate scaffolding in teaching. Earlier studies have shown the impact of CLIL on second language acquisition, learners' motivations, and strategies. This study analyzed the learners' reactions obtained over the four years of CLIL instructions, and investigated how the learners' beliefs on language learning and the actual learning strategies associated with each other, as well as how they correlated with the learners' motivation, confidence, language proficiency, and learning history.

Previous Studies

Numerous studies have explored the language learner's beliefs (Benson & Lor. 1999: Gaies, Galambos, & Cornish, 1999: Horwitz, 1985: Huang, 1997; Matsuura, Chiba, & Hilderbrant, 2001; Mori, 1999; Park, 1995: Sakui & Gaies. 1999: Tanaka & Ellis. 2003: Truitt. 1995: Wenden. 1986; Yang, 1999). Yang (1999) investigated 505 university students in Taiwan, and found connections between learners' self-efficacy, belief, and their use of learning strategies. Tanaka and Ellis (2003) examined Japanese university students' belief about language learning after a 15-week study-abroad program and concluded that there was an improvement in self-efficacy and confidence of the learners as well as their proficiency level. In their study, language learners' beliefs could be divided into two main categories: beliefs about (a) language learning approaches and (b) themselves as a learner. In this study, the beliefs about analytic and experiential learning refer to both, in a sense that it questions what the learners believe to be and what they believe is the best approach for language learning.

Izumi, Shiwaku, and Okuda (2011) compared the learners who have lived abroad with those who have not, and found that the former group tended to be more experiential learners while the latter group were

more analytical learners. More recently, Imura and Ahmadi (2016) explored the relations among the students' sense of achievement, the actual progress, and their learning belief and strategies and found that there was a mismatch between the learners' belief and strategy, and there were significant correlations between the learners' strategies and past learning experiences of communicative language teaching, content based teaching and teaching in English. This study goes further on with exploring the learners' confidence, motivation, starting age, and learning experiences, considering the learners' internal factors in relations to the learners' language learning beliefs and strategies. The research questions are as follows.

Research Questions.

- 1. How do learner belief and learner strategy relate to each other in CLIL courses?
- 2. How do learner belief and learner strategy relate to the following factors?
 - a. English level
 - b. Previous language learning experience
 - c. Confidence
 - d. Motivation
 - e. Starting age

Method

The study analyzed the questionnaire conducted among students who were taking the compulsory Listen and Read III and IV courses in a private university in Tokyo. Although the initial course description was skill based, the course was designed under the framework of CLIL. The study conducted a survey using the 5-point Likert scale questionnaire developed by Imura and Ahmadi (2016) which was originally based on Izumi, et al. (2011). The questionnaire comprised of the stu-

dents' English level, study abroad experience, starting age, language learning experience, sense of achievement, confidence, motivation, learning belief and learning strategy. The study analyzed a survey (see Appendix) conducted in six classes which were performed during the academic year of 2016 to 2019.

Course Design

The courses used in this study were conducted once a week, covering 15 classes per semester, and were designed to integrate the four skills: listening, speaking, reading, and writing. They focused on academic contents such as World Englishes and Intercultural Communication to acquire the knowledge of the content as well as skills for EAP (English for academic purposes). Each course was designed to use the 4Cs: Content, Communication, Culture, and Cognition. It was also designed to use different levels of thinking skills (remember, understand, apply, analyze, evaluate, create), employed cooperative learning, and promoted intercultural awareness and use of authentic materials. Students also had frequent opportunities for discussions and presentations.

Participants

The participants of this study were second-year learners of English who were assigned to each class by TOEIC scores and class performance. Among 110 participants, 91 reported their TOEIC scores in the survey, and the average score was 643.68. Among six classes, one was lower-intermediate level, and the other five were advanced level. Seven students had study abroad or living experiences in English speaking countries more than a year, and 32 studied abroad less than a year. Since the university highly recommends students to participate in the study abroad programs, it turned out that the percentage of study or living abroad was 35%, which meant that one out of three students had study experience in English speaking countries.

As for the learners' starting age of learning English, the average

was 10.7. As Figure 1 shows, the percentage of students who started earlier than the age of eight adds up to 28%, and the percentage of those who started from higher grades in elementary school was 27%, and 45% of the students started learning English from secondary schools.

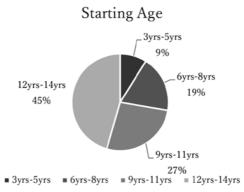


Figure 1 Percentage of the Learners' Starting Age

Results

Language Learning Experiences

The survey asked the learners' past learning experiences (see Appendix questionnaire part E) which entailed nine factors relating to teaching methodologies. As Figure 2 shows, the relatively high scores of the grammar-translating method, and whole class activity indicate the learners' prior traditional language learning experiences. However, the score of teaching English in English was also high, and learners seemed to have some opportunities to communicate in class, since communication activities and having opportunities to use the language were also relatively high. At the same time, the low score of learning different subjects shows that participants had less prior experience in CLIL.

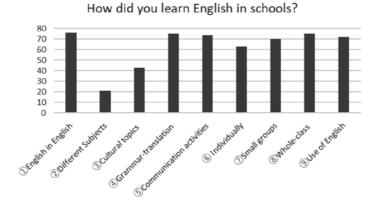


Figure 2 Average Scores of Learning Experiences.

- ① Learning English in English ② Learning Different Subjects in English
- ③ Cultural topics woven into each classes ④ Grammar-translation method
- (5) Communication activities (6)
- 6 Learning individually
- (7) Learning in small groups
- 8 Learning through whole-class activities
- 9 Had the opportunities to use English in class

The Learners' Learning Beliefs and Strategies

Language beliefs are the learners' ideas or philosophies about language learning, and they exert strong influence on L2 learning, constituting variables that accounts for individual differences (Izumi, 2014; Dörnyei, 2005). In this study, beliefs indicate the learners' ideas or principles on how language should be learned. The questionnaire items for the belief in analytic learning are as follows: It is important to be able to understand everything the teacher says. I want my English teacher to explain new grammars in Japanese. It is important to check any words that I do not understand. I think we need to know the grammar and vocabularies before we can speak in English. I want my teacher to correct all my mistakes. The items for the belief in experiential learning are as follows: I think we need to speak and listen in English in order to learn English. It is okay to speak English with some Japanese accent. If I do not under-

stand some words in English, I try to guess it and continue the conversation. I am not afraid of making mistakes while speaking. I do not spend too much time on learning grammar and memorizing vocabularies. Next, strategies refer to the learners' actual involvement in language learning. The questionnaire items for the strategies in analytic learning are as follows; I learned English by memorizing a lot of words and idioms. I learned English by studying school textbooks carefully. I learned English by repeating and practicing a lot. I learned English by looking up the dictionary and translating the words into Japanese. I learned English by studying a lot of grammatical structures. The items for the strategies in experiential learning are as follows: I learned English by immersing myself in an English speaking environment. I learned English by writing e-mails, diaries, or letters in English. I learned English by listening to the radio or watching TVs / movies in English. I learned English by speaking with others in English. I learned English by reading a lot of English magazines, books, and newspapers. (see Appendix Section H).

Using the questionnaire adopted by Imura & Ahmad (2016) and Izumi, et al. (2011) the scores of the entire learners' language learning beliefs and strategies were summed up. Table 1 shows the result of a paired t-test based on the scores of Belief Analytic, Belief Experiential, Strategy Analytic, Strategy Experiential groups. There was a significant difference between Belief Experiential and Strategy Experiential, which implies that the learners who believed to be experiential did not employ experiential learning in practice. In contrast, for analytic learning, the

Logistic parameter	M	SD	t	p
Belief A and Strategy A	.58	3.45	1.78	.083
Belief E and Strategy E	2.23	3.79	6.14	.000**
Belief A and Belief E	.88	3.63	2.54	.013**
Strategy A and Strategy E	2.53	5.19	5.09	.000**

Table 1. Results of Paired T-test on Belief and Strategy

r < 0.01**

learners' belief and strategy did not contradict.

Language Proficiency, Learning Belief and Learning Strategy

The participants' language proficiency was examined in relation to learning beliefs and strategies. Table 2 shows the correlations between the learners' TOEIC scores and the Belief Analytic, Belief Experiential, Strategy Analytic, and Strategy Experiential learning. Interestingly, there was a strong negative correlation between the learners' language proficiency and the belief in analytical learning. This result indicates the fact that those who believed in analytical language learning did not receive higher scores in TOEIC tests. The result also shows that there is no correlation between the actual analytical practice and the TOEIC scores. The learners' ideas or philosophies about language learning seem to have some impact on their actual performance. Their beliefs about analytical learning had some negative effects on the actual performance on language proficiency tests.

Table 2. Results of Pearson's Correlation Analysis on TOEIC Scores, Analytic and Experiential Learning

	Belief A	Belief E	Strategy A	Strategy E
TOEIC scores	384**	.068	133	.112

r < 0.01**

Other Individual Factors in Relation to Learning Belief and Learning Strategy

The individual factors such as confidence, motivation, and starting age were examined in relation to learning beliefs and strategies. The questionnaire items indicating confidence are as follows: I don't think learning English is very difficult. I am not afraid of speaking to a native speaker of English. I think I can manage to achieve my goals in learning English in a few years. I understand more than 70% of the teachers talk

during the lesson. When I have a question, I would ask it immediately. Table 3 shows the correlation between the learners' confidence and the belief and strategy types. The result shows that there was a strong correlation between the learners' confidence and belief on experiential learning, and their analytic strategy and experiential strategy. There was no correlation between confidence and belief on analytic learning. Belief in analytic learning did not correlate with the learners' confidence.

Table 3. Results of Pearson's Correlation Analysis on Confidence, Analytic and Experiential Learning

	Belief A	Belief E	Strategy A	Strategy E
Confidence	.014	.408**	.244*	.391**

 $r < 0.01^{**}, r < 0.05^{*}$

Next, the questionnaire items indicating motivation are as follows: I would like to speak in English with my classmates. I would love to travel to English speaking countries to challenge my English knowledge. The teacher asks us to explain our ideas to him or to other students. I enjoy presenting my new ideas to the teacher and other students. I think speaking in English, not in Japanese, is very important for improving in English.

Table 4 shows the correlation between the learners' motivation and belief and strategy types. The result shows that there was a strong correlation between motivation and beliefs on both analytic and experiential learning, and analytic and experiential strategies. The result shows that motivation is linked with the learners' beliefs and strategies of both types.

Table 4. Results of Pearson's Correlation Analysis on Motivation, Analytic and Experiential Learning

	Belief A	Belief E	Strategy A	Strategy E
Motivation	.256**	.436**	.267**	.412**

Table 5 shows the correlation between the learners' starting age, the belief and strategy types, and the TOEIC scores. The result demonstrates a strong correlation between starting age and all types of learning. Interestingly, there was a negative correlation (r = -.238) between the starting age and TOEIC scores. The result indicates that the test score rises as the starting age declines, which means that starting at early age relates to higher scores in language proficiency tests.

Table 5. Results of Pearson's Correlation Analysis on Starting Age, Analytic and Experiential Learning and TOEIC Scores

	Belief A	Belief E	Strategy A	Strategy E	TOEIC
Starting age	.256**	.436**	.267**	.412**	238*

 $r < 0.01^{**}, r < 0.05^{*}$

Correlations Between the Learners' Learning Strategies and Learning Experiences

Table 6 shows the correlations between the learners' learning strategies and learning experiences: Learning English in English (How 1), Learning different subjects in English (How 2), Cultural topics woven into each class (How 3), Grammar-translation method (How 4), Communication activities (How 5), Learning individually (How 6), Learning in small groups (How 7), Learning through whole-class activities (How 8), Had the opportunities to use English in class (How 9). The correlation analysis shows that there are significant correlations between the learners' experiential strategies and their learning experiences such as learning English in English (How 1), CLIL (How 2), communicative approach (How 5) and learning in small groups (How 7). Furthermore, there was a correlation between learners' analytic strategy and grammar translation method (How 4). The result shows that no correlations were found between the learners' beliefs and learning experiences. In contrast, strong positive correlations were found between the learners'

strategies and learning experiences. There were more positive correlations with Strategy experiential than with Strategy analytic.

Table 6. Correlations Between Learning Experiences and Analytic and Experiential Learning

	How 1	How 2	How 3	How 4	How 5	How 6	How 7	How 8	How 9
BA	.131	017	-0.013	.047	.080	.055	023	003	.174
BE	024	.126	059	.134	027	085	.090	021	.169
SA	070	022	074	.279**	073	078	146	.124	042
SE	.190*	.321**	.167	.053	.218*	.175	.198*	.115	.139

r < 0.01**, r < 0.05*

Experience in learning English through English, CLIL, communicative language teaching, and having group works in class correlated with the experiential strategy, and grammar translation method correlated with the analytic strategy.

Categorizing Belief and Strategy Types

Next, the study classified the learners' belief and strategy types into Belief A+E+, Belief A+E-, Belief A-E+ Belief A-E-, Strategy A+E+, Strategy A+E-, Strategy A-E+, Strategy A-E-. The cut-off point was 18 out of 25 points, considering the average 17.73 points for the entire BA, BE, SA, SE scores. (5 question items for each category). For example, if the learner's score of Belief Analytic was 18 or below, and belief experiential was 19 or above, it was categorized as belief A- E+, and if the score of strategy analytic was 19 or above and strategy experiential was 18 or below, it was categorized as strategy A+ E-. Table 7 shows

Table 7. Belief Analytic and Experiential, Strategy Analytic and Experiential

Variable	A+E+	A+E-	A-E+	A-E-
Belief	33	28	14	35
Strategy	15	41	14	40

the numbers of learners in each category.

It should be noted that there was a gap between the learners' beliefs on language learning and their actual learning strategy. Those who believed to be experiential learners were not necessarily the ones who engaged in experiential learning. The number of participants who believed to be A+E+ outnumbered those who employed A+E+ strategies. Also, the number of strategy A+E-. outnumbered belief A+E-. Learners employed more analytic learning in reality.

Finally, the learners' strategies types, language proficiency, and other individual factors will be compared. The focus will be laid on learner strategy to explore each factor with the actual performance, not what the learner believes. Figure 3 shows the learners' average TOEIC scores by the strategy types.

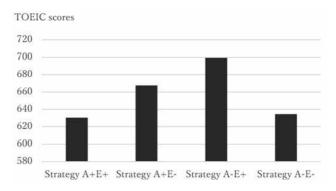


Figure 3 The learners' Proficiency and Strategy Types.

The result of ANOVA analysis shows that strategy types had no impact on the TOEIC scores. There is no statistically significant difference among the four strategy types, F (3, 85) =.578, p=.631.

Figure 4 shows the learners' average confidence scores by the strategy types. The result of ANOVA analysis shows that strategy types had an impact on the Confidence scores. There is a statistically significant difference among the four strategy types, F (3, 85) =4.570,

p=.05. It shows that Strategy A+E+ and A-E+ learners have higher confidence than other types of learners. On the contrary, learners who did not employ experiential learning had less confidence.

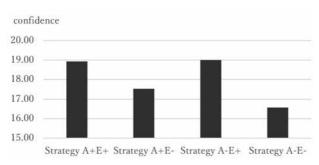


Figure 4 The Learners' Confidence and Strategy Types

Figure 5 shows the learners' average motivation scores by the strategy types. The result of ANOVA analysis shows that strategy types had an impact on the Motivation scores. There is a statistically significant difference among the four strategy types, F (3, 85) =7,718, p=.000.

Strategy A+E+ and A-E+ learners seems to have higher motivation than other types of learners.

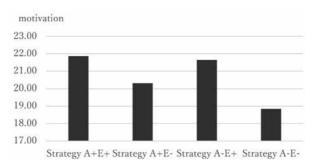


Figure 5 The Learners' Motivation and Strategy Types

Conclusion

This study examined Japanese EFL learners' beliefs on language learning, and their learning strategies in a CLIL course. It explored how learner beliefs and strategies related to each other, as well as how they related to the learners' English proficiency, starting age, previous language learning experiences, confidence, and motivation.

A summary of the results of each analysis will be stated as follows. The result of the t-test for the Beliefs and Strategies showed significant differences between Belief Experiential, and Strategy Experiential. This implies that although the learners believed that experiential learning is necessary, they might not have been exposed to the situation where experiential learning took place. The recent educational reform lead by MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology) suggests giving more opportunities for language use in classrooms. The result shows, however, that there is still a gap between what the learners feel they should employ with what they can actually perform.

Another interesting finding was that there was a negative correlation between the learners' language proficiency with belief in analytic learning. Learners who believed that they should be able to understand everything the teacher says, occasionally checked new words in a dictionary, focused on grammar rules, wished their teachers would correct their mistakes and believed that they needed to learn before they use, did not necessarily do well on TOEIC tests.

Next, the learners' prior experience in learning English through English, CLIL, communicative language teaching, and having group works in class correlated with experiential strategy. The learners' past experience in these methods might have had a positive effect on developing their experiential learning strategies and have functioned well in a CLIL course.

Furthermore, while motivation correlated with all types (BA, BE,

SA, SE), confidence did not correlate with BA (belief in analytic learning). This implies that belief in analytic learning leads to learners' uncertainty about themselves.

As for the starting age, there was a negative correlation between the starting age and TOEIC scores which implies that earlier starters have advantage over the late starters. It accounts for the possibility of early English education giving positive effect on language learning in a long run. However, it requires further investigation, with a more detailed analysis focusing on the age factor and learner belief and strategy.

Lastly, the study focused on the learner strategies and categorized them into eight types: Belief (A+E+, A+E-, A-E+, A-E-), Strategy (A+E+, A+E-, A-E+, A-E-). Further analysis focusing on the learners' strategy types indicated that Strategy A+E+ and A-E+ learners had higher confidence and motivation compared to the other groups. There seemed to be more advantage in experiential learning for the learners' internal factors.

What do these results infer? If CLIL is a holistic approach, and requires the learners' use of balanced strategies, the traditional analytic learning might not fulfill its needs. The results indicate positive effects of experiential learning in such learning environment. Limitation of the study, however, is the lack of evidence in favor of CLIL instruction against the traditional ones. It will be interesting to conduct the similar survey in other skill-based language courses and monitor the outcome.

References

- Benson, P., & Lor, W. (1999). Conceptions of language and language learning. System, 27 (4), 459-472.
- Dörnyei, Z. (2005). The philosophy of the language learner: Individual differences in second language acquisition. Erlbaum.
- Gaies, S. J., Galambos, A., & Cornish, Y. (1999). The beliefs about language learning of Russian learners of English. [Unpublished manuscript].
- Horwitz, E. K. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In: A, Wenden & J. Rubin (Eds.), Learner strategies in language learning. (pp. 119–129). Prentice Hall.

- Huang, S. C. (1997). Taiwanese senior high school students' EFL learning: Focus on learning strategies and learning beliefs. [Unpublished doctoral dissertation]. Indiana University.
- Imura, K. & Ahmadi, M. H. (2016). Learners' beliefs, strategies and sense of achievement in an EAP and CLIL course. ASTE newsletter 64, 38-48.
- Izumi, S., Shiwaku, R. & Okuda, T. (2011). Beliefs about language learning, learning strategy use, and self-efficacy/confidence of EFL learners with and without living-abroad experience. Sophia Linguistica, 59, 151-184.
- Matsuura, H., Chiba, R., & Hilderbrandt, P. (2001). Beliefs about learning and teaching communicative English in Japan. *JALT Journal*, *23*, 69-89.
- Mehisto, P., Marsh, D., & Frigols-Martín, M. J. (2008). Uncovering CLIL: Content an language integrated learning in bilingual and multilingual education. Oxford, UK: Macmillan Education.
- Mori, Y. (1999). Epistemological beliefs and language learning beliefs: What do language learners believe about their learning? *Language learning*, 49, 377–415.
- Park, G. P. (1995). Language learning strategies and beliefs about language learning of university students learning English in Korea [Unpublished doctoral dissertation]. The University of Texas.
- Puffer, C. D. (2018). Putting CLIL into Practice. ELT Journal, 72 (1), 109-111.
- Sakui, K., & Gaies, S. J. (1999). Investigating Japanese learners' beliefs about language learning. System, 27, 473-492.
- Tanaka, K., & Ellis, R. (2003). Study abroad, language proficiency, and learner beliefs about language learning. *JALT Journal*, 25, 63-85.
- Truitt, S. N. (1995). Anxiety and beliefs about language learning: A study of Korean university students learning English [Unpublished doctoral dissertation]. The University of Texas.
- Wenden, A. L. (1986). What do second-language learners know about their language learning? A second look at retrospective accounts. Applied linguistics, 7, 186-205.
- Yang, N. D. (1999). The relationship between EFL learners' beliefs and learning strategy use. System, 27, 515-535.
- Ikeda, M. (2017). CLIL ni okeru translanguaging katsuyo no moderu kouchiku [Constructing a model of translanguaging in CLIL]. English literature and language, 53, 1-12.
 - http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20170315001

Appendix

Qu	estionnaire on CLIL course
Naı	me
Dat	
Ma	jor:
Gei	nder: male – female
Em	ail address (optional):
A.	TOEFL/TOEIC/IELTS/TEAP score (if any)
	TOEFL () TOEIC () IELTS ()
	TEAP () STEP test ()
В.	Study/stay abroad experience
	Country
	Duration <u>years months</u>
	Country
	Country Durationyearsmonths
	Country Durationyearsmonths
	Duration <u>years months</u>
C.	When did you start learning English? When I wasyears old
D.	What other English classes have you taken except for the schools? How long have you been attending the class? How often did you take the class a week? Cram school for years a week Language school for years a week Private lesson for years a week Others
E.	How did you learn English in schools? Check the ones you have experienced. ① Learning English in English () ② Learning different subjects in English () ③ Cultural topics woven into each class () ④ Grammar-translation method () ⑤ Communication activities () ⑥ Learning individually () ⑦ Learning in small groups () ⑧ Learning through whole-class activities () ⑨ Had the opportunities to use English in class ()

F. To what degree have you practiced each of these skills? Chose a number from one to five. [5. I worked very hard 4. I worked well 3. I worked fairly well 2. I did not work so hard 1. I did not work hard]
a. listening () b. speaking () c. reading () d. writing ()
 G. Do you think that you acquired the following skills in this course? Write down the number. — [5. Strongly agree 4. Agree 3. Somewhat agree 2. Disagree 1. Strongly disagree]
Speaking skills
 Listening to the gist of the content () Listening to academic lectures and other listening materials and take notes ()
Reading Skimming and scanning () Reading books and articles for research () Writing
Writing a paragraph () Summarizing a lecture () Vocabulary
 Understanding the academic vocabulary () Using academic vocabulary in your speaking or writing ()
 H. Do you agree with the following statements? Write in five point scale. [5. Strongly agree 4. Agree 3. Somewhat agree 2. Disagree 1. Strongly disagree] Section 1 ① I don't think learning English is very difficult. ()
 ② I would like to speak in English with my classmates. () ③ I am not afraid of speaking to a native speaker of English. () ④ I think I can manage to achieve my goals in learning English in a few years. ()

⑤ I would love to travel to English speaking countries to challenge my En
glish knowledge. ()
⑥ I understand more than 70% of the teachers talk during the lesson. ()
7 The teacher asks us to explain our ideas to him or to other students. ()
(8) When I have a question, I would ask it immediately. (
(9) I enjoy presenting my new ideas to the teacher and other students. (
10 I think speaking in English, not in Japanese, is very important for improve
ing my English. ()
Section 2
① It is important to be able to understand everything the teacher says. ()
② I think we need to speak and listen in English in order to learn English.
③ It is okay to speak English with some Japanese accent. ()
④ I want my English teacher to explain new grammars in Japanese. ()
⑤ If I do not understand some words in English, I try to guess it and contin
ue the conversation. ()
⑥ It is important to check any words that I do not understand. ()
① I am not afraid of making mistakes while speaking. ()
® I do not spend too much time on learning grammar and memorizing vo
cabularies. ()
9 I think we need to know the grammar and vocabularies before we can
speak in English. ()
① I want my teacher to correct all my mistakes. ()
Section 3
① I learned English by memorizing a lot of words and idioms. ()
2 I learned English by immersing myself in an English speaking environ
ment. ()
③ I learned English by writing e-mails, diaries, or letters in English. ()
④ I learned English by studying school textbooks carefully. ()
(5) I learned English by listening to the radio or watching TVs / movies in
English. ()
6 I learned English by speaking with others in English. ()
T learned English by repeating and practicing a lot. ()
® I learned English by looking up the dictionary and translating the word
into Japanese ()

9 I learned English by reading a lot of English magazines, books, and news-

1 learned English by studying a lot of grammatical structures.

papers. ()

Japanese Object Honorification and Agreement

Eiki ONO

Abstract

This paper discusses Japanese object honorification and examines the appropriateness of the syntactic agreement analysis for this type of sentence. Referring to Kim & Sells's (2008) model of English subject-verb agreement, this paper applies their model into Japanese object honorification data and considers whether the object-verb agreement system works properly. Results show that this attempt is not tenable on theoretical and empirical grounds. Further, the Japanese object honorification is indicated to have room for argument from a pragmatic perspective.

Keywords: Object Honorification, Head-Driven Phrase Structure Grammar, Index Agreement, Object-Verb Agreement, Pragmatics

1. Introduction

Object honorification (OH) in Japanese is the phenomenon in which the honorific morphemes *o-/go-* & *-suru* are added to a verb stem and an honoured person appears in the object position, as exemplified below:

(1) Taroo-ga Yamada sensee-o o-tasuke-si-ta *Taro-Nom Prof. Yamada-Acc help-OH-past*'Taro helped Prof. Yamada.'

In (1), the verb stem *tasuke* is changed into the object honorific form *o-tasuke-si-ta* (*si-ta* is the past form of *suru*), and the honoured person *Yamada sensee* appears in the object position.

As for Japanese object honorification, previous Generative Grammar focussed on the possibility that there is a syntactic agreement between the object-honorific verb and the object including the target person of honorification (e.g. Harada 1976, Shibatani 1977). In the recent framework of Minimalist Syntax, this association has been considered to be object-verb agreement (e.g. Toribio 1990, Ura 2000, Niinuma 2003, Boeckx & Niinuma 2004, Hasegawa 2006). In Head-Driven Phrase Structure Grammar (HPSG), although some studies are conducted on Japanese honorifics (e.g. Pollard & Sag 1994: Chapter 2, Siegel 2000), there seem to be few studies that attempt to analyse Japanese object honorification using an agreement system.

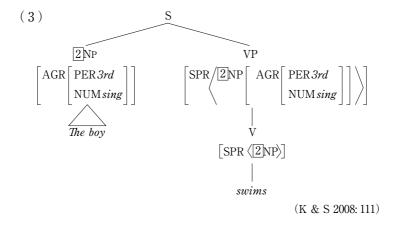
In this paper, I will discuss Japanese object honorification and present an agreement analysis using an HPSG framework. First, in Section 2, I will overview Kim & Sells's (2008) model of subject-verb agreement in English, which is called 'index agreement', and see how the elements of SPR (specifier) and HEAD agree with each other. Next, in Section 3, I will attempt to apply their index-based agreement approach to Japanese object honorification and consider how the object-verb agreement system works between the elements of HEAD and COMPS (complement). Finally, in Section 4, I will point out two problems showing that the agreement analysis faces difficulties in covering all the data of Japanese object honorification.

2. Kim & Sells (2008)

Let us first see the following sentences:

(2) a. The boy swims/*swim. (Kim & Sells 2008: 111) b. The boys swim/*swims. (*ibid.*)

Kim & Sells (2008) (henceforth K & S) observe the above contrastive acceptability and state that the English verb has at least morpho-syntactic agreement with its subjects. They consider that the agreement is caused through a process in which the verb specifies the subject's (SPR's) lexical information, as shown in the following structure:



In the above structure, we can see that the morphological AGR (EE-MENT) value of the subject is the same as that of the NP with which the VP combines. In other words, the subject properly satisfies the verb's AGR requirements of being third person and singular.

According to the morpho-syntactic method given in (3), the subject-verb agreement seems to be successful. K & S, however, point out that there are some cases where the morpho-syntactic agreement does not hold:

- (4) a. [Five pounds] is/*are a lot of money. (K & S 2008: 114)
 b. [Two drops] deodorizes/*deodorize anything in your house.
 (ibid:: 115)
 - c. [Fifteen dollars] in a week is/*are not much. (ibid.)
 - d. [Fifteen years] represents/*represent a long period of his life.

(ibid.)

e. [Two miles] is/*are as far as they can walk. (ibid.)

In each of (4a-e), the number of the subject within the square brackets is plural; nevertheless, the verb form must be singular. This is because we cognitively regard the subject referent as a single unit; even though it is morphologically expressed in a plural form. It is clear that the morpho-syntactic agreement cannot directly give any explanation of these data.

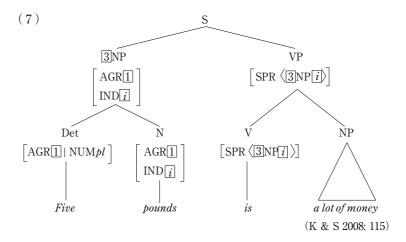
To solve this problem, K & S claim that English agreement is not only morpho-syntactic; but that there is also another type of agreement dependent on context. This agreement is called 'index agreement', and it is caused between the SEM(ANTIC) IND(EX) values of the subject and the verb. K & S distinguish the function of index agreement from that of morpho-syntactic agreement, as can be seen in the following quotation:

(5) ... English determiner-noun agreement is only a reflection of morpho-syntactic agreement features between determiner and noun, whereas subject-verb agreement is index-based agreement. (K & S 2008: 114)

Consider the example in (4a):

The lexical entry in (6) indicates that the morpho-syntactic value of *pounds* is plural, while the index value is singular. According to the quotation in (5), the former value should combine with a plural deter-

miner, whereas the latter value should combine with a singular verb. Consequently, the entire sentence in (4a) is expressed in the following structure:



In the tree diagram in (7), the head noun *pounds* coincides with the plural determiner *five* by morpho-syntactic agreement and with the singular copular verb *is* by index agreement.

K & S's idea that subject-verb agreement is an index agreement can also explain the examples of collective nouns:

- (8) a. This Government have/has been more transparent in the way they have dealt with public finances than any previous government. (K & S 2008: 116)
 - b. In preparation for the return fixture this team have/has trained more efficiently than they had in recent months.

(ibid.)

The head noun of the subjects in (8a, b) government or team basically means a single organisation and carries a singular index value, so it can

combine with the singular verb *has*. However, it is even possible that the collective noun *government* or *team* can combine with the plural verb *have* when it refers to the individual members in the group. In the latter case, *government* or *team* carries a plural index value. To confirm this point, consider the further examples of a collective noun:

(9) a. My family is/*are a big unit.b. My family *is/are all early risers.

In (9a, b) we can observe the contrastive acceptability on the number agreement between the subject and the verb. In (9a) the collective noun *family* is interpreted as a single unit and has a singular index value, whereas in (9b) it refers to the individuals in the given organisation and has a plural index value.

3. Japanese Object Honorification

In the previous section, we reviewed the agreement system proposed by K & S (2008), in which subject-verb agreement occurs between SPR and HEAD by checking the index value against each other. In this section, we would like to expand this index-based agreement system into Japanese object honorification and discuss the relationship between HEAD and COMPS.

As already mentioned in Section 1, Japanese object honorification is the phenomenon wherein the verb changes into the object honorific form by adding the morphemes o/go- & -suru to the verb stem and the exalted person appears in the object position, as shown in the following (1) is repeated here as (10):

(10) Taroo-ga Yamada sensee-o o-tasuke-si-ta
Taro-Nom Prof. Yamada-Acc help-OH-past

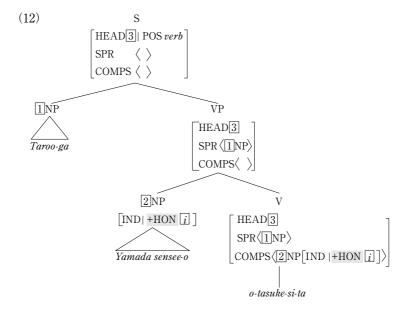
'Taro helped Prof. Yamada.'

Note here the association between the verb and the object: the verb *o-tasuke-si-ta* 'helped' requires the target of honorification, *Yamada sens-ee* 'Prof. Yamada', in the direct object position.

Let us here apply the data in (10) to the agreement model by K & S. The lexical entry of the object-honorific verb *o-tasuke-si-ta* in (10) can be described as the following:

```
 \begin{array}{c} \text{(11)} \quad \left[ \left\langle \text{ o-tasuke-si-ta } \right\rangle \right. \\ \left. \text{ HEAD } \right| \text{ POS } \textit{verb} \\ \text{SPR} \quad \left\langle \boxed{\texttt{INP}} \right\rangle \\ \text{COMPS} \quad \left\langle \boxed{\texttt{2NP}} \boxed{\texttt{IND}} \right| + \text{HON} \right] \right\rangle \\ \left. \text{ARG-ST} \quad \left\langle \boxed{\texttt{1}}, \boxed{\texttt{2}} \right\rangle \\ \end{array}
```

The lexical entry in (11) indicates that the honorific verb *o-tasuke-si-ta* needs two arguments in the SPR and COMPS positions. Note here that the information in COMPS includes the index value [+HON]. The value [+HON] stands for 'honorific', which is adopted from Pollard & Sag (1994), and it requires the verb to combine with an NP that includes an honoured person. Consequently, the lexical entry in (11) eventually projects the following structure:



We can observe in (12) that both the honorific verb *o-tasuke-si-ta* and the object *Yamada sensee* share the same index value [+HON] and they are co-indexed by the notation *i*. Therefore, the object-verb agreement is successfully captured by the index agreement between HEAD and COMPS.

So far, we have seen how K & S's idea of index agreement works in the Japanese honorific agreement between the verb and the direct object. Let us now consider the case of the double object construction. Harada (1976) points out that there is an asymmetry between the indirect and direct objects with regard to object honorification. He observes that if the ditransitive predicate (i.e. the double object verb) is used, what is interpreted as the target of honorification is not the direct object but the indirect object. Observe the following examples:

(13) Yamada sensee-ni otooto-o go-syookai-si-ta

*Prof. Yamada-Dat brother-Acc introduce-OH-past

'(I) introduced my brother to Prof. Yamada.'

(Harada 1976: 530)

(14) *Otooto-ni Yamada sensee-o go-syookai-si-ta brother-Dat Prof. Yamada-Acc introduce-OH-past '(I) introduced Prof. Yamada to my brother.' (ibid.)

As shown in the contrastive acceptability between (13) and (14), the double object verb *go-syookai-si-ta* 'introduced' agrees with the indirect object, not with the direct object. The unacceptability of the sentence in (14) illustrates that in the double object construction it is impossible to interpret the direct object as the target of honorification. From this observation, Harada formulates the following general rule called 'object honorific marking':

- (15) Object Honorific Marking

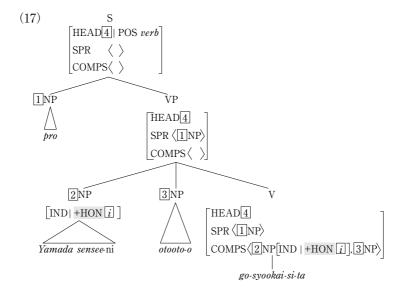
 Mark the predicate as [Object Honorification] when an SSS (a person who is socially superior to the speaker) is included in
 - (a) the indirect object, if the predicate is ditransitive, or
 - (b) the direct object, if the predicate is transitive

(Harada 1976: 530)

In (15), in brief, it is shown that the target of honorification in the double object construction appears not in the direct object but in the indirect object. In other words, the honorific verb's agreement with the indirect object takes priority over its agreement with the direct object.

How should this phenomenon be explained in an HPSG framework? To capture the fact that the honorific ditransitive verb agrees with the indirect object, the lexical entry of the verb *go-syookai-si-ta* in (13) must be described as the following:

The lexical entry of the honorific verb *go-syookai-si-ta* in (16) indicates that the ditransitive verb takes two object arguments of *goal* and *theme* within its VP and the verb requires both of the arguments to appear in the COMPS positions. Note here that the *goal* NP has the index value [+HON], whereas the *theme* NP does not. This difference is the reason the honoured person appears in the indirect, not the direct, position. Therefore, the structure for the whole sentence in (13) is expressed as follows (in (13) the topicalised subject *watasi-wa* (*I-Top*) is omitted because Japanese is a *pro-*drop language and it is common for the obvious subject between interlocutors not to be uttered; hence, in the following structure the omitted subject is represented as *pro*):



In the structure in (17), it is shown that there is an index agreement between the honorific verb *go-syookai-si-ta* and the indirect object *Ya-mada sensee* since these two elements are marked by the same index value [+HON] and are co-indexed by the notation *i*. In this way, the agreement between the honorific verb and the indirect object can be explained.

4. Problems

In the previous section, I attempted to explain some examples of Japanese object honorification along the agreement system proposed by K & S. This attempt in an HPSG way is linguistically interesting and seems to be able to explain Japanese object honorification.

However, a syntactic analysis based on agreement has two problems. The first problem is theoretical; it is unreasonable and impossible to capture Japanese object honorification via an agreement relationship. Let us consider this point by comparing English to Japanese. English has an obligatory grammar system on agreement, as shown in the following examples:

(18) a. I *play* tennis on Sundays.b. John *plays* tennis on Sundays.

In English, if the subject property is in the third person and singular and the sentence is represented as the present tense, the inflectional suffix -(e)s must be added to the verb, as in (18b). This agreement operation is obligatory without any exceptions. In Japanese, on the other hand, object honorification is not necessarily obligatory:

(19) a. *Inu-ga eki-de Yamada sensee-o o-mati-si-ta

*Dog-Nom station-at Prof. Yamada-Acc wait-OH-past

'A dog waited for Prof. Yamada at the station.'

b. *Taroo-ga Yamada sensee-o o-naguri-si-ta

*Taro-Nom Prof. Yamada-Acc hit-OH-past

'Taro hit Prof. Yamada'

As is clear from the unacceptability of (19a, b), Japanese object honorification is not simply determined by the syntactic relation between the object and the verb alone. Object honorification is used under the context that the subject referent pays his/her respect to the object referent. In (19a), since the subject referent is a dog, it cannot have a respectful feeling for Professor Yamada. In (19b), judging by Taro's rude action of hitting Professor Yamada, Taro cannot be considered to defer to Professor Yamada. Under these conditions, object honorification does not happen and thus, these examples are judged unacceptable from common social sense. Since the syntactic agreement focusses only on the relation between the verb and the object, it cannot account for Japanese object honorification data as in (19a, b).

The other problem is empirical. We can recognise that there are counterexamples for Harada's general rule in (15), as shown in the following:

(20) Jimukata-ni sensee-no go-ikoo-o o-tutae-si-teoki-masu *the secretary-to Professor's message-Acc deliver-OH-will-pres* '(I) will deliver Professor's message to the secretary.'

In (20), despite the presence of the indirect object, the honoured person is included in the direct object; nevertheless, this sentence is perfectly acceptable. The agreement system in the previous section wrongly predicts that the target of honorification in (20) should appear in the indirect object.

Why, then, is the sentence in (20) judged acceptable? The target of honorification in (20) is *sensee* 'Professor' and it is put in the direct object position, but it must be noted in the example that the target of

honorification is also a hearer (i.e. a person who is called *sensee* by the speaker). Unless this sentence is uttered to the exalted addressees, the sentences are judged unacceptable. The crucial point here is that the acceptability is determined not by the syntactic agreement condition but by the pragmatic relationship between the speaker and the hearer. Therefore, it is concluded that the pragmatic factor takes precedence over the syntactic factor.

The following is evidence to support this conclusion:

(21) Watasi-ga denwabangoo-o o-sirabe-si-masu

I-Nom phone number-Acc check-OH-pres

I'll check the phone number

(22) Takusii-o o-yobi-si-masu taxi-Acc call-OH-pres

(I'll) call a taxi

These examples have no honoured person in the object position; nevertheless, these object honorific sentences are perfectly acceptable. The key to understanding the acceptability is to understand that the honoured person exists as a hearer for the utterances and benefits from the speaker's action of checking the phone number or calling a taxi. With such a pragmatic relationship between the speaker and the hearer, even if there is no exalted person in the object position, the verb can change into the object honorific form. In such cases, since the honorific target superficially does not appear as a lexical item, the object-verb agreement analysis faces difficulties in providing an adequate explanation, even though it adopts a semantic method like the index-based agreement in Section 2.

5. Conclusion

In this paper, I have overviewed Kim & Sells's (2008) agreement

system on the English subject-verb agreement, and then attempted to explain Japanese object honorification using the index agreement system. This syntactic approach was seemingly successful, but I have pointed out that the approach is not entirely satisfactory in either theoretical or empirical aspect. Furthermore, I have suggested that there is room for Japanese object honorification to be discussed from a pragmatic perspective.

References

- Boeckx, C. & Niinuma, F. (2004). Conditions on agreement in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 22, 453-480.
- Harada, S. (1976). Honorifics. In M. Shibatani (Ed.) Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar, 499-561. New York: Academic Press.
- Hasegawa, N. (2006). Honorifics. In M. Everaert and H. van Riemsdijk (Eds.) The Blackwell Companion to Syntax 2, 493-543. Cambridge, MA: Blackwell.
- Kim, J-B. & Sells, P. (2008). English Syntax: An Introduction. Stanford: CSLI Publications.
- Niinuma, F. (2003). *The Syntax of Honorification*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Pollard, C. & Sag, I. A. (1994). Head-Driven Phrase Structure Grammar. Chicago: University of Chicago Press.
- Shibatani, M. (1977). Grammatical relations and surface cases. *Language* 53, 780-809.
- Siegel, M. (2000). Japanese honorification in an HPSG framework. In A. Ikeya and M. Kawamori (Eds) *Proceedings of the 14th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 289-300. Waseda University International Conference Center, Tokyo: Logico-Linguistic Society of Japan.
- Toribio, A. (1990). Specifier-head agreement in Japanese." In A. Halpern (Ed.) Proceedings of West Coast Conference on Formal Linguistics 9, 535-548. Stanford: CSLI Publications.
- Ura, H. (2000). Checking Theory and Grammatical Functions in Generative Grammar. Oxford: Oxford University Press.

(原稿受付 2020年10月28日)

発話における指示表現のレトリック性

---語用論的観点からの考察 ---

小野寺 美智子

要旨

本稿では、発話に用いられる指示表現、特に指示表現に見られるレトリック性について語用論理論である Levinson の M 原理と Sperber and Wilson による関連性理論から説明を試みた。分析に際しては、ドラマのシナリオと公開されている会話コーパスをデータとして用いて質的な方法で行った。その結果、日本語発話の場合は、M 原理で説明できるものもあるが説明できないものも存在することが明らかになった。一方、関連性理論を用いた分析では、M 原理で説明できる指示表現のレトリックを含めすべての指示表現を説明できることが示唆された。

キーワード:指示表現,レトリック,M原理,関連性理論,語用論

1. はじめに

発話者と聞き手とが同一空間に共存する対話などでは指示表現(referring expression)は、発話者が意図した指示対象を聞き手に特定させる役割を果たす。また、発話者は指示表現を用いることで線条的な発話の流れに沿って結束性をもたせることができ、聞き手が発話コンテクストから発話者によって意図された指示対象を想起できた場合に指示表現は最も情報量の少ない効率的な表現として機能することになる。しかしながら、指示

表現には指示対象を特定するという役割があるだけではなく, (1)の例のように発話者の特別な情意的意図が含意される場合がある。

(1) あのたぬきがまたとんでもないことを考えているらしい。

「たぬき」は動物の一種ではあるが、ある種の人間を比喩的に意味することもあり、聞き手は百科事典的情報を想起することにより「とぼけた顔をしながら実際にはずる賢いことをする人」と解釈する。例えば、発話コンテクストから「あのたぬき」という指示表現によって「とぼけた顔をしながら実際にはずる賢いことをする人」である会社の上司などの人間を聞き手は特定することができる。この場合の「あのたぬき」は、意味拡張によるメタファー表現であり、アドホック概念として使われている。そこには、例えば「林部長」のような通常の指示表現を選択せず「あのたぬき」というメタファー表現を使うという発話者の意図が存在する。

一方,メタファー表現以外にも発話者の特別な情意的意図が感じられる 指示表現法がある。

(2) A: **優子ちゃん**が昨日うちに遊びに来たよ。

B:**あの人**. まだ日本にいたんだ。

(2)の発話者Bも以前は「優子ちゃん」と呼んでいたが、何かの諍いがあり発話時では「優子ちゃん」と距離を置く関係になっている場合、指示表現として「優子ちゃん」の代替表現「あの人」という指示表現を選択することによって心理的な距離感を含意させることが可能である。この場合は、先のメタファー表現とは異なり、「あの人」という表現自体に意味拡張を伴うアドホック概念はない。つまり、「あの人」という表現そのものに心理的な距離感がコード化されているのではない。このことは、下記

の(3)の「あの人」には、そのような発話者の意図は感じられないことか らでも分かる。(3)では、名前を知らず固有名詞を用いて指示することが できないので「あの人」を用いたに過ぎず、発話者の心理的な距離感をも たせるような特別な意図は存在しない。

(3) 昨日. 君の家にいた人だけど. あの人. 中国の人?

本稿の目的は、(2)のような指示表現自体には特別な意図が含まれない が、発話コンテクストを介して発話者の情意的意図が感じられるもの(指 示表現のレトリック(1)) を対象に語用論理論の知見を援用し説明すること である。その際、新グライス派 (neo-Griceans) (2) の Levinson (2000) が 提唱する M 原理による分析の検証とポスト・グライス派 (post-Griceans) による関連性理論(Relevance Theory)の有効性について論じる。また. 本稿ではシナリオ集と会話コーパスをデータとして用いて質的な分析を行 うこととする。

2. 指示表現の定義

本章では、「指示詞」と「指示表現」という用語について規定する。「指 示詞 (demonstratives) | とは、月に見える事物や発話の中に登場する事柄 などが発話者、聞き手などとどのような物理的距離や心理的距離にあるか を指し示す語である。意味論的に指示限定詞(demonstrative determiners) と指示代名詞(demonstrative pronouns)に区別される。日本語では 「こ・そ・あ・ど」という共通の要素を有し、前者は、「この本、あの箱」 のように名詞句の中で名詞と共起し、後者は、「これは素晴らしい本だ | のように名詞句全体を単独で指す。また、いわゆる「コソアド語」と言わ れる指示詞は、目に見える事物を指し示す現場指示の用法と話題に出てく

る事柄などを指し示す文脈的用法とに分けられる。英文法では、一般的に空間的ダイクシス(spatial deixis)、照応的な(anaphorically)指示、談話的ダイクシス(discourse deixis)に3分類される。照応的な指示と談話的ダイクシスが日本語の文脈的用法に相当すると考えられる。

一方、「指示表現」は、発話者が意図した対象を聞き手に特定させるために用いる表現であり、「指示詞」を含めた広義に捉えることができる。 英語の指示表現は、一般に下表のように分類される。

	久田の川の大人の主義	
種類	例	
定表現 定名詞句	the book (s) , Jonathan's course (s) ,	意味論的
	my example, etc.	†
固有名詞	Michael, Smith, Professor Leech, etc.	
照応表現	he, it, they, herself, etc.	\
ダイクシス表現	this, that, I, here, now, tomorrow, etc.	語用論的

英語の指示表現の種類

(ジョナサンほか 2020: 18)

日本語においても指示詞「こ・そ・あ・ど」を使わずに表すことができる名詞句がある。(4)の下線の「子ども」は、コンテクストの情報から欧米の学校に通う子どもを指示していることは明らかである。この場合、英語では、定名詞句 the student(s) となる。

(4) 新型コロナウイルスの感染拡大が続く欧米で9月から学校の新年度が始まる。経済復興には学校再開は不可欠、というのが各政府の考えだ。だが、学校が感染源になる懸念も強く、<u>子ども</u>の登校再開をめぐり揺れている。

(朝日新聞朝刊 2020.9.1) (下線は筆者が加筆)

上表の「固有名詞」は「小林先生」など、「照応表現」は「彼ら」など 日本語にも同様に存在する。「ダイクシス表現」とは、コンテクストへの 依存性を符号化した言語表現のことであり、一般的に人称のダイクシス. 空間のダイクシス、時のダイクシス、談話のダイクシスに分類される。人 称とは、発話者(一人称)と聞き手(二人称)、そして話題に登場する人 物(三人称)に言及するものであるが、三人称は通常発話の中で前方照応 として使われるので、ダイクシス的には一人称と二人称が典型的なものと なる。

以上のように「指示詞」と「指示表現」が区別され用いられることを前 提に本稿では、指示詞「こ・そ・あ・ど」を含めた広義である指示表現を 分析対象とする。

3. 先行研究と問題の所在

指示対象に対して、どの指示表現が用いられるかに関しての語用論的研 究は様々あり、概してそこではどのような語用論的原理に基づいて、実際 の場面で指示表現が選択されるかが議論されている。しかし、指示表現の レトリックを語用論的原理の視点から研究しているのは、管見の限りそれ ほど多くない。最近の研究として平田(2018)が挙げられる。平田は、 Levinson (2000) による M 原理を用いて実際に使われている有標⁽³⁾ の指 示表現に対し、発話者が実際には使わなかった無標の指示表現を聞き手が 想起できる場合に限り指示表現のレトリックは有効となるとしている。説 明の際に拠り所とした M 原理(次章でさらに述べる)は以下のとおりで ある。

The M-Principle (4)

Speaker's maxim: Indicate an abnormal, nonstereotypical situation

by using marked expressions that contrast with those you would use to describe the corresponding normal, stereotypical situation.

Recipient's corollary: What is said in an abnormal way indicates an abnormal situation, or marked messages indicate marked situations, specifically: Where S has said "p" containing marked expression M, and there is an unmarked alternate expression U with the same denotation D which the speaker might have employed in the same sentence-frame instead, then where U would have I-implicated the stereotypical or more specific subset d of D, the marked expression M will implicate the complement of the denotation d, namely \overline{d} of D. (Levinson 2000: 136–137)

平田は、このM原理に補足説明⁽⁵⁾ を加え、(5)の the woman は Penny/she に比べ有標性の特徴である more phonologically complex and less lexicalized を備えており、また more prolix or periphrastic なので、有標指示表現として機能していると説明している。したがって有標の表現である the woman と無標の表現である Penny/she の denotation は同じであるが、非概念的意味すなわち connotation の違いを伝えることになるとしている。発話者が Penny/she という選択肢ではなく、敢えて the woman という指示表現を選択するのは、発話者が Penny に対して心理的な距離感を抱いていることを聞き手に推意させるという意図が存在するからであると考えられる。そしてある表現が有標であると決定されるのは、その発話での無標表現が聞き手によって想起されるかどうかに因るということになる。つまり、用いられている有標表現に対して無標表現 (Penny/she)が想起できなければ、レトリックとしては機能しないことになる。

(5) Sheldon: Oh, come on, Leonard! This is obviously about

Penny.

Leonard: It doesn't matter. The woman's not interested in me, the woman rejected me.

(11:25-, "The Fuzzy Boots Corollary," The Bing Bang Theory, Season 1.) (平田 2018: 63)

以上のように平田は、英語の指示表現のレトリックを Levinson の M 原 理で説明することの有効性を論じている。しかし、英語による発話の場合 は有標表現に対して無標表現を比較的容易に想起することができると考え られるが、日本語の場合は指示表現そのものの選択範囲が英語より広いた め、ある有標表現に対する無標表現が英語のように決定されるか疑問が残 る。例えば、上記の例(5)では無標表現として Penny あるいは she しか 考えられないが、日本語の場合は、「友だち」など指示対象との関係を表 す指示表現もあり、選択肢の多さの点では英語と異なる。無標表現が想起 される場合のみレトリック効果が現れるという説明は、日本語発話におい ても果たして有効なのだろうか。

次章では、語用論理論である M 原理と関連性理論の概要を述べ、5章 で英語とは異なる指示表現の体系を持つ日本語の場合についてまず M 原 理の観点から検証し、次に関連性理論を適用することの有効性を論じてい く。

4. 「M 原理」と「関連性理論」の概要

ここでは、まず Levinson (2000) の M 原理 (Manner (M)-principle) に ついて概略を述べる。

M原理は、Griceの4つの格率 (maxim) を再編成したものである。 Grice は発話を解釈する際に行われる推意は、暗黙の一般原理(協調の原 理(cooperative principle))によって行われるとし、さらに「協調の原理」を構成する下記の4つの格率を主張した。

[量]

- 1. 自分の貢献を(その場のことばのやり取りの目的のために)要求されているだけの情報を与えるようなものにせよ。
- 2. 自分の貢献を要求以上の情報を与えるようなものにするな。

「質]

上位の格率(supermaxim):自分の貢献を真であるものにすべく 努めよ。

- 1. 真でないと自分が知っていることを言ってはならない。
- 2. 十分な根拠を持たないことを言ってはならない。

[関係性]

関連性のあることを言え。

「様態]

上位の格率:明快な言い方をせよ。

- 1. 不明瞭な言い方を避けよ。
- 2. あいまいな言い方を避けよ。
- 3. 簡潔な言い方をせよ(不必要な冗長性を避けよ)。
- 4. 順序立った言い方をせよ。

(今井 2014: 71)

Levinson が上記の4つの格率を再編成した3つの原理とは,Q原理(Quantity(Q)-principle),I原理 (Informativeness(I)-principle),M原理(Manner(M)-principle)であり、特に本稿で取り上げるM原理は以下のとおりである。

M 原理:

発話者:理由なしに通常でない(=有標の)言い方をするな。

聞き手:通常でない(=有標の)言い方で言われたことは、通常で ない (=一般的ではない) 状況を示す。

(6) A: John came in. He sat down.

B: John came in. *The man* sat down.

(Levinson 2000: 272)

(6)Bでは. He ではなく The man という有標の表現が使用されてい ることから M 原理に従い The man と John は「通常でない状況」つまり 同一の指示対象を指さないと解釈される。

次に日本語の指示表現のレトリック性を解釈するにあたり必要と思われ る関連性理論の一部について概要を述べる。

Sperber and Wilson が提案する関連性理論とは、発話が十分言語的に 記号化されていないのにも関わらず、聞き手が発話者の意図した意味を解 釈することができるのはなぜか、という疑問に対してその解明を目指した 理論である。「関連性理論 | では、「関連性 | を認知効果 (cognitive effect) と処理コスト (processing effort) によって定義している。認知効 果は、ある発話を聞いて聞き手が既に持っている想定と相互作用を起こし 文脈含意(contextual implication)を導く場合生じる。その認知効果が大 きければ大きいほど関連性は高いとされている。また. 処理コストとは. 聞き手が発話を処理する際に要する労力のことで、発話の言語的な複雑さ などによって影響される。聞き手に十分な情報が与えられない発話の解釈 では、その処理コストは大きく、関連性は低いと言える。つまり、認知効 果が大きければ大きいほど関連性が高く、処理コストが小さければ小さい ほど関連性は高いとなる。

次の例では、「あの日」がいつか、「友人」が誰を指すか、「あそこ」が どの場所かを明確にしないと発話の解釈は成立しない。そのため聞き手 は、言語化されていない部分を適切に補う必要があり、その際決め手とな るのが「関連性」である。発話の解釈の面から考えると(7)では、「あの 日」、「友人」、「あそこ」が文脈から明確でない場合、それぞれについて特 定するために処理コストがかかるが、(8)ではそれらが言語化されている という点から(7)より処理コストが小さくて済むことになり、(8)の方が 関連性が高いことになる。

- (7) あの日は、友人と一緒にあそこに行っていたよ。
- (8) <u>息子がアメリカから帰国した日</u>は、<u>大学の時の友人</u>と一緒に<u>い</u> つものお店に行っていたよ。

聞き手は、十分に情報が記号化されていない発話から関連性を求めて発話者の意図した意味を推論する。その際、最小の処理コストで最大の認知効果を求めて推論し、処理コストに見合う関連性が得られたところで聞き手は解釈を止めると関連性理論では説明している。

また、関連性理論では、発話者が発話によって聞き手に伝えようと意図した明示的意味を明意(explicature)と呼び、非明示的意味を暗意(implicature)と呼んでいる。(9)の例では、関連性のある解釈を求めて、「彼」は誰か、「若すぎる」とは何をするには若すぎるのかをコンテクストから推論を行い、その結果得られるのが発話の明意である。一方、暗意は推論のみによって得られる。(10)のAは、Bの発話から明後日提出するレポートを完成させるため明日はBは映画を見に行かないと解釈する。言語化された意味を推論によって発展させた明意とは異なり、暗意は発話の言語化された意味を推論によって発展させた明意とは異なり、暗意は発話の言語化された意味とコンテクストに基づく推論のみから得られるものであり、その点非明示的であるという特徴を持つ。

- (9) 彼はまだ若すぎる。
- (10) A:明日. 映画を見に行かない?

B:明後日がレポートの締め切りなんだ。

以上「M原理」と「関連性理論」について本稿の議論に関わる点を中 心に概略を述べた。

5. 発話に見られる指示表現のレトリック性

本章では、シナリオ集と会話コーパスから指示表現のレトリック性を分 析し、M原理における無標と有標の対という視点ではなく、発話のコン テクストの中で用いられる複数の指示表現との関係性によってレトリック 性が現れる例があることと、指示表現のレトリックは、関連性理論によっ て説明することが可能であることを明らかにする。

次の会話(11)の中で A が指示表現として用いているのは. 「ワンちゃん」 「そのワンちゃん | 「さっきの犬 | 「犬 | である。A が街中で散歩している 知らない犬に対して、会話の初めの部分では「ワンちゃん」という表現を 使い、最後には「犬」という表現を選択している。「ワンちゃん」という 表現からは小さな犬への可愛さを感じる。一方、「犬」は単に動物の一種 としての犬を指していると言えるので、「ワンちゃん」という表現から 「犬」への選択変更によって、やや突き放した印象を与えることになる。 上記(5)において、ある指示対象に対して有標の指示表現が使われ語用論 的な意味が含意されるのは、同じ対象を指示できる別の無標の指示表現が 聞き手によって想起される場合であるという説明がされていた。しかしな がら、(11)の場合は無標と有標の対立ではなく、会話の中で選択される指 示表現の変化によって語用論的な意味が出現されると言えるのではないだ ろうか。

(11) A:ほいでさあ、なんか途中で<u>ワンちゃん</u>に会ったんだね。 (ふーん) 散歩をしてるワンちゃんに会ったんだ。

> B: 城壁の上をやっぱ観光客なんだけどワンちゃん連れてきて る人たち結構多くて。

> A:で,こう,<u>そのワンちゃん</u>と2人を,なに,お父さんとお母さんと歩いて,<u>ワンちゃん</u>に会ったんだ。途中で。あワンちゃーんとか言ってなでて,ほいで,この人たちはこっち行って,あたしらこっち行ったじゃん。ずうーとこうやって回ってきてるの。また会っちゃって。ここで。そうしたら。

C:おー、そら地球はやっぱり丸かったみたいだね。

A:そうしたら<u>そのワンちゃん</u>がなんかか喜んじゃって,で,あたしの方に走ってきて,とびついてきちゃってさ。別にあたしさあ,別にさっきなでただけなのにさあ,なんかすごーいなつかれちゃってね。

B: さっきね、別に、そんなになでてもいないんだよ。

A:よしよしって言っただけなのに。

B:あらワンちゃんだーとか言ってすれ違ったんだよ。普通 に。それでその次のとき、向こうの方からは一っといって かけてくるじゃん。

A: すごい勢いで走って。私,あ,あー<u>さっきの犬</u>だとか私たちが言っとるじゃん。あんで向こうの人たちも,あっ,さっき会った子たちねみたいな感じで気がついたじゃん。 <u>犬</u>も気がついたじゃん。じゃははって走ってきちゃって, 犬が。

A: ほいであたしなんかとびつかれちゃったよ。

(名大会話コーパス)

次の例(12)(13)は、『やすらぎの郷』(倉本 2017)からのものである。 会話の中の栄は脚本家であり、かつての仕事仲間であるテレビディレク ターだった中山と亡くなった栄の妻律子の話をしている場面である。この 会話においても同じ対象について「律子 | 「あいつ | 「女房 | という指示表 現を用いている。denotation は同じであるが、非概念的意味の違いはどの ような点にあるのだろうか。「律子」は、やや客観的に自分の妻について 語っている様子が感じられるが、「あいつ」は、より身近な存在としての 妻を表現しているのではないだろうか。「女房」と言及していることから は、婚姻関係にあるという律子との関係性が印象づけられていると言え る。いずれも無標と有標の対立という構図は見られないが、会話の流れの 中で発話者が適宜指示表現を選択している。そこには発話者の意図を感じ ることができる指示表現のレトリック性がある。Levinson (2000) は. 有標性の概念について形式面では有標形はより形態的に複雑で語彙化され ておらず、冗長であるがステレオタイプでないという特徴を持つとしてい る。しかしながら、この有標性の概念では(11)~(13)の会話に出現する指 示表現を説明することができない。仮に用いられている指示表現がすべて 無標と仮定すると発話者の意図的な指示表現の選択について説明できな い。このことから発話における指示表現のレトリック性は、その発話の中 で用いられている複数の指示表現の対比によって決定されるという語用論 的な現象が日本語に存在すると言えるのではないだろうか。

(12) 栄 「この話が初めて俺ンとこに来たのは。 — 律子の認知 症がどんどん進んで、あいつが徘徊を始めたころだ」

申山 「―― |

栄 「息子と孫娘は時々見に来てくれたけど──嫁は殆んど 来てくれなかったし

<中略>

栄 「俺は結局連ドラを降りてな」

申山 「――」

栄 「つき切りで律子といることにした」

栄 「あいつはどんどん人が変わっちまって」

中山 「——」

栄 「昔の律子と別人になっちまった」

中山 「—— |

栄 「ある日昔の、<u>律子</u>がブレークした — そうだ、あんた の演出だったよな。"陽だまりの時"の DVD を観せた ンだ |

中山 「——」

栄 「あいつ、昔の、若い自分を見て」

(13) 栄 「判らないよ、ただ―。俺の全く気づかなかったところで、―<u>女房</u>にひそかな青春があって。――そのことで<u>女房</u>がその時期ひとりで、――苦しんだり、悩んだり ――或いは束の間心を燃やしたり。――そういうことがあったンだとしたら。そんなことに全く気づきもしないで、あいつの気持ちも判ってやれず ―― |

(14)は、『冬の運動会』(向田 2009)からの引用だが、ここでの指示表現「あの日出子という女」については、無標表現「日出子」との対立で説明が可能である。つまり、「あの日出子という女」が有標性を持つ表現であることは、形式面ではより形態的に複雑で語彙化されておらず、冗長であるという Levinson(2000)による有標性の概念によって説明ができる。したがって、日本語における発話には、Levinson の M 原理を適用させることで説明されうるものもあるが、必ずしも無標と有標の対立構図によって指示表現のレトリック性が出現するとは限らない場合が日本語にはある

ことを主張する。

(14) 菊男 「こういう場合、一番いいのは、オレが車にでもぶつ かって死ぬことだ。そうすれば、あの日出子という女 は、少しはみじめさから救われる。だが、この道は滅多 に車が入ってこない一方通行の道なのだ |

以上、日本語の発話に見られる指示表現のレトリック性は、「話者が実 際には使わなかったが、使うこともできた|無標の指示表現を聞き手が想 起できる場合に出現するという Μ 原理で説明できるものもあるが、コン テクストの中での無標の指示表現の想起は必須ではないことを指摘した。 つまり、日本語による発話においては、同じ指示対象に対して異なる複数 の指示表現が用いられている場合. それらの指示表現の対比によってコン テクストの中で非概念的意味を推意することで捉えられるケースも存在す るのである。

次に認知と伝達に関する理論である「関連性理論」によって指示表現の レトリックの説明を試みる。関連性理論では、「発話の言語形式が持つ意 味は、発話が表現している意味(発話によって表出される命題 = the proposition expressed by an utterance= 表出命題) を下回る」という主 張を立てている。聞き手は、この意味の確定度が十分でない発話から推論 を働かせ、発話の言語形式にさまざまな調整(語用論過程⁽⁶⁾ = pragmatic procedures)を行うことによって最終的に明確な意味を得ると言う(今 井 2015)。関連性理論では、Grice が提示しているような複数の格率を設 けるのではなく、単一の原理によって発話解釈は支配されていると考えて いる。

また、既に4章で述べたように 関連性理論では、語用論的に補強され た表出命題の概念を明意(explicature)と呼び、暗意(implicature)と

いう概念と対照させている。明意は、明示的に伝えられる意味である。一方、暗意は暗示的に伝えられる意味であり、発話の言語形式を発展させたものではなく、発話の言語形式とコンテクストに基づく推論のみから得られるものである。指示表現自体には特別な意図が含まれないが、発話コンテクストを介して発話者の情意的意図が感じられる指示表現のレトリックは、関連性理論のこの「暗意」の概念に基づいて説明できるのではないだろうか。

関連性理論において「コンテクスト」という語は、「発話の解釈する時点で聞き手が想起でき、推論の前提とすることのできる想定」という意味で用いられる。聞き手が発話を聞く前に知識として身につけたことであっても、発話や発話解釈の時点で想起できなければそれはコンテクストではない。つまり、「コンテクスト的含意(= contextual implication)」は、聞き手が以前から持っているコンテクストだけからは得られず、また発話者の発話だけからも得られず、コンテクストと発話の双方を前提とした推論によって初めて得られる想定である。

以上の関連性理論の主張から上述した(14)の発話における指示表現のレトリックは、説明できることになる。つまり、発話以前に持っているコンテクストは、知り合いに日出子という名前の女性がいて、通常は例えば「ひでちゃん」とか「日出子さん」という呼び方をしているが、発話の中では「あの日出子という女」という言語形式が使用されている。この双方から聞き手は指示表現のレトリック性を理解するのである。また、M原理で用いられる「無標の指示表現」は、発話以前に持っているコンテクストに含まれると考えることで「関連性理論」を適用することの妥当性が示唆される。

(11)(12)(13)では、M原理で必要とされている「無標の指示表現」を聞き手が想起せずに指示表現のレトリック性が説明できるケースが日本語に存在することを主張したが、このことも関連性理論から同様に説明がで

きるだろう。「律子 | 「あいつ | 「女房 | という言語形式が誰を特定するか は、発話以前から聞き手が持っているコンテクストから理解でき、これら の指示表現が持つレトリックを発話全体から推論によって得ることができ るのである。この推論過程は、今回研究の対象から外した指示表現として 使われるメタファー表現にも応用できると考えられる。

6. 結 語

本稿では、まず日本語発話における指示表現のレトリックを対象に Levinson の M 原理を用い、その有効性を検証した。その結果、「発話で 用いられる指示表現に対応する無標の指示表現が聞き手によって想起され る場合に発話中の指示表現はレトリックと解釈される | と主張する M 原 理からでは説明できない指示表現のレトリックが存在することが明らかに なった。つまり、日本語発話では無標表現を想起せずとも指示表現のレト リックの効果が現れる例が存在するのである。

次に、指示表現のレトリックを関連性理論から包括的に説明することが 可能であることを提示した。関連性理論の「明意」と「暗意」を対照させ て指示表現のレトリック性を解釈する過程を説明した。この過程は無意識 的かつ瞬時に機能し. 発話の明示的意味・非明示的意味を解釈するための 推論やコンテクストの選択といった発話解釈のすべての側面に適用される と考える。しかしながら、今回は関連性理論の骨格でもある「認知効果」 と「処理コスト」の視点から十分な分析がされていない。指示表現のレト リックについての解析に関連性理論が有効であることが示された以上、さ らにデータをもとに「認知効果」と「処理コスト」によって定義される 「関連性 | の観点から検証を続けていきたい。

また、日本語と英語の指示表現についても体系的に比較する必要があ る。英語における指示表現のレトリックは M 原理による説明は有効で あった。しかし、日本語では M 原理によって説明できない指示表現のレトリックが存在したのは、単に日本語と英語の指示表現の体系的な違いによるものなのかどうかについての考察も今後の課題としたい。

最後に日本語教育における指示表現の指導について触れておく。日本語教育では、指示詞「こ・そ・あ・ど」は「現場指示用法」と「非現場指示用法」の2つに分け初級段階で導入されるが、会話や文章で多用される非現場指示用法については体系的に指導がなされておらず、指示表現のレトリックの解釈については、会話や読解活動において出現した際に指導しているというのが実情ではないかと思われる。指示表現の指導には、単に指示対象を特定化することに終始するのではなく、発話者や書き手の意図を推測するような指導も望まれる。指示表現のレトリック性を理解せずに発話者の意図を汲むことはできない。本稿で取り上げた関連性理論による説明が指示表現のレトリックを指導する上で一助となれば幸いである。

《注》

- (1) 発話における「指示表現のレトリック」のレトリックとは、単に指示対象をそれによって特定するだけでなく、ある意図を持って聞き手に伝えるための術である。
- (2) 発話者は「言われたこと」と「推意とされたこと」の両方を意味することができるが、Grice (1975) は「推意とされたこと」に焦点を当て理論化し「一般会話推意 (GCI)」(generalized conversational implicature)を提唱している。Griceの「言われたこと」と「推意とされたこと」の区別をさらに発展させ GCI を詳述することに主眼を置いているのが新グライス派の研究者たちである。一方、ポスト・グライス派は、「言われたこと」を語用論的にさらに発展させ文脈主義的な概念の必要性を主張している。また、新グライス派は発話者が意味していることに焦点を当てているが、ポスト・グライス派は発話者が意味していることを聞き手はどのように理解するかという点に焦点を当てている (ジョナサンほか 2020)。
- (3) 有標性:平田は、Levinson (2000: 137) の規定を踏襲している。 On the formal side, marked forms, in comparison to corresponding unmarked forms, are more morphologically complex and less lexicalized.

more prolix or periphrastic, less frequent or usual, and less neutral in reg-

形式面では、有標形は、対応する無標形と比べて、より形態的に複雑でな おかつ語彙化されておらず、より冗長であるか周辺的であり、より頻度が 少ないか通常でなく、さらに使用域が中立ではない。

(田中・五十嵐 2007: 176)

(4) M 原理

話し手の格率:有標表現を使って、通常でなく、またステレオタイプ的で ない状況を示せ、その有標表現とは、通常の、ステレオタイプ的な状況を 述べるのに使う表現とは対照的な表現のことである。

受け手の系:通常でない言い方で言われたことは、通常でない状況を示す か、あるいは、有標のメッセージは有標の状況を示す。とりわけ:

話し手Sが有標表現Mを含むpと言った場合、そして(話し手がpと 同じ文フレームでその無標表現を使ったかもしれないが)pと同じ外延 的指示をもつ無標の代替表現 U がある場合は、U と言えばステレオタイ プ的かあるいはより特定的な D の部分集合を推意したことになるが、有 標表現 M は D の補集合である外延的指示 d. すなわち D の d を推意す (田中廣明・五十嵐海理 (訳) 2007:175) ることになる。

- (5) M原理の最後のthe marked expression M will implicate the complement of the denotation d, namely \overline{d} of Dの後に平田は If no \overline{d} is available, the connotation of M that U does not have will be ostensively communicated. を付け加えることによって、無標/有標の対がある場合、有標 の表現 M は無標の表現 U にない非概念的意味 (connotation) を伝えるこ とになるとしている。
- (6) 文の言語的意味表示である論理形式を発展させ表意を構築する際に聞き 手が行う「語用論過程」には、曖昧性除去(一義化 = disambiguation)、飽 和(論理形式に含まれる変項に対してコンテクストに照らし合わせ値を付 与すること = saturation). アドホック概念構築 (論理形式の語彙概念を語 用論的に調整すること = ad hoc concept construction), 自由拡充 (論理形 式に語用論的要請により何らかの要素を付加すること = free enrichment) がある。

参考文献

Carston, Robyn (2002) Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication. Oxford: Blackwell. 「内田聖二ほか(訳)(2008) 『思考と

- 発話 明示的伝達の語用論』東京:研究社]
- Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. [清塚邦彦 (訳) (1998) 『論理と会話』東京:勁草書房]
- 平田一郎(2018)「指示表現のレトリック」日本語用論学会『語用論研究』第 20号 pp. 62-81
- Huang, Yan (2014) *Pragmatics*, 2nd edition. Oxford: Oxford University Press. 今井邦彦 (監訳) (2014) 『語用論キーターム事典』東京: 開拓社
- 今井邦彦 (監訳) (2015) 『意味論キーターム事典』 東京: 開拓社
- 今井邦彦(2015)『言語理論としての語用論 入門から総論まで』東京: 開拓 社
- 庵功雄(2019)『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』東京:ひつじ書房 ジョナサン・カルペパー/マイケル・ホー/椎名美智(監訳)(2020)『新しい 語用論の世界―英語からのアプローチ』東京:研究社
- 小松原哲太 (2016) 『レトリックと意味の創造性 言葉の逸脱と認知言語学』 京都:京都大学学術出版会
- 金水敏・田窪行則 (1992) 『指示詞』(日本語研究資料集[第1期第7巻]) 埼玉: ひつじ書房
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By.* Chicago: University of Chicago Press. [渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳)(1986) 『レトリックと人生』東京:大修館書店|
- Levinson, Stephen C. (2000) Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature. Cambridge, Mass.: MIT Press. [田中廣明・五十嵐海理(訳)(2007)『意味の推定――新グライス学派の語用論』東京:研究社]
- メイナード、泉子・K. (2000) 『情意の言語学――「場交渉論」と日本語表現の パトス』東京: くろしお出版
- メイナード,泉子・K. (2006)「指示表現の情意:語り手の視点ストラテジーと して」国立国語研究所『日本語科学』第19号 pp. 55-75
- 追田久美子(2001)「第1章学習者独自の文法 学習者は独自の文法を作り出す」野田尚史・追田久美子ほか『日本語学習者の文法習得』東京:大修館書店
- Sperber, D. and Wilson, D. (1981) Irony and the use-mention distinction. In P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*. New York: Academic Press.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986) Relevande: Communication and Cognition (2nd ed.: 1995). Oxford: Blackwell

内田聖二 (2011) 『語用論の射程 - 語から談話・テクストへ』 東京: 研究社

(作品引用)

倉本聰(2017)『やすらぎの郷 上』東京: 双葉社

向田邦子(2009)『向田邦子シナリオ集IV 冬の運動会』東京:岩波書店

(資料)

名大会話コーパス:https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/ (2020年8月29日閲覧)

(原稿受付 2020年10月30日)

初級日本語における 「お+漢語 | の扱い方について

小 林 孝 郎

要旨

「待遇性接頭辞」の「お」と「ご」とその使い分け方法については、従来から問題点の存在が指摘されてきた。おおかたの研究の示すところは、その使い分けの要諦を「お、ご」に後接する語彙情報に拠るとするもの(「語種原則」)であったが、そこで生じる問題として「お、ご」と後接する語種とのミスマッチをどのように説明するかという点があった。本稿はこれに対して、「お+漢語」「ご+和語」の問題を含めて研究史を概観し、学術的にも日本語教育分野においても「語種原則」が浸透している現状について考察した。次に、「語種原則」に代わる可能性を持つ新たな説明項を模索する研究潮流について論じた。そして、それらの説明項(本稿では「解釈要素」とした)を初級日本語教育に応用することが可能かどうかを日本語教科書の「漢語語彙」を実際に検証することで考察した。

キーワード:接頭辞, 漢語, 語種, ポライトネス, ウチソト

0. はじめに

接頭辞の「お、ご」の使い分けは、日本語学習者にとって習得の困難な ハードルの一つと言われる。この問題の所在は、「お」と「ご」に後接し て派生語を生成する、後部要素の「語基」の弁別を可能にする明快な回答 が提示されていないことによるが、かと言ってこの課題がこれまでまった く放置されてきたということではなく、研究史を紐解けば、戦前からの議 論も積み重なり、現在に至っていることが分かる。しかし日本語教育の場 に目を移すまでもなく、母語話者にとっても時に困惑を生み出す元にもな り得る言語事象である。

本稿では、研究史における論点を整理し、従来の説明項に代わる「解釈 要素」を検証した後に、その初級日本語教育への応用も視野に検討してい くこととする。

1. 先行研究

現在,「お,ご」の用法について,後述する辞・事典類や日本語教育解説書⁽¹⁾ などに異論なくほぼ一致して取り上げられているのは,次のような事項である。

- 1) 和語接頭辞「お」には「和語」語彙が後接する
- 2) 漢語接頭辞「ご」には「漢語」語彙が後接する
- 少数だが「お」に「漢語」が後接することがある。また、極めて 少数だが「ご」に「和語」が後接することがある
- 4) 「お」と「ご」の両形に後接する語が確認されている

これらは、いずれも「接頭辞」と「語種」との関係性に重きを置いた記述であるが、本稿では、特に1)2)を山田・奥瀬(2013)に倣い「語種

⁽¹⁾ 例えば、東京 YMCA 日本語学校(1992)には、「美化語」の解説の項に、 〈「お/御」の使い分け〉として、「一般的に和語には『を』、漢語には『御』が 付くが例外もある」と記され、例外(漢語でも「お」が付くもの)に「お料理、 お電話、お時間」を挙げている。

原則」と呼ぶことにする。

1.1 接頭辞「お、ご」に後接する「語種」をめぐって

接頭辞「お、ご」は、両者とも漢字「御」で表記される「待遇性接頭辞⁽²⁾」に類別されるが、それ自身が和語・漢語の別を持つように、後接する語に「語種」による制約がある。例えば、『日本語学研究事典』(2007)には、「接頭語」の項に

「お」と「ご」の使い分けが、「お酒、お年、お友達、お仲間」、「ご 挨拶、ご自慢、ご立腹、ご令息」のように、基本的に結合相手の語種 の相違にあることを考えると(ただし、「おビール」のような例もあ る)注目に値する。 (p. 166)

との記述がある。

また日本語教育の分野においても、近藤・小森(2012)に、

「お」と「ご」の使い分けは、通常、「お+和語」(例「お名前」「お休み」「お顔」「お美しい」)、「ご+漢語」(例「ご家族」「ご住所」「ご出身」「ご立派」)となるが、「お電話番号」「お元気」「お食事」など、漢語の前でも「お」が好まれる例も多い。 (p. 167)

との解説がある。なお、この引用の末尾の部分「『お電話番号』『お元気』 『お食事』など、漢語の前でも『お』が好まれる例も多い」とあるのは、 本稿で扱おうとしている語種原則の制約とは異なった語種の組み合わせ例 である。

⁽²⁾ 玉村(1985:48)。

時代を遡れば、山田($1924^{(3)}$)、松下($1930^{(4)}$)らにもこの問題に言及した部分があるが、本格的な調査研究が始まるのは戦後しばらく経った後である。

柴田(1957)は、戦後の本格的な調査研究の起点であるが、アクセント辞典収録語を元に母語話者に「お、ご」の許容度を質問する調査を行ない、「お」につきにくい語⁽⁵⁾を中心に、後述する「おがよくつく語」についても考察を行った。

新聞,雑誌の語彙調査⁶⁾を元に「お,ご」がつく語について考察をした田中(1972)は、圧倒的に「お」がつく語が多いことや、「お,ご」両形につく語はそれほど多くないことについて「慣用的な限られた用法をのぞいては、「オ」が和語に、「ゴ」が漢語につくという傾向は、強く定着しているとみられる」と述べている(p. 42)。「慣用的な限られた用法」とは、近藤・小森の「漢語の前でも『お』が好まれる例」と重なるものであるう。

^{(3) 「}御」といふ字を書いても「お」であるか「ご」であるかは下の語に由って 定まるから讀み方に迷う様な場合は殆ど無い。唯「御丈夫」「御立派」「御試験」 など「お」「ご」兩方にいふものも多少あるが、其れも前後の關係で大體は分 かる。何となれば「お」は平易な語で「ご」は莊重な語であるからである。 (pp. 375-376)

^{(4) 「}一,接頭辭にして敬意をあらはすものは次の数種なり。『お』名詞の上に冠することあり。」として、品詞別に語例を記載。語種についての記述はない。続けて「『ご』名詞の上に冠す。主として漢語のものにつく。(中略)副詞の上に冠するもの。これも主に漢語のものにつく」と、こちらは語種に触れている。なお副詞は『ご親切・ご丈夫・ご盛ん・ごゆっくり・ご尤も』の語例から現在の形容動詞と知れる。(pp. 22-24)

⁽⁵⁾ 外来語/「お」で始まる語/長い語/悪感情の語/色・自然に関する語 (pp. 41-45)。

⁽⁶⁾ 国立国語研究所 (1971)『電子計算機による新聞の語彙調査・Ⅱ』, 同左 (1962)『現代雑誌九十種の用語・用字』

このように、日本語の「お、ご」とその後接する語についてのこれまでの研究は、後接する語の「語種」の問題に焦点が当てられており、柴田、田中をはじめとした多くの実態調査⁽⁷⁾ がこの説を支えてきたこともあって、「語種原則の有効性」(山田・奥瀬 2013)を疑う者はきわめて少数であった。

1.2 「お、ご」と初級日本語語彙について

中西(2012)は、日本語教育の立場からこのテーマに取り組み、「お、ご」と初級日本語語彙との関連を調べたものであるが、「日常語⁽⁸⁾」の中で接頭辞「お」が付く語を合計で384語抽出した。また、そのうち、「お」の付く「漢語」は43語⁽⁹⁾(以下、「中西リスト」と略述)である。「中西リスト」中の各語を、旧 JLPT 出題基準の級別、さらにモーラ数別に整理し〈表 1〉に示す。

中西リストに記載されているのは、旧 JLPT 出題基準の「3,4 級語彙」である。中西は、日常語 1,500 語の中で、接頭辞「お、ご」の付く語は442 語で全体の約 3 割であるが、そのうち「お+漢語」の割合は1 割に満たないことから、

これらの語は初級日本語学習者にとって、日常生活で多用されるも

⁽⁷⁾ 既述の国立国語研究所調査の他に、文化庁による「国語に関する世論調査」 (1997, 2006)、NHK「ことばのゆれ調査」など。直近の調査は滝島(2018)に 詳しい。

⁽⁸⁾ 中西 (同上) では、国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』の「3,4 級語彙 (1,500 語)」及び「あいさつ語等表現 (32 項目)」としている (p.28)。

⁽⁹⁾ このほかに、「お」と「ご」双方が可能な語彙として「大切、返事」を挙げている。なお、論文内での「じゃま」の扱いが不統一だが、「あいさつ語」でもあり、本稿では考察対象には含めない。

3 級		4 級					
2モーラ (4)	4モーラ (2)	1モーラ	3モーラ				
客	正月	茶	きれい (綺麗)	上手	教室		
世話 (する)	約束(する)	2 モーラ	元気 丈夫		玄関		
留守	大切	医者	紅茶	洗濯(する)			
礼	返事	椅子	財布 掃除(する)		人形		
3モーラ (4)		菓子	砂糖	天気	勉強		
支度(する)		肉	散歩 (する)	電話	弁当		
食事 (する)		ふろ	時間	布団	洋服		
大事			写真	帽子			
野菜			授業	料理			

表1 「お」の付く初級「漢語」リスト(中西 2010:28-34 より)

のであり、接頭辞「お」が付く例外として教えるべきである (p.34)

とした。日本語教育語彙に的を絞ってリスト化し導き出した主張であるが、基本的には「語種原則」を踏襲している。

しかし、「お+漢語」という点で言うと、無視できない数の例外を固定 化しない、「語種原則」とは異なる新たな説明が求められていると思われ る。

1.3 語種原則への疑問

山田・奥瀬(2013)は、この「語種原則」による「お、ご」の使い分けに対して「語の出自という通時的概念に関わる『語種』という述語を用いては、共時的原理になりえず、説明概念としては不充分もしくは不適当である」(p. 223)とする根源的な問題提起を行った。さらに、「語種」による説明には方法論的に問題があり、共時的観点からの考察が必要であることを述べるとともに、語種原則の限界を次のように表現した。

現実の言語生活で、語種を意識・確認しながら オー/ゴー 選択する という状況はほぼ考えがたい。(例えば「お忙しい中申し訳ありませんが、ご確認お願いします。」という発話をするときに、"「忙しい」は「和語」だからオー、「確認」は「漢語」だからゴーを付けよう"と いったプロセスを踏んでいるだろうか? (p. 227)

この根源的な問に的を射た解答を用意するのは容易ではないが、語種原 則からは例外として扱われてきた、「お+漢語」形の生成を説明する新た な枠組みに手がかりが潜んでいるかもしれない。

本稿ではこの後、これまでに論究されてきた語種原則に代わる新たな説明方法を、研究史を辿って検討したのち、初級日本語教育への適用可能性について検討していくことにしたい。

2. 「お+漢語」について

2.1 語の成立プロセス要因

中西(1993)は、「語種原則」同様の通時的観点ではあるが、「お」に後接する漢語の成り立ちを検証し、和製漢語には「お」が後接することを述べた⁽¹⁰⁾。この方法は、学術的には検討されてしかるべきものだが、漢語と和製漢語の判別、「お」の後接しない和製漢語⁽¹¹⁾ についての新たな位置づけが必要となることもあり、教育の視点からは今後整理が必要となろう。

^{(10) 「}お+漢語」の形式で使われる漢語を「真に例外とすべきもの(肉, 茶, 紅茶, 時間, 醬油)」「和製の漢語(愛想, 菓子, 行儀, 辞儀, 受験, 食事, 世辞, 世話, 洗濯, 葬式, 電話, 荷物, 人形, 風呂, 便所, 弁当, 味噌)「日中語間で用法の違うもの(礼, 上品, 勉強, 料理)」に3分類している。(p. 140)

⁽¹¹⁾ 例えば、出席、心配、想像、責任など。

2.2 後接語の意味範囲

柴田(1957)は、前述したように「お」と語種の問題として、外来語には非外来語よりも「お」がつきにくいことを述べているが、「語種原則」に関する言及はなく、「お+漢語」形を特に意識してはいないものと思われる $^{(12)}$ 。同時に、語の意味範囲を基に、「お」のつきやすい例として、a)食事(例:醬油)b)心の働き(例:気の毒)c)身体の働き(例:病気)の3項目を挙げている(検討過程ではそれ以外に「家の道具/食するもの/感情」などの項目も)が、「お」のつきやすいとされる語例には「手伝、知らせ」などの和語が含まれていたり、b)c)のようにカテゴリー化するには無理のあるものも見受けられる $^{(13)}$ 。

西隈(2004)は、「語種原則」を述べたのち「お+漢語」形について、「お茶、お菓子、お豆腐、お味噌」の例を挙げ、「漢語のうち飲食に関するもの(まれに外来語にも付く)」に「お」が用いられると述べ、「おビール、お紅茶」なども「飲み物であるからだ」とした。ただし、「お天気、お電話」などについては「慣用」としている。

「お+漢語」形の問題に、語の意味範囲による説明を本格的に用いたのは堀尾(2010)である。堀尾は、「仮説」として〈漢語であっても、モノであれば「お」が付く〉を立て、「和語には『お』漢語には『ご』を付ける」という「基本のルール」に当てはまらない語彙のうち、「モノ」の定義(14)を満たす語彙を諸種のメディアから収集した。〈表 2〉は、堀尾がま

⁽¹²⁾ 山田・奥瀬 (2013: 227) など。本稿 89ページに引用あり。

⁽¹³⁾ 柴田(同上)ではまた、「お」についての先行研究のうち、三宅(1944)の 「食事に関する語にはよくつく」、今泉(1955)の「魚の名・花の名にはつきに くい」という見方が紹介されている。

^{(14) 「}形のある物体を初めとして、広く人間が知覚し思考し得る対象の一切を意味する。「こと (事)」が時間的に生起・消滅する現象を表すのに対して、「もの」はその現象を担う不変な実体を想定して用いる語」としている (p.63)。

とめた「モノ」の下位分類と語例である。

カテゴリー	モノを表す語彙の特徴	例
金銭	お金に関する語彙	お賽銭・おこづかい・お通帳
装飾	服装や体につけるもの、ファッション	お鏡・お鞄・お扇子
家	家や家の間取りなどに関する語彙	お宅・お座敷・お二階
食器	食べ物を作る・食べる際に使う道具	お杓文字・お皿・お玉
祭礼	儀式や慣例、行事などに関するもの	お数珠・お中元・お土産
通信	通信に使用する道具	お電話・お手紙・お葉書
その他	上記の8つのカテゴリー以外のモノ	おタオル・お注射

表2 モノに「お」を付ける語彙

※ 堀尾 (2010:64) より転載

堀尾が上述の定義に従って収集した語数は113 語であるが、そこから「お」に後接する「漢語」44 語(以下、「堀尾リスト」と略述)を抽出した。堀尾リストをモーラ数別にまとめたのが〈表 3〉である(語彙の表記は原文のまま)。

2モーラ (11)	3モー	ラ (20)	4 モーラ (13)				
匙	急須	駄賃	給金	人形			
札	化粧	茶碗	給料	洋服			
数珠	月謝	電話	玄関				
席	財布	道具	香典				
代	時給	時計	賽銭				
宅	写真	二階	座席				
ちょこ	杓文字	布巾	餞別				
鉢	祝儀	布団	雑巾				
布施	歳暮	帽子	中元				
盆	扇子		注射				
わん	太鼓		通帳				

表3 堀尾 (2010) の「お」に後接する「漢語」リスト

※同上 p. 65, 注 12 より

堀尾は、「基本的に和語には『お』、漢語には『ご』をつける。モノの語彙の場合は「お」が付けられるが、規則からの逸脱ではない」(p.70)として「語種原則」の修正を主張し「返事、会計」の分析時には、「敬意の方向」「動作主」の概念を援用している。「語種原則」を踏まえつつも、「お+漢語」の共時的説明項として、「モノ」性という概念を用意したものである(15)。

2.3 後接語の機能・ウチソト・言語内的要因

菊池(1994)は、「語種原則」を承認した上で、部分的にではあるが、「機能」という概念を取り入れて以下のように述べている。

「お」か「ご」かで〈機能〉を区別する傾向のある語も、稀にある。 「ご返事」「お返事」は、前者が尊敬語・謙譲語 A、後者が美化語(たとえば幼稚園言葉)という使い分けの傾向が、かなり認められそうである。 (pp. 385-386)

しかし「機能」の視点は、両接頭辞に後接可能な「病気、誕生、気分」などの語の場合はともかく、「お」に後接できる/できない語の選択という新たな問題が生じる。

西隈(2004)は、「お+漢語」形の2つ目の要素として、「漢語のうち「相手の所有物」を指す場合には「お」使用の傾向がある」と論じている。「お時間、お返事、お宅」などがその具体例である(16)。また、「フォーマリ

⁽¹⁵⁾ この他に堀尾は、「お/ご+返事」の使い分けに「動作主」と「敬意の対象」という要素を用いた説明を加えている。

⁽¹⁶⁾ 反例となる「ご+漢語」については、「ご住所、ご両親」を挙げ「所有というよりも所在」であるからとしている。

ティー⁽¹⁷⁾」概念を用いて「ご返事」「お返事」の違いも述べた。西隈が用いた「所有,フォーマリティー」などの概念は、後述する山田・奥瀬の分析にも通じるだけではなく、母語話者の「お、ご」選択の判断基準に近いものに思える。また、この点は、日本の言語文化の基本構造との関連も想定され、日本語の特徴とされる「ウチソト」体系の指標⁽¹⁸⁾ に加えることも可能となるかもしれない。

宮田(2005) $^{(19)}$ は,「お」「ご」に後接する要因を検討し,a)語種 b) 拍数 c)音韻的要因 d)形態的動作性の有無の 4 項の「言語内的要因」について述べた $^{(20)}$ (p. 31)。その結果,「お」に後接しやすいのは「お以外で始まり形態動作性を持つ 3 拍語の和語及び混種語」であり,「ご」に接続しやすいのは「ご以外で始まり形態的動作性を持つ 4 拍の漢語」であるとしている(p. 116)。

山田・奥瀬(2013)は、「お、ご」両用の語の分析を主としたものだが、 まず柴田、宮田について、以下のように述べる。

柴田 (1957) も宮田 (2005) も、敬語接辞が前接できるかどうかについて、後部要素(語基)の性質の諸要素によって条件化できるという予想の下、様々な条件(変数)を仮設し、その有効性を検証しようとしたものであろうが、その変数設定自体が、敬語の特質である対人

⁽¹⁷⁾ 形式的であるかどうかの度合い。「お返事は?」は母親が答えない子どもに、「ご返事をお待ちしております」は上司やビジネス相手に用いる、という例を挙げている(p.33)。

⁽¹⁸⁾ 本稿では、これ以上は立ち入らない。ウチソトの視点から「は、が」「の、 こと」などを分析している牧野(1996)を参照されたい。

⁽¹⁹⁾ 日本語教育語彙リストの一つである「国際交流基金 (2002)」に収録されている JLPT1 級名詞語彙を「お、ご」に後接させた時の自然さについて、日本語母語話者の判断を求めたものである。

^{(20) 「}言語外的要因」である男女別の傾向分析も行っている。

関係の問題を離れて、ほぼ形態論レベルでの解決を探っている点に疑問を感じる。しかし、いずれにせよ、柴田(1957)は、そもそもオ/ゴ選択自体を(おそらく暗黙の前提として)問題としておらず、宮田(2005)は語種原則を第一に認めているように、語種原則を最も大きな要因とする点に変わりはない。 (pp. 226-227、下線は筆者)

この山田・奥瀬の言辞の背景には、「お、ご」の使い分けという「共時的言語状態」を説明する上で、通時的概念である「語種」を用いて説明するという方法論を疑問視する理論的な立場がある。その理論とは、「ポライトネス理論」を基にした「距離」の視点である。例えば「お返事」「ご返事」の分析では、話者の判断で「距離の近い人」「距離の遠い人」の場合に使用されるとした。その上で、この「距離」標示機能は「お、ご」にではなく、「語基」自体が持つものであると述べ、「友人/友だち、職業/仕事」などの類義語ペアの使い分けをはじめ、多くの語彙分析に適用できる可能性について論じた。西隈同様に「ウチソト」体系との親和性を思わせる記述である。

2.4 「語種原則」以外の解釈要素

ここでは、次節以降の検討資料とするため、「お+漢語」を例外として 処理した「語種原則」に換わり得る解釈要素を取り上げた「お+漢語」の 説明項について整理をする。以下、1)2)は解釈の対象を、①~⑦は説明 項とする解釈要素を、()内には論者名を記す。なお西隈、堀尾は複数 の説明項を持つので、それぞれに abc 記号を付して区別した。

1) 接頭辞「お.ご|

- ① 「お」と「ご」の機能(菊池, 堀尾 a)
- ② フォーマリティー (西隈 a)

2) 後接する語基

- ③ 和製漢語(中西)
- ④ カテゴリー (柴田, 西隈 b. 堀尾 b)
- ⑤ 形態的動作性(宮田)
- ⑥ 所有 (西隈 c)
- ⑦ 距離(山田・奥瀬)

接頭辞「お」を解釈対象としたのは、①②である。ただし、これは「お、 ご」の両接頭辞の使用が可能な後接語にのみ適用されるものである。

これに対して、後接語の語基のさまざまな意味特性を解釈の対象としたものが3 \sim 7である。

中西による③は、通時的観点ではあるがその有効性を確認する必要がある。語の意味範囲を指標にした柴田、西隈 b、堀尾 b の 3 者の議論では、堀尾 b の「モノ」に加えて、「食品」をプラスすることで重複を避けてまとめることができる。本稿ではこの「モノ」系列の意味範囲を説明項とする場合を④「カテゴリー」と呼ぶことにした。

宮田は言語内的要因として4項目を挙げたが、そのうちの「拍数」は、「お、ご」で解釈要素とするほどの明示的な差は見られず、「音韻」も後接語基の頭音が「お、ご」の場合のみに通用する限定的なものなので除外すると、解釈要素としては⑤の「形態的動作性」が選択される。

西隈 c の「所有, (フォーマリティー)」, 山田・奥瀬の「距離」の機能は、空間概念を基本とする日本語のウチソト体系の一部を成すものと捉えられるが、ここでは、それぞれ独立した解釈要素として⑥「所有」, ⑦「距離」を選択した。なお、⑥の場合は、後接する語基部分に「お」が付くと相手の所有となるもので話者側には属さないものという基準を用い、

⑦では、対になる「ご」のつく漢語の存否 $^{(21)}$ と「生活に密着した語」に属するかどうか $^{(22)}$ を基準とした。

本稿は、日本語教育の初級段階で「お+漢語」の学習を、「例外」としての取り扱い以外にどのような解釈要素の適用が可能かつ妥当かを、初級語彙を対象に、上の③~⑦の解釈要素について、適用の可否を検討することを目的としているが、実際の検証は、後述の「3.2 解釈要素適用の適否」において行うことにする。

3. 「お+漢語」の解釈について

3.1 「大地」の漢語リスト

本節では、日本語教育の実践面で、先行研究でなされた「お+漢語」の解釈要素の適用が可能かどうかについて、初級教科書に用いられている名詞(サ変動詞語基、形容動詞を含む)を基に考察する。

対象とする教科書は、『日本語初級①大地』及び『日本語初級②大地』 (以下、「大地」と略述)とする。同教科書の総語彙数は異なり語数で約 1,900 語で、中西(2012)が選定した 1,500 語より 25%ほど多いが、「お」 の付く漢語は、〈表 4〉に示す 37 語⁽²³⁾ である。この漢語の数は、上述の中 西リストと比べて、数の上で遜色はない。

また中西リストと所属語の比較をすると、中西リスト側には8語、大地側には5語、相手リストには属さない漢語が見られたが、いずれも初級では関連語彙として扱われるものであることから、ここでは「大地」のリストに対象を絞ることにする。

⁽²¹⁾ pp. 237-8_o

⁽²²⁾ p. 239

^{(23) 「}あいさつことば」「親族名称」は含めない。

:	2	3	4	5	6	7	8
砂糖	紅茶	茶教室	弁当	相撲(さん)	食事	きれい	椅子
しょうゆ	財布		野菜料理	風呂		元気	
肉				勉強		写真	
9	9	12	13	16	19	20	21
教師	掃除	授業	布団	菓子	医者(さん)	帽子	調子
散歩	天気				大事に		
洗濯	約束						
22	23	32	39	42	まとめ		
世話	丈夫	面	留守	宅	客 (さん)		
人形							

表4 「大地」における「お」に後接する漢語

3.2 解釈要素適用の適否

「大地」の37語について、「お+漢語」形を語基部分の特性を対象とした前述の解釈要素③~⑦について適用の可否を検討し、〈表5〉に示した⁽²⁴⁾。なお、「解釈率」は、5つの解釈要素の適用が可能な語数の37語に占める割合を表す。

事前に予想していたことではあったが、すべてにわたってカバーできる「解釈要素」は認められなかった。解釈要素としてもっとも高い割合を示したのは「距離」の68.4%(26語)であった。「カテゴリー」「形態的動作性」が続くが、いずれも解釈率は50%に届かない。

また、今回のどの解釈要素によってもカバーできなかったものは、「相撲 (さん)、医者 (さん)、大事、調子、客」の5語であった。

そこでこの5語を除いて、解釈可能な要素の使用を最小限に抑えた組み 合わせを検討したところ、仮に「距離(26語)」に加えて「カテゴリー

注1 数字は各漢語語彙の導入課を表す。

⁽²⁴⁾ 表中には、試みに「和製漢語」も含めた。

要素\漢語	砂糖	しょうゆ	肉	紅茶	財布	茶	教室	弁当
③和製漢語	-	-	-	-	-	_	-	0
④カテゴリー	0	0	0	0	0	0	-	0
⑤形態的動作性	-	-	-	-	-	-	-	-
⑥所有	-	-	-	-	-	-	-	-
⑦距離	0	0	0	0	0	0	0	0
要素\漢語	野菜	料理	相撲(さん)	風呂	勉強	食事	きれい	元気
③和製漢語	-	-	-	0	-	0	-	-
④カテゴリー	0	0	-	0	-	0	-	-
⑤形態的動作性	-	0	-	-	0	0	-	-
⑥所有	-	-	-	-	-	-	0	0
⑦距離	0	0	-	0	0	0	-	0
要素\漢語	写真	椅子	散歩	洗濯	掃除	天気	約束	授業
③和製漢語	-	-	-	0	-	-	-	-
④カテゴリー	0	0	-	-	-	-	-	-
⑤形態的動作性	0	-	0	0	0	-	0	0
⑥所有	0	-	-	-	-	-	-	0
⑦距離	0	0	0	0	0	0*	0	0*
要素\漢語	布団	菓子	医者(さん)	大事(に)	帽子	調子	世話	人形
③和製漢語	-	0	-	-	-	-	0	0
④カテゴリー	0	0	-	-	0	-	-	0
⑤形態的動作性	-	-	-	-	-	-	0	-
⑥所有	-	-	-	-	-	-	-	-
⑦距離	0	0	-	-	0	-	0	-
要素\漢語	丈夫	面	留守	宅	客(さん)	可 (○) の計	解釈率	
③和製漢語	-	-	-	-	-	6	15.8%	
④カテゴリー	-	0	-	0	-	18	47.4%	
⑤形態的動作性	-	-	0	-	-	10	26.3%	
⑥所有	0	-	0	0	-	6	15.8%	
⑦距離	_	-	0*	-	-	26	68.4%	

表5 「大地」37語の解釈要素の可否

(18語)」「相手の所有物 (6語)」を解釈要素にすると、100%の解釈率を得ることが分かった。「解釈要素」ではカバー仕切れなかった「相撲 (さん)、医者 (さん)、大事、調子、客」の5語のうち「相撲、医者、客」については、「人物の役割⁽²⁶⁾」のような意味範囲を設定することも可能であ

^{※ ○}は可を示す

[※] ⑦の「○*」は対語が想定できるもの⁽²⁵⁾

⁽²⁵⁾ 天気/天候、授業/講義、留守/不在

⁽²⁶⁾ 本稿執筆の過程で匿名の査読者からいただいた示唆を元に、着想したものである。記して感謝申し上げる。

ろう。「大事, 調子」についても調査語彙を増やすことで, 何らかの解釈 要素が設定できるのではないかとも考える。

4. まとめ

これまで「お+漢語」への疑問に対して「例外」「慣用」という解説がなされてきたが、時に歯切れの悪さや茫とした気分を抱かせるものであった。これに対して、近年の研究の中には、「例外」を含めた「語種原則」に代わる説明項を用意しようとするものが現れてきており、本稿では、そうした潮流に注目して論題として取り上げた。さらに、それらの研究成果と日本語教育との接点についても検討したが、汎用性を求めるという点では、充分なものとは言えない。

日本語教育現場において「お+漢語」の説明を、語種原則の「例外」という従来の見方に縛られずに、「解釈要素」の再検討を通して、今後新たな方向性を模索していきたいと考える。

参考文献

今泉忠義 (1955) 「日本の敬語」『講座日本語』2, 大月書店, pp. 146-158

菊地康人(1994)『敬語』角川書店

国際交流基金(1994)『日本語能力試験出題基準【改訂版】』凡人社

近藤安月子・小森和子 (2012) 『研究社日本語教育事典』 研究社

柴田武 (1957) 「「お」の付く語・付かない語」 『言語生活』 70, pp. 40-49

滝島雅子(2018)「放送における美化語の意識調査 — 視聴者とアナウンサーの 双方へのインタビュー調査から — 」『ことばの研究』NHK 放送文化研究所 (https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/index.html?p= 研究論文・ 報告)

田中章夫 (1972)「「オ」のつくことば・「ゴ」のつくことば」『國文学解釈と鑑賞』5月臨時増刊号. pp. 40-45

玉村文郎(1985)『語彙の研究と教育(下)』国立国語研究所

東京 YMCA 日本語学校(1992)『入門日本語教授法』創拓社

- 中西泰洋(1993)「接頭辞「お」と「ご」について」『大阪千代田短期大学紀要』 24, pp. 131-142
- 同上 (2012)「初級日本語の語彙に付く接頭辞「お」と「ご」について」『神戸 大学留学生センター紀要』18. pp. 27-36
- 西隈俊哉(2004)「『お』と『ご』の使い分け」『月刊日本語』11月号、アルク
- 服部匡 (2018)「敬語接頭辞異形「お〜」「ご〜」両者の用例のある語について」 『言語資源活用ワークショップ 2018 発表論文集 (Web 公開版)』国立国語 研究所
- 飛田良文編(2007)『日本語学研究事典』明治書院
- 堀尾佳以 (2010)「御 (お) と御 (ご) の統語的特徴 「お電話」 「お時給」はなぜ「お」か 」 『人間科學研究』 6, 北見工業大学, 59-71
- 牧野成一(1996)『ウチとソトの言語文化学 文法を文化で切る』アルク
- 松下大三郎(1930)『増補改訂 標準日本口語法』勉誠社
- 三宅武郎(1944)『現代敬語法』日本語教育振興会
- 宮田剛章(2005)「『お』か『ご』か?日本語母語話者による名詞の敬語化――日本語能力試験の語彙から――」『計量国語学』25-3,計量国語学会,103-122
- 山田健三・奥瀬真紀 (2014)「敬語接頭辞「オー/ゴー(御)」の使い分け原理試論 ポライトネス理論の観点から ——」『信州大学人文科学論集』47, 223-241
- 山田孝雄(1924)『敬語法の研究』東京寳文館

(原稿受付 2020年10月31日)

蜃気楼とハーンの宗教哲学

先 川 暢 郎

要旨

本論はラフカディオ・ハーンの霊魂観を彼の作品に頻出する「蜃気楼」という現象をキーワードとして、仏教や西欧神秘哲学やスペンサー哲学を参考にしつつ考察しようとする試みであるが、ここには必然的に「神と人」、「人と宇宙」、「人と時間」という壮大なテーマがかかわってくる。ハーンが青年期を過ごしたアメリカは、キリスト教主流派教会の衰退に呼応して、東洋思想と心霊主義ルネサンスともいうべき新たな思潮が押し寄せていた時代で、ハーンも当然ながらそれらの影響を受けて来日したわけである。

しかしながら、ハーンの日本体験は書物によらず、生の人間と自然との直接的交流に裏打ちされた体験であり、その結果の霊魂観、神観、時間論は既成の思想・信仰の二番煎じではない。ハーンの鋭い直覚から生まれた思想は飽くまでハーン独自の思想であり、反面、そこにはニューエイジ・サイエンスや現代の先端量子論の先取りとも思われる斬新ささえ見られるのである。我々はハーンの思想の淵源を追うというよりは、時代がやっとハーンに追いつきつつある事実を前に、彼の慧眼に驚嘆せざるをえない。

キーワード: 蜃気楼, 霊魂 (観), 神秘 (主義), 仏教, ニューエイジ・サイエ ンス

序論

本来,「蜃気楼」は気象用語である。ペレルマン (Yakov Perelman, 1882-1942) 『おもしろい物理学』⁽¹⁾ (*Physics for Entertainment*) によれ

ば、雲などの反射体の位置により蜃気楼は三種類 — 上方蜃気楼、下方蜃気楼、側方蜃気楼 — に分けられている。ハーンはこの言葉を拡大して物理現象から心象風景、精神風景、幻想性について用いている。また、ハーンの著作の中には具体的に「蜃気楼」という語を用いているわけではないが、「蜃気楼」につながる現象が多々見られ、この現象にも「蜃気楼」と同様の意味を求めていると思われるのである。ハーンにとって「蜃気楼」とは仮象たる此の世のメタファーであると同時に、世界ならびに人間精神の神秘を表わすメタファーなのである。神秘主義を扱う書では、自己(self)からの解放、神との直接対峙、神との一体化を神秘的体験の条件にしている。自己からの解放は無我、無私、没我、無欲…等々と様々に表現されているが、現実からの解放もそこに含まれるのではなかろうか。欧米では神秘的体験が応々にして森で生じることも注目される。1760年代から1830年代にかけての現実世界の変化を産業革命と呼ぶならば、神秘主義のひとつの波が19世紀後半の第二次産業革命と重なっているように思われる。

ところが、日本では西欧化に向かう流れの中で神道系諸派から新興宗教の形で神秘主義が起っている。東西いずれも「物質対精神」、「既成体制対個人」という対立構図があるのであろうが、とりわけ、日本では自然の精霊への回帰が色濃くあらわれている。日本人は汎神というよりも汎霊を好むのではないかと思われる。本論はこの蜃気楼というキーワードを通じてハーンの哲学・宗教・思想的側面に迫ろうとする試みである。

[1] 神秘主義と仏教哲学

1. 神秘主義

兵頭高夫は「神秘主義」の定義を求めて W.R. Inge, Christian Mysticism (1894) の Appendix にある二十六種の定義を紹介しつつ、神秘主義

を人間の存在体験の一つとして位置づけようとした。

ところで、神秘的体験を宗教に限定して扱うか、心理学の一分野として扱うかについてはこれまであいまいなままに論述されることが多かったが、兵頭は「神秘主義の位置づけについての試論」において、この問題を宗教と心理学との橋渡しとなるような「人間の存在体験の一つ」として位置づけようとする。彼は F.Staal の Exploring Mysticism (1975)をこの主題のとっかかりとして、先ず「人間の主観あるいは意識(S)」の階層に目を向け、古代ヘレニズム世界のグノーシスや新プラトン主義的な人間観にみられる「霊 (pneuma)」、「魂 (psyche)」、「体 (soma)」の三元論や、仏教(唯識)の八識中、第八識の「阿頼耶識」に言及して人間の深層心理に迫る。

兵頭は人間の意識(S)を「身体と結びついた日常的・感覚的レベル(S1)」、「知・情・意を含む心的な自己意識のレベル(S2)」、「通常の心的意識を超えた霊的レベル(S3)」の三分法を認め、S3において多くの第一義的な宗教体験にみられるような主客の対立を超えた「主客未分(以前)」の意識状態が認められるという。

しかしながら、S1 < S2 < S3 という意識の階層秩序以上に重要な点として、「S は常にこの三層を含みつつ、上層と下層とは相互浸透的である」点を、彼は重視する。

更にあらゆる存在(対象)(O)は意識の層に対応する階級構造をもつことが述べられた後、彼は次のように三分を強調する。

こうした存在の階層性(ヒエラルキー)は、いわゆる大いなる存在の連鎖(物質―生命―意識―魂―霊)の思想はもちろん、テイヤール・ド・シャルダン(Teilhard de Chardin、1881-1955)の物質圏、生物圏、精神圏の思想に至るまで、人間の根源的思考形態として存在してきた。しかも古代ヘレニズム以来のマクロ・コスモス

とミクロ・コスモスの思想, エメラルド板における錬金術的な照応の原理(「上にある如く,下にもある」), あるいは中国の易の思想などに見られるように, 存在の階層と意識の階層との間には, 東西を通じてある種の照応性が認められてきた。

かくして存在(対象)(O)の層を,意識(主観)(S)の層 S1, S2, S3, に対応して,大きく O1(物質的), O2(心的), O3(霊的)の三層に分ける⁽²⁾。

「神秘主義の形態は S3-O3 の関係をどのようにとらえるかによって異なってくる。」 S3 = O3 の状態で主客の二元が消滅し完全に無化されると考えれば「絶対無」とか「空」とか呼ばれるし、逆に O3 (= S3) が空化した場の全体に充満すると考えれば「梵我一如」とか unio mystica とか呼ばれる。これは仏教の「真空妙有」にも通じる神秘体験である。

兵頭はこれらの事情を O を縦軸としS を横軸とした座標で表し、宗教経験の本格性(深さ)を S と O との積で測りうると判断し「S 座標が極端に大きければ O 座標が小でも積は大となりうるから、時には呪術の方が、ある種の神秘主義より宗教的本格度が高い(深い)ということもありうる | と結んでいる。

2. 影絵芝居としての人生

ハーンは人間の内的世界, すなわち, 意識がかもしだす様々な認識と理解の世界も究極的な意味においてひとつの夢, 空を生みだす働きであるとの認識に到達し, それを仏教哲学の用語を借りて「知見正覚」と呼んだのである。

空, 太陽, 海, — 山, 森, 平野, — 光輝くもの, 形のあるもの, 色のあるものは, — これらすべてのものは亡霊である。人間の

感情も、高等であろうと下等であろうと、永遠の目的以外の何かのた めに想像されたり、作られたりしたものすべては夢から生まれた夢. 空虚を生みだす夢にすぎない。透徹した見識を持った者にとっては (覚者にとっては), 自我のあらゆる感情 — 愛, 憎しみ, 喜び, 苦し み、希望、後悔もすべて同様に影である。 — 若きも、老いも、美し きものも、恐ろしきものも、愛らしいものも、みにくきものも何ら違 いはない。生死はひとつのもの(生死一如)であり、同じものであ る。「時間」と「空間」は永遠の「影絵芝居」の舞台としてまた演目 として存在しているにすぎないのである。「『時間』のなかに存在する すべてのものは必ず滅びるのである。目覚めた者にとって. 『時間』 も『空間』も『転変』もない。 ―― 昼もなければ夜もない。 ―― 暑さ も寒さもない。 — 月もなければ季節もない, — 現在も過去も未来 もない。| 形あるもの、形あるものの名前は同様に空なのである。智 のみが実相である。智者にとっては、宇宙はまぼろしとなる⁽³⁾。

ハーンは一切の輝かしき存在、形あるもの、光輝くもの、つまり光の世 界と形の世界(西洋的認識の原点である)はすべて幻、即ち、まぽろしの 世界であると断言する。さらに、ハーンは真の確実な仏教的認識、即ち知 見正覚から見れば、すべての人間感情、即ち、自我の感情はすべて夢であ り、影であり、究極的には生死はひとつにして、我々が意識する時空の世 界もこの終幕を迎える舞台と筋はこびにすぎないと断定するのである。人 生夢論を展開している。まぼろしを認めるが、それもまた着実な夢である との結論に到達するのである。私見ではハーンがここかしこで触れる蜃気 楼現象もこのように壮大な過去生とのつながりでとらえる宇宙の個と合 体、影としての空なる実諦なのではなかろうか。西洋人にとっては、可視 的、客観的実在こそ、認識のアルファであり、オメガであったが、ハーン にとっては、こうした我々の時空への現実認識は今や終幕を迎えねばなら ず、ハーンは更に認識を深めて、それが空の空たるをわきまえて、宇宙と個の更なる合体をきわめようとした。これはハーンの究極の結論であって、ハーン独自の現象論的思索が試みられている。本多顕彰は「宗教は雰囲気である」と言っている。教会が音楽やステンドグラス等により宗教的空間を創出する演出をおこなうとすれば、芸妓は歌舞音曲によりエロス的空間の創出を演出するのである。ハーンが日本の宴のエロスに魅了された最大の要因は、そのエロス的空間が肉欲の直接的満足ではなく、一種の非日常的異界へと我々を誘う異界経験にあったのではなかろうか。通俗的道具だてが非日常への通路となる意外性は様々な場合において宗教的儀礼と通底する。武田泰淳の小説世界にみられるように、俗が聖の輝きを発する一瞬が我々の経験のなかに確かに存在するのである。蜃気楼とは、ハーンにとって風景が蜃気楼的効果によって精神性、神秘性を帯び非現実の風景となり、実在の深みへと思索を誘うと同時に、それまでの西欧的認識が蜃気楼の如く基盤を失ってしまうという両義性がみられる。

ハーンの認識論はすべての存在の絶対性を否定し、相対化するが故に、ニヒリズムと見間違えることがあるが、その思想は仏教の中論に近く、実体の本質としての無を肯定するのである。「露のひとしづく」においてハーンは人間の生と死を含めた生命の変遷とこの生命の永遠性をハーン独自の生命的素粒子論ともいうべき自説として展開している(4)。ハーンは様々な物象を「無」として等閑視する世界観を徹底的に否定し、我々の生命や一生もこうした素粒子の特殊な運動とその永遠につながる生命の顫動そのものと考える思想があったことから、「量子力学」につながる現代のナノテクノロジー(nanotechnology)の視点をすでにハーンは直観していたのかもしれない。量子力学や素粒子の理論では、時間の可逆性も論じられており、宇宙規模では時間の存在すら証明するには困難と言われ、時間は未来から過去へと流れているとすら言えるであろう。イギリスの物理学者ジュリアン・バーバー(Julian Barbour、1937-)は、時間というの

は幻想だと言っている。スウェーデン出身の MIT の物理学者マックス・ テグマーク (Max Erik Tegmark, 1967-) 教授による「ブロック宇宙論」 (block universe theory) では現在、過去、未来が空間的に位置づけられ、 時間は自由に行き来でき、先のバーバーと同様、時間は幻想であると考え られている。バーバーの方は「現実主義」という立場から時間の流れを否 定している。ブロック宇宙論の応用として、『インターステラー』(Interstellar, 2014) という映画があるが、そこでは、四次元立方体における 時間の自由な流れが仮定されている。時に関する神秘を人間が宇宙体験す る条件は、自分が時間から解放され、ゆったりのどかな心持になることで はなかろうか。確かにあらゆる現象は影の如くあらわれ、消滅するが、こ うした影そのものを創造する生命自体が永遠なのである。この作品では ハーンは、あらゆる存在を存在たらしめる力を「無」と呼ばず、その存在 を「影」と呼び、それが「影」である点よりも、「影」を成す力であるこ とを肯定的にとらえようとする。これは「…である (being)」よりも「… になる (becoming)」という生成論に基づく神観にも発展しうるかもしれ ない。生命が創造する個々の現象は正しく実体のない蜃気楼ともいえよ う。ここには「空即是色」のより積極的、肯定的解釈が想像される。

3. 仏教を支える蜃気楼

ハーンは中論の中に独自の時間論を導入して過去は未来。未来は現在と いう循環的時間論を展開し、あらゆる存在の時間、空間的同一性を認めた のである。ハーンの言う円環的時間論は神話的. 宗教的ルーツをもつ思想 でミルチァ・エリアーデ (Mircea Eliade, 1907-1986) も解説している (5)。梅原猛は『日本人の「あの世」観』(6)の中で、生命の永遠の循環の 思想こそ、まさに生命の真相であり、人間というものもそのような生命の 流れの中にあると言う。彼はその後「生命の永遠の循環運動」という言葉 を使っている。生命の循環と時間の循環とを統合した思想が我々に必要な

のであろう。

宇宙の秘密は「『無限の見識(眼)』によってのみ読みとることができる。もしお前がお前の力が及ばぬ程の遠い過去をふり返ることができれば、お前にとって『過去』はその時『未来』となるだろう。

さらになおさらいっそう耐えることができれば、『未来』はもどって『現在』と軌道が重なるであろう。」「でも何故だろうか?」「その時の渦というのは何なのですか?」私は不思議に思ってつぶやいた。「『時の渦』とは生と死の大いなるまぼろしの渦以外の何ものでもない。無知なるものは想いも行為も、その渦に縛られる。しかし、この渦は『時間』のなかにのみ存在する。そして『時間』自体はまぼろしである | ⁽⁷⁾。

ここでは、ハーンは覚者との問答を試み、もし太初(世界の始まり)にタイムスリップすることができたら、この宇宙の秘密を読めるのではないかとの質問に対して、その覚者はそれは不可能であると答え、相手は宇宙の秘密は無限のまぽろしによってのみ解くことができると答えたが、その意味はあなたが時空を超えた時のみ過去が未来に、未来が現在につながるという意味を示したのである。ところで、こうした時の瞬間こそ生と死の大いなるまぽろしの渦に他ならずこの渦は時の中にこそあり、この時こそ真のまぽろしと喝破したのである。我々が生きているというのは時の中に存在し、そこで呼吸をすることを意味するのであるが、この生命の実存こそまぽろしであると結論づけるのである。生と死の循環の中に過去と現在と未来とのつながりを見ることができれば、この世界の時と空間とをまぽろしとして正しくとらえることができる。そう考えればハーンが作品の中で度々述べている蜃気楼的風景も、風景を超えて宇宙論、生命論の壮大を得るのである。ここでは、ハーンの究極の思索をからめて、時間論・認識

論が展開されている。この世界の時と空間は正しく蜃気楼的風景であり、 現実の風景をのりこえて存在の神秘、生命の実存へと誘う風景を通じて 我々は荘大な宇宙生命へと接近するのである。蜃気楼的風景は可視的風景 の内奥、存在の神秘へと我々を誘うとば口としての蜃気楼の両義性が述べ られている。ここでは最も深遠な時間論が展開されており、現在、過去、 未来が循環するまぼろしとしてとらえられる。ハーンはこの理りに仏教 的無常と諦念を読みとり、生と死のまぼろしを生起させる「時」すらをも まぼろしと見、その奥の存在の謎の神秘に迫ろうとする。風景あるいは物 の認識は TPO によって変化するという意味ではそれ自体の本質的認識は 人にはほぼ不可能である。しかしながら、意識の作用的側面 (ノエシス) と対象的側面(ノエマ)とが相関関係にあるように、それらがすべて実存 認識の鍵にはなりうるという現象論的立場に立てば、一回性現象と、その 奥にひそむ実存(認識)はさほど矛盾しないことになる。ハーンの胸中に は常に日常と非日常、現実と非現実(異界)との二項対立があり、彼の共 感が後者へ向いていたとはいえ、両者はアウフヘーベンされ上記の認識の 理を彼が見逃していたはずはなかろう。ハーンは時間論を通してその彼方 にある実在認識に至ろうとしたのであるが、真の実在は人間の能力では不 可知のものであるが、時という神秘の基に生起する生生流転という現象を 究極において、夢幻の非実在とみて、その呪縛から解放されるべきと考え る思想は大乗仏教的「中(観)論」にはなはだ近いものと言えよう。

ハーンの文学に頻出するこのような時間論・神秘観こそ正に日本の仏教 説話に展開される現実界と異界、過去世と現在世とのつながりの物語に他 ならず、上田秋成、折口信夫、宮澤賢治の系譜を一貫して流れる思想であ る。しかしながら、ハーンの世界観には仏教的無常として大ざっぱにくく れない独特の美学がみられる。無常に安んじるニヒリズムでもなく、無常 をばねとした積極的生の哲学でもない、ひたすらに哀しい、あえかな美し さこそがハーンの真骨頂である。この循環を一回性の連続として、何度う

まれかわっても(永劫回帰)同じ選択をする自由意志に到達すれば、ニーチェが『悦ばしき知識』⁽⁸⁾でいう実存的人生を発見したことになる。

ニーチェの永劫回帰の思想に対する答えとして、この思想を告げる悪魔を呪うか、それともその悪魔と神とを同一視するかのいずれかだろうと作者は自問する。もし永劫回帰の思想に読者が圧倒されれば、その問いの重みに永遠に打ち負かされることになるか、この真実のためには全て犠牲にするかのいずれかであると結論する。自らが永劫回帰の思想に飲みこまれて力を失うか、その真理(永劫回帰)をめざして全力投球の旅に出るかのいずれかであると答えている。つまり、人間にとって同じことの繰り返しは望みなき絶望になる可能性もあるが、より積極的にその点こそをcenter of gravity 即ち最重要点として、この世の生を100%受け入れ、それを自覚的、創造的に生きる覚悟が求められるのである

中世にあっては静的宇宙観が中心を占めていたように思われるが、近代以降、とりわけ19世紀の時点では定説であった。現代ではこうした通念的宇宙観が次々とこわされ、宇宙は恒常どころか常に膨張し続けているというのが新しい天文学的認識となった。ところで、ハーンは19世紀において、すでに今日的(21世紀)宇宙観を先取りしてこの大自然界は永久に変化し続け、休息など全くありえないと予見していることは驚嘆に値する。宇宙の営みは過程(process)としてしかとらえられない。ハーンにとっては個人の一生は一つのパルス(pulse)である。「現在」という時間のみが実在としてとらえうる⁽⁹⁾。人の命や魂はパルスのような性質があるとハーンは述べているが、最近のドイツとギリシアの共同チームの研究業績によれば、少なくとも脳の神経細胞は「活動電位」という流れるイオンのパルスであり、そのプラス帯電したイオンのコンビネーションは脳神経に論理演算を可能にさせると言われている。「カルシューム媒介樹状活動電位」(calcium-mediated dendritic action potential)と呼ばれる電位がそれである。脳神経細胞の電子の流れは開閉により、ナトリウム、塩化物、

カリウムという電荷粒子を交換するチャンネルの波となっているそうである。ギリシアのデモクリトスは「原子説」の創始者で魂も原子だと言ったと言われている。そのうちに魂も電子であるという説が現れるかもしれない。

ニーチェの永劫回帰の思想にみられる実存的生の前提として、ハーンに よって語られる自然論・宇宙論は気宇壮大であり、スピノザ的に部分と全 体が連動する永遠の牛命体の如き自然・宇宙においては個々の牛をまぼろ しと見なしうるほどの透徹した神秘的原理が支配するのである。スピノザ も「自然即神」のようなことを言うが、日本の「精霊即神」に対しスピノ ザの神はやはり旧約聖書(ユダヤ教)の神である。ハーンは非クリスチャ ンであったとしても、無神論者あるいは無宗教者ではないことは、スピノ ザをめぐるレッシング.ヤコービ等の対話. 論争を考えても明白である。 レッシングやその親友であるメンデルスゾーン、ヨハン・ゴットフリー ト・ヘルダー、後のゲーテ等はスピノザに汎神論を観た。レッシングはス ピノザの「一即全」(エン・カイ・パーン) なる神を汎神論的に肯定し、 スピノザを無神論者とみるヤコービと対立した。「エン・カイ・パーン | という概念を最初に表したのは、古代ギリシアのクセノフォンであるが。 ゲーテは更にスピノザを「最高の有神論者、最高のキリスト者」と讃え た。スピノザの神観の出発点は聖書であったのに対して、ハーンは身の周 りの自然と人間から神を考えた末の汎神論あるいは汎霊論であったと言え る。もっとも大学の授業では、当然ながら、ハーンは学生に対して聖書の 重要性を説き、本人は旧約聖書の中でも、とりわけ「ヨブ記」を愛したと いう。「ヨブ記」こそは旧約聖書中、神論の白眉と言うべきであろう。

「イザヤ書」44章6節にもつながる「ヨハネ黙示録」1章8節に「私はアルファでありオメガである。初めであり終わりである」とあり、神やキリストの超越性と解釈が可能である。これは同時に人が死んで時間から解放されることも意味していると思われる。アーサー・クラーク『2001年

宇宙の旅』⁽¹⁰⁾ のモノリスに象徴される初めが終わりになるということにも通じる。ハーンが考える,この世とあの世とが影響しあうという思想にも通じるのではなかろうか。ニーチェはスピノザの影響を受けた後,「永劫回帰」の思想を見いだしたといわれている。「出エジプト記」3章14節の「われは在りて在るものなり」(イエヒェ・アジェル・イエヒェ)という神の宣言を最も忠実に定義したのがスピノザではなかろうか。即ち,この世界に実在するものは神のみである,という意味である。ハーンはキリスト教の神にはある種の拒否反応があったので,「神」を「霊」に置きかえるかもしれない。

4. 仏教的原点としての蜃気楼

ヨーロッパにあっては人間の意識や精神世界の原点は「今あるこの私」,即ち自意識がアルファであり、オメガであって、この自己意識なしには世界は存在しないのである⁽¹¹⁾。デカルトの「我思う、ゆえに我あり」が西欧の世界認識の原点なのである。

ところが、仏教にとってはこの自意識そのものが偽りの自我に基づいたものである。仏教が問題にするのはこのような偽りの自我ではなく、「真我」である。この真我の前では、いわゆる自我意識にかかわる苦楽や全ての感情は幻影なのである。仏教では、それは蜃気楼ともいえる偽りの世界で、それは実体ではなく、虚空なのである。しかも悪いことにはこの感覚という認識媒体が正しい知覚を歪め、偽りの感情と衝動を生むのである。一方、無条件の絶対的実在はあらゆるものの上に超越して、いわゆる我一次、時と場所といったものの区別がとりはらわれる自他不二の世界にあり、快楽や苦痛といった一切の感情が幻覚として認識され、もはや偽りの自我はすて去られ、ここでは世俗的感情や情欲や一切の情念が眠りの幻影、即ち蜃気楼のような幻覚としてのみ存在するのである。ハーンはこの幻覚を対立概念として永遠の悟り(涅槃)を説いていると思われる。

ハーバート・スペンサーの「実在 | 認識の要諦を仏教的に「自他不二 | という言葉で言い換えることにより、ハーンの仏教観を述べることが可能 であろう。蜃気楼的な illusion は自他不二を達成できない限りはいつまで もつきまとう。デカルトの認識論に立っている限りは苦しみを克服できな い。幻影に悩まされて悩みを克服できないのである。

西洋人にとって、現実はあくまでも自我、自己認識によって規定してい るが故に、我、それ(外界)の対立構造は決して解消できないのである が、仏教思想に親しんだ日本人、東洋人は我、それ(外界)を相対的にと らえ、そのいずれも実体でないが故に幻影にすぎぬと考えるのである。仏 教の本質は無から生じて無に帰るという独自の存在論に立つ。

現象とは束の間のものであり、見かけとは異なるものである故、幻 想的性質を持つものとみなされるべきである — 即ち、唯一永遠なる 「究極の実態」の仮象とみなされるべきである。

しかし、仏教の立場は不可知論ではない。次に示す如く、仏教は不 可知論とは驚くほど異なっているのである。

ハーバード・スペンサーは意識が存続する限り、我々はその「究極 の実態 | を知り得ないと言う。つまり、意識が存続する限りは、我々 は主客の対立を超越できないのだが、意識なるものを可能にしている のは正にこの対立であるからだ。

「正に然かり」と仏教哲学者は答えるだろう。「意識が存続する限り は、我々は唯一の究極の実態を知り得ない。しかし、意識を懐してし まえば、その究極の実態は認識可能になるのだ。心の迷いを滅するが よい、そうすれば悟りの光が訪れるであろう」この意識の消滅が悟り の境地を表すのである。即ち、我々が自我と呼ぶところの全てを消滅 すれば。自我とは盲目であり、それを破壊すれば、「究極の実態」は 無限の眼が開け、無限の心の平安として明らかにされるのである(12)。

ここではハーンの仏教哲学が如実に語られている。ハーンは仏教同様 我々の現実(現象)は実体のない幻影と考えており、従って、現象は唯一 の永遠性をもつ実在の一時的現象であると考えている。ただし、ハーンは 仏教は不可知論ではなく、もし我々が意識を超える、即ち、主観と客観を 超えることはきわめて至難のわざであるが、この意識の消滅を実現できれ ば、そこに涅槃が実現し、永遠の真実の世界に到達できると考えるのであ る。実際、我々の自我の世界は盲目的で制御しがたいものであるが、これ を克服した時、即ち、そこに生じる現実は幻影とは異なる無限の視力と無 限の平和をあらわす。ここで、ハーンは蜃気楼という言葉を用いているわ けではないが、東の間の現実は蜃気楼、つまり、夢、まぼろしであるが、 この自我を克服して無意識を通して最も深い部分である真我(真如)に到 達する時、はじめて、真実、即ち、永遠無窮の世界が実現する。この意識 は深層心理学でいう「末生の生」あるいは阿頼耶識に通じうるかもしれな い。

ハーンの空の思想は『般若心経』の「五蘊皆空」を解釈したものであろう。五蘊は「色」(肉体/物体)、「受」(感覚)、「想」(想像)、「行」(心の作用)、「識」(意識)で仏教はこれらの支配からの解放を教えているのである。人によっては、この言葉は、ものの存在(の意味)を否定するものではなく。人間の認識や価値判断の否定だと解釈されているようである。その見解(見方)の方がハーンの仏教・神道観とつじつまが合いそうである。

ソローも『森の生活 — ウォールデン』⁽¹³⁾ において、永遠と実在の一瞬について語っている。一般の人々は真実が最も遠いところにあると信じて疑わない。真理と崇高は永遠の中にあると。しかし、実は、それはこの現在我々が生きている一瞬にあるとソローは説く。「永遠即一瞬」の現実であるという思想は華厳経の縁起観で「一微塵中全世界一瞬中永遠」という「一切即一」の世界と一致する。ソローは事物の本質を見抜く自身の力故

に真理が遠くではなく我々の生活の中にあると説く。宇宙は常に我々の思 索に答えてくれるという信頼がソローをして意識を一瞬に集中させうるの である。この「一切即一」の一元論の大元はプロティノスの『善なるもの 一なるもの』に見られ、華厳経の「一即多、多即一」の思想にも通じる。

[2] 無常の象徴としての蜃気楼

1. 儚い現実が心に刻む消えやらぬ幻想

ハーンは日本の縁日に出かけて民俗学的観点からその印象を見事に分析 している⁽¹⁴⁾。ハーンは縁日にことさら興味を示し、これを真に鑑賞する には、提灯やカンテラの光で満ち満ちた夜の体験をすすめ、この縁日見物 なしには日本の何たるかを理解できないとさえ断言している。ハーンは日 本の庶民生活の中にあらゆる美しさが溶けあっているのを知るのである。

祭にみる蜃気楼的特色を通して、ハーンはたとえ蜃気楼のように儚い現 世であれ、いやそうであらばこそ、そのあらわれの得もいわれぬ美、神 秘、奥深さを感じている。

普段は人目を惹かぬ子供達も少しばかり上手にお白粉と紅をつけて やり化粧をまとわせれば提灯の明かりの効果でたちまち妖精へと変身 する。線と色を使いわける芸術的才さえあればいかなる変身も可能で ある。装飾の色合いも決して行き当たりばったりではなく熟練に基づ いたものである。一定の色合いのみが組みあわされて用いられている ところをみれば、提灯の明るささえもこれに一役かっていることがわ かるだろう。祭りそのものが驚嘆すべきものであると同時に束の間の できごとである。それはあらさがしをする間もなくすぐさま消え失せ てしまう。見た後も一ヶ月は驚きと夢心地をひきずらせる蜃気楼であ る(15)。

日本的蜃気楼の特色を、ハーンは祭りの中にとらえ、その束の間の光景 がたとえ消え失せたとしても、夢み心地がとどまりつづけると、述壊して いる。蜃気楼が心の風景として、消え失せた後も心にとどまりつづけると いうハーンの理解は、蜃気楼が単に物理現象ではなく、我々の集合的無意 識にまで訴える残留思念的性質を宿していることを語っている。祭りとい うハレのときに、夜の明かりのもと衣装と化粧とで、普段は何のへんてつ もない子供が妖精へと「変身」する現実をハーンは鋭くとらえている。そ れぞれの現実の中で同一の存在が素晴らしいものに「変身」するが、それ も祭りの間の束の間の夢として、蜃気楼のように消え失せてしまう。祭り という人為とその蜃気楼的効果がおりなす魔術は、たとえ束の間の事象で あっても、ハーンの心の乾板には消えやらぬ印象を残したのである。子供 と祭りあるいは芝居にみる蜃気楼については鏡花の『陽炎座』にみる子供 歌舞伎の現実と幻想が参考になろう(最も鏡花らしい作品は『眉かくしの 霊』であろう)。尚、鏡花『陽炎座』、ジョン・ファウルス (John Fowles) の『魔術師』 (The Magus), モーツアルトの『魔笛』の三作に は蜃気楼性のみならず探求とイニシェーションという共通のテーマが散見 される。

2. 解体する万物

古今東西の哲人、聖人の霊魂観が互いに対立していることはアナトール・フランス(Anatole France、1844-1924)『エピクロスの園』の「エリェシオンの野にて」 $^{(16)}$ にも興味深く示されるが、ハーンの現世観、霊魂観は総じて仏教の創造的虚無を基礎にしていると思われる。

ハーンは万物は全て集合と離散によって形成され、不老不死のものは一切ないと説く。つまり、万物は必滅にして、すべてはとるにたらないものである。それ故、人間の無常もまた蜃気楼の如く一時的で、泡の如くとるにたらない存在である。一瞬一瞬が人間の人生であるが、人の生は永遠で

はなく、とるにたらぬ存在なのである。その人間観はキリスト教の人間観 に近い。

仏教は、天地自然は夢であり、まぼろしであり、走馬灯のように移 りゆく幻影であることを教えた。また、その夢の一瞬の姿をとらへ、 それを至高の真理との関連で解明することも教えた。これらのことに ついて、日本人は十分に学んだ。春の色鮮やかな見事な桜の開花に、 生まれてはすぐに死んでしまうセミに、薄れゆく秋の紅葉したもみじ に、雪のこの世ならぬ美しさに、人をまどわすような波や雲の動き に、彼らは無窮の意味を表す 古 よりの教えを見たのである。大惨事 ―火事、洪水、地震、疫病ですら、生者必滅の理りを絶えず彼らに教 えたのである。物は最初のうちは固定されているが最後にはばらばら になってしまう。ばらばらになったものが異なる結合をすると別のも のになるのである。というのは天地自然においては、不変で、一定の 法則は存在しないからである。すべての合成物は、例外ではなく、必 滅し、安定はなく、卑しむべきものであり、必ずばらばらに分離して 無くなってしまうのである。すべての物は蜃気楼、まぼろし、飛沫の 如く無常のものである。「…」たとへ陶工の作った陶器でさえ、人間 の一生と同様に最後は壊れてしまうのである⁽¹⁷⁾。

ここに古代ギリシア哲学、例えばデモクリトスに見られる原子論を発展 させた生命観が見られる。ハーンによれば、日本人は存在への執着を捨 て、西欧人の存在信仰に対して、生老病死の道を辿る人間をはじめとする 万物の解体性を認め、存在の無常性と必滅を強く心に刻む。ハーンは存在 の刹那を蜃気楼になぞらえ、それを生の理ととらえて、仏教の無常観ある いは諦念の宗教へと昇華させている。仏教は人間も自然も必ず夢のごとく 滅びゆく無常の世界に生まれあわせていることを徹底的に教えている。自

然もまた人間と変わりなく生者必滅の流転を繰り返すのである。即ち,移りゆく季節の姿もまた一種の蜃気楼現象(表層世界)であり,世界は現象的にはおしなべて蜃気楼的無常の世界であることをハーンは説く。ハーンは仏教的輪廻転生も万物の解体性とそれを構成する要素の再結合の観点からとらえようとする。ハーンは古代日本人が仏教到来以前のアニミズム的信仰において万物無常の理に気付いていたことも承知していたはずである。「神道の発達」⁽¹⁸⁾ の中に見られるように万物有霊説も肉体の無常を超えたところに霊の世界を認めた結果であったろう。

[3] 仏教の現実認識

1. 生生流転と変形実在論

おそらく、ハーンはアメリカ時代に、当時流行の東洋思想および輪廻転 生以前に親しんでいたオウィディウスやアプレイウスの変身譚を通じて輪 廻転生(metempsychosis)を学んでいたと思われるが、ハーンの場合、 実生活からの実感を通してそのような普遍的生命観に至っており、後に仏 教教義としてのそれに呼応したのではなかろうか。

すでにアメリカ時代の「転生」⁽¹⁹⁾ においてハーンの仏教受容の精神的基盤が宿されており、ハーン自身がすでに数えきれぬ生を受け、生き続けて来たこと、かつては自分も男でもあり、女でもあったことを夢想する。ハーンは、人間が宇宙の死滅に至るまで無窮の輪廻転生を繰り返すと信ずる。ハーンの想念の根底には日本と並んで冥界文学の豊かさが指摘されるケルト精神が潜んでいたと思われる。

アメリカ時代の 1880 年ハーンは『アイテム』(*Item*) 紙に「不死の人」を執筆し、冒頭で世にもめずらしい死に瀕した不死の人を登場させ独白させている。ハーンによれば、この不死の人も何ひとつあとに残さず、死んでゆき、この世から消え去って行くのである。3000 年の間、生き続けて

きた心臓も何もかも全く消え失せてしまうのである。しかし、あらゆるものをつめこんできたこのわが頭脳もまた完全に消え失せるのであろうか。それは正しく死の如き白い亡びの世界に至る道なのである。究極的無の世界への没落をハーンは想定し、白い虚無の世界への墜落を示唆しているように思われる。しかし、この虚無は人間的虚無を越え、形を変えた仏教的不死・永遠の想念へと発展する⁽²⁰⁾。来日後のハーンは庶民の生活を通じて輪廻転生の思想に一層の確信を抱いている。1902年に発表した『骨董』では「真夜中に」で死者の目から見た世界を描いている。ここにはゴーティエからの影響もみられるが、ハーン独自の輪廻転生があらわされている。

個の命と「大霊」ともいえる世界霊としての命そのものとのつながりを 意識するプラトニズム的感覚はハーンの後の作品にも息づいている。

私は時の始まる前から生きていた。私は永遠の究極の循環を越えて生き延びるだろう。私は何百万という無数の形になって移りゆくように思われるが、それは見かけにすぎない。形としては私は波にすぎないが、本質としては海なのであるから⁽²¹⁾。

こうした人間の一生を、さらに見つめて、ハーンはその生涯のプロセスを次の如く見極める。ハーンにとって、今現存するこの私は今までいた私のすべての延長であり、この私は有史以前からすでに存在しており、その私は永遠がその流れを止める究極のままで生き続けている。それ故、おのれが死して無と化するように見えてもそれは死を乗りこえた変形的生への変身に他ならぬのである。これは仏教のいわゆる変形実在論に相当するものである。日本時代には、ハーンの輪廻転生の思想が確立していたと考えられる。ボルへス「不死の人」のエピグラムで、プラトンの「すべての知識は追憶にほかならず」という「想起説」(アナムネーシス)があげられ

ているが、これは『メノン』等、ソクラテスとの対話が原典であり、結局 のところネオ・プラトニズムもソクラテスをさしおいて論じることは不可 能であるということではなかろうか。ソクラテスは『メノン』で、「徳 | も知識のひとつであるという前提で、それが解るのは「魂の想起」による とメノンに答えている。つまり、一度忘れてしまった知識を再び取り戻す ことになるので、輪廻転生を前提にしているとみなすべきで、輪廻転生信 仰のルーツははたしてギリシアなのか、ペルシア(ミトラ教)か、インド (バラモン教 / 仏教) か? 他方、輪廻転生説はユダヤ教にも有ったと考 えることも可能である。ユダヤ教ではアレクサンドリアのフィロ(ン). キリスト教ではユスティノスが自分の信仰をプラトンに結びつけている。 やはり、とりわけ一、二世紀にはプラトン思想は中近東をふくめて当時の 西欧世界の中心に位置していたのではなかろうか。「マタイ伝 | 11 章 12 節の有名な「天の国は激しく攻める者がこれをうばう」は、救いが異教徒 にも開かれていることを示しているのだと思える。「マタイ伝」11章全体 が、ユダヤ人だからといって特別扱いを期待してはいけないと叱咤してい る。ホワイトヘッドは、西洋哲学全般はプラトンの脚注である、と言った そうである。

現在,我々がプラトニズムと呼ぶ思想は,厳密には三世紀前半アレクサンドリアで活躍したアンモニアス・サッカスを元祖とするネオ・プラトニズムに帰すべきことが多い。サッカスの弟子にはかの偉大なるプロティノスと,キリスト教教会史家オリゲネスが数えられる。

京でながら、ハーンのこの独特の文体が折口信夫『死者の書』冒頭にある、長い死の眠りから醒めた滋賀津彦(大津皇子、大友皇子、隼別皇子、 天若日子をモデルとする)の独白に影響を与えたと考えられないだろうか? 彼の人は長い眠りから目覚めるまで処刑の刹那目にした耳面刀自を想い続け、死から目覚めた時、耳面刀自に似た、その血縁につながる藤原南家の郎女にとりつく。従ってハーンの「不死の人」とは異なり、この皇 子は俗世の欲望を脱却していない。この皇子が救われるのは、この郎女の 阿弥陀への帰依を通して叶えられると解釈される(22)。過去の長い眠りと これからとをひと続きとしてとらえると、ハーンにとって人生も夢もひと つの流れにくみこまれるのである。主人公が眠り続けてきたということは ハーンと折口との共通点であるが、折口の場合、その救済の夢が想い人の 聖い解脱を通して間接的に叶えられる点が異なっている。ハーンの生命観 はア・プリオリに時間を超越する方向に向かっているとも言える。

ハーンは「犬の遠吠え」において、犬に仏性があるか否かという禅門答 としてもなじみ深い議論について論ずる。

とにもかくも極東(日本)の信仰は、西洋の信仰よりもこの問題に はるかにうまく対処している。仏教徒にとって、宇宙は全く神聖なも のではない。それどころか全くその正反対である。宇宙とは「業」で ある。宇宙とは、誤った思考と行為の産物であり、神も統べ治めると ころではない。ぞっとする恐怖、悪夢なのである。同時に一個のまぼ ろしである。悪夢の姿と苦痛が夢みる者にとって現実と見えるのと同 じ理由で宇宙は現実と見えるのである。地上における人間の一生は睡 眠状態なのである。しかし、人間は完全に眠っているわけではない。 人間の闇の中には光がある。この光が愛と憐み、同情、慈悲心のかす かなオーロラの目ざめである。これらは無私であり、真実なのであ る。永遠にして神聖なものである。これらは不滅の四大感情であり. 太陽の日差しの中で霧や霞となって消え去るようにその残照をあびて すべての形あるものや幻影は消え去るのである⁽²³⁾。

ハーンは日本人の信仰の楽天的な側面を評価している。何故なら、仏教 徒にとって宇宙は神聖か否かで測るものではなく.「業」という神とも仏 とも独立した前提として存在すると考える。それ故、こうした宇宙は人間

的判断を超越しているという意味で一個のまぼろしなのである。その意味で、人間の一生はひとつの眠りとも言える。人間は闇の中でうたた寝して覚醒をしていない。その意味では犬の方が純粋にこの生を生きている。ただし、人を目覚めさせる光は存在し、愛と憐れみと慈悲の光こそ永遠にして神聖なものなのである。つまり、眠りは蜃気楼の世界であり、偽りの世界なのである。しかし、目覚めると光を見つけて永遠の世界、慈悲の世界に参入できるのである。

ハーンは日本人の実に融通無碍なる現実界と夢・幻の世界との間の往還を羨んでいるようである。ヨーロッパの中では特異な感覚で知られるスラヴ文学ですら、両界の間の葛藤を認めざるをえない。チェーホフの「黒衣の僧」⁽²⁴⁾ は蜃気楼が更なる蜃気楼を生み千年も消えることのない「僧の蜃気楼」が登場する。話の内容は悲劇的なものであるが、ロシアの風土を彷彿とさせる幻想性にあふれた短篇である。ロシアの神秘は禁欲的な印象が強いと思われるが、ここでは神の前での人間の快楽のあり方が問われているようである。ケルトの異界とは異なるロシア正教の不思議な人生肯定が聞こえるようである。但し、この作品では蜃気楼である僧との対話にのめりこむ主人公はフィアンセから正気を疑われるという悲劇的な結末が待っている。

それでも異界への没入という点ではヨーロッパでケルト文学に比肩しうるのは唯一スラヴ文学であろう。ゴーゴリの作品などにみられる非現実の世界が寓話的な語り口と相性が良い点も、ケルト文学の異界の寓意性を思わせる。

2. 「実体」としての「変形実在」

ハーンはイギリス思想界をリードした三人の学者ダーウィン、スペンサー、ヘンリー・ハックスリーを列挙しているが、彼らは19世紀前半に生を受け、その業績が認められたのも19世紀後半であった。彼らの業績

はおしなべて新しい地質学、新しい古生物学、新しい植物学においてなさ れていたが、ある意味で三人は生物の新しい生態学的興味をいだき、ハー ンはこうした面での彼らの業績に関心をよせていたと思われる。スペン サーは結論として物質、力、実体、心という哲学的概念も実はひとつの永 遠不変の実在の異なった様相にすぎぬということ、つまり、実在は永続性 によって判断されるが、それによって宇宙そのもの、および宇宙を構成す る諸要素も恒常のものでないということ、従って、現象を確固たる現象と してとらえる相対的実在論は成立しても人間は、人間の限界にとどまる限 り、不可知なある力の移ろいとして全ての形を考えねばならぬとスペン サーは判断したのである(25)。実在は恒常的に存在するが、その中に浮遊 する人間の存在は自分自身の存在も含み、存在するあらゆる形は、ある力 の移ろいとしてとらえねばならないとしたのである。

ハーンは生生流転を説くが、決して永遠の実在を否定してはいないので ある。この考え方は常識的には自己矛盾に見えるが、ハーンはこの解決策 として、スペンサーの変形実在論を採用している。つまり、実在は目に見 える形ではなく千変万化の中に見えざる真理として確固と存在していると 説くのである。

それが実在であるか否かを試す試金石は永続性である。仏教徒は. この目に見える宇宙のなかで、現象の永遠の生生流転を目にしなが ら、物質的集合体を、少なくとも泡、雲、蜃気楼の如く永続性がない が故に実在ではない普遍的な思考と主張する。重ねて言えば、相対は 思考の一般的な形である。しかし、相対は一時的なものだとすれば、 思考がどうして永続的であるだろうか。このような見解から判断する と、ハーバート・スペンサーの次の言葉にはっきりとみられるよう に. 仏教の論理は非実在論ではなく本当の意味での変形実在論なので ある。[…]「一つの永遠性がこれら変わりゆく形の下にかくれてい

る,不可知な実在であることを我々は知るのである」⁽²⁶⁾。

ハーンは西洋思想と仏教哲学を比較しながら、仏教徒が認める実在が西洋のそれと異なり、後者は物質には永続性はなく、一時的な現象、すなわち泡や雲の如き蜃気楼現象と考えるのである。しかしながら、ハーンは仏教は非実在論ではなく、ハーバート・スペンサーが言う、変形実在論であり、言い換えれば、移り変わる物質の底に実在は確乎として存在する、即ち「生生流転」の現象の底に隠れて存在しているのである。ハーンがハーバート・スペンサーに心酔した理由のひとつは、ハーンが彼の不可知論と宗教進化論とに納得したからであり、もうひとつは、仏教の一見すると非実在論ともいえる思想をスペンサーが変形実在論に分類した点である。

ユダヤ・キリスト教に「空の思想」を一べつするなら、旧約聖書の「伝道者の書」(「コヘレトの言葉」)11章6節~8節には死あるいは幽体離脱について書かれているようである。これは神秘主義者達の間では projection of the astral body(アストラル投射)と呼ばれ、「伝道者の書」では「白銀の糸が断たれ、黄金の鉢は砕ける」と表現されている。幽体離脱は英語で、out-of-the body experience 略して OOBE というらしいが、訓練により人為的になされうるといわれている。ところで、「伝道者の書」は仏典から影響を受けているのではないかと考えられる。冒頭の有名な「空の空、一切は空である」は、誰でも「色即是空」を思い出すところであるが、聖書辞典でも、さすがに「伝道者の書」の著者がソロモンであるという伝説は否定し、紀元前2世紀頃のエルサレムの智者だと書いてはいるが。但し、「伝道者の書」で語られるのは徹底した虚無主義ではない。虚無的ではあるが徹底しておらず、どこかで神の導きを期待するユダヤ教の神観は息づいている。もっとも、アショカ王による仏教伝道団のエジプト方面への派遣が紀元前3世紀頃として、その影響の浸透と持続とを考慮し

て、仏教影響説はあり得る仮説ではなかろうか。空の思想を掘り下げた学 者をあげるなら、京都学派では西谷啓治、キリスト教神学者なら八木誠一 であろう。「伝道者の書 | 最終章 12 章 8 節は、この書の冒頭にあった「空 の空. 一切は空である | がまた繰り返されるので. ここで一応完結してい るとみることができる。従って、その後の数節は神への服従を説く、付け 足しであると言えよう。12章7節は、人が死ぬに際して、「霊は与え主で ある神に帰る」と明解に言い切っている。

科学は原始海中の無機物から放電によりアミノ酸等の生命の元が生じる - 過程をつきとめているが、仏教でも進化を含め、このような過程を認識し ているとハーンは考える。しかし、科学は同様に勢力学第二法則、即ち、 エントロピーの原理により、宇宙のすべての消滅をも予測する。この点で も科学は仏教の必滅の理と一致する。ハーンは変形実在論を真理としてそ のまま受入れているが、禅の「無一物中無尽蔵」の教えから解説すれば、 ハーンの思想は現代的な意味の虚無ではなく、そこにこそ絶対的な自由と 無限の創造的可能性を秘めた芸術的宇宙が連想されるのである(ニーチェ なら、この創造性に代えて「力への意志 | を唱えるだろう)。蜃気楼はこ うした創造の可能性と芸術性とにつながるのである。禅の「無一物中無尽 蔵」という思想ではこの虚無こそに絶対的自由があり、それが無限の創造 可能性を秘めており、この仏教的神秘をハーンは究極の真理として享受し たのではなかろうか。

既知の物質は精神同様. 進化の産物であることに変わりないことを 示す証拠を科学は発見している —— 即ち、全てのいわゆる「要素」は 「物質の原始的な未分化の形態」から進化したものであることを。そ して、この証拠が驚くべきことに化身(権現)と迷いという仏教論理 の底流に潜む真理を示唆している。即ち、姿、形のあるすべてのもの の形なきものからの進化、すべての物質的現象の非物質的単性からの 進化。 一すべてのものが欲がなく、悪意が無く、愚鈍さの無い状態への回帰、 一即ち、個人にみられる激情がもはや見られず、それ故、「究極の空」と名付けられる状態への回帰がここに見られるのである (27)。

ハーンは近代科学が物質なるものはいわゆる原始的無形態から進化したものであることを実証したが、この実証は仏教における権現(進化)と幻(蜃気楼)の教義にすでにふくまれていると考えた。ハーンは仏教は物質が無形、即ち、非物質的現象から物質的なものへと進化し、それはやがて全ての存在を否定する虚空に至ることを説いていると考えた。ハーンは人間を含めて宇宙は進化するけれども、無窮の実在に対して、仮の自己は滅し、それは蜃気楼現象であることにほかならないことを強く認識すると同時に、その仮象が「実在」の表象(representation)として少なくとも人間にとっては「実在」の暗示にはなりえていると考えているのである。

諸行無常という仏教の教理(仏教の無常説)もまた現代科学の教理に一致する。[…] 仏教はすべての自己完成体の不安定遺伝の倫理的重要性,精神的進化の教訓,道徳的進歩の義務に関する19世紀の思想と著しい一致を示すのみならず我々の物資主義と心霊主義の教理,我々の創造主と特別な創造についての学説,また霊魂不滅の信条などを一様に否定する点においても科学と意見が一致すると言えるかもしれない。しかし,こんなふうに西洋宗教の基盤を否定しているにもかかわらず,仏教は,より大きな,宗教的な可能性を啓示してくれる。つまり,これまで存在したいかなる教義よりも高貴な普遍的な科学信条を暗示してくれるのだ[…] 我々は今後いかなる改革的知識(positive knowledge)も打ち破ることのできない希望(a hope)をもっている,偉大な信仰に直面していることに気づくのである。科学の教えの補強によって,仏教という古いこの宗教は,何千年にもわたって.

我々が裏返しあるいは逆さまに考えてきたということを示すのであ る。「唯一の実在はひとつである。」われわれが「実在」と考えていた すべてのものは「影」にすぎないのであり、物質・肉体は実相ではな い。形ある人間は幽霊であるということだ⁽²⁸⁾。

ハーンは仏教の中に西欧的唯心論や唯物論、さらに、神による人間創 造、霊魂不滅説といった西欧的基本原理・思想の否定を見ながら、他方 19世紀の科学思想との同質という奇跡を説いている。こうして、ハーン は西欧的合理主義思想の否定によって、実は、西欧人に新しい宗教的可能 性を示唆する。その後の欧米人は東洋思想、わけてもタオイズム(道教) に希望を見い出し、20世紀後半以降のアメリカ西岸にみる New Age Science との一致に興味を示している。これは宇宙論やナノテクノロジー等 の量子力学において増々その傾向を強めている。positive knowledge と いっているところをみると、ハーンは将来の革命的知識(科学)を予測し ているが、仏教にはその革命的知識(例えば、ハーン以後で、近い時代の |思想としては「唯物論|)を以てしても砕けない「希望|があると考えた。 ハーンは、1960年代以降のアメリカのニューエイジ・サイエンスの時代 を予告しているようにさえ思える。このような思想は一人ハーンの独創に あらず、19世紀中葉以来のスピリチュアリズムにみられる、心霊・宗教 と科学との一致を目指す方向性であり、振り返れば、エマソンも一大潮流 の中にあったと考えるべきであろう。『般若心経』の「色即是色」に続い て「空即是空」と返すのは、単に A = B を B = A と言いかえたのではな く、前半であたかも虚無主義に聞こえる空、その空を後半で無限の創造性 を秘めた力として表現するところに道教的な優れたダイナミズムがあると 思われる。ハーンの仏教理解に、このダイナミズムがあるか否かが重要と なってくる。ハーンの東洋(仏教)思想理解が単にニヒリズムではないと 言いきるためには、そこに何らかの希望ないしは予兆を見出さなくてはな

らない。即ち、仏教の虚無主義を神道の自然霊や祖霊で補完するのではな く、仏教本来の力強さをハーンは見抜いていると思われる。

科学思想の発現によって、我々は仏教というキリスト教よりももっと古い宗教によって、我々の信仰を逆転させられてしまったのである。仏教によれば、実在を唯一無二のものとしてとらえ、我々が実体と考えてきたものはすべてまぼろし(蜃気楼)にすぎず、言い換えれば、我々西欧人が固執してやまなかった形あるものは、すべて空疎な影法師にすぎぬと、説いたのである。西欧人は神の創造を根底に置きながら結局のところ唯物論から離れることが出来なかったのに対し、東洋人は物質的の存在をいとも軽く捨て去って、物こそ単なる影、すなわち、空虚な幽霊にすぎぬと喝破したのである。

結 語

ハーンの世界観には仏教的無常としてとらえきれない独特の美学が垣間 みられる。ハーンは独自の感性で形あるものや輝かしき存在はすべてまぼ ろし (蜃気楼) であるとみなす。つまり、彼は現象とは唯一の永続性を もっている実在の一時的なあらわれであると見なす。あらゆる現象は影の 如くあらわれては消え去ってしまうものである。世界は現象的に見ればおしなべて蜃気楼的無常の世界なのである。しかし、ハーンの説く実在論は 西欧社会が説くデカルト的存在論ではなく、ハーン独自の変形実在論によって従来の存在論にみる硬直性の欠点を補っているのである。

つまり、ハーンは西洋思想と仏教哲学を比較しながらも、仏教は非実在論ではなく、スペンサーが述べているように変形実在論――変化する物質の奥底には実在が存在することを主張するのである。これがハーンのスペンサー哲学へ接近していったひとつの理由なのである。

人間の人生が移ろいやすい束の間の現象であり、究極の実在あるいは神

は意識を超えたところで認識できるとして、この現象と実在との間をどの ように関係づけるべきなのかが問題であると思われる。仏教的には、実在 を把握し、悟りに至れば、人間は慈愛と心の平安を得ることができ、誤っ た価値観から解放されて真の人生に目覚めるということであるが、ハーン の場合、この認識に加えて自然の霊と相霊とに導かれて、その真の人生を 送りうるということになるのであろう。この点で、ハーンにおいて仏教と 神道とが重なってくるが、人生と実在、及び、霊との関係性を明らかにす ることが我々のこれからの課題となってくるであろうと思われる。仏教学 者は、おそらく、西洋の現象学から離れ、「色即是空」の思想を純粋に仏 教的に深化する以外には道はないと説くのではなかろうか。但し、この 「空」の思想に究極の意味を認めない限り、悲しい虚しさしか得られない ことになる。「空」に安心すること自体、悟りなのではあろうが、『仏の畑 の落穂』、「涅槃」の最終部からハーンは察するところ仏教が提示する希望 (a hope) をかぎとっているようである。

《注》

- (1) ペレルマン (藤川健治訳編) 『おもしろい物理学』社会思想社、昭和52 年. 234-238 頁。
- (2) 武蔵大学人文学会編『人文学会雑誌』(第26卷. 第2号) 1994年. 85-89 頁。
- (3) Lafcadio. Hearn "Within the Circle" Gleanings in Buddha Fields, Yushodo Booksellers LTD., 1981, pp. 294-295.
- (4) L. Hearn "A Drop of Dew" Kotto, Yushodo Booksellers LTD., 1982, DD. 176-177.
- (5) エリアーデ (堀一郎訳) 『永遠回帰の神話 祖型と反徳』 未来社, 1963 年。
- (6) 梅原猛『日本人の「あの世|観』中公文庫, 68頁。
- (7) "Within the Circle" p. 296.
- (8) ニーチェ全集(信太正三訳) 『悦ばしき知識』(8) 理想社. 昭和41年. 341 番。

- (9) L. Hearn "The Life of Stars" *Miscellanies*, William Heinemann LTD., 1924, pp. 122-123.
- (10) Arthur Charles Clarke 2001:Space Odyssev (1968).
- (11) "Nirvana" Gleanings in Buddha—Fields, pp. 232 233.
- (12) L. Hearn "The higher Buddhism" Japan An Interpretation, Yushodo Booksellers LTD., 1982, p. 235.
- (13) ヘンリー・D・ソロー (佐渡谷重信訳) 『森の生活 ウォールデン 』 講談社, 2011 年, 147 頁。
- (14) L. Hearn "Insect-Musicians" Exotics and Retrospectives, Yushodo Booksellers 1982, p. 39.
- (15) "Notes of a Trip to Kyoto" Gleanings in Buddha Fields, p. 64.
- (16) アナトール・フランス (大塚幸男訳)「エリュシオンの野にて」『エピクロスの園』 岩波書店、昭和 49 年、146-155 頁。
- (17) L. Hearn "The Genius of Japanese Civilization" *Kokoro*, Yushodo Booksellers LTD., 1981, pp. 23-25.
- (18) "Development of Shinto" Japan An Interpretation, pp. 145-146.
- (19) L. Hearn "Metempsychosis" *Fantastics and Other Fancies*, Houghton Mifflin Company, 1923, pp. 260-261.
- (20) "Undving One" Fantastic and Other Fancies, p. 267.
- (21) "In the Dead of the Night" *Kotto*, p. 230.
- (22) 折口信夫『死者の書・身毒丸』中央公論社,2015年,10頁。
- (23) L. Hearn "Ululation" In Ghostly Japan, Yushodo Booksellers LTD., 1981, p. 142.
- (24) 沼野充義編『ロシア怪談集』河出書房新社,1990年,245-295頁。
- (25) 『ハーン著作集』(10巻) 恒文社, 1987年, 126-147頁。
- (26) "Nirvana", pp. 224-225.
- (27) "The Idea of Pre-Existence" Kokoro, p. 256.
- (28) "Nirvana", pp. 263-266.

参考文献

エド・レジス (Ed Regis) (大貫昌子訳)『ナノテクの楽園』工作舎, 1997 年。 プラトン (藤沢令夫訳)『メノン』岩波書店, 1994 年。

『ハーン著作集』(7巻)恒文社,1994年。

石原慎太郎『巷の神』(上・下) PHP 研究所、2017 年。

上野修『スピノザの世界 — 神あるいは自然』講談社,2005年。

波多野直人『史的イエスをめぐる謎 — 豊かなる混沌 — 』彩流社, 2015年。 新改訳聖書刊行会(訳)『聖書』日本聖書刊行会, 1994年。 新教出版社編集部『聖書辞典』新教出版社, 1975年。

(原稿受付 2020年10月5日)

死者に捧げる詩の言葉

─ フィリップ・ジャコテの場合 ─

中 山 慎太郎

彼が部屋の片隅にいてくれますように。 かつて活版を組んでくれたように/ 測ってくれますように私が彼の最期を 問い/思い出しながら結び合わせている詩行を。震えていても/彼の廉直さ のおかげで私の手が迷ったり逸れたり しませんように(1)。

要旨

歴史上、死者に捧げられた詩は枚挙にいとまがない。本稿では、フランス現代詩を代表する詩人フィリップ・ジャコテの「喪の詩」、『ルソン』(1977)を分析し、「抒情の危機」とも呼ばれる 1960-70 年代における「抒情」の一側面について考察する。

なお、本論考は2019年3月に行われたフランス抒情詩研究会シンポジウム「20世紀における抒情の危機と再生」(於神戸大学)での発表をもとに、加筆・修正を加えたものである。

キーワード: 死, 喪の詩, 抒情

⁽¹⁾ Leçon dans Œuvres, édition établie par José-Flore Tappy, avec Hervé Ferrage, Doris Jakubec et Jean-Marc Sourdillon, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade ». 2014 (以下 在 と略す), p. 449.

はじめに

1960-70 年代は「抒情の危機」と呼ばれる時代であった。構造主義の影響のもと、とりわけ 60 年代後半から 70 年代前半にかけて、詩人たちは情景や人間そのものを主題とするのではなく、詩作品のなかで己の「詩学」を語る傾向を強めていく。現代詩人ミシェル・ドゥギーが言うように、詩は「詩それ自体のメタファー⁽²⁾」となり、新たな詩学の理論的構築の場となるのである。その一翼を担ったのはフィリップ・ソレルスを中心として1968 年に創刊された前衛雑誌『テル・ケル』であろう。革命的であろうとするこの雑誌は、「テクスト主義」を極限まで理論化し、テクストから書く主体の特権性と、人間と日常的な世界との関係を徹底的に排除しようとした。ジャン・チボードーは、「一個の<自我>を他者との関係の中に構造化するのではなく、単にテクストの生産者にすぎない<束縛されない私>を創出する⁽³⁾」と宣言する。また、テル・ケル派詩学のエッセンスを凝縮した詩人ドゥニ・ロッシュは、詩と呼ばれるジャンルを内部から自己崩壊させることを試みる。

そう, エクリチュールのスペクタクルをより上手く使用するのに必要なのは, 私たちの記号が暴れだす与件と直角をなし, 詩的生産をその最も極端な教養失調の点へと, すなわちポエティシテの明白なゼロ地

⁽²⁾ Cité par Agnès Disson. « Turbulences et mutations : la poésie française contemporaine des années 50 aux années 2000 », in *Bulletin de la Société de Langue et Littérature Française*. Université d'Osaka. 2007. p. 111.

⁽³⁾ Jean Thibaudeau, « Le roman comme autobiographie » in *Théorie d'ensemble*, Seuil, « Tel Quel », 1968, p. 214.

点へと連れ戻すことなのだ(4)。

「抒情的、形而上的ユマニスムの破産⁽⁵⁾」を宣告する「前衛」の詩学は、 挑発的で論争的であるが故に時代の趨勢となっていく。

ジャコテの詩は20世紀後半の詩の世界で特異な声を響かせている。とはいえ、何かしら新しい思想を声高に宣言したり、前衛的かつ奇抜な詩的言語をこれ見よがしに提示するのではない。むしろ、論争の時代であっても、ジャコテの言葉は「過度に輝くイマージュ」や「極端さ、仰々しさ、大げさな言葉づかいを避けた⁶⁶」節制の効いた言葉であり、自然や身近な世界に寄り添っている。そのようなジャコテは1960-70年代の「詩的言語の革命」に対して次の様に述べている。

言葉についての、あるいは、好んで「エクリチュール」とか「ディスクール」などと呼ばれていることについての、今日溢れかえっている学問的研究への私の躊躇いも付け加えようか。私はといえば、ただ問いかけたかっただけなのだ、ある果樹園に、そして後に果樹園を通して垣間見られた顔に⁽⁷⁾。

「前衛派」をあからさまに槍玉に挙げるのではないところがいかにも ジャコテらしいところであるが、詩の理論化それ自体を詩の場とする前衛

⁽⁴⁾ Denis Roche, Le mécrit (1972) dans La Poésie est inadmissible, Œuvres poétiques complètes, Seuil, 1995, p. 589.

⁽⁵⁾ Agnès Disson, *op.cit.*, p. 110.

⁽⁶⁾ Jean Starobinski, « Parler avec la voix du jour » dans *Poésie* (1946-1967), Gallimard, « Poésie / Gallimard », p. 7.

⁽⁷⁾ A travers un verger, Eaux-fortes de Tal Coat, Montpellier, Fata Morgana, 1975, p. 32.

派に対して眉をひそめているのは明らかだ。というのも,ジャコテの詩学は明らかに「抒情的,形而上的ユマニスム」に基づいているからである。ジャコテは,季節や時刻によって微妙に変化する身近にある自然を詩の主題とし,詩の言葉を通して自己と世界の関係を問いながら,現代における詩のあり方、抒情のあり方を模索する。

詩はどの文学ジャンルよりも死という出来事に密接に関わってきた。文学史家ウィリアム・マルクスは、「望みさえすれば、詩の特徴である卓越した威厳によって、詩は他のどのような文学ジャンルよりもうまく不幸を扱うことができた⁽⁸⁾」と述べている。ただし、「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である⁽⁹⁾」というテオドール・アドルノの有名な言葉が示すように、第二次世界大戦後、抒情詩の状況は一変する。マルクスは、20世紀後半になって、「死という神秘を前にしたとき、ただ沈黙だけが価値をもつ⁽¹⁰⁾」状況になり、抒情詩は素直に死を悼むことができなくなっていると指摘している。

本稿では、フィリップ・ジャコテの「喪の詩」である『ルソン』を分析し、フランス現代詩を代表する詩人が、死という言葉にならぬ出来事に対してどのように向き合ったのかを分析する。21世紀にはいり、ジャコテについての優れた研究が数多く発表され、韻律、文体、思想などの面からその詩学の特徴が明らかになってきている(111)。本研究はジャコテの「抒情」

⁽⁸⁾ ウィリアム・マルクス『文学との決別―近代文学はいかにして死んだのか』 塚本昌則訳, 水声社, 2019 年, p. 162.

⁽⁹⁾ テオドール・アドルノ「文化批判と社会」『プリズメン』渡辺祐邦,三原弟平訳,ちくま学芸文庫,p. 36.

⁽¹⁰⁾ ウィリアム・マルクス, 前掲書, p. 185.

⁽¹¹⁾ 代表的なものとして以下の研究を挙げる。Jean-Claude Mathieu, *Philippe Jaccottet, l'évidence du simple et l'éclat de l'obscur*, J. Corti, 2003. Hélène Samson, *Le « tissu poétique » de Philippe Jaccottet*, Sprimont, Belgique, Mardaga,

の特徴を明らかにすると同時に、哀悼の詩、喪の詩の歴史を視野に入れつつ、その詩学の歴史的射程を測ることを目的とする(12)。

ジャコテの詩学

ジャコテはスイス,ヴォー州ムードンに生まれる。1946 年から出版社の特派員としてパリで過ごし,フランシス・ポンジュ,イヴ・ボヌフォワ,アンドレ・デュブーシェ,ジャック・デュパンらと親交を結ぶ。1953年,画家アンヌ=マリー・エスレルと結婚し,南仏グリニャンに定住。フランス語圏に限らず多くの詩人・作家について批評・エッセイを書いており,R.H.ブライスの Hai-ku (The Hokuseido Press, 1949–1952) に関する批評では俳句論を展開している (13)。また,ヘルダーリン,ムージル,リルケ,ウンガレッティなどの翻訳者としても知られる。

次のジャコテの言葉は、彼の詩学の一側面を要約するものであろう。

ときとして私は思うのだが、私がなおも書くのは、なによりも悦びの

[«] Philosophie et langage », 2004. Mathilde Vischer, La traduction, du style vers la poétique : Philippe Jaccottet et Fabio Pusterla en dialogue, Kimé, « Détours littéraires », 2009.

⁽¹²⁾ Figures du sujet lyrique (sous la direction de D. Rabaté, 1996), Le Sujet lyrique en question (sous la direction de D. Rabaté, J. de Sermet, Y. Vadé, 1996) の発刊以降,個々の詩人研究のみならず,「ジャンル」としての「抒情詩 (la poésie lyrique)」や,「抒情 (le lyrique)」についての研究も盛んに行われている。本稿は「抒情」に関する総合的研究に接続することも目指される。

^{(13) «} L'Orient limpide » NRF, n° 95 novembre 1960. Texte repris dans *Une transaction secrète*, Gallimard, 1987. ジャコテの俳句論については、拙論 « Philippe Jaccottet et le haïku » (『研究年報 61 輯』学習院大学文学部, 2015年 3月)参照。

多少とも輝く確かな断片を集めるためであると。そうであるはずなのだ。この悦びについては、ずっと以前、ある日、心のなかの星のように爆発して、われわれの中にその塵をまき散らしたと考えたくなる⁽¹⁴⁾。

ジャコテの作品は自然の移ろいを主題とすることが多く、その移ろいのなかで感じられた、美しくも儚い瞬間を詩篇のなかで輝かせようとする。おそらく輝かせると言っては言い過ぎで、岩切正一郎氏も指摘するように、ジャコテがその語源を多分に意識して使う語彙を用いるなら、«traduire»「翻訳する=表現する」、すなわち«faire passer»「過ぎゆかせる」と言った方が適切であろう(15)。

一方,ジャコテは初期のころから死を主題とする作品を多く扱っている。詩人としてデビューするとすぐに,ジャコテは対独レジスタンスで虐殺されたある若者を追悼する『レクイエム』(1947)を出版する。また、『無知なるもの』(1958)には「死者の書」と題されたセクションがある。もちろん,ジャコテが言う「悦びの多少とも輝く確かな断片」が刹那的なものでしかなく,失われる,過ぎゆくというかたちでしか存在しない以上,「死」という主題は風景を前にしたジャコテの詩学にも大きく関わっている。

詩集『ルソン』について

次に『ルソン』の沿革を確認しておきたい。『ルソン』は義理の父ルイ・エスレルの死を契機にして書かれた作品だ。1994年にジャコテはル

⁽¹⁴⁾ Cahier de verdure (1990), Gallimard, « Poésie / Gallimard », 1994, p. 11.

⁽¹⁵⁾ 岩切正一郎「ひらかれた断片 フィリップ・ジャコテ論」『仏語仏文学研究』 13号、東京大学仏語仏文学研究会、1995年10月、p. 175.

イ・エスレルと『ルソン』という作品の成り立ちについて、「エスレルは素朴で実直なひとで、心から愛され、尊敬されていました。後に、彼の廉直さから着想を得て、『ルソン』のなかで彼の臨終の苦しみを語ろうと試みたのです⁽¹⁶⁾』と回想している。

執筆期間は1966年11月から1967年10月の間。1969年になってようやくローザンヌのペイヨ社から出版される。その後、1971年、ガリマールから出版された『ポエジー1946-1967』に再録。さらに、修正と新たな詩篇が加えられて1977年に詩集『冬の光に』に再録。2014年に発刊されたプレイアッド叢書の『作品集』では、後者のバージョンが決定稿として収録されている。時間をかけて執筆されたこと、そして、発表後にも大幅な修正が加えられ、再版されたことを考慮に入れると(17)、ジャコテにとって『ルソン』は重要かつ思い入れの強い作品であったことは明らかであろう。

私の作品のなかで、真に仕事の対象となり、執筆に長い時間がかけられたのは『ルソン』である。しかし、常に完成し足りないと考えた作品でもある⁽¹⁸⁾。

本稿では、1977年に『冬の光に』に再録され、決定稿としてプレイアッ

⁽¹⁶⁾ Tout n'est pas dit, Cognac, Le temps qu'il fait, 1994, p. 7.

^{(17) 『}ポエジー 1946-1967』が、第二版の『ルソン』を発表した後も、初版の『ルソン』を掲載したまま現在でも出版されていることを鑑みると、初版の『ルソン』が否定されたのではないというのは明らかだ。初版と第二版の関係について は « La figure du sujet lyrique dans la poésie contemporaine – Jacques Dupin, Philippe Jaccottet et Jacques Réda » (Thèse, Université Lumière Lyon 2, France) にて論じた。pp. 208-223.

^{(18) «} Cette folie de se livrer nuit et jour à une œuvre... » dans *Une Transaction secrète*, Gallimard, 1987, p. 321

ドの選集に収録されたバージョンを分析対象とする。構成は、全文イタリックで書かれた序詩にはじまり、そのあとに題名や通し番号もない詩篇が22篇続く。

生と死のあいだ

『ルソン』は、「私」が、死んで不在となった「師」とどのような関係を 持ちうるのかを模索した詩集だ。冒頭の詩篇を見てみよう。

かつて

私は怯えきって 無知なるものであった やっと生きているにすぎず イマージュで目を覆うことで

死に向かうものや 死者たちを導けると思っていた。

保護された詩人であった私は いたわられ ほとんど苦しまずに そこまでの道を示そうとしていた!

いまではランプが吹き消され いままで以上に手はさまよい 震えているけれど もういちどやり直そう ゆっくりと 大気のなかで⁽¹⁹⁾。

自らの過去の作品,すなわち「死」を主題とした『レクイエム』や『無知なるもの』について言及されている。つまり,過去の「私」は詩の言葉で「死者」を導いていけると考えていたが,大切なひとを亡くすという出

⁽¹⁹⁾ *Œ*, p. 451.

来事が身近におこった今、そのようなものは傲慢に過ぎないと気づかされたのであり、生きているものが死者と取り得る関係を再び問い直さなければならないと決意している。

フランス詩史を概観すると、死を主題として扱った詩篇、死者に捧げられる哀悼の詩は枚挙にいとまがない。ピエール・ド・ロンサールの人口に膾炙した美しい詩篇「マリーに捧げるソネ」、ヴィクトル・ユゴーが愛娘レオポルディーヌを亡くした際に書いた中断符のみの沈黙の詩、死者としての娘との対話を試みた悲しくも美しい詩篇などを思い浮かべることが出来るだろう(Les Contemplations、1856)。また、ステファヌ・マラルメはその決して多いとはいえない作品群のなかで、「エドガー・ポーの墓」、「シャルル・ボードレールの墓」など数多くの「哀悼の詩」を捧げている。20世紀ではアンリ・ミショーの『われら今もふたり』(Nous deux encore、1948)、『ルソン』以後の作品では、ミシェル・ドゥギーの散文詩『尽き果てるなきものへ――テレーヌ』(Â ce qui n'en finit pas. Thrène、1995)、ジャック・ルーボーの『何か黒いもの』(Quelque chose noir、1986)――三つの作品とも亡き妻に捧げられている――が思い浮かぶだろう。

第二次世界大戦後の作品であるドゥギーやルーボーの作品を除き,死者に捧げられた詩篇にはある傾向を見いだすことができる。まず,死者を礼賛するタイプの詩篇。ロンサールの,アンリ三世の愛人マリー・ド・クレーヴ公妃の早世を嘆いた詩篇は,儚く散ったマリーを薔薇に譬えながら在りし日の美しさを賛美し,現実の薔薇の存在によって人びとに彼女の美しさを想起させるという手法をとっている。

春五月 匂やかにみずみずしく 枝に薔薇が初めて花ひらき 空もそのあざやかな色を羨むとき なが明けそめる頃には 曙 の濯ぐ涙を受けるそのとき

花びらには優美さが そして愛が休らっている 庭を 木々を 香りで燻きしめて けれど あるいは雨あるいは激しい暑さに打たれて 薔薇はやつれて死んでいく 花びらが一ひら また一ひらと枯れ散って

そんな薔薇にも似て 初々しい若さのただなかで 天も大地もあなたの美しさを讃えているときに パルカに命を奪われて あなたは灰になって構たわる

受けとってほしい わたしの捧げもの この涙と悲しい嘆きを 乳でいっぱいのこの甕 花でいっぱいのこの籠を 生きてるのであれ 儚いのであれ あなたの体がひたすら薔薇の花々 であるために⁽²⁰⁾

一方、不在という悲しみのなか、死をもうひとつの誕生、あるいは再誕として捉え、死者が「彼岸」で別の生を得ていることが歌われる詩篇もある。ユゴーは「死ぬというなかれ、生まれると言うのだ⁽²¹⁾」と書いている。マラルメの「エドガー・ポーの墓」では、死者は「偶然」に支配される「俗世」から離れ、永遠が支配する死の国で理想的な生を授けられている。

⁽²⁰⁾ Ronsard, Œuvres complètes, tome I, édition établie, présentée et annotée par Jean Céard, Daniel Ménager et Michel Simonin, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, pp. 254-255. 『愛のフランス詩集――作品に書きたい言葉――』 吉田加南子編訳, 天来書院, 2007 年, pp. 26-27.

⁽²¹⁾ Les Contemplations dans Œuvres poétiques, tome II, édition établie, présentée et annotée par Pierre Albouy, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1967, p. 779.

彼その人へと ついに 永遠は 彼を変容せしめ, 詩人は 白刃をふるって 掻き立てる, この異形の声には 死が 勝ち誇っていたのだと 知らなかった故に 驚愕する 世俗の民を! (22)

伝統的に哀悼の詩は在りし日の素晴らしさを賛美するか、あるいは、死者がここではない別のどこか、すなわち、生者が赴くことの出来ない超越的な「彼方」で理想的な存在として別の生を得ているとすることが多い。いずれの場合にせよ、死そのものの生々しい出来事性は隠され、死を直視することは避けられる。ジャコテの同時代の詩人で、友人でもあったイヴ・ボヌフォワは、「こういった詩は死を忘れる。だからこそ、詩は神々しいとよく言われるのだ⁽²³⁾ | と述べている。

それでは詩人自身は? 西洋ではギリシャ神話の登場人物であるオルフェウスが詩人の象徴となってきた。詩歌や音楽の神アポロンと音楽の女神のひとりカリオペの子であった詩人オルフェウスは、その比類なき竪琴の音と歌声で、動物だけでなく、木々や岩さえも魅了した。あるとき妻であったエウリュディケーが蛇に噛まれて命を失い、悲嘆にくれたオルフェウスは妻を取り戻すべく冥府下りを敢行。彼の竪琴の音と歌声は、冥界の河の渡し守カロン、冥界の番犬ケルベロスを魅了し、さらには冥界の王ハデスをも説き伏せて、愛妻を連れて帰る許可をもらう。しかし、冥界を出るまでに後ろを振り返ってはならぬという禁を破ってしまい、妻を永遠に失うことになってしまう。

詩人の野村喜和夫は『オルフェウス的主題』のなかで、「詩人が詩人で

^{(22) 『}マラルメ詩集』渡辺守章訳,岩波文庫,p. 132. *Œuvres complètes*, tome I, édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1998, p. 38.

⁽²³⁾ Yves Bonnefoy, L'Improbable, Mercure de France, 1992, p. 106.

あることを意識するとき、あるいは詩の行為の意味を根源から問うというようなとき、詩人の祖型として直接間接にオルフェウスの名が呼び起こされる⁽²⁴⁾」と指摘している。先ほど見た例では、詩人は在りし日の美しさを永遠に伝えつづけることが出来るオルフェウス、また、死者を蘇らせることはできずとも、想像力の翼を用いて死の世界を垣間見ることの出来るオルフェウスとして想定されている。

しかしながら、第二次世界大戦の災厄を経験し、さらに自らの近親者の 死に直面したジャコテにとって、「彼岸」にある死者の国は想定されず、 詩人がオルフェウスとして想定されることはない。

今日の詩人にとって危険なのは、自分をオルフェウスと思い込むことである⁽²⁵⁾。

死という出来事を見つめる

23 篇ある詩篇の中で、3 番目の詩篇から 15 番目の詩篇まで、「私」は今にも死を迎えようとするものを執拗に見続ける。まずは3 番目の詩篇を見てみよう。

葡萄と無花果 遠く山々に守られ ゆったりとした雲のもと そして涼しさのなか 恐らく 恐らく

⁽²⁴⁾ 野村喜和夫『オルフェウス的主題』水声社, 2008年, p. 16.

⁽²⁵⁾ Ecrit pour papier journal, Gallimard, 1994, pp. 24-26.

・時期がきたのだ 年上のものが横たわる時期が 力もほとんどなくなった。目に見えて 日に日に 歩みが覚束なくなっている。

いまはもう そういった場合ではない 草の間を流れる水のように通りすぎて行く場合ではないのだ それは向きを変えない。

師自身が

あまりにすばやく はるか遠くへ連れ去られるとき 私はさがす 師に伴わせるものを

果実のランタンでもない 冒険好きな鳥でも 至純のイマージュでもない

むしろ 取り替えられる布と水 夜も眠らぬ手 むしろ 忍耐する心⁽²⁶⁾。

「師」には刻一刻と死が迫ってきている。「私」はそれを敏感に感じ取っているのであろうか、断片化された言葉や言いあぐんだ言葉には、狼狽し、言葉を失っていることが読み取れる。また、「私」は「師」に伴わせるものを探しているが、それは死者を黄泉へと送る「ランタン」でもなけ

⁽²⁶⁾ Œ, pp. 451-452.

れば、死を易々と超えていける「鳥」でもなければ、はたまた、死者への オマージュとなるような美辞麗句でもない。むしろ必要なのは、死者をく るむ衣服や、死者を清めるための水といった実質的なものであり、さらに は目を閉じることなく死者の手を握り、迫り来る死から目をそらすことな く、死という出来事に身を置き続けるための「忍耐の心」である。

もはや「師」と呼ばれているものは生の領域にはいない。しかし、先の 引用からも明らかなように「彼岸」にはまだ辿り着いていない。ジャコテ は23ある詩篇のうち半分以上を費やして、生と死の「境界」にいる「師」、 すなわち死という生々しい出来事のなかにいる「師」を直視する。

無言。語と語の繋がりも壊れはじめる 同じく。彼は語から離れていく。

境界。少しのあいだ

私たちは ふたたび彼を見る。

いまでは彼はほとんど聞くことが出来ない。

遠くからこの異邦人に呼びかけられるのか? 彼が私たちの言葉を 忘れたのなら もはや立ち止まって耳を傾けることがないのなら。 彼は他所に用があるのだ。

いまとなっては彼は何にも関わり合わない。

私たちのほうを向いていても

もはや背中だけが見えるかのよう。

背を丸めているのは 何をくぐろうとしているのか⁽²⁷⁾。

⁽²⁷⁾ Œ, p. 454.

「師」は生と死のあいだに身を置いている。もはや「彼」は「こちら側」 に属してはいないが、まだ「彼方」にも行っていない。また、この境界に いる「彼」の特徴がその身体にも現われる。

何かが入り込んで破壊する。 何と哀れなんだろう 別の世界が ひとつの身体のなかに くさびを打ち込むときとは⁽²⁸⁾

「彼」は現世から切り離された「彼方」にいるのではなく、「いま・ここ」 で死という出来事のただなかにいる。「私」はといえば、空間も含めた死 という出来事に、現在時として立ち会っているのだ。

彼は引き裂かれ 引き抜かれる 私たちが身を寄せ合うこの部屋は引き裂かれ 私たちの繊維=琴線が悲鳴をあげる。

もし引き裂かれるのが「時間のヴェール」であり 壊れるのが「身体という檻」であるなら もしそれが「もうひとつの誕生」であるなら?

私たちは傷口の小穴を通り抜け 生きながら永遠のなかに入り込めるのだが・・・・・・

あまりに冷静で 厳しい産婆たちよ

⁽²⁸⁾ *Œ*, p. 455.

あなたたちは新しい命の 産声を聞いたのか?

私が見たのは 消えゆく蝋燭のみ この渇いた唇には どんな鳥も飛翔する余地はなかった⁽²⁹⁾。

死という生々しい出来事を直視するジャコテは、死者を「時間のヴェール」が引き裂かれた永遠の世界に導くこともなければ、「身体という檻」から解放され、純化されたイデーとして死者を扱うこともない。また、死者が「彼方」で「もうひとつの誕生」を授けられることもない。もはや詩人は、「生きながら永遠のなかに入り込める」オルフェウスではないのだ。

はじめての一撃とまでは言わないまでも はじめての 激しい苦痛 そんなふうに壊されてしまうとは 師が 種が 善良な師がこんなふうに罰せられようとは か弱い幼子のように思えてしまうとは 大きすぎる赤子のベッドに寝かされているために⁽³⁰⁾

「師」は生まれたての「赤子」のように語られているが、それはあくまで死に瀕した「師」の弱々しさを描写しているにすぎない。すなわち、いましがた見た二つの詩篇は、死者を永遠の世界に押しやり、純化して理想化すること、そして、死から目をそらして、それを「もうひとつの誕生」

⁽²⁹⁾ *Œ*. p. 457.

⁽³⁰⁾ Œ, p. 453.

として捉えることを拒むものとなっているのだ。

死を語る詩の言葉

『ルソン』は多弁な詩集ではない。死の悲しみをこれ見よがしに絶叫することもなければ、死者について美辞麗句を連ねることもない。言葉はときに名詞文の使用によって断片的になり、ときにねじれ、破格とはいえないまでも模範的な文章から外れたりする。また、詩の言葉は短く、概して囁きに近い言葉で述べられる。

詩形に注目するなら、ジャコテは『ふくろう』などの初期詩集ではソネなどの定型詩や、音節をそろえた詩形を使っていたが、『無知なるもの』以降、より流動的で、自由な詩形を用いている。また、詩節に関しても統一性はなく、それぞれの詩篇でも各連の詩句の行数は一定ではない。

『播種』という詩的日記のなかでジャコテは次のように述べている。

おそらく、長く規則的な韻文による詩篇が前提とするのは、ゆったり とした穏やかな息や、安定である⁽³¹⁾。

死の出来事とは、「安定」を壊し、「ゆったりとした穏やかな息」を吐くことを許さない、「語と語の繋がりも壊れはじめる」出来事である。そのため、一定の音綴数で統一が図られ、安定したリズムが目指されることはない。しかしながら、韻律が意識される詩篇がないわけではない。

Entre la plus lointaine étoile et nous,	10
la distance, inimaginable, reste encore	12

⁽³¹⁾ La Semaison, Gallimard, 1984, pp. 46-47.

_

comme une ligne, un lien, comme un chemin.	10
S'il est un lieu hors de toute distance,	10
ce devait être là qu'il se perdait :	10
non pas plus loin que toute étoile, ni moins loin,	12
mais déjà presque dans un autre espace,	10
en dehors, entraîné hors des mesures.	10
Notre mètre, de lui à nous, n'avait plus cours :	12
autant, comme une lame, le briser sur le genou.	13 ou 1

最も遠い星と私たちのあいだには 隔たりがまだ残っている 想像もつかない隔たりが まるで一本の線 ひとつの絆のように ひとすじの道のように。 いかなる隔たりも超えたところに場所があるなら 彼が姿を消したのは そこであったに違いない どんな星よりも遠くもないし 遠くないこともない場所 でも すでにほとんど別の空間 外部に 尺度(=拍節)を超えたところに運び去られている。 彼から私たちのところまで いまとなっては私たちの定規(=音律) は用いられていない

いっそ それを刃のように膝の上で折るがよい⁽³²⁾。

この詩篇は、音綴数への意識が低い『ルソン』のなかで珍しく 10 音綴と 12 音綴の詩句を中心に構成されている。しかし、伝統的な区切りを持つ アレクサンドランやデカシラブと言えるような詩句は少なく (アレクサン

.

⁽³²⁾ *Œ*, p. 453.

ドランであれば 6//6. 4//4//4. デカシラブであれば 6//4. 4//6 の区切 り). むしろ全体のリズムとしては韻文のリズムより散文のサンタックス のリズムが優先されている。さらに、最後の2行の詩句に注目したい。9 行目の詩句の韻律上の区切りは 3//5//4 であるが、 サンタックスのリズム では逆に等しいリズムの4//4/4となる。「死者 | と「生者 | の「隔たり | を考慮に入れた場合では、「nous | と「lui | の間に区切りをいれ 6//6 と なる。この詩句は少なくとも3つのリズムを持つわけで、ひとつのリズム に決定することができないものとなっている。そういった12音綴の詩句 の後に、散文のリズムをとるなら 13 音綴 (autant. comme une lam (e). // le briser sur le genou [6/7]). 音律のリズムをとるなら 14 音綴 (autant, comme une la//me, le briser sur le genou 6/8) となる、さらに不 安定な詩句が現れる。加えて、9行目にある « mètre » と言う語に注目し よう。この語は文脈上、死に向かうものと生きているものの間にある「隔 たり=距離|を測る「定規」を意味するが、詩の形式を考慮に入れるなら ば「音律 | という意味に取ることも可能である。この最後の2行が決定打 となって、この詩篇は全体として、意味上でも、形式上でも、伝統的な音 律の力を失効させる詩篇となっている。音律を意味する語 « mètre » と死 に向かう « maître » 「師」が音声上重ねられること、そして実際の音律の 安定したリズムの失墜が詩形式のうえで示されることで、詩形のうえから も死の出来事のなかにいる「師 | と、死という出来事を直視する「私 | の 不安定さが表現されていると言えるだろう。

また、ジャコテの詩における言説的な表現について確認しておきたい。 『ルソン』がときにつぶやくような言葉で書かれる一方、「私」は死にゆく 「彼」を語るさい、死を語る言語の不可能性について述べる箇所がある。

それは恐怖とも汚物とも名づけられる 汚物の言葉を発することすら出来る そういった言葉は最下層の布きれに読み取れる。 詩人がどんなに猿まねを演じようとも それは書き込まれた頁に記されることはないだろう⁽³³⁾。

ここでは死という出来事と言葉自体とが釣り合いがとれないこと、すなわ ち死を言葉にすることの不可能性が説明されている。先ほど『ルソン』と いう詩集では、死者が永遠化されたり、理想化されたりするのではなく、 あくまで死という出来事を現在時として直視することが目指されていると 指摘した。確かに、それは残されたものにとっては虚構にしかすぎない。 というのも、「師」の死はすでに過ぎ去った出来事だからだ。しかし、こ れまで引用してきた詩篇の多くが現在形で書かれてきたことに注目しても らいたい。いまを生きる「私」は、死を見続けることが虚構にすぎないと 分かっていたとしても、「彼」の死という出来事を現在時として見ること しか残されていない。というのも、死者をその死から引き離し、死そのも のを忘却して永遠化することは、死者の「死者性」――他者の「他者性」 のように「死者性」という言葉がもしあるのなら ― を冒涜的にも否定 し.「もう一度死者を殺してしまう(34)」ことになってしまうからだ。死が 「生きているもの」と「死に向かうもの」とのあいだに「隔たり」を生じ させる経験である以上、また、それが「隔たり」であることによってのみ 死という出来事である以上、言語の虚構性 —— 言語が死を十全には捉えき れないといった意味での虚構性 ―― を明らかにしておかなければならな 11

「誰が私を助けてくれるというのか? 何人もここまで来ることはで

⁽³³⁾ *Œ*. p. 455.

⁽³⁴⁾ Jean Laplanche et J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la psychanalyse*, sous la direction de Daniel Lagache, PUF, 1973, p. 504.

きない。

私の手を握っても 誰も震える手を握ることはないだろう

私の目の前に幕を置いても 私を見えないようにすることはできな いだろう

外套のように 昼も夜も私をくるんでいてくれても

あの火 あの寒さに対しては何もできないだろう

この場から 少なくとも証言しよう

どんな兵器 どんなトランペットだろうと ぐらつかせることの出来 ぬ壁があると。

今は 私を待つものは何もない もっとも長きもの もっとも悪き もの以外は。|

狭苦しい夜に 彼が黙っているのはこういうわけなのか? (35)

直前の詩篇(注 27)では、「師」は言葉を理解することも、話すこともできない状態であることが語られていた。それ故、この「師」の言葉が想像力による虚構であるのは言うまでもない。死者など言葉を持たぬものに言葉を授ける「プロゾポペ」というレトリックが使われているのだが、重要なのは空白を挟んだ最終行で、その発話が虚構であることを「私」自ら明らかにしているということだ。さらに、この自問の形式が、名づけられぬものとしての「隔たり」を、まさに名づけられぬものとして浮き彫りにしている。

それ故,この虚構の発話の目的は,死の生々しさから目をそらし,同時 に死者を私の内部で生者として永遠化することではなく,「隔たり」その ものを維持することだ。ジャコテにとって,言語の虚構性によってこそ逆

⁽³⁵⁾ *Œ*, p. 454.

説的にも、「死者」としての「彼」との「隔たり」を生きることができる。その時、「隔たり」は「私」と「彼」との断絶を意味するのではなく―ジャコテにとって「隔たり」の解消、すなわち「死」の否定は「師」の忘却へと繋がるだろう――、「生きているもの」と「死者」の関係のひとつのあり方なのである。詩句と詩句のあいだに置かれた空白が、詩句をわけると同時に、詩句から詩句へと通行の場所となるように。

透明な「私」

次に『ルソン』における「私」の形象について分析したい。この詩集では冒頭から、「師」は「彼」という代名詞で呼ばれることが多い。言語学者エミール・バンヴェニストが言うように、三人称は「話」としてのディスクールのレベルでは不在なものだ。

《わたし》は、話している人を示すと同時に、《わたし》に関する言表である。《わたし》というとき、わたしはわたしのことを話さざるを得ないのである。二人称では、《あなた》は必然的に《わたし》によって指示され、しかも《わたし》を起点として設定された状況のそとでは考えられ得ない。しかも同時に、《わたし》は、《あなた》の述辞としてなにごとかを言い表す。しかし、三人称については、なるほど述辞は言い表せるが、ただそれは《わたし‐あなた》のそとで行われる(36)。

「私」によって言動化されるディスクールのなかで、「彼」と呼ばれる

⁽³⁶⁾ エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳, みすず書房, 1983年, p. 206. Emile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard, « Tel », 1993, p. 228.

「師」は言語学的にも不在の相を与えられているといえる。「私」は死にゆくものに二人称で話しかけることはなく、頻繁に現われる疑問文は自問の形になっている。しかしながら、「師」が亡くなり⁽³⁷⁾、灰となった後、ついに最後の詩篇で「私」は「師」に二人称で話しかけることになる。

それでもあなたは

つまり完全に姿を消してしまったあなた 夕べの暖炉の火よりも 少ない灰を私たちに残したあなた

あるいは 見えない世界の見えないもの

あるいは 私たちの心の小部屋の種子

いずれにせよ

忍耐とほほえみの模範となって 私たちの背後で机や紙面や葡萄を照らす太陽のように いまでも ここに居続けてください⁽³⁸⁾。

^{(37) 22} 篇ある詩篇のうち、ついに 16 番目の詩篇で「師」が亡くなったことが語られる。「もはや息はない。/// 朝の風が // 最期の蝋燭に / 打ち勝ったときのように。 | (E, p. 457).

^{(38) «} Toi cependant, // ou tout à fait effacé / et nous laissant moins de cendres / que feu d'un soir au foyer, //ou invisible habitant l'invisible, // ou graine dans la loge de nos cœurs, // quoi qu'il en soit, // demeure en modèle de patience et de sourire, / tel le soleil dans notre dos encore / qui éclaire la table, et la page, et les raisins. » Œ, p. 456.

最後の詩篇ではじめて「師」が二人称で呼びかけられる。しかし、呼びかけられているのは、遠く「彼方」にいる「あなた」ではない。むしろ、「私」は死者としての「あなた」に語りかけつつも、「あなた」が不在の状態でここに在り続けてほしいと願っているのだ。すなわち、死者はもはや手に届かない存在となっているが、決して超越的なものとして措定されていない。「見えない世界の見えないもの」、すなわち「不在の形象をもった」もの——この表現はジャコテの重要なエセー『不在の形象をもつ風景』 Paysages avec figures absentes (1970) からとった——として側にいてくれるよう望まれている。

さらに、指摘しなければならないのは、対話者となった「師」が「私」の形象にも変化を生じさせていることだ。この最終詩篇において、ついに「あなた」という代名詞が登場するが、それと同時に、この詩篇では「私」は存在していても、「私」という代名詞が現れない。「私」の存在は「あなた」と呼びかける発話それ自体によってのみ示されている。代名詞としての「私」が消え、「私」が透明な存在になっている。そして、その透明さは不在として在る「あなた」によって与えられている。

「私」の透明性はジャコテの詩学において重要な問題であった。

自己への執着は生の不透明さを増す。本当に忘れ去ったとき、すべてのスクリーンは、一枚一枚透明になっていく。その結果、視線が届く限り、奥底まで明るさが見え、同時に軽くなる。こうして、魂は鳥へとかわる⁽³⁹⁾。

つまり、エクリチュールの透明さが求められるわけだが、それと同時に自 己の透明さも求められていることに注目したい。ジャコテの詩は自然の移

⁽³⁹⁾ La Semaison (Carnets 1954-1979), Gallimard, 1984, p. 11.

ろいを主題とすることが多く、その詩学は風景が光を放ちつつも消えてい く微妙な移ろいを、不可能であることを意識しつつも、詩篇のなかで輝か せることを目的とする。その際、求められるのは「スクリーン」としての エクリチュールの透明さであり、同時に、自己へと執着しない「私」の透 明さである。

『ルソン』の分析に戻ろう。「師」が「あなた」と呼びかけられる前 ―― 「私」という代名詞が消えるまえ — には、次のような美しい詩篇が置か れている。

そしていま 私はといえば空の滝に全身を浸している 大気の髪につつまれ ここ ノスリとほとんど同じ高さに宙に浮いて 燦めく木の葉と等しいものになっている 見つめながら 耳を澄ましながら ― そして 蝶はいずれも消えてしまった炎 山々はどれも煙 — ひととき 私は周りの天空の全き循環を抱擁する そこには死が含まれているのではないか。

いまとなっては 私にみえるのは ほとんど光のみ 遠くにいる鳥たちの鳴き声は その結び目

山は?

日の光のもとの 軽やかな灰。

死に向かうものを見続けた後、「私」は「師」の死に立ち会い、彼が灰 へとかわるところを見る。これまで「私」が過ごしてきたのは「鳥たちが 棘のように充満している⁽⁴⁰⁾」時間で、身を置いてきたのは「引き裂かれ」 た空間、すなわち「私たちの琴線=繊維が悲鳴をあげる|場所であった。 しかし、この詩篇では、死の直後にもかかわらずある種の幸福感に包まれ ている。「師」が死に向かっているあいだは鳥が「棘」のように現われた が、この詩篇では鳥は光の結び目となる姿で現われている。「日の光のも との/軽やかな灰 | と述べられているように、これまで肉体的に現世にあ りながら死に向かっていた「彼」は、死の成就とともに「不在の形象」と して、風に乗って過ぎゆくものとして世界にあり続けている。しかもその 「不在の形象」は、「私」と世界との関係そのものに大きく関わっているこ とが重要だ。注目したいのは、「私」が大気に包まれ、「ノスリ」と同じ高 さにいること. 「きらめく木の葉 | と等しきものになっていることだ。そ こでは、「私」は世界の中心点にいるのでもなければ、自我の視点から世 界を観察しているのでもない。「私」も含めて世界の事物たちが各々自分 の場をもち、他の事物との関係のなかで互いに燦めきを放っている。そこ には世界の中心となる「私」は存在しない。最終詩篇で、「私」の透明さ が「不在の形象」となった「師」によって与えられていたことを思いだそ う。そのことを考慮にいれるなら、いわゆる「透明な」「私」のありかた、 詩のエクリチュールのありかたは、死をとした「師」の「教え」であった と言えるのではないだろうか。

新たな抒情のありかたに向けて

1960-70年代にかけての「抒情の危機」を先導したテル・ケル派の詩人

⁽⁴⁰⁾ *Œ*, p. 455.

ロッシュは次のように述べている。

奴らが詩と名付けるものについて、私にとって必要なのは、なんとかしてその中へいっそう深く入り込み、そこへと詩の素材を引きずり込んで、その素材がマイナスの形でしか現れないようにすることなのだ。しかも、私がなおも動き回っている唯一の風景の極めて狭い限界のなかで。

「抒情的、形而上的ユマニスムの破産」が宣言される時代的潮流のなかで、ジャコテは伝統的な「喪のエクリチュール」に打ち込み、かなりの時間をかけて — 改編もふくめ — 『ルソン』を著した。もちろんジャコテは、この「抒情の危機」の時代で、「抒情の復権」を求めて『ルソン』を書いたのではない(41)。あくまで、彼の義理の父の死に直面し、その死の苦しみのなか書いたのである。一方で、近親者の死を体験することで、『レクイエム』や『無知なるもの』においてとった死者との関係のありかたに疑問を持ち、「彼の臨終の苦しみを語ろうと試みる」際に、新たな「喪の詩」のあり方を、さらには新たな抒情のあり方を問うきっかけになったことは確かだ。

ところで、抒情詩は伝統的に「主観」と結びつけられてきた。フランス 近現代詩研究家であり、「抒情性」の問題についての研究をリードするミ シェル・コローはヘーゲルを引用しながら次のように述べている。

ロマン主義以降、リリスムは「客観性」として考えられる叙事詩とは

⁽⁴¹⁾ とはいえ、「抒情の危機」の時代における、このようなジャコテの抒情の問い直しと探求は、1980年代に登場する「新抒情」nouveau lyrisme の詩人たち (ジャン=ミシェル・モルポワ、マルチーヌ・ブローダ、ブノワ・コノール、ジャン=クロード・パンソンなど) に大きな影響を与えることになる。

反対に、「外的対象の表現ではなく、主観性の表現として」しばしば 定義されてきた。ヘーゲルによると、抒情詩人は「それ自身へと閉じ こもった」「閉じ、かつ限定された主観的世界」を作りあげる⁽⁴²⁾。

詩人自身の主観なのか、詩のなかに登場する「抒情的主体」の主観なのかが問題となるのだが、本論ではジャコテを論じているので、ここでは「抒情性」の問題に立ち入ることはしない。ただここで確認しておきたいのは、詩人自身であろうが、登場人物としての「抒情的私」であろうが、いずれにせよ詩における視点が、中心に置かれた語り手の「主観」に固定されているということである。

しかし、『ルソン』の詩学はそのような抒情詩のありかたのうえには立っていない。『ルソン』では死の「悲しみ」は次のように表現されている。

茫然自失が

彼の目のなかで はじまっていた。こんなことがありえたとは。悲しみもまた悲しみは広大で まるで彼のうえにやってきて彼の命の柵を壊すもののよう。 柵は緑で鳥たちでいっぱいだったのだが⁽⁴³⁾。

「私」自らが「茫然自失」の状態になり、「悲しみ」を感じているのではなく、あくまでその状態や感情が死に向かう「師」の「うえ」で起こっていると描かれている。また、「悲しみ」が「広大」と述べられていることに

⁽⁴²⁾ Michel Collot, La matière-émotion, PUF, « écriture », 1997, p. 29.

⁽⁴³⁾ *Œ*, p. 453.

注目したい。つまり、「悲しみ」の感情は「私」の心の内部にあるのではなく、それが空間性をもち、「私」と「彼」を含む空間全体として表現されている。「悲しみ」の空間に関わるものには、常に自己に問いかけ、言いよどみ、沈黙に近くなる詩の言葉も加えることが出来るだろう。それ故、ジャコテにとって抒情とは、「私」の内部にある感情の吐露なのではなく、むしろ「私」の外部で、「私」、「世界」、「詩の言葉」の関係の編み目のなかで構成されるものなのである。

結びにかえて

『ルソン』は生者が死者とどのような関係を持ち得るのかを模索した詩集だ。ジャコテは死者との新たな関係を模索するなかで、世界との関係のあり方や、詩における「私」のあり方を問い直す。「私」の「閉ざされた主観」によらない抒情詩のあり方も、そして、新たな抒情性の探究することの意味も、「師」の死をとした「教え」であった。この後も、ジャコテは「師」に導かれ、迷うことなく、幸福かつ困難な詩の探求に身を捧げ続けることになるだろう。詩が「未知なるもの、見えないもの、果てしないもの(44)」に向かって開かれてあるために。

(原稿受付 2020年10月28日)

⁽⁴⁴⁾ La Promenade sous les arbres (1957), Lausanne, La Bibliothèque des Arts, 2009, p. 147.

日本人英語教師の英語に対する 日本人大学生の英語観

矢ヶ崎 邦 彦

Abstract

This study reports on an exploratory investigation of Japanese university students' perceptions of Japanese English teachers (JETs) and native English-speaking teachers (NESTs). Quantitative data was collected by means of a questionnaire completed by 118 university students at five different private universities in Japan. This preliminary study focuses on three specific areas: Is there a significant difference in the intelligibility of JETs' and NESTs' English? Secondly, do Japanese university students have negative perceptions of JETs' English? Lastly, when comparing JETs and NESTs, do Japanese university students have a preferred English role model for their English learning experience? Participants' responses to the questionnaire reveal the followings: JETs' English was perceived to be more comprehensible than NESTs' English. Moreover, most of the participants did not have negative perceptions of JETs' English. The analysis also reveals that NESTs' English is perceived by the students who prefer NEST's English to be the role model. By contrast, the students who prefer JETs' English perceive JET's English as the role model. Thus, the significant difference in the English preference may represent the features of the role mode of Japanese students. Finally, implications for classroom teaching and teacher education are discussed.

キーワード: 固定概念, 英語の好み, 日本人英語教師, ネイティブ英語教師, χ^2 検定

1. はじめに

2020年度より公立小学校における新学習指導要領が実施され、第3・4 学年においては「外国語活動」が、第5・6学年においては「外国語科」 が必修化されることとなり、国際化 (globalization) が進む日本で英語が さらに重要な役割を果たす教科となっている。日本における英語教育の目 標の指針を示す『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語活 動・外国語編』(以後、小学校学習指導要領)においては、「外国語による コミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこ と、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる 資質・能力を次のとおり育成する」(2018:11) とある。また、『中学校学 習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語編』(以後,中学校学習指導要 領)においては「主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとす る態度を養成する | (2018:14) と明記されていている。望月(2018:27) は、学習指導要領とは「学校教育法施行規則に基づいており法的拘束力を 持っている | と述べている。よって、学習指導要領に上述の内容が明記さ れている以上、日本の教育現場においてコミュニケーション主体の英語教 育を行うことは必要不可欠であることは明確である。しかしながら、具体 的にどのような英語を用いてコミュニケーションを養成するのかにかんし ては看過されている。現在、日本の英語教育においては、主にアメリカ英 語とイギリス英語、即ち英米語に重点を置いて教育がなされている。それ はアメリカの経済力だけではなく、第二次世界大戦後にアメリカに統治さ れていたという事実とディズニー映画に代表されるようなエンターテイン メントが英語を使用して作成されたことが大きく影響していると考えられ る。実際に、日本人英語学習者は英語と聞いて、ほとんどの人がアメリカ 英語を思い浮かべるだろう。それは、中学校・高等学校での英語教育はア

メリカ英語を基盤として実施されるからであると考える。というのも、文 部科学省検定教科書で付属されている CD は、ほとんどの会話がネイティ ブ(アメリカ・イギリス)英語で録音されている。よって、必然的にそれ らのインプットが多くなり英米語の概念が芽生える。しかし、日本の教育 現場における. 英語の授業はほとんどの場合. 非母語話者 (Non-Native English Speaker. 以後 NNES) が授業を行っている。Shiroza (2014) は. 日本人英語(Japanese English, 以後 JE) が未だに規範的概念となりえ ておらず、矯正や揶揄の対象に留まっていると述べている。そのような問 定概念(stereotype)を払拭できずにいる日本人英語教員が多く存在する。 具体的には、小学校教員の外国語(英語)不安に本格的に取り組んだ研究 には、町田・内田(2015)や及川(2017)などがあり、大多数の小学校英 語教員が外国語不安を感じていることが指摘されている。また. 吉田 b (2017:124) や和泉(2009:241) においても日本人英語教員は英語を話 すことに対して自信が無いと指摘している。さらに、卯城(2018:52)で は、「英語教師は、他の教科に比べて、自分の教科の専門性に対する自信 が低い」と述べられている。よって、未だに文法訳読法(Grammar Translation Method) を払拭できない英語教員が多いことは否定できない 事実である。このような状況を鑑みて、日本の英語教員は英語の多様性を 十分に理解し、英語教師の使用する英語の種類を明確化することは重要で あると言える。本稿では、まず「英語は英語で教える」(1) において、先行 研究では説明しきれていない誤解を取り上げ、昨今の日本における英語入 試制度の変容を概観し、英語に対する固定概念を理解し、日本の教育現場 においての「英語は英語で教える」の議論の一助となることを期待するも のである。

2. 「英語は英語で教える」という固定概念

日本の英語教育にあり方を抜本的に反省しようとする動きは、平成元年 改訂の中学校、高等学校学習指導要領にまで遡る。その年、初めてコミュ ニケーションという記述が登場する。むろん、このような改訂が発生すれ ばおのずと従来の体制を見直し、コミュニケーション能力の育成のため に、「聞くこと」、「話すこと」の指導に重点が置かれることとなった。

実際にここ数年で、英語教授法は変化したのだろうか。図1は、Google Ngram Viewer⁽²⁾ を使用して、世界的に「Grammar Translation Method, 以後 GTM」、「Communicative Language Teaching, 以後 CLT⁽³⁾」、「Content Language Integrated Learning, 以後 CLIL⁽⁴⁾」という語句の世界中の書籍データにおける使用頻度の変容を可視化した結果である。

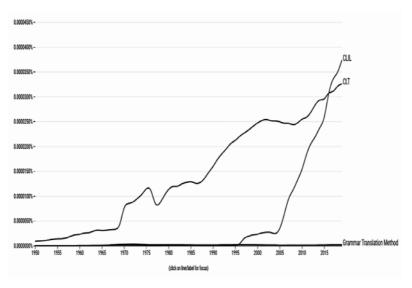


図1 Google Ngram Viewer における検索結果

この図1から、CLTが1990代末から注目されるようになったことがわかる。また、2010年代からはCLILが急速に注目されるようになったこともわかる。2005年から2019年を見比べてみると、この14年間で使用頻度が約8倍になっている。一方で、GTMは1950年代から2019年代までに、ほとんど使用されていないことがわかる。望月(2018:79)では、「欧州では現在でもラテン語、古典ギリシア語の教授法に依然として広く使われている」と述べられているが、世界的に見るとGTMにかんしての書籍や研究論文が決して多いとは言えないことが考えられる。

「英語は英語で教える」の代表的な先行研究には、池田(2011、2016)。 和泉 (2009). 卯城 (2011. 2014). 吉田 b (2017) などがある。その全て の先行研究において、現場の英語教員が「英語は英語で教える」ことにか んしての有効性や方法論が論じられている。ここで重要なポイントは. 「英語は英語で教える」という概念に誤解が生じていることである。 CLT、CLIL は「英語は英語で教える」という教授法。一方で、GTM は 「英語は日本語で教える」という教授法という信念自体が一種のイデオロ ギーとして問題があると考える。実際,池田(2016:10)は CLIL におい ても「トランスラングエッジングと呼ばれる積極的母語活用」を推奨して いる。さらに、池田(2011:9-11)では柔軟性があることが CLIL の特徴 であるとし、授業を日英両語で進める(Bilingual CLIL)、英語のみで行 う (Monolingual CLIL) に分類できると報告している。そして、GTM で は口頭のコミュニケーションは目的外とされる。ここで指摘されるよう に、コミュニケーションを主体としないことが問題視されているかのよう に示唆されていることが一種の誤解が生じていると考える。そもそも、文 法説明を英語で行うことは非現実的である。しかし、英語授業である以上 教師が英語を発話しないということは考えられない。母語による丁寧な文 法説明と英語によるインプットを織り交ぜての授業展開が現実的であると 考える。ここで本格的な検討に入る前に、本稿の目標について一言してお きたい。それは、日本の教育現場における「英語は日本語で教える」または、母語の併用を批判的に検証することではない。「英語は英語で教える」とは、すべての活動を英語で行うことではなく、英語と母語の併用を行うことである。換言すれば、基本的に授業は英語で行うが、複雑な指示や難解なトピックや文法を理解させる場合には、母語への切り替えを行う。さらに、白井(2013:17)では、標準語偏重の社会的構造に問題があるとし、教師は母語を抑圧するのではなく、母語と方言の両者における併用の重要性を述べている。つまり、「英語は英語で教える」は必要条件であるが、十分条件ではない。日本の児童・生徒・学生の英語力の現状を認識しないまま、全てを「英語は英語で教える」という授業展開では現場の混迷に繋がる状況になることに警鐘を鳴らしたい⑤。重要なのは、英語と母語をバランス良く併用することであるといえる。

3. 日本における英語教育の目標

現在、日本の社会だけでなく教育現場においても多様性を顕著に感じられるようになった。このような状況への認識が高まる中、英語教育にも大きな変化が押し寄せている。前述のとおり、2020年度より小学校に英語教育が導入された。よって、これまでは学校の判断で行われていた英語教育が一律に必修化されることになった。つまり、小学校においても、中学校・高等学校同様に英語教員免許を有する教員が英語の授業を行うこととなった。

さらに、日本における英語教育の目標にかんしても、大きな過渡期を迎えていると言っても過言ではない。具体的には、大学入学選抜大学入試センター試験(以後、センター試験)の英語試験には平成18年度からリスニングが導入される目的としては、従来の語彙や文法項目を機械的に暗記するだけでなく、学習指導要領に明

記されている実践的なコミュニケーション(communicative competence) を養成しない限り、大学に合格しないことが明らかであり、これまで行わ れてきた英語教育に大きな転換期をもたらす要因となった。その後、上智 大学と日本英語検定協会により Test of English for Academic Purpose (以後、TEAP) が開発された。英検・TEAP・IELTS などの外部検定試 験を利用した英語外部検定利用入試も、多くの大学で採用されるように なった。また、2020年度からは従来のセンター試験は廃止され、大学入 学共通テスト(以後、共通テスト)が実施される。センター試験において は、リスニングよりリーディングの配点が重視されていたが、共通テスト はリーディングとリスニングの配点が均等になる。リスニングの音声は. 多様な話者による英語を使用するとし、アメリカ英語・イギリス英語・日 本語母語話者によって出題される予定である。つまり、従来の英語教育に しばしば垣間見れた文法や長文読解だけに目標を掲げるのではなく、英語 の多様性を理解し、自ら積極的にコミュニケーションを図ろうとし、表現 し判断する能力の養成が期待されている。そのためには、日本人英語教師 が重要な役割を果たすことは否定できない事実である。

4. 言語と固定概念

現在、日本社会は政治、経済などさまざまな分野においてアメリカ英語が偏重している。その背景には、アメリカの国家としての経済力、影響力の存在にほかならない。さらに、行森(2017)は現在では「インターネットに代表される情報システムとの結びつきもその要因のひとつとして加わることのなった」と述べている。これらの要因で、日本の英語教育はアメリカ英語を基盤として行われていると考えられる。その結果、日本人の英語発音と顕著な差異が生じるため、揶揄される対象となってきた。しかし、日本も G7 に所属し、世界を代表する国家である。

下内(2016:84)は、日本人が英語をしゃべる際に、日本語の発音が英語に影響を与えるのは自然なことであり、これを日本語にある音声を英語の類似音に流用する音声面での「言語転移」であると述べている。そして、日本人が自らしゃべる JE に偏見や固定概念が発生すると考える。具体的には、th の音と L と R の違いなどがある (6)。神谷(2008:58)は、「日本人英語の使用する Japanese English とは一つの performance variety に過ぎず、日本における英語モデルとはなりえない」としている。

白井(2013:19) は子どもが、言語やなまり(accent)について敏感で あるとし、人種よりも自分と同じなまりの英語をしゃべる子どもと仲良く し、信頼するとしている。このような観点から、より詳細な検討に値する ものである。Rosina Lippi-Green (2012) は、映画やテレビからのイン プットが子どもの言語観に重要な役割をするとし、合計38のディズニー 映画内で使用されている英語の種類にかんして調査した。371のアニメ キャラクターの英語の種類を調査した中で、悪役がしゃべる英語は、アメ リカ英語よりも外国人なまりの英語・イギリス英語・その他のネイティブ 英語が多く使用されていることが判明した。一方で、良い役にかんして は、全体の78.5%ものキャラクターがアメリカ英語を使用している。ディ ズニー映画は世界的市場があるため、日本だけでなく世界中の英語学習者 の英語観に重大な影響を及ぼすものであり、日本の教育現場でのコミュニ ケーションを重要視した英語教育の実践を考える上で重要な問題であると いえる。さらに、言語の分類はさまざまであり、日本語と英語のリズムの 捉え方には違いがある。白井(2008:20)は「第二言語習得における音声 面は、母語の干渉が非常に強い領域だと考えられている」と述べている。 和泉(2016:89)は、「日本語は拍(mora)を1単位として捉えるが、英 語は音節(syllable)を1単位として捉える」と述べている。例えば,日 本語で MacDonals's は「マ・ク・ド・ナ・ル・ド」と6拍である。一方 で英語では、3音節である。よって、音声要素が異なるので差異が生じる

のは至極当然のことと言える。

この研究結果を鑑みて、日本人英語教師が英語で授業を行わず、日本語だけの文法説明やインプットを実施することで、英語学習者における英語観の諸相に影響を与えるのは明白である。

今後は、小学校英語の必修化により、さらにコミュニケーションのための英語の意識が高まっていくことが予想される。実際、吉田 a (2017: 27) は小学校における英語授業にかんして「外国語によるコミュニケーションを通して体験的に外国語や文化、また、日本と外国語の音声の違いなどに気づき、外国語の基本的な表現に慣れ親しむことが目的」と述べている。よって、小学校英語教育で重要なのは、将来自分の意見を恥じることなく、述べることのできる素地を養成することであると考える。つまり、小学校英語から「英語は英語で教える」を念頭において授業を行うことで、子どもに日本人英語に対する固定概念は払拭され、中学・高等学校・大学でのコミュニケーション主体の英語教育の足場(scaffoldings)が形成されると考える。

5. 研究の目的

20世紀中頃から、外国語教育における動機づけ研究は現在に至るまで、さまざま行われている。しかし、そのほとんどが学習者を対象としたものである。外国語学習者が外国語教員に対し抱く、心象を具体的に調査した研究は決して多いとはいえない。このような状況下で、日本の英語学習者が日本人英語教師の英語に対する諸相を実証的に探ることが急務と考えた。

そもそも、当然のことながら現場の英語教員はただ英語を教えることだけが仕事ではない。具体的には、教科指導、部活指導、徳育指導のこれら重要な3つの柱をこなす必要があると考える。林(2015:156)では、生

徒は教師の一挙手一投足を観察していると述べられている。つまり、教科 指導が確立されていないと、前述の柱のすべてが壊滅的な状況となる可能 性がある。長い教師人生の中で何回かは学級崩壊も経験する(諸富、 2013:164)。それを防ぐ一助となるものが教科指導であると強く考える。 実際、和泉(2009:246)では、子ども達の無限の可能性を狭めてしまっ ているのは教員側の「どうせできないだろう」という考えに起因すると警 鐘を鳴らしている。

本研究の目的は、現在の日本における英米語を知識として学習し習得する教育を批判的に検証し、現場の日本人英語教師が日本人英語学習者の英語観を理解し、英語での授業実践へと繋がる一助となるものと期待する。また、本研究は英語で授業を行うことに焦点を当てているため、話す英語に限定して調査を行った。

以下のリサーチクエスチョン(RQ)を設定し、検証する。

RQ1:日本人英語学習者において、日本人英語教師(Japanese English teachers, 以後 JETs)とネイティブ英語教師(Native-English speaking teachers, 以後 NESTs)に対する英語の好みが英語の理解度へ影響をもたらすのか。

RQ2:日本人英語学習者は、日本人英語教師(JTEs)の英語を揶揄 する対象としてみているのか。

RQ3:日本人英語学習者の英語の好みが、ロールモデルとする英語に 対する意識に違いがあるのか。

6. 調査方法

日本人英語学習者の英語観に対する諸相を明確にするために、質問紙⁽⁷⁾ によるアンケート調査を行った。英語の好みが、学生の英語理解に影響す るかを調べるために、JTEs の英語が好きだと回答した学生と、NESTs の英語が好きだと回答した学生の二つのグループを独立変数とし、それぞれの質問ごとにクロス集計を行い、それぞれに有意な差が見られるかどうか、 χ^2 検定(chi-square test)を行った。

6.1. 手 順

本研究の統計分析は、フリーのデータ解析ツールである RStudio[®] を使用して行った。また、日本人英語が揶揄される対象であると感じる被験者においては、自由記述アンケートを実施し、その理由を回答してもらった。

6.2. 調査協力者

私立大学 5 校(東京都内 3 校・埼玉県内 2 校)に所属し、英語を専攻していない大学生に協力してもらった。英語力は、英語に苦手意識を持っている初級レベルの英語学習者から、TOEIC L&R で 800 点を取得した上級レベルの英語学習者である。彼らを対象に少人数ごと、もしくはオンラインで調査を実施した。なお、調査に先立ち、対象となる学生には書面をもって説明を行い、理解と協力を求めた。また、対面でアンケートに協力してくれた調査協力者には、記入しなくてもそれでもよいこと、評価には関係ないので思っているままを回答してほしいことを調査実施者から口頭で説明した。

また、本調査は125名に実施したが、すべてのデータがそろい分析対象となったのは118名である。調査協力者の英語の好みの状況は図2に示したとおりである。

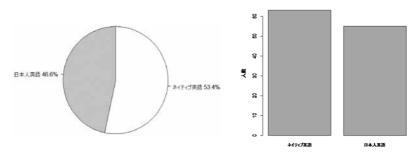


図2 英語の好みの構成比

7. 結 果

7.1. RQ1 に対する結果

英語の好みが、学生の英語理解に影響するかを調べるために、JETsの英語が好きだと回答した学生(Japanese Preference、以後 JP)と、NESTsの英語が好きだと回答した学生(Native Preference、以後 NP)の二つのグループと、日本人教師の英語がより理解度が高いと認識した学生(Japanese Intelligibility、以後 JI)とネイティブ教師の英語を理解度が高いと回答した学生(Native Intelligibility、以後 NI)の二つのグループにおける英語の理解度に差があるかを検証した。その結果、表1のように分かれた。

X1 人間 () 五州 (X) 相 (X) 3 (3) 1 () () () ()			
	JI	NI	総計
JP	53	2	55
NP	55	8	63
総計	108	10	118

表1 英語の理解度の結果によるクロス集計表

ns, p = .10, p > .05

RQ1 にかんしては、表 1 のクロス集計表において、JE を好むが、理解度としては NE が、より理解度が高いと回答した学生のサンプルサイズが 2 名であることを考慮して、フィッシャーの正確確立検定(Fisher's exact test)を参照した。分析の結果、p>05 で統計的に有意な差が認められなかった。すなわち、英語の好みが、英語の理解度に関係はなく、あくまでも理想であって NESTs の英語を理解できているとは限らないことが概観できた。これが有意な値にあるということは、NP と回答した学生の多くが NI と感じることが認められることである。本研究で認められた有意でないという結果から、自らのより理解度が高い英語の種類で英語の好き嫌いを判断していないことが明らかとなった。このような結果は、特に英語を理解できる学習満足度が英語を好きになる結果に導く関係性について再考をうながすものであるといえよう。

次に、収集されたデータの背景にある情報を効果的に伝えるという観点から、データの可視化を行う。本研究のデータは、JIかNIを示す二値データであることから、棒グラフと円グラフを用いることとする。

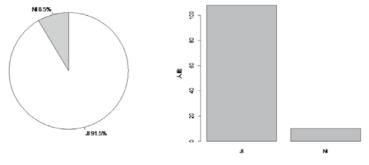


図3 構成比率

 語学習者がJEの方が理解度は高いと回答している。そのため、さらに記述式回答などの質的研究が必要であるといえる。

7.2. RQ2 に対する結果

日本人英語学習者が、JEを揶揄する対象として見ているのかを検証するために、JPとNPの二つのグループと、JEがかっこ悪いと回答した学生(Yes)と、かっこ悪くないと回答した学生(No)を分類し、クロス集計表を行った。結果は下記のとおりである。

	No	Yes	総計
JP	46	9	55
NP	51	12	63
総計	97	21	118

表2 JE は揶揄される対象の結果によるクロス集計表

表 $2 \, \text{の} \, \chi^2$ 乗検定による分析は、漸近有意確率 $p=.70 \, \text{と} \, 5\%$ 水準で、JE のイメージにかんして、有意な差は見られなかった。つまり、英語の好みが JE に対して悪いイメージを顕著に与える原因ではないことが判明した。

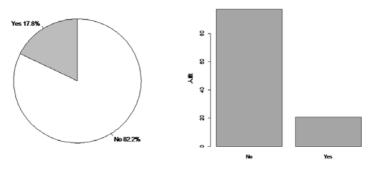


図4 構成比率

ns, χ^2 fit = 0.1446, df = 1, p = .70 p > .05

図 4 から約 82% もの調査協力者が JE を揶揄する対象と認識していないことが明らかになった。この結果から、母集団の割合が基準値に等しいか否かを検証するために二項検定を用いて、さらに解析することとする。本研究では、NP に対する悪いイメージ率を 20%未満にすることを目標とし検定する。分析の結果、p=.64>.05であり、有意な結果は得られなかった。すなわち、NP に対する悪いイメージ率は 0.20 未満とはいえないことが示唆された。また、母悪いイメージ率の 95%信頼区間は .11< 母悪いイメージ率 $\pi<.25$ という結果が得られた。したがって、日本人英語学習者の JE に対する悪いイメージ率を 20%未満に設定することは難解であることが確認された。

本研究では統計学的に有意差は得られなかったが、NPと回答している 学生においても、JE に対して悪いイメージを抱いていないことが多い傾 向であることが認められた。

7.3. RQ3 に対する結果

JETs の英語と NESTs の英語への意識が異なるかを調べるために、参加者には日本人英語教師の英語(Japanese English teachers' English,以後 JETE)と(Native English speaking teachers' English,以後 NESTE)のどちらをロールモデルしたいかについて回答してもらった。その結果、表 3 のように分かれた。

211 3			
	JETE	NESTE	総計
JP	33	22	55
NP	17	46	63
総計	50	68	118

表3 IETE と NESTE の理想度の結果に対するクロス集計表

significant, χ^2 fit = 13.108, df = 1, p = .0002 p < .05

上記の結果をもとに χ^2 検定を行った結果、 χ^2 値 = 13.108、漸近有意確率 p=.0002 と、比較的強い有意な関連が示唆された。そのため、帰無仮説「英語の好みに目標とする英語に差はない」は棄却され、対立仮設「英語の好みに目標とする英語に差がある」を採択した。つまり、この二つの事柄の間には関連性があることが示唆された。JPへの意識と NPへの意識が英語学習者の目標とする英語に影響を与えていることが明らかになった。そこで、より明確にどの項目が期待値よりも統計的に有意に大きく、または小さいかを調べるために、調整済み標準化残差(adjusted standardized residuals)で判断したところ、表 4 のような結果になった。

	JETE	NESTE	
JP	3.620*	- 3.620*	
NP	- 3.620*	3.620*	

表 4 調整済み標準化残差

表 4 から、JP で JETE は p<.05 で有意に多く、JP で NESTE は有意に少ないことがわかる。逆に、NP で NESTE は p<.05 で有意に多く、NP で JETE は有意に少ないことが判明した。換言すると、JP と回答した学生は JETE をロールモデルとし、NP の学生は NESTE を目標とする傾向があることが示唆された。

8. 考察

7.1. の結果により、英語の好みと英語の理解度の高さには有意傾向はみられなかった。しかしながら、NP 学習者においても、大多数が JETE を理解しやすいと感じていることが明らかになった。これにより、日本の英語教育の言語使用の規範を英米語に極端に依存する必要はないといえる。

^{*} p < .05

第二言語習得の重要な研究に、Krashen のインプット仮説(Input Hypothesis)がある。言語習得にアウトプットは特に必要なく、インプットだけで言語習得は促進されるという理論を提唱した。実際、海外に赴任をした家族の子どもが親よりも早く現地の言葉を習得するのは、十分なインプットがあることが要因として考えられる。しかし、ただインプットをすることは、時に言語習得に意味を成さないことがある。ここで重要なのは、学習者が理解可能なインプット(Comprehensible Input)を行うことである。また、Krashen は I+1 という、学習者の能力の少し上のレベルのインプットをすることも重要であると述べている。

次に、図4の構成比により、日本人英語学習者の多くは、JETEを揶揄する対象と考えていないことが看取できる。しかしながら、JETEを揶揄する対象であると回答した調査協力者のほとんどが、自由記述で「発音が悪いから」であると回答をしていた。JETEと NESTE の発音の違いを比較して、JETE を軽視する傾向が認められた。また、そのように回答者のほとんどが比較的英語力の高い学生である傾向がみられた。

RQ3にかんして、JPの学習者とNPの両者の学習者においても、最終的なロールモデルとしては、自らの目標とする英語に対する偏りが認められた。この結果により、NPの学習者にかんしては、英米語に対する規範意識(prescriptivism)が芽生え、NP主義に偏重してしまうことを危惧する。しかし、JPの学習者を増やすことで、これを解決できるとも考えられる。日本の教育現場におけるインプットの種類は、NESTsだけではなく、JETsによるインプットのことである。つまり、JETsが、自ら英語を使用して、授業をすることで、JEのインプットも増え、英語学習者は英語に対して肯定的な英語観が芽生えると考える。よって、インプットのバラエティーが重要であると考える。

9. 教育現場への応用

流暢な英語でネイティブのような発音で授業することは重要であると感じられてきたが、考察の結果、日本人英語学習者の英語の好みに違いはあるものの、JETEが理解しやすいことが明らかになった。先述の通り、本稿の目的は現場において授業内の日本語を抑制し、GTMを批判的に検証することではない。JETsが、自らの英語を使用して豊富なインプットを行う一助となることを期待するものである。言い換えれば、帰納的教授法(Inductive Teaching)を主体的に行うことである。4技能を史上最悪の英語政策と考える阿部(2017、52-53)においても、非英語圏にていわゆる「かたこと」の英語を使用しても説得力のある発言をする人物との出会いについて述べている。

また、Sung (2014) は、香港の高校生における、非母語話者の英語教師と NESTs に対する認識にかんする質的研究を実施した。その結果、それぞれの教師に対して強みと弱みを感じていることが明らかになった。強みにかんしては、NESTs は相互交換的な教授法と発音の正確性であった。比較して、テスト対策と文法の指導法を非母語話者の英語教員の強みであることを認識しているとした。香港のような、外心円⁽⁹⁾ に所属する地域で旧イギリス植民地であることから、日本とは多少の違いがある可能性もあるが、「英語は英語で教える」の実践を考える上で重要な傾向が示唆された。

9.1. 演繹的指導法と帰納的指導法の併用

以下、仮定法を用いて、演繹的指導法(Deductive Teaching)においての日本語による説明と帰納的指導法の英語によるインプットの違いを示す。

演繹的指導法(日本語による説明主体)

英語では、現実世界と非現実世界を分ける概念が存在し、非現実世界の事柄を表す時には仮定法を使用します。仮定法には、仮定法現在、過去、過去完了、未来とありますが、受験で大切なのは仮定法過去と仮定法過去完了です。この2つの構文には公式があるのでその公式を覚えれば簡単です。

(1) 仮定法過去の場合

公式 → If S 動詞の過去形 … ,S 助動詞の過去 動詞の原形

例: If it were not for the sun, no living creatures could exist on the earth.

(2) 仮定法過去完了の場合

公式 → If S had 過去分詞 … S 助動詞の過去 have 過去分詞

例: If he had been a little more careful, the accident would have been avoided.

帰納的指導法 (英語によるインプット主体)

(1) 仮定法過去の場合

If he were here, we could begin the meeting.

If we had more money, we might move to a bigger house.

If I were in your place, I could teach English.

If there weren't so many mosquitoes, it would be a perfect evening.

If it were not raining, we would be able to walk home.



公式 → If S 動詞の過去形 … S 助動詞の過去 動詞の原形

(2) 仮定法過去完了の場合

If Jim had gone to college, he could have gotten a better job.

If he had eaten sensibly as a child, he would have gotten the better teeth.

If he had known, he might have come earlier.

If the operation hadn't been successful, he would have lost his hearing.

If we hadn't spent so much time in Vancouver, we could have gone to Victoria.



公式 → If S had 過去分詞 … .S 助動詞の過去 have 過去分詞

このような、日本語による情報や説明、英語による豊富なインプットが、英語の授業内容を豊かにすると考える。日本の社会は大きな転換期を迎えている、社会が変化すれば教育は変化する。実際、大学入試にも大きな変化が見られるようになった。このような状況下で、教員は教育が変化するに伴って、教育方法や教授法をより発展させることが重要である。Gorsuch(2001)は、英語力に自信を持っている教員は、ネイティブ英語教員と長く接触しているという結果を明らかにした。NESTsをヒューマン・テープレコーダーとしての役割しか与えるのではなく、自分の英語を受容し、豊富なJETsと NESTs の英語によるインプットを与える授業を実施することが必要不可欠である。

10. 結論と今後の展望

英語は今や、世界の国際語としての地位を確立してきた。この現象が進み、日本でも教育だけではなく、社会にも浸透し、英語学習者が年々増加し、逃れることのできない言語となった。しかし、World Englishes (10) などの国家レベルでの英語における変種の研究は多いが、個人や職業にかんする英語の変種に対する具体的な研究は、多いとは言えない。現在の学習指導要領の「標準的な英語」とは「国際共通語としての英語」も含まれるとしている(吉田 b、2017:124)。重要なのは、日本の教育現場において、帰国子女の JETs よりも、留学経験がある JETs も含め、純粋に日本で英語を学習し、習得した JETs の方が割合的に多いのは事実である。「人間はときに、違いを嫌う」(本名、2013:14)。しかし、日本語にも東京弁や関西弁の違いがあるように、英語にも多種多様な表現が存在する。実際に、アメリカ人とイギリス人のネイティブ同士の会話でさえ、ときに誤解が生じる。鳥飼(2011:17)は、英語は共通語であるため、正確さや流暢さだけではなく、「通じる」と「分かりやすさ(Intelligibility)」が重要で

あると述べている。よって、教育現場も多様化している状況下で、JETs にとっても日本人英語学習者の諸相を理解していることで、英語での授業を抵抗なく実施できると考える。現代のJETsは、ひとつの規範を求めてそれに忠実であり、言語運用や正確さに着目し、言葉がいかに使用され、いかに機能するかということを看過している。授業を行う際に、児童・生徒・学生の理解が最も重要であることを念頭に置く必要がある。

最後に、本研究の問題点について述べたい。日本人英語学習者の英語観は、個人が主観的に判断したものであり、過去の経験や教員に対する思いなど、個人的な要因が絡み合っていると考える。本研究では質問紙を用いて量的な研究を行ったが、より詳細な JETs の諸相を分析するには、インタビュー調査を用いた質的研究も必要であると考える。

謝辞

本研究を行うにあたって 125 名の大学生にはアンケート記入にご協力を頂き,感謝申し上げたい。皆様のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

《注》

- (1) 「英語は英語で教える」については卯城祐司『英語で英語を読む授業』 (研究社 2011年)・『英語で教える英文法』(研究社 2014年) などを参 照。
- (2) https://books.google.com/ngrams
- (3) CLTとは、「コミュニケーション志向のアプローチに分類される教授法の1つ。英語のコミュニケーション能力の養成を重視した教授法(米山、2003:49)。
- (4) CLILとは、「言語教育と他教科などの内容教育とを統合した形で行う教育方法の総称である」(和泉、2016:72)。近年、イマージョン教育(Immersion Education)という言葉をよく耳にするが、イマージョン教育では、他科目を英語で実施する言語教育アプローチである。たとえば、数学を英語で実施するなどが挙げられる。一方で、CLILでは英語という教科の中で、様々な内容を取り扱い、英語の4技能を向上させることを目的とする。主に、英字新聞や社会や理科の内容などの題材はよく扱われる(和泉、2016:72)。加えて、池田(2011:4)でCLILの画期的な点に関して、内容(Con-

- tent), 言語 (Communication), 思考 (Cognition), 協学・文化 (Community・Culture) の 4 つの C を統合した点であると指摘している。
- (5) 4技能に警鐘を鳴らした研究には阿部公彦「史上最悪の英語政策 ウ ソだらけの「4技能」看板 ——」(ひつじ書房、2017年)を参照。
- (6) 鳥飼(2011:19)は、両者ともに大きな障害にならないと述べている。
- (7) 質問紙を作成するにあたり、浅野・矢内 (2018)、および内田 (2017) を参考にした。前者は小規模な世論調査を行い、男性のほうが女性より内閣を支持しているかを架空のデータを基に説明した。また、 χ^2 検定を用いて、好みの割合を調査して研究は内田治「R によりノンパラメトリック検定」(オーム社、2017年)を参照。
- (8) Rは、政治学や社会科学分野で広く利用される統計分析のためのプログラミング言語である。誰でも、無料で利用することができるオープンソースな言語である。また、RStudioとはRの総合開発環境(IDE)である(浅野・矢内、2018:45)。
- (9) Kachru は世界の英語を三つの同心円 (Three Concentric Circles of English) として、次のように示した。アメリカやカナダのような英語を母国語としている国を内心円 (The Inner Circle)。次に、バングラディシュやナイジェリアのような英語を第二言語としている国を外心円 (The Outer Circle)と示した。その特徴は、過去に植民地支配を受けてきた影響で、英語がその国の第一言語ではないが、多文化共生社会の状況下で英語に触れる機会が多く、英語が国内で重要な役割を果たしている。最後に、日本や韓国のように英語を外国語として扱っている国は今後も増加する可能性があることから拡大円 (The Expanding Circle)とした。
- (10) 国際英語は、World Englishes と英語では標記される。つまり、複数形で表され、世界には多種多様な英語の種類が存在することを指摘している。 具体的には、アメリカ英語・イギリス英語・インド英語・シンガポール英語・ピジン英語などがある。このような、世界諸国の英語を、Kachru は World Englishes と説明した。

参考文献

浅野正彦・矢内勇生(2018)。『R による計量政治学』東京:オーム社。 阿部公彦(2017)。『史上最悪の英語政策 —— ウソだらけの「4 技能」看板 ——』

東京:ひつじ書房。

Cargile et al. (2006). "Attitude toward African-American Vernacular English: A US export to Japan?" Journal of Multilingual and Multicultural Devel-

- opment, 27 (6), pp. 443-456.
- Galloway, N and Rose, H. (2015)."Introducing Global Englishes" New York: Routledge.
- Gorsuch, G. (2001). "Japanese EFL teachers' perceptions of communicative, audiolingual and yakudoku activities: The plan versus the reality" Education Policy Analysis Archives, 9.
- 池田真ほか (2011). 『CLIL 内容言語統合型学習 原理と方法』東京:上智大学出版.
- 池田真ほか (2016). 『CLIL 内容言語統合型学習 授業と教材』東京:上智大学出版.
- 和泉伸一(2009).『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』東京:大修館書店.
- 和泉伸一(2016). 『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』東京:アルク.
- 行森まさみ (2017). 『国際語としての英語における標準語イデオロギーと規範 主義』東京:立教大学異文化コミュニケーション論集. pp. 79-91.
- 林純次 (2015). 『残念な教員 学校教育の失敗学』東京:光文社.
- 本名信行(2013). 『国際言語としての英語 文化を越えた伝え合い』東京: 冨山房インターナショナル.
- 本名信行ほか (2018). 『世界の英語・私の英語 多文化共生社会をめざして』 東京:桐原書店.
- 神谷雅仁 (2008). 『日本人は誰の英語を学ぶべきか World Englishes という視点からの英語教育』Sophia Junior College Faculty Journal.
- Krashen, S, D. (1981). Second Language Acquisition and Second Language Learning. Oxford: Pergamon Institute of English.
- 久保田章ほか(2018). 「英語の国際化と日本の英語教育」pp. 14-26. 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』東京:大修館書店.
- Loppi-Green, R (2012). "English with an Accent" New York: Routledge.
- 町田智久・内田浩樹 (2015). 『教師の外国語不安の軽減を目指した教員研修の 開発』. 小学校英語教育学会誌 15 巻 01 号. pp. 34-49
- 望月明彦ほか (2018). 「学習指導要領」pp. 27-37. 『新学習指導要領にもとづ 〈英語科教育法』東京: 大修館書店.
- 望月明彦ほか (2018). 「英語教授法」pp. 78-96. 『新学習指導要領にもとづく 英語科教育法』東京: 大修館書店.
- 諸富祥彦(2013). 『教師の資質 できる教師とダメ教師は何が違うのか? 』.

- 東京:朝日新聞出版.
- 文部科学省. (2018). 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』. 東京:開降堂出版株式会社.
- 文部科学省. (2018). 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』. 東京:開隆堂出版株式会社.
- 及川賢 (2017). 『小学校英語教員に関する教員の不安度 ― 教員経験年数,英語指導年数,中学校英語教員免許の有無による違い ――』埼玉:埼玉大学紀要 教育学部 66 (2). pp. 499-512.
- Rose, H and Galloway, N. (2019). "Global Englishes for Language Teaching" Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤敬典 (2017). 「発音指導」pp. 47-50. 『応用言語学から英語教育へ』東京: 上智大学出版.
- Shiroza, S (2014). "WE and Us: The Transplantation and Transformation of the World Englishes Paradigm in the Japanese Context" Unpublished Ph. D. dissertation submitted to University of Tokyo.
- 白井恭弘 (2008). 『外国語学習の科学 第二言語習得論とは何か』東京:岩 波書店.
- 白井恭弘 (2013). 『ことばの力学 応用言語学への招待』 東京:岩波書店
- Seidlhofer, B. (2011). "Understanding English as a Lingua France" Oxford: Oxford University Press.
- 塩澤正ほか (2016). 『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』東京: くろしお 出版.
- 下内充 (2016). 「日本人英語の発音・語彙」pp. 83-117. 『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』東京: くろしお出版.
- Sung, C, C, M. (2014). "An Exploratory Study of Hong Kong Students' Perceptions of native and Non-Native English-Speaking Teachers in ELT". Asian Englishes, pp. 32-46.
- 鳥飼玖美子(2011). 『国際共通語としての英語』東京:講談社.
- 卯城裕司(2011). 『英語で英語を読む授業』東京:研究社.
- 卯城裕司(2014). 『英語で教える英文法』東京:研究社.
- 卯城裕司ほか (2018). 「英語教員」pp. 52-64. 『新学習指導要領にもとづく英語 科教育法』東京: 大修館書店.
- 米山朝二 (2003). 『英語教育指導法辞典』東京:研究社.
- 吉田研作 a (2017). 『小学校英語教科化への対応と実践プラン』 東京:教育開発研究所.

吉田研作 b (2017). 「これからの日本の英語教育の方向性」pp. 122-135. 『応用言語学から英語教育へ』東京:上智大学出版.

(原稿受付 2020年10月26日)

付録1. 質問紙

日本人英語教師に関するアンケート調査

次の質問は、日本人英語学習者が日本人英語教師に対する考え方を計る質問です。この場合、日本人英語教師というのは、今まで皆さんが中学校・高等学校・大学で教わってきた英語教師を指します。あまり考えすぎず、それらの先生方のことを思い出して、それぞれの項目に当てはまる方を選んで○をつけてください。また、研究以外の目的で、データを使用しないことを誓います。名前や所属が使用されることもありません。

回答者 男性・女性

- (1) あなたは、日本人英語教師のしゃべる英語とネイティブの英語どちらが好きですか。 日本人・ネイティブ
- (2) あなたは、日本人英語教師のしゃべる英語とネイティブの英語どちらが理解しやすいですか。

日本人・ネイティブ

(3) 日本人の英語とネイティブの英語の違いは分からない。

はい・いいえ

(4) 今まで、日本人英語教師の英語の授業は、ほとんど日本語であった。

はい・いいえ

(5) 日本人の英語はカッコ悪い。

はい・いいえ

(6) 「はい」と答えた場合、何故ですか。

(

(7) 現実的に考えて、どちらのようにしゃべれるようになりたいですか。 習ってきた日本人英語教師・習ってきたネイティブ英語教師

Problems in Describing Tag Questions in English:

their Syntax, Phonetics and Semantics

Tsutomu WATANABE

Abstract

99 new examples of tag questions from the Archers (2020) have been added to the previously collected examples from the Archers (2016, 2018). The total number of examples now amounts to 284. The larger collection has provided two improvements on the description of tag questions. The tone of question tags has been added to Tottie and Hoffmann's (2006) syntactic classification of tag questions. The new classification will come in descending order as follows: (1) [positive + negative; fall]; (2) [negative + positive; fall]; (3) [positive + negative; rise]; (4) [negative + positive; rise]; (5) [positive + positive; rise]. 12 categories have been proposed to classify tag questions in terms of both syntactic and phonetic combinations. The phonetic combinations describe the tone of anchors as well as that of question tags.

In the 99 examples the responses to question tags are analyzed, which are divided into 50 coherent responses and 49 incoherent responses. The 50 coherent responses provide 28 literal responses: 18 cases come with "yes" and 10 cases come with "no".

14 instances of constant polarity tag questions have been observed. Three of them use an exceptional falling tone in the question tag. None of the 14 examples do not seem to sound sarcastic. The observation may go against what is written in some reference and learner's grammars.

Keywords: anchor, coherent, incoherent, response, question tag, tone

Table of Contents

- 1. Introduction
- The description of tag questions in the previous studies: their limitations
- 3. The necessity of corpus study
- 3.1. Written corpus
- 3.2. Phonetic corpus
- 4. The Archers
- 4.1. The Archers (2020)
- 4.2. The procedure of collecting data
- 4.3. Twelve categories of polarity and intonation
- 4.3.1. Positive rising anchor + negative falling tag
- 4.3.2. Negative rising anchor + positive falling tag
- 4.3.3. Positive rising anchor + negative rising tag
- 4.3.4. Negative rising anchor + positive rising tag
- 4.3.5. Positive falling anchor + negative falling tag
- 4.3.6. Negative falling anchor + positive falling tag
- 4.3.7. Positive falling anchor + negative rising tag
- 4.3.8. Negative falling anchor + positive rising tag
- 4.3.9. Positive rising anchor + positive rising tag
- 4.3.10. Positive falling anchor + positive rising tag
- 4.3.11. Negative falling anchor + negative falling tag
- 4.3.12. Positive falling anchor + positive falling tag
- Results and discussion.
- 5.1. Statistics on the syntax and the phonetics of tag questions
- 5.2. The tone of anchor clauses
- 5.3. Classifying tag questions in terms of polarity combinations and tones
- 5.4. Pragmatic classification of tag questions
- 5.4.1. Tottie and Hoffmann's (2006, 2009) six categories
- 5.4.2. Responses following a tag question
- 5.4.3. Coherent and incoherent responses
- 6. Concluding remarks

1. Introduction

English has a grammatical structure called tag questions. The following four examples¹ are quoted from a textbook² published in Japan.

- ① He was in the 12th grade last year, wasn't he? (Yasuda 1971: 9)
- ② He was in the 12th grade last year, wasn't he? (Yasuda 1971: 9)
- 3 You're not a student, are you? (Yasuda 1971: 31)
- 4 You're not a student, are you? (Yasuda 1971: 31)

The term "tag questions" can be ambiguous. I will take up the example in ① as an illustration. I will follow Huddleston and Pullum (2002: 891) and will call the [He was in the 12th grade] part the "anchor". I will follow Thompson and Martinet (1986: 113) and call the [wasn't he] part a "question tag". I will follow Sinclair (1990: 433) and will name the whole structure a "tag question".

As Huddleston and Pullum (2002: 891) do, the four question tags in the examples in ① to ④ are called reversed polarity tags because the polarity of the anchors and the question tags are reversed. In other words, when the anchor is positive, the corresponding question tag is negative whereas when the anchor is negative, the corresponding question tag is positive.

In an EFL context only the reversed polarity tags are usually³ discussed. Yet, more comprehensive reference grammars also take up the constant polarity tags as in the following examples:

A: She likes her granddad, does she? (Biber et al.1999: 208)B: Yeah.

(6) %He isn't ill, isn't he? (Huddleston & Pullum 2002: 892)

We should note that Huddleston & Pullum (2002: 892) state that many speakers will reject examples like 6 where both the anchor and the question tag come in a negative form.

2. The description of tag questions in the previous studies: their limitations

The description of tag questions in school grammars, reference grammars and the introductory books on English phonetics focuses on the syntactic combination of an anchor and the question tag and the intonation of question tags as I have briefly discussed in the introduction. I have been doing a research on tag questions in English since Watanabe (2013 a). I have found some problems when we study tag questions. I'm going to discuss three major problems.

The first problem is what the expression "tag question" refers to. Some literature does not distinguish an anchor clause and the question tag but only call the whole structure a tag question. Since Watanabe (2014) I have argued that an anchor clause and the question tag must be independently named, in the manner of Huddleston and Pullum (2002), to make it clear which part is discussed.

The second problem is where the example sentences come from. The examples given in EFL materials, grammars, introductory phonetics books, if they are written by native speakers, will have been produced by themselves. They offer good examples of tag questions from a prescriptive viewpoint. But, unfortunately, the examples may not reflect how they are used in actual daily context. Tottie and Hoffmann (2006, 2009) conducted an extensive corpus research and provided various observations on how tag questions are employed. One of the most amazing findings will be the observation that British English uses about nine times as many tag questions as American English does. Yet, as

they⁴ admit the corpus they used do not include phonetic data.

The third problem is whether the phonetic descriptions in technical introductions to English phonetics will reflect the actual frequency in the daily use of tag questions. For instance, O'Connor & Arnold (1973) describe the rhythm and the intonation of both the anchor and the question tag in tag questions. In Watanabe (2014: 16-22) I analyzed 143 examples of tag questions in O'Connor and Arnold (1973). Since it is usually the case that only the tone of the question tag is described, I checked which tone an anchor clause would take. I learned that out of 143 anchor clauses 78 instances took a falling tone whereas 65 instances took a rising tone. Will the statistics reflect the actual distribution in the daily use of the language?

3. The necessity of corpus study

3.1. Written corpus

Tottie and Hoffmann (2006) conducted a survey of 10.36 million words in the British National Corpus and 5 million words in Longman Spoken American corpus. They presented us with the statistics on how the canonical tag questions are distributed in the use of prototypical tag questions as illustrated in the examples in ① to ⑥ in section 1.

I summarized what Tottie and Hoffmann (pp.289-291) discuss about the possible combinations of an anchor and the question tag in Watanabe (2014: 12), where I converted their bar chart into a table. I will quote it below as table 1.

	positive + negative	negative + positive	positive + positive	negative + negative
American	69%	27%	4%	0%
British	75%	17%	8%	2 instances

Table 1

Thanks to Tottie and Hoffmann's (2006) research we can tell how the distribution of four kinds of tag questions changes according to the difference in syntactic combinations. Among the four possible combinations of an anchor clause and the question tag, the most frequent type is [positive + negative], followed in descending order by, [negative + positive], [positive + positive], and [negative + negative]. It should be noted that the statistical tendency is the same in both American and British English.

At the end of section 1 I have referred to the syntactic combination of [negative + negative] and introduced Huddleston and Pullum's (2002) observation that the pattern is rejected by many native speakers referring to the following example:

7 [= 6] "He isn't ill, isn't he? (Huddleston & Pullum 2002: 892)

The percentage mark preceding the sentence seems to indicate that it is not fully acceptable. Yet, Watanuki et al. (2008: 70) take up an example of the [negative + negative] combination as follows:

- A: So he wouldn't come, wouldn't he?
 - B: No. He said he was too busy.

How can we interpret this apparent discrepancy in description? The extensive statistical study of corpus by Tottie and Hoffmann allows us to declare that the [negative + negative] combination is possible but very rare.

The fact that a particular grammatical phenomenon is described in a grammar does not guarantee that it is frequently used in the daily use of a language. We should bear in mind that a grammarian may discuss a particular grammatical phenomenon because it is rare but interesting.⁵

3.2. Phonetic corpus

Tottie and Hoffmann (2006:302) state as follows:

Further research using material that is annotated for intonation is likely to provide more conclusive answers about the interplay between the form and the function of tag questions.

We do have a technical phonetics books annotated for intonation such as Kingdon (1958) and O'Connor and Arnold (1973). Even though the examples in the books are provided by renowned phoneticians, they are not provided based on corpus research.

Since Watanabe (2013b), I have been collecting phonetic examples from a British radio drama, *the Archers*. I will briefly discuss why I felt the need to collect actually spoken examples.

In Watanabe (2014) my question was two-fold: Will some anchor clauses of tag questions really end in a rising tone? Secondly, if that is the case what is the proportion between rising anchors and falling ones?

In Watanabe (2017) I collected 120 examples from the drama and enlarged the phonetic corpus. The enlarged corpus provided us with the frequency in the combination of an anchor and the question tag with an accompanying tone. If we don't take the intonation of question tags into account, we will be using such syntactic categories of [positive + negative], [negative + positive], and [positive + positive] as represented by Tottie and Hoffmann. I subdivided the three categories into five using the phonetic observation of question tags I obtained from the radio drama. I counted the frequency of the five categories. The most frequent type of tag questions was (1) [positive + negative; fall], followed, in descending order, by (2) [negative + positive; fall], (3) [positive + negative; rise], (4) [positive + positive; rise], and (5) [negative + positive; rise]. We seemed to have obtained a counter-intuitive observation in two respects: firstly, the constant polarity category [positive + positive;

rise] comes fourth in ranking; secondly, the reversed polarity category [negative + positive; rise] comes fifth in ranking. In Watanabe (2019) 65 newly collected data changed the ranking picture. The category [negative + positive; rise] comes fourth in ranking and category [positive + positive; rise] comes fifth in ranking. I consider we need to collect more examples to get a stable statistical tendency.

In Watanabe (2019) the motivation behind collecting data was to reveal that a tag question is not always used to elicit responses from the other party as illustrated in the following example:

(9) A: You're June Smith, aren't you? (Marks 2007: 103)B: No, I'm Jane Smith.

In the following sections I am going to present the data I have collected this time. And then I will compare what I have found with the major problems addressed in Watanabe (2014, 2017, 2019).

4. The Archers

4.1. The Archers (2020)

Before I begin to present the data I am going to explain a little bit about why I chose the Archers as a corpus. According to the BBC website the broadcast of the Archers began in 1950. It is a radio soap opera set in the fictional English Village of Ambridge. There have been 18740 episodes broadcast so far. The website also comments that "Listeners are occasionally intrigued to hear topical events reflected in the evening's broadcast". Actually, while I was collecting data this time, I learned that the expression "BMB money" stood for "Bit-Money Token" in the broadcast on 23 April 2020. I heard one of the two ladies referring to [nɔɪn neɪl] in the broadcast on 27 April 2020. It turned out, by research, to be *Nine Nails*, which seems to be a popular novel written by Nicole Cirone and published in 2019. I would assume that the drama⁶

represented the current English of England in terms of pronunciation, usage, and trendy topics.

4.2. The procedure of collecting data

I have obtained 22 sessions of the Archers available from the BBC's website and have collected 99 examples from the radio drama, of which 85 examples are those of reversed polarity tag questions while 14 examples are those of constant polarity tag questions. All the data are presented in the appendix of this article. For the purpose of acknowledging the data source, each example is accompanied by the broadcast date, and the minute and second of when a particular dialogue is uttered. The speaker's gender is indicated by F or M at the beginning of each line.

Wells (2006) is assumed for the rhythmic notations. The notations are illustrated with the examples to be discussed in 4.3. The indicated rhythms are as follows: (a) a rhythmic beat as in 'haven't, 'much, and 'help in example (5), which is represented by a short vertical line placed as a superscript on the left of the word in question; (b) the location of a nuclear accent as in colour and isn't in example (1), which is shown by an underline; (c) a falling nuclear tone as in \int in example (1) and \have in example (5), which is indicated by a slash going down from left to right; (d) a rising nuclear tone as in \has has has have in example (7), which is indicated by a slash going up from left to right; (e) a fall-rise nuclear tone as in \hat Easter in example (5), which is shown by the combination of the falling and rising slashes. The rhythmic notations are given only for the examples of tag questions.

4.3. Twelve categories of polarity and intonation

In Watanabe (2017: 152) I proposed to classify the collected examples from the Archers (2016) into "ten types" from two aspects: (a) syntactic combination of an anchor clause and the question tag; (b) their respective nuclear tones. In Watanabe (2019: 164) I declared that I would employ the "ten types" for the classification of the examples col-

lected from the *Archers* (2018). Yet, on closer scrutiny of my own data I found later that I had obtained "twelve types" in the data collected from the Archers (2018). I would like to make a revised proposal of employing "twelve categories" to analyze tag questions.

The twelve categories are as follows:

- ① positive rising anchor + negative falling tag;
- 2 negative rising anchor + positive falling tag;
- 3 positive rising anchor + negative rising tag;
- 4 negative rising anchor + positive rising tag;
- 5 positive falling anchor + negative falling tag;
- 6 negative falling anchor + positive falling tag;
- (7) positive falling anchor + negative rising tag:
- ® negative falling anchor + positive rising tag;
- 9 positive rising anchor + positive rising tag;
- 10 positive falling anchor + positive rising tag;
- ① negative falling anchor + negative falling tag;
- 12 positive falling anchor + positive falling tag.

The categories from ① to ⑧ are called reversed polarity tag questions with 85 cases in total whereas those from ⑨ to ⑩ are named constant polarity tag questions with 14 cases.

I am going to take up an example⁷ to discuss each category. All the 99 examples are presented in the appendix at the end of this paper. The examples are shown, grouped into 12 categories. Each example is headed by a circled number which indicates the category.

4.3.1 Positive rising anchor + negative falling tag

In example (1) the female speaker is trying to call attention to the nail care she is receiving. She seeks an agreement from her husband but he cannot grasp what is going on.

(1) ① [reversed polarity]

M: I don't know. What's going on?

F: Hello, Robert. What do you think?

M: Can't you copy here?

F: 'Great Vcolour, | \isn't it? (It's) called one in vermillion.

(The Archers 2 April 2020: 5:07)

M: What?

4.3.2. Negative rising anchor + positive falling tag

In example (5) F_1 is blaming her own behavior and is trying to elicit agreement. F_2 mildly denies her claim and consoles her.

(5) ② [reversed polarity]

F₁: I feel terrible. (I) 'haven't been 'much 'help for this $\vee \underline{Eas}$ ter, $| \underline{have} |$ I? (The Archers 8 April 2020: 8:38)

F₂: Look! It's not a problem.

4.3.3. Positive rising anchor + negative rising tag

In example (7) M_2 tries to get confirmation of his knowledge and M_1 gives it.

(7) ③ [reversed polarity]

M₁: The place is hemorrhaging money at the moment.

 M_2 : The 'health club's re\opened there, | \(\frac{hasn't}{a} \) it?

(The Archers 6 April 2020: 1:42)

M₁: Yeah. But small bearing comparison.

4.3.4. Negative rising anchor + positive rising tag

In example (11) the male speaker tries to confirm his belief. The female speaker offers him confirmation.

(11) ④ [reversed polarity]

M: 'Not taking up Vcricket, | /are you? (The Archers 15 April 2020: 3:50)

F: No, Roy. I've got too much else to worry about.

4.3.5. Positive falling anchor + negative falling tag

In example (51) M_2 expresses his own relief that his behavior has turned out right, not necessarily seeking an agreement from M_1 . M_1 does not respond to M_2 's word but develops the conversation in the direction he wants.

(51) ⑤ [reversed polarity]

M₁: And the Andy. He asked if I had a word with the nurses. Say, no visitors till he feels better unless it's some brave wants to see.

M₂: Oh. 'Good 'job I 'didn't 'visit him to\day, | \innit?

(The Archers 8 April 2020: 11:38)

M₁: You were at the hospital again today.

M₂: Yeah. Seeing Linda.

The question tag "innit" is uttered by M_2 . Biber et al. (1999: 210) state that the expression is used in conversational British English. They comment that it is derived from a regular question tag "isn't it". M_2 's words will be paraphrased as " (It is a) good job (that) I didn't visit him today, isn't it?"

4.3.6. Negative falling anchor + positive falling tag

In example (45) the male speaker tries to elicit sympathy from the female speaker. On the contrary, she begins to criticize him by putting another tag question.

(45) ⑥ [reversed polarity]

M: The 'trouble is there's 'nothing to get $\underline{\text{up}}$ for, $|\underline{\text{vis}}|$ there?

(The Archers 1 April 2020: 1:06)

F: You're 'missing \work, | \aren't you?

M: Yeah.

4.3.7. Positive falling anchor + negative rising tag

In example (74) the male speaker seeks an agreement for his statement. And the female speaker agrees with him.

(74) (7) [reversed polarity]

M: Don't hide your light under a bushel. 'That's \biblical, | /isn't it? (The Archers 20 April 2020: 6:14)

F: It is Yes

4.3.8. Negative falling anchor + positive rising tag

In example (80) the female speaker tries to confirm his belief but the male speaker denies it.

(80) 8 [reversed polarity]

M: I've just had a text. Freddy's Art project is finished at last.

F: Oh, fantastic. You 'haven't \seen it, | /have you?

(The Archers 15 April 2020: 1:56)

M: That was a picture, yeah.

4.3.9. Positive rising anchor + positive rising tag

The example for the category [positive rising anchor + positive rising tag] has not been obtained from the Archers (2020). I will quote an example in the Archers (2016) from Watanabe (2017: 155). In example (114) speaker A tries to get an agreement for his idea. The speaker B agrees with him. I commented in Watanabe (2017: 154) that "speaker A seems to be using two rising tones for politeness because he is aware that speaker B is in the position of making decisions."

(114) 9 [constant polarity]

A: Ah, we can give him a few /days, |/can we? (M)

(The Archers 12 July 2016; 11:54)

B: Hum. I expect so. (M)

A: Good.

As we have seen in table 1 at the beginning of 3.1., a certain number of constant polarity tag questions where both an anchor and the question tag come in a positive form is expected in terms of syntax. When it comes to phonetics, the anchor is supposed to assume a falling tone and the question tag, a rising tone according to Alexander (1988: 258) and Quirk et al. (1985: 812). Category (9) seems to be exceptional in this respect. The tone of a question tag is described as taking on a rising tone in Huddleston and Pullum (2002: 895), Quirk et al. (1985: 812), Watanuki (2008: 70), Wells (2006: 49). Therefore, category (9) can be considered as a standard case on this point.

4.3.10. Positive falling anchor + positive rising tag

In example (86) the female speaker expresses her mild irritation toward the male speaker's proposal. The male speaker does not seem to withdraw his proposal.

(86) (10 [constant polarity]

M: Shall I open some wine?

F: Oh. 'That's your i'dea of \help, | /is it? (The Archers 5 April 2020: 9:42)

M: It helps me.

Category [®] is the prototype of constant polarity tag questions in that an anchor assumes a falling tone and the question tag takes on a rising tone.

4.3.11. Negative falling anchor + negative falling tag

The example for the category [negative falling anchor + negative falling tag] has not been obtained from the Archers (2020). I will quote an example in the Archers (2018) from Watanabe (2019: 191). In exam-

ple (64) the male speaker expresses a sympathy toward what the female speaker is going through and the female speaker accepts it.

(64) ① [constant polarity]

F: It's very kind of you. I'm grateful.

M: No more 'human be\<u>hav</u>ior, | \<u>isn't</u> it? When someone's under the weather.

F: Oh, I probably don't deserve this. Not after everything I've put you through.

M: Probably not. (The Archers 1st June 2018; 6:20)

Category ① is exceptional in two respects: firstly, both an anchor and the question tag come in a negative form; secondly, the question tag takes on a falling tone, not a rising one.

4.3.12. Positive falling anchor + positive falling tag

In example (99) F_1 strongly seeks an agreement for her belief. But F_2 does not agree with her.

(99) ② [constant polarity]

 F_1 : You are my sister and I love you. We 'want our 'kids to be \strong, | \do we?

(The Archers 27 April 2020: 11:47)

F₂: No. You say "nine nails".

F₁: They need to be independent.

Category ② represents a standard case syntactically in that both an anchor and the question tag come in a positive from. In terms of phonetics the falling tone of an anchor is expected as we have seen in 4.3.9. The falling tone of a question tag seems to be exceptional.

5. Results and discussion

In section 5 I would like to discuss how my survey will answer the questions I raised in section 3.2.

5.1. Statistics on the syntax and the phonetics of tag questions

Here I am going to present what I have found about the examples of tag questions from two aspects: (a) the polarity combinations of anchors and question tag; (b) the tones of anchors and question tags. I will summarize the findings of the survey in the form of tables as follows.

Table 2 Tag Questions with Rising Anchors in the Archers (2020)

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	3	3
Negative + Positive	3	5
Positive + Positive	0	0
Total	6	8

Table 3 Tag Questions with Falling Anchors in the Archers (2020)

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	31	5
Negative + Positive	27	8
Positive + Positive	3	11
Negative + Negative	0	0
Total	61	24

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	34	8
Negative + Positive	30	13
Positive + Positive	3	11
Negative + Negative	0	0
Total	67	32

 Table 4
 Tag Questions with Rising/Falling Anchors in the Archers (2020)

Now, what can we learn from the data above? How will they answer the three major questions I raised in section 3.2? The first question concerns the tone of anchor clauses. The second question is about the statistical distribution of five categories in tag questions. The third question is related to the function of tag questions; will they always elicit responses from the other party?

5.2. The tone of anchor clauses

In Watanabe (2014) I found that 143 examples of tag questions in O'Connor and Arnold (1973) were grouped into two kinds: those with anchors with a rising tone; those with anchors with a falling tone. The rising anchors comprise 65 instances (45.5%) whereas the falling anchors make up 78 cases (54.5%). O'Connor and Arnold seemed to imply that there was not a big difference in the distribution of both types of anchors. I wondered if it was the case and collected 24 actual examples of tag questions from the Archers (2014). It turned that the rising anchors contained six cases (25%) while, by contrast, the falling anchors included 18 cases (75%). The cases of rising and falling anchors do not seem to be evenly distributed. In Watanabe (2017) I collected 120 examples of tag questions from the Archers (2016). The rising anchors contained 27 cases (22.5%) whereas the falling anchors included 93 cases (77.5%). From the two corpus-based researches of mine it would seem that about a quarter of tag questions had a rising anchor and the

remaining three quarters of tag questions took a falling tone. In Watanabe (2019) I collected 65 examples of tag questions from the Archers (2018). The rising anchors contained eight cases (12.3%) whereas the falling anchors included 57 cases (87.7%). In this research I have collected 99 examples of tag questions from the Archers (2020). The rising anchors constitute 14 cases (14.1%) while the falling anchors make up 85 cases (85.9%).

If we combine the statistics obtained in the Archers (2016, 2018, 2020), I consider that we can get a more balanced picture of how rising and falling anchors are distributed. I have collected 284 examples of tag questions so far in total. The rising anchors contain 49 cases (17.3%) whereas the falling anchors include 235 cases (82.7%). The rising anchors do not occupy a quarter of the total cases of tag questions. Yet, I think we could safely assert that the distribution of the rising and the falling anchors in O'Connor and Arnold (1973) does not represent the actual frequency of falling and rising intonation in the daily use of tag questions.

5.3. Classifying tag questions in terms of polarity combinations and tones

Now I would like to discuss the second question: how can we classify tag questions in terms of syntax and phonetics? The tag questions can be classified based on the polarities of anchors and question tags into three types: [positive + negative], [negative + positive] and [positive + positive], as represented by Tottie and Hoffmann (2006). I am excluding the exceptional [negative + negative] type here. In Watanabe (2017) I proposed to make the classification of tag questions more precise by taking the tones of question tags into consideration. Based on the data obtained from the Archers (2016), I got the frequency order as follows: (1) [positive + negative; fall], (2) [negative + positive; fall], (3) [positive + negative; rise], (4) [positive + positive; rise], and (5) [negative + positive; rise]. I pointed out in section 3.2. that the observation that [positive + positive; rise] comes fourth in ranking

seemed to be counter-intuitive because Tottie and Hoffmann (2006: 289) observe that, in the total instances of tag questions of theirs, the [positive + positive] type comprises four percent in American English and eight percent in British English. The type is described as least frequent in ranking except for the [negative + negative] type.

The data obtained from the Archers (2018) in Watanabe (2019) changed the ordering of five categories; the order of the first three categories remained the same but the category [negative + positive; rise] came in fourth and the category [positive + positive] came in fifth.

The most recent data obtained from the Archers (2020) in this research is provided in table 4 above. The relevant five cells are highlighted. We get the frequency order as follows: (1) [positive + negative; fall] (34 instances); (2) [negative + positive; fall] (30 instances); (3) [negative + positive: rise] (13 instances); (4) [positive + positive; rise] (11 instances); (5) [positive + negative; rise] (8 instances). The frequency order we have got is different from that in Watanabe (2017: 158) and that in Watanabe (2019: 166).

If we combine all the statistics I have obtained in the Archers (2016, 2018, 2020), we will get the following table:

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	128	34
Negative + Positive	66	28
Positive + Positive	4	23
Negative + Negative	1	0
Total	199	85

Table 5 Tag Questions with Rising/Falling Anchors in the Archers (2016, 2018, 2020)

We get the frequency order as follows: (1) [positive + negative; fall] (45.9%; 128 instances); (2) [negative + positive; fall] (23.7%; 66 instances); (3) [positive + negative; rise] (12.2%; 34 instances); (4) [negative + negative; rise]

tive + positive; rise] (10.0%; 28 instances); (5) [positive + positive; rise] (8.3%; 23 instances). The frequency order of syntactic and phonetic combinations of tag questions we have gained from 279 examples, in which five exceptional cases are excluded, agrees well with that I got in Watanabe (2019). The first four rankings are occupied by reversed polarity tag questions and the last slot is filled up by constant polarity tag questions. The last ranking of [positive + positive; rise] can be predicted from Tottie and Hoffmann (2006: 290), the summary of which is presented as table 1 in section 3.1.

5.4. Pragmatic classification of tag questions

Now I would like to go on to the third question: do tag questions always elicit responses from the other party?

5.4.1. Tottie and Hoffmann's (2006, 2009) six categories

The different function of a falling or a rising tone of question tags is a common topic taken up in the standard works on English grammar and phonetics such as Huddleston and Pullum (2002), Quirk (1985), and Wells (2006). The falling tone is used for getting an agreement from the listener in a conversation whereas the rising tone is employed to get an agreement from the listener or to ask a real question. In either case it seems to me that the speaker is trying to elicit information or responses. Is it really the case?

Biber et al (1999: 208) characterize "the main function of tags" as "eliciting confirmation or agreement rather than eliciting information." They argue that eliciting confirmation or agreement will result in involving the addressee in the conversation. To put it simply, their argument implies that the function of question tags is not for a speaker to draw information in the form of "yes" or "no" from the addressee.

Tottie and Hoffmann (2006: 300-301) propose six categories to classify tag questions from the pragmatic functions they perform. The categories are as follows: (1) informational, (2) confirmatory, (3) facilitating,

- (4) attitudinal, (5) peremptory, and (6) aggressive. Tottie and Hoffmann (2009: 140-141) improve their discussion to set up proper categories to classify tag questions which will help to correlate polarity types with pragmatic categories. I will quote their concise examples. The numbers following the notation of the functions indicate the percentage that each use of functions occupies in their data. The italic notations are theirs
- (1) informational (4%)
- ② You're getting paid for this, *are you*? (Tottie and Hoffmann 2009: 141)
- (2) confirmatory (37%)
- ③ I don't need a jacket, do I? (Tottie and Hoffmann 2009: 141)
- (3) facilitating / facilitative (36%)
- (4) Teacher: Right, it's two, *isn't it*? (Tottie and Hoffmann 2009: 141) Pupil: Mm.
- (4) attitudinal (18%)
- (5) ...she'll be in trouble, *won't she*, she often gets her own drinks anyway...

 (Tottie and Hoffmann 2009: 141)
- (5) peremptory (1%)
- ⑥ I wasn't born yesterday, was I? (Tottie and Hoffmann 2009: 141)
- (6) aggressive (1%)
- 17 Ernest: ...I put six eggs on.

Peggy: you put what?

Ernest: put six eggs on didn't I? (Tottie and Hoffmann 2009: 141)

Tottie and Hoffmann (2009: 140-141) assert that "informational" and "confirmatory" can be put together as a "new confirmatory" category as

there are very few examples of purely informational tag questions. Accordingly, the confirmatory category or an "information-seeking" category in a large sense occupies 41% in their data. The purely informational category makes up only 4% and even when we enlarge it to include the confirmatory category, it is short of a majority. We can expect that most of the tag questions will not be used to get a "yes" or "no" response but for other purposes.

5.4.2. Responses following a tag question

In Watanabe (2019: 168-172) I paid attention to the responses following a tag question. Tottie and Hoffmann offered us six concise and intriguing categories to classify tag questions from a pragmatic viewpoint. I tried to apply their classification to my own data. It dawned on me that in order to assign a particular category to a tag question I needed to read the preceding and the following context of the question. I proposed to divide the responses coming after the tag questions into two kinds depending on whether a response is coherent or incoherent to the words uttered by the preceding speaker.

A coherent response can be classified into two kinds: a "yes-response" and a "no-response". It is to be noted that a "yes-response" may not include a literal "yes" and a "no-response" may not contain a literal "no". A positive or a negative response is often revealed by other expressions. The substitutive expressions for "yes" reported in Watanabe (2019: 171) are as follows: "It certainly did," "Of course she can," "Ok," "Right," "Oh, of course," and "That's right". The substitutive expressions for "no" reported in Watanabe (2019: 171) are as follows: "Not right," "I suppose not," and "Well, probably not".

An incoherent response is a case where a verbal response following the tag question do not seem to constitute a direct answer to it. I argued in Watanabe (2019: 168-170) that I was able to observe five kinds of incoherent responses as follows:

(a) A case where the first speaker poses a question and goes on to

make his own comment before the second speaker gets a chance to make a response;

- (b) A case where the scene changes in a drama or the drama itself is concluded by a speaker's tag question;
- (c) A case where the second speaker tries to change a topic addressed by the first speaker or to develop a conversation initiated by him;
- (d) A case where the second speaker reveals his ignorance to the first speaker's question;
- (e) A case where a tag question is answered by another tag question.

In 65 examples of tag questions in the Archers (2018) the coherent responses comprise 37 cases (56.9%) and the incoherent ones constitute 28 cases (43.1%). The distribution of the coherent responses is a little bit larger than that of incoherent ones.

5.4.3. Coherent and incoherent responses

In this section I am going to classify 99 newly collected examples of tag questions obtained from the Archers (2020) into coherent or incoherent cases. I am going to collect additional substitutive expressions for a literal "yes" or "no" for coherent cases. I would like to find out if the five types of incoherent responses set up tentatively in Watanabe (2019) is appropriate.

The 99 examples are distributed in coherence as follows: the coherent responses¹⁰ comprise 50 cases (50.5%); the incoherent responses¹¹ constitute 49 cases (49.5%). The frequency of occurrence of both responses is almost the same.

Now I would like to look into what kind of expressions are employed in 50 cases of coherent responses. The responses with a literal "yes" add up to 18 cases while the responses with a literal "no" amount to 10 cases.

We have a wide variety of substitutive expressions. The substitu-

tive expressions for a positive response are as follows: "Um," "I have to," "Okay," "Sure," "They do," "Oh, I think she might have seen somewhere," "Ambridge is a winning team," "You could make it work," "Darling, you could surely for a while," "I may quite a bit," "You are perfectly well," and "absolutely".

The substitutive expressions for a negative response are as follows: "Oh, it's fine, Roy," "It's fine for now," "Useful. But we can do without," "There was nothing to hang in there' aura," "Oh, but I was thinking of bringing her bed downstairs and," "That's my Lindie," "Exactly," "I wasn't trying to be ruthless," and "Um".

A grammatical form or the meaning of an expression can tell if a response implies a positive or a negative answer. Let us look at two examples reported in Watanabe (2019: 171). "It certainly did" will be interpreted as "yes" because the sentence is in a positive form and an adverb "certainly" reinforces the interpretation. "I suppose not" will be understood as "no" because an adverb "not" provides the negative interpretation.

The examples obtained from the Archers (2020) offer us more variety than the Archers (2018). We need to interpret the context as well as the expression in question. I'd like to take up two examples from the Archers (2020).

The dialogue (66) below is an example of a positive response.

(66)

F: Sign him up, Harrison.

 M_i : I'd love to, ma'am. $\vee Only, \mid$ you're not 'living in $\setminus \underline{Am}$ bridge, $\mid \setminus \underline{are}$ you?

(The Archers 21 April 2020: 11:58)

M₂: I may quite a bit.

The female is looking for a new member for the local cricket team. She wants M_2 to join the team. She urges M_1 to let M_2 join. The team

members have to live in Ambridge. So, M_1 asks M_2 if he lives there. M_2 tries to give a positive response. M_2 's words can be paraphrased as "It is quite likely that I may (live in or move to Ambridge)." I interpreted "quite a bit" as meaning "quite likely". Therefore, "I may quite a bit." can be taken as "yes". If M_1 accepts M_2 's reply, the interpretation will be resolved.

The dialogue (37) below is an example of a negative response.

(37)

M: Good. Because there's no way we can accept guests for at least a few months.

F: Al'though we do 'rather 'rely on the BM'B \money, | \don't we? (The Archers 23 April 2020: 11:08)

M: Useful. But we can manage without.

The female proposes that they should use BMB money to reopen their hotel. The male's first word "useful" may sound as if he received her words but he rejects her proposal by saying the next words, "But we can manage without." The expression "manage without" implies that he does not intend to use the BMB money.

Next, I would like to discuss the incoherent responses obtained from the Archers (2020). Most of the 49 examples of the incoherent responses fall neatly into one of the five categories proposed in Watanabe (2019: 168-170). We have got six examples which do not belong there. Each case is described with a relevant example from the appendix. First, the examples falling into the five categories are discussed.

(a) A case where the first speaker poses a question and goes on to make his own comment before the second speaker gets a chance to make a response. The two instances belonging to the category are examples (19) and (35). Example (35) is quoted below as an illustration.

M: Close Grip Bench Presses?

F: You'll need these, yeah.

M: Yeah, that's \White Lifter, |\innit? (The Archers 21 April 2020: 1:30) And breakfast, a glass of water with a slice of lemon.

F: Lemon to give it a body.

In example (35) the male speaker poses a confirmatory question to check if the shoes the female wears are produced by "White Lifter" but immediately goes on to another topic saying, "And breakfast, a glass of water with a slice of Lemon." The female speaker responds to his comment but disregards his first question.

(b) A case where the scene changes in a drama or the drama itself is concluded by a speaker's tag question. We have got 21 instances. This category includes examples (2), (3), (9), (15), (20), (25), (36), (39), (47), (49), (56), (63), (68), (69), (72), (73), (78), (79), (84), (85) and (89). Example (15) is quoted below as an illustration.

(15)

F: How did you sleep?

M: Not great.

F: 'Had a 'couple of bad \nights, | \hadn't you? I know what it's like. But you do need to try to keep to routine. If you nap in the day, you won't sleep at night. (The Archers 1 April 2020: 1:00)

In example (15) the female speaker seems to show her concern for the male speaker's sleeplessness. But she keeps on talking and does not give him a chance to respond.

(c) A case where the second speaker tries to change a topic addressed by the first speaker or to develop a conversation initiated by him. We have got 16 instances. This category includes examples (5), (18), (27), (38), (40), (42), (43), (44), (50), (62), (71), (86), (94), (95), (96) and (98). Example (95) is quoted below as an illustration.

(95)

M₁: Here's Alistair here.

M₂: I haven't seen him.

F: Oh, he's \coming too, | /is he? I wanna talk to him. More fitness training for the cricket team. (The Archers 26 April 2020: 6:01)

M₁: Oh, I'm not sure if he'd be in cricket mood.

In example (95) the female speaker's constant polarity tag question expresses her excitement about having known Alistair's arrival. She is also confirming if it is true. M₁ does not respond to the confirmation of the news directly but develops the conversation.

(d) A case where the second speaker reveals his ignorance to the first speaker's question. The two instances belonging to the category are examples (1) and (30). Example (30) is quoted below as an illustration.

(30)

F: Alistair?

M: 'It's this \week, | \isn't it? (The Archers 15 April 2020: 5:56)

F: What?

M: Your sicker thing. The interview. I was thinking about it. And I've iust remembered.

In example (30) the male speaker begins to talk about the female speaker's planned interview but she does not recognize at once what he is talking about.

(e) A case where a tag question is answered by another tag question. The two instances belonging to the category are examples (4) and (46). Example (46) is quoted below as an illustration.

(46)

M: The 'trouble is there's 'nothing to get \up for, | \is there?

(The Archers 1 April 2020: 1:06)

F: You're 'missing \work, | \aren't you?

M: Yeah.

In example (46) the male speaker seeks for an agreement for his small assertion. The female speaker does not provide an agreement. She puts him another tag question and tries to find out what is his "real" trouble is.

I have found six new responses which cannot be included in one of the previous five categories. We can divide the six examples into two new categories.

(f) A case where the second speaker responds to the first speaker's tag question by a polar question. The four instances belonging to the category are examples (33), (51), (58) and (67). Example (33) is quoted below as an illustration.

(33)

M: So maybe, I don't know. He put the grill on because he wanted to light a cigarette or something. Now (what) you realize is what he's done

F: If that 'is what \happened, | they'll 'find \out, | \won't they?

(The Archers 19 April 2020: 4:58)

M: Will they do? I'm not sure.

In example (33) the male speaker does not reply to the female speaker's tag question. He expresses his doubt on the female speaker's assertion made by her tag question.

(g) A case where the second speaker responds to the first speaker's tag question by saying, "I don't know". The two instances belonging to the category are examples (8) and (70). Example (8) is quoted below as an illustration

(8)

M₁: I'll be honest. You're worrying me.

You're \lor okay, | /aren't you? (The Archers 14 April 2020: 9:50) M_2 : Oh, I don't know, Roy.

In example (8) M_2 confesses he is finding it difficult to catch up with what is going on around him, following his words, "I don't know". It could be interpreted as a negative answer to M_1 's tag question.

6. Concluding remarks

In this research I have collected 99 new examples of tag questions from the Archers (2020). Combined with the examples from the Archers (2016, 2018) in the previous studies of mine, we now have 284 examples. The augmented examples have enabled us to judge if what is written in technical books or reference grammars is accurate. I have found some rarely discussed problems as well.

This research has deepened the discussion on tag questions in other studies in four respects.

In the first place, as we have discussed in section 5.3, we have obtained the frequency order as follows: (1) [positive + negative; fall] (45.9%; 128 instances); (2) [negative + positive; fall] (23.7%; 66 instances); (3) [positive + negative; rise] (12.2%; 34 instances); (4) [negative + positive; rise] (10.0%; 28 instances); (5) [positive + positive; rise] (8.3%; 23 instances). As we have introduced in table 1 in section 3.1, Tottie and Hoffmann (2006) provided the frequency of polarity combinations based on a large corpus research. This research has improved on their classification by adding the tones of question tags, which I started in Watanabe (2017).

In the second place I have proposed 12 categories to classify tag questions in terms of both syntax and phonetics. The phonetics includes the tone of both anchors and question tags. This is a revised version of the ten types proposed in Watanabe (2019). The categories presented in section 4.3 will be repeated below for the ease of reference. The twelve categories are as follows: ① positive rising anchor + negative falling tag; ② negative rising anchor + positive falling tag; ③ positive rising tag; ④ negative rising tag; ④ negative rising tag; ⑥ negative falling anchor + positive falling tag; ⑥ negative falling anchor + positive falling tag; ⑨ positive rising tag; ⑧ negative falling anchor + positive rising tag; ⑨ positive rising tag; ⑪ positive rising tag; ⑪ positive falling anchor + positive rising tag; ⑪ positive falling tag; ⑫ positive falling anchor + positive falling tag; ⑫ positive falling anchor + positive falling tag.

In the third place we have been able to show the percentage of a literal response following a tag question. We have seen in section 5.4.1. that Tottie and Hoffmann (2009) assert that a confirmatory category with an information-seeking function will make up 41% in their data of tag questions. They provide examples of tag questions themselves but the responses that should follow are not shown. In this research I also investigated the responses following tag questions. In section 5.4.3. I divided the responses into coherent and incoherent ones. In 50 instances of coherent responses I found 18 literal responses with "yes" and 10 literal responses with "no". The 28 literal responses constitute 28.3% in 99 total number of the examples. In 284 examples collected in the Archers (2016, 2018, 2020) we find 75 examples of literal responses with "yes" or "no", which occupies 26.4% in all the examples of tag questions. We could make a tentative hypothesis that a literal response will constitute roughly a quarter of all the responses following a tag question.

In the fourth place we have obtained data which show if there is a gender difference in how often tag questions are used. Tottie and Hoffmann (2006: 304) present a data which suggest that there is a gender difference. Female speakers use them about 1.7 times as often as men in Britain while female speakers use them about 1.5 times as often as men in America. In Watanabe (2017) I counted the frequency of usage

by both sexes. It turned out that out of 120 instances 61 cases are used by males and 59 cases are employed by females. I have done the similar investigation in the Archers (2020). It has been revealed that out of 99 instances 51 cases are used by males whereas 48 cases are employed by females. The data obtained from the Archers seem to suggest that there is no gender difference in the use of tag questions. Yet, we should bear in mind that the Archers is a radio drama produced by the script writers who can control how often a particular expression is used in the drama. Tottie and Hoffmann (2009: 140) point out the difficulty of using a drama as a source of data. They comment: "we have no solid data on tag questions in present-day drama dialogue as yet."

Now I would like to go on to the problems rarely discussed in other studies. I have found three problems.

Firstly, I have argued since Watanabe (2014) that the tone of anchors as well as that of question tags needs to be equally described. The investigation of 284 examples obtained in the Archers (2016, 2018, 2020) has revealed that the rising anchors provide 49 cases, which make up 17.3% of all the instances. I have also found that the rising anchors appear practically only in the reversed polarity tag questions or so-called "tag questions". I have found two exceptional cases in the Archers (2016) in Watanabe (2017: 175) where the rising anchor is employed in constant polarity tag questions. In other words, we can expect to find both rising and falling anchors in the reversed polarity tag questions whereas, by contrast, we will only see falling anchors in constant polarity tag questions.

Secondly, I have investigated a linguistic response following a tag question. I would think that in order to study the function that a tag question plays in actual conversation we need to know what kind of linguistic expressions will come after a tag question. I proposed in Watanabe (2019) to divide the linguistic responses into two kinds: coherent and incoherent ones. A coherent response is a case where the speaker responding to a tag question uses either a literal "yes" or "no" or the

equivalent coherent expressions. An incoherent response is a case where a verbal response following the tag question do not seem to constitute a direct answer to it. I argued in Watanabe (2019: 168-170) that I was able to observe five kinds of incoherent responses. The research on the data from the Archers (2020) in the present study has revealed that most of the 49 examples of the incoherent responses fall neatly into one of the five categories¹² as we have discussed in section 5.4.2. I have found six exceptional cases, for which I have proposed to add two new categories.¹³

In this research I have conducted another investigation to find out if we can observe any relation between a coherent or an incoherent response and a falling or a rising tone of the question tags. Among 50 coherent responses falling tags provide 30 instances¹⁴ while rising tags account for 20 instances.¹⁵ Among 49 incoherent responses falling tags provide 37 cases¹⁶ whereas rising tags account for 12 cases.¹⁷

Some coherent responses are realized by a literal "yes" or "no". We have 28 literal responses among 50 examples. Among 30 falling question tags literal responses are given to 15 instances¹⁸ (50%) whereas among 20 rising questions tags literal responses are given to 15 cases¹⁹ (75%). The percentage of literal responses are much higher in answer to rising tags than in answer to falling tags. I would consider that the observation corroborates the general characterization of tag questions, as stated in Huddleston and Pullum (2002: 894), that the rising tag expresses a doubt or asks for verification while the falling tag seeks an agreement that the proposition in the anchor is true. To put it simply, the literal reply in coherent responses are considered to be an honest answer to rising tags.

Among 49 instances of incoherent responses, 37 of them (75.5%) are preceded by falling tags. I would think that the first speaker in the conversation keeps talking for himself and does not expect a verbal response from the other party. That attitude will invite an incoherent response from the second speaker.

In the third place I have been able to shed more light on the use of constant polarity tag questions. 14 instances²⁰ of constant polarity tag questions have been obtained from 99 examples in the Archers (2020).

I have made two observations from phonetic and semantic aspects.

Firstly, I'd like to present a phonetic observation. Among 14 examples eleven of them are prototypical instances of constant polarity tag questions in that an anchor assumes a falling tone and the question tag takes on a rising tone as we saw in section 4.3.10 where we discussed category ①. The remaining three examples are regarded as exceptional because the question tag assumes a falling tone as we saw in section 4.3.12 where we discussed category ②.

Secondly, I'd like to present a semantic observation. The constant polarity tag questions are often described as having a sarcastic meaning in reference and learner's grammars. Tottie and Hoffmann (2006: 302) deny the past claims by introducing Kimps' (2005) study who asserts that "only 18 percent of her 425 examples convey irony, sarcasm, mockery or contempt." Let us review our 14 examples.

Huddleston and Pullum (2002: 895) divide the meaning of constant polarity tags into two kinds. I will quote their two groupings. The first group includes the use which is "commonly accompanied by so or a comparable item as oh, etc., carries an emotive meaning of disapproval, reproach, belligerence, or the like." The second group contains the use "where I accept what you say, indicating some surprise or at least acknowledging that the information is news to me." I think that the first group can cover a sarcastic use. Swan (2016: 306) offers a different approach to classify the meaning of constant polarity tags into two kinds. The first category deals with the cases "where speaker repeats what he / she has just learnt, and uses the tag to express interest, surprise, concern or some other reaction." The second category takes care of the cases where "we use the main sentence to make a guess, and then ask (in the tag) if it was correct." In short, in the second category tags are used to ask questions. Swan's two-way categorization seems better suit-

ed to deal with our 14 examples.

Let us see how our 14 examples will be distributed between the two categories. The category one comprises the examples (87), (88), (89), (92), (94), (97), (98), and (99). The question tags in examples (97), (98), and (99) end with a falling tone. They are not used to ask questions, which is in line with the general characterization of falling question tags that they are employed to seek agreement.

The category two covers the examples (86), (90), (91), (93), (95), (96). The female speaker in example (91) sounds as if she is expressing an anger when we listen to the following story but it is not obvious. It is rather surprising that we cannot find a clear example of sarcasm in the 14 examples, which seems to be contrary to the expectation we may have after reading the descriptions in a reference grammar as I have mentioned in endnote (21).

The reference to the constant polarity tag questions seems to be limited in EFL context at least in Japan. Yet, they might as well be taught to the advanced EFL students since "non-negative tags are quite common after affirmative sentences" as Swan (2016: 306) points out. They might encounter actual examples in a daily conversation. As we saw in section 1, the use of constant polarity tag questions occupies four percent in American English and eight percent in British English as Tottie and Hoffman (2006) report.

Acknowledgements

This research was partially supported by a grant-in-aid (言語文化研究所研究助成 2019) from Takushoku University. I would like to express my heart-felt gratitude to all the people concerned.

Notes

1 The examples quoted from the other documents are preceded by such a circled number as ① whereas the examples originally collected from radio dramas are preceded by such a bracketed number as (1).

- 2 Yasuda (1971) is a textbook written for a radio English program broadcast by NHK. The program was designed for the lower-intermediate students in junior high schools. In Watanabe (2019: 154-157) I looked into three government-authorized English textbooks currently in use. I was unable to find an example of canonical tag questions as illustrated in the sentences in ① to ④. I was only able to encounter the canonical examples by such independent learning materials as Ogata and Kamiho (2012) and Kanatani (2016). The cover of Yasuda (1971) shows that one lesson in the English program was 15 minutes in length. It was broadcast six times a week. Going over the textbook, I have found that tag questions were the topic of the day in 14 lessons out of 26 lessons for the month. The way tag questions are described in Yasuda (1971) shows a stark contrast to that in the current textbooks in 2010's. A research is needed to find out why the contrast is observed. Yasuda (1971) has another characteristic, which is not employed in the textbooks of 2010's, in describing tag questions. He indicates the tones of both the anchor and the question tag by the ups and downs of added lines. It is usually the case that only the intonation of a question tag is given except for such technical introductions as Kingdon (1958) and O'Connor and Arnold (1973). As I commented in Watanabe (2019:177), Leech & Svartvik (2002: 132) is an exception. They provide the following example: He likes his jòb, dóesn't he?
- 3 Watanuki et al. (2008: 70), which is written for high school teachers and students in Japan, take up the examples as follows:
 - (a) A: This is the last bus, is it?

B: I'm afraid so.

(b) A: So he wouldn't come, wouldn't he?

B: No. He said he was too busy.

The sentence in (a) A is a case of constant polarity question tags where both the anchor and the question tag are positive. The sentence in (b) A is a case of constant polarity question tags where both the anchor and the question tag are negative.

- 4 Tottie and Hoffman (2006: 302) and Tottie and Hoffman (2009: 134) admit that their data lack the notation of intonation.
- 5 Cameron (2007: 17), who discusses the alleged "differences between men and women", points out that a 'positive' finding is more likely to be published in a scientific journal than a 'negative' finding. She warns that such publication tendency can change the facts. She states: "If findings that confirm male-female differences get published more often than findings that disconfirm those differences, the resulting literature will systematically distort the picture." We cannot conclude that the [negative + negative] combination is frequently used just because it is taken up in a grammar.

- 6 The home page of the University of Aberdeen introduced on 10 February 2016 that Dr. William Barras was going to make an academic presentation on the change of a pronunciation of a particular individual. He examined episodes of *The Archers* from 1975 and 2015. The longevity of the broadcast, he asserted, provided an invaluable resource for research. He compared his undertaking to the analysis of the Queen's Christmas speeches over a period of 50 years.
- 7 The numbers heading each example are not in an immediate sequence because they are quoted from the appendix.
- 8 As I have discussed in the introduction, Yasuda (1971) refers to the intonation of anchors and question tags. Egawa (1991), one of the representative English grammars in Japan, talks about the falling and rising tones of question tags. A slight difference in my approach is that my classification is based on the collected phonetic examples.
- 9 Tottie and Hoffmann (2009: 141) revised "facilitating" in Tottie and Hoffmann (2006: 301) into "facilitative".
- 10 The sentence numbers for the coherent responses are (6), (7), (10), (11), (12), (13), (14), (16), (17), (21), (22), (23), (24), (26), (28), (29), (31), (32), (34), (37), (41), (45), (48), (52), (53), (54), (55), (57), (59), (60), (61), (64), (65), (66), (74), (75), (76), (77), (80), (81), (82), (83), (87), (88), (90), (91), (92), (93), (97), and (99).
- 11 The sentence numbers for the incoherent responses are (1), (2), (3), (4), (5), (8), (9), (15), (18), (19), (20), (25), (27), (30), (33), (35), (36), (38), (39), (40), (42), (43), (44), (46), (47), (49), (50), (51), (56), (58), (62), (63), (67), (68), (69), (70), (71), (72), (73), (78), (79), (84), (85), (86), (89), (94), (95), (96), and (98).
- 12 Category (a) has two instances where the first speaker poses a question and goes on to make his own comment before the second speaker gets a chance to make a response. Category (b) has 21 instances where the scene changes in a drama or the drama itself is concluded by a speaker's tag question. Category (c) has 16 instances where the second speaker tries to change a topic addressed by the first speaker or to develop a conversation initiated by him. Category (d) has two instances where the second speaker reveals his ignorance to the first speaker's question. Category (e) has two instances where a tag question is answered by another tag question.
- 13 Category (f) has four instances where the second speaker responds to the first speaker's tag question by a polar question. Category (g) has two instances where the second speaker responds to the first speaker's tag question by saying, "I don't know".
- 14 The sentence numbers for the coherent responses with falling tags are (6), (16), (17), (21), (22), (23), (24), (26), (28), (29), (31), (32), (34), (37),

- (41), (45), (48), (52), (53), (54), (55), (57), (59), (60), (61), (64), (65), (66), (97), and (99).
- 15 The sentence numbers for the coherent responses with rising tags are (7), (10), (11), (12), (13), (14), (74), (75), (76), (77), (80), (81), (82), (83), (87), (88), (90), (91), (92), and (93).
- 16 The sentence numbers for the incoherent responses with falling tags are (1), (2), (3), (4), (5), (15), (18), (19), (20), (25), (27), (30), (33), (35), (36), (38), (39), (40), (42), (43), (44), (46), (47), (49), (50), (51), (56), (58), (62), (63), (67), (68), (70), (71), (71), (72), and (98).
- 17 The sentence numbers for the incoherent responses with rising tags are (8), (9), (73), (78), (79), (84), (85), (86), (89), (94), (95), and (96).
- 18 The sentence numbers for the literal replies to the falling tags with "yes" are (16), (17), (21), (24), (26), (41), (45), and (60) while those with "no" are (34), (54), (55), (97), (99).
- 19 The sentence numbers for the literal replies to the rising tags with "yes" are (7), (14), (74), (75), (76), (77), (80), (81), (88), (90), (91), and (92) while those with "no" are (11), (12), (83), (87), (93).
- 20 The sentence numbers for the constant polarity tag question are (86), (87), (88), (89), (90), (91), (92), (93), (94), (95), (96), (97), (98), and (99).
- Quirk et al. (1985: 812) offer comment together with examples. They assert, "Its effect may be scolding (*Oh*, you've had another accident, have you?), sarcastic (*So that's your game*, is it?), or sarcastically contradictory (*So your car is outside*, is it?). Watanuki et al (2008: 70) also argue that constant polarity tag questions express an interest, a doubt, or a sarcasm in what the other party has said. By contrast, Swan (1980: 515; 1995: 467; 2005: 472; 2016: 306) discuss "negative same-way question tags," whose use is rejected by many speakers as we have discussed in section 1. He takes up the following sentence: "(I see.) You don't like my cooking, don't you?" The part "I see." has been added since 1995. He asserts that the sentence "usually sound aggressive". Yet, on the contrary, when he discusses "affirmative same way question tags" (or positive constant polarity tag questions in our terms), he has been consistent in characterizing them as expressing "interest, surprise, concern or some other reaction" since 1995. Swan (1980) just remarks that they can express "anger depending on the intonation".

References

Alexander, L. George. 1988. Longman English Grammar. Longman: London.

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, Edward Finegan. 1999. Longman Grammar of Spoken and Written English. Pearson Education Limited: Essex

Barras, William. 2016. "What can The Archers tell us about changing accents?"

- (https://www.abdn.ac.uk/sll/news/8679/ accessed on 23 June 2016)
- Cameron, Deborah 2007. The Myth of Mars and Venus. Oxford University Press.
- Cirone, Nicole 2019. *Nine Nails*. Serving House Books: Copenhagen, Denmark and Florham Park, NJ.
- Egawa, Taichiro. (江川泰一郎) 1991『英文法解説』(A New Guide to English Grammar) Kaneko Shobo: Tokyo.
- Huddleston, Rodney, Geoffrey K. Pullum. 2002. The Cambridge Grammar of the English Language. Cambridge University Press.
- Kanatani, Ken 2016. (金谷憲) 『くわしい英文法 中学 1~3年』 文英堂
- Kimps, Ditte. 2005 "Declarative Constant Polarity Tag Questions: A Data-Driven Analysis of Their Form, Meaning and Attitudinal Senses" Paper Presented at 26th Meeting of the International Computer Archive of Modern and Medieval English, Ann Arbor, MI.
- Kingdon, Roger 1958 *The Groundwork of English Intonation*. Longmans, Green and Co Ltd: London.
- Leech, Geoffrey and Svartvik, Jan. 2002. A Communicative Grammar of English. 3rd edition Pearson Education Limited: London.
- Marks, Jonathan 2007. English Pronunciation in Use Elementary. Cambridge University Press.
- Murphy, Raymond. 2004 English Grammar in Use Third Edition Cambridge University Press.
- O'Connor, Joseph D., Gordon F. Arnold. 1973. *Intonation of Colloquial English*. Longman: London.
- Ogata and Kamiho (小縣宏之,上保匡子) 2012.『学研ニューコース 中 3 英語』 学研
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik. 1985. A Comprehensive Grammar of the English Language. Longman: London
- Sinclair, John 1990. Collins Cobuild English Grammar. Collins: London and Glasgow.
- Swan, Michael. 1980. Practical English Usage. Oxford University Press.
 - _ 1995. Practical English Usage. 2nd Edition. Oxford University Press.
 - 2005. Practical English Usage. 3rd Edition. Oxford University Press.
 - 2016. Practical English Usage. 4th Edition. Oxford University Press.
- Tottie, Gunnel and Sebastian Hoffmann 2006 "Tag Questions in British and American English" *Journal of English Linguistics*. Vol. 34 No. 4 pp. 283–311.
- 2009 "Tag Questions in English the First Century" *Journal of English Linguistics*. Vol. 37 No. 2 pp. 130-161.
- Thompson, A.J., A. V. Martinet. 1986 A Practical English Grammar. Oxford University press.
- Yasuda, Ichiro (安田一郎) 1971. 『NHK 続基礎英語 10 月号』日本放送協会出版 Watanabe, Tsutomu (渡辺勉) 2013 (a) 「英語の付加疑問文の音調について (1):

- 文献が示す規範」『英語音声学』第 18 号 pp. 289-299 日本英語音声学会
- Watanabe, Tsutomu (渡辺勉) 2013 (b) 「英語の付加疑問文の音調について (2): 予備音声調査」『英語音声学』第 18 号 pp. 301-312 日本英語音声学会
- Watanabe, Tsutomu. 2014. "On Describing Tag Questions in English" Takushoku Language Studies. No. 131, pp. 1-32
- Watanabe, Tsutomu. 2017. "A Preliminary Phonetic Study of Tag Questions in English" Takushoku Language Studies. No. 136. pp. 127-175
- Watanabe, Tsutomu. 2019. "Toward a Description of Tag Questions in Discourse" Takushoku Language Studies. No. 140. pp. 147-192
- Watanuki, You et al. (綿貫陽) 2008. 『ロイヤル英文法』 (Royal English Grammar with Complete Examples of Usage) Obunsha: Tokyo.
- Wells, John C. 2006. English Intonation an Introduction. Cambridge University Press.

12 Combinations of Polarity and Intonation (99 instances in total)

① Reverse polarity: positive rising anchor + negative falling tag (3 instances)

(1) (1)

M: I don't know. What's going on?

F: Hello, Robert. What do you think?

M: Can't you copy here?

F: 'Great \vee colour, $| \vee$ it? (It's) called one in vermillion.

(The Archers 2 April 2020: 5:07)

M: What?

(2) (1)

F: She is planning to come along tomorrow, though. Lilian told me.

M: Oh, Easter festival. That's great.

(3) ①

F: We do need help if we are to reopen the BMB. The more hands on deck, the better. And it 'would be so 'lovely to see \(\forall \text{Mango}, \| \wouldn't it?\)

(The Archers 29 April \(\frac{2020:}{10:28}\)

2 Reverse polarity: negative rising anchor + positive falling tag (3 instances)

(4) (2)

 F_i : Well, it's \text{typical}, | \text{isn't} it? Josh gets arrested. He's under police investigation. As it goes, (the partner) gives him a job.

 F_2 : He 'hasn't been $\lor \underline{charged}$ or anything, $| \lor \underline{has}|$ he? I can't see why you are annoyed about that. (The Archers 1 April 2020: 9:45)

(5) ②

 F_1 : I feel terrible. (I) 'haven't been 'much 'help for this $\$ \(\frac{Eas}{Eas} ter, \) \(\frac{have}{Eas} \) (The Archers 8 April 2020: 8:38)

F₂: Look! It's not a problem.

(6) ②

M₁: I left her making a salad. She won't let me help.

M₂: No. She wants to get back to normal, apparently.

'Nothing is 'normal any / \underline{more} , | \underline{is} it? (The Archers 23 April 2020: 5:58) M_i : Um.

3 Reverse polarity: positive rising anchor + negative rising tag (3 instances)

(7) (3)

M₁: The place is hemorrhaging money at the moment.

M₂: The 'health club's re \lor opened there, \mid / $\underline{hasn't}$ it? (The Archers 6 April 2020: 1:42)

M₁: Yeah. But small bearing comparison.

(8) (3)

M₁: I'll be honest. You're worrying me.

You're Vokay, | /aren't you? (The Archers 14 April 2020: 9:50)

M₂: Oh, I don't know, Roy.

(9) ③

F: 'Bit 'little for the \slides, | /isn't it? (The Archers 27 April 2020: 0:27)

(4) Reverse polarity: negative rising anchor + positive rising tag (5 instances)

(10) (4)

F: I'll tell you later.

M: Oh, 'not inter'rupting /anything, | /am I? (The Archers 15 April 2020: 3:36)

F: Oh, it's fine, Rov.

(11) (4)

M: 'Not 'taking up \(\text{\cricket}, \| /are you? \) (The Archers 15 April 2020: 3:50)

F: No, Roy. I've got too much else to worry about.

(12) (4)

M: You're 'not 'really \worried, | /are you? (The Archers 15 April 2020: 6:27)

F: No, well, yes.

M: You want to help with revision. Quick run through the gospels or something?

(13) (4)

M₁: You're 'not \/going, | /are you? (The Archers 19 April 2020: 11:48)

M₂: I have to, Jeff, I'm afraid. My shift starts this afternoon.

(14) (4)

M: Right.

F: You're 'not still 'stressing about the $\vee \overline{DJ}$, | /are you? If you had a few drinks, we'll all do it. (The Archers 30 April 2020: 6:31)

M: Yeah.

⑤ Reverse polarity: positive falling anchor + negative falling tag (30 instances)

(15) (5)

F: How did you sleep?

M: Not great.

F: 'Had a 'couple of bad \nights, | \hadn't you? I know what it's like. But you do need to try to keep to routine. If you nap in the day, you won't sleep at night. (The Archers 1 April 2020: 1:00)

(16) (5)

M: The 'trouble is there's 'nothing to \get up for, | \is there?

F: You're 'missing \work, | \aren't you? (The Archers 1 April 2020: 1:09)

M: Yeah.

(17) ⑤

F_i: 'That 'latte for table 'four was a \decaf, | \wasn't it?

(The Archers 1 April 2020: 4:11)

F₂: Yes, right. Jinny from Grey Gables. (She) works for some receptionist, I think.

(18) (5)

F: Why don't you offer to help with this Easter festival? It might take your mind off things.

M: After my last disaster, I don't think I'm cut out for organizing events.

F: What disaster?

(The Archers 1 April 2020: 6:26)

F: Wasn't that bad?

M: Mom, it was a car accident.

(19)(5)

F₁: It's about Josh. He's started working in a home farm.

F₂: So?

F₁: Doing numbing shifts.

F2: And that's bad because....

F₁: Well, it's \typical, |\isn't it? Josh gets arrested. He's under police investigation. As it goes, (the partner) gives him a job. (The Archers 1 April 2020: 9:37)

(20) (5)

F₁: But here's the genius part. With some of the kids being the judges.

F₂: Ah, actually, that's not a bad idea.

 F_i : I have to get the committee to agree to the change, of course. But everything's more likely to be a success that way.

(It) must (be) im/portant thing, \isn't it? (The Archers 1 April 2020: 10:29)

(21) (5)

F: That was 'nice 'bumping into \(\frac{\Grand}{\text{dad, Leonard, | \wasn't it?}}{(The Archers 1 April 2020: 10:34)}

M: Yeah.

(22)(5)

M₁: I miss you, man. You only want to get much air-con things. Please.

M₂: You're a per'sistent little \twerp, | \aren't you?

(The Archers 2 April 2020: 3:31)

M₁: Is that it? Yes.

(23)(5)

M₁: You are not used to that job before.

M₂: I must \start, | \isn't it? In fact, I'd be very interested to give it a go.

(The Archers 5 April 2020: 7:08)

M₁: Okay. When are you thinking of?

(24) (5)

F: Adam's only just as minute. (I) picked him up.

M: 'Babies \sleep, | \don't they? (The Archers 5 April 2020: 9:27)

F: Oh, yes. That's right tide of the house. I'll prepare the supper.

(25) (5)

F₁: Yeah. But would Justin be happy with that sort of restriction? I mean. especially, as he'd be putting up some of the capital.

 F_2 : Oh. There's 'only one 'way to 'find \out, | \is there?

(The Archers 6 April 2020: 6:02)

(26) (5)

F: Al'though 'Keira and 'George will want to be on the 'same \ride, | so it'll 'need 'two of you to 'keep an \eye, | \won't it? (The Archers 7April 2020: 8:19)

M: Yeah. That is true.

(27) (5)

M₁: And the Andy. He asked if I had a word with the nurses. Say, no visitors till he feels better unless it's some brave wants to see.

 M_2 : Oh. 'Good 'job I 'didn't 'visit him to\day, | \innit?

(The Archers 8 April 2020: 11:38)

M₁: You were at the hospital again today.

M2: Yeah. Seeing Linda.

(28)(5)

 $\begin{array}{l} M_i \hbox{: God! This 'office 'really is a little 'poky for a 'temporary $$\underline{\text{staff}}, | \underline{\text{sin't}}$ it? \\ & \text{Nifty since the lockers are brought in.} \end{array} (The Archers 9 April 2020: 1:57) \\ M_{\underline{s}} \hbox{: It's fine for now.} \end{array}$

(29) ⑤

F: And you forget some weirdo any point you just have to say. You 'know \text{\text{that}}, | \don't you? (The Archers 9 April 2020: 2:34)

M: Sure.

(30) ⑤

F: Alistair?

M: 'It's this \week, | isn't it? (The Archers 15 April 2020: 5:56)

F: What?

M: Your sicker thing. The interview. I was thinking about it. And I've just remembered.

(31) (5)

F: Sometimes all I can see is hurdles.

M: I know.

F: But 'hurdles 'have to be \taken, | \don't they? (The Archers 16 April 2020: 2:54)

M: They do.

(32)(5)

M₁: What stuff?

M₂: Oh, you know further-to stuff you got stored in the barn.

M₁: What's the hurry? She's 'only decided to \move, | \hasn't she?

(The Archers 16 April 2020: 10:31)

M₂: Oh, I think she might have seen somewhere.

(33)(5)

M: So maybe, I don't know. He put the grill on because he wanted to light a cigarette or something. Now (what) you realize is what he's done.

 $F \colon If \ that \ 'is \ what \ \lor happened, \ | \ they'll \ 'find \ \setminus \underline{out}, \ | \ \setminus \underline{won't} \ they?$

(The Archers 19 April 2020: 4:58)

M: Will they do? I'm not sure.

(34) (5)

M₁: How Blake?

M₀: Blake.

M₁: Well, he's your \nephew, \isn't he? (The Archers 20 April 2020: 7:42)

F: He's what?

M₂: No. No, he isn't.

(35)(5)

M: Close Grip Bench Presses?

F: You'll need these, yeah.

M: Yeah, that's \<u>White</u> Lifter, | \<u>innit</u>? And breakfast, a glass of water with a slice of lemon. (The Archers 21 April 2020: 1:30)

F: Lemon to give it a body.

(36) (5)

F: We need to be fit, fine-tuned, and ruthless. They go together.

M: Of course, they don't.

F: In my book they do.

M: You can be 'fit and \kind-hearted, | \can't you? (The Archers 21 April 2020: 8:02)

(37)(5)

M: Good. Because there's no way we can accept guests for at least a few months.

F: Al'though we do 'rather 'rely on the BM'B \money, | \don't we?

(The Archers 23 April 2020: 11:08)

M: Useful. But we can manage without.

(38) (5)

M: When you were at home, you checked them all the time.

F: I can 'check to \these guests, | \can't I? We've always enjoyed their visits.

Very interesting family. (The Archers 23 April 2020: 12:00)

M: It's such a huge amount of work.

F: Well, we need to get some help with all the preparation.

(39) (5)

M: I feel awful about last week. I honestly didn't mean to embrace Philip and Fromm and everyone.

F: Well, the timing wasn't great. It was a misunder\standing, | \wasn't it? He's fine about it, really. (The Archers 26 April 2020; 2:25)

(40) (5)

F: Oh, Rosie, don't pick that up.

M: She 'loves the \sandpit, | \doesn't she? (The Archers 27 April 2020: 0:41)

F: Oh, it just gets everywhere.

(41) ⑤

 M_1 : Plus, she's 'perfectly a'ware of our 'game \partial plan, | \land isn't she, Alan?

(The Archers 28 April 2020: 8:07)

M₂: Yeah, that's right.

(42) (5)

F: This time 'last 'year, I suppose, I 'let myself get dis\tracted, | \didn't I? Wanting a few nice things, wishing we had what everyone else seems to have.

(The Archers 29 April 2020: 8:30)

M: That wasn't a lot to ask for.

(43) (5)

F: But you're \fine, | /aren't you?

M: No, I'm not. (I'm) for\getting stuff, | \aren't I? (The Archers 30 April 2020: 7:15)

F: Oh, Roy.

(44) ⑤

M: Little grange. Our place.

F: We can hang it by the front door.

M: Yeah, yeah, I guess.

F: Oh, it's \beautiful, | \isn't it? Ed, what's wrong? (The Archers 30 April 2020: 10:55)

(45) (5)

F: We're equal partners. So we 'fail to\gether, | \don't we?

(The Archers 30 April 2020: 11:50)

M: Yeah. Yeah, you're right.

6 Reverse polarity: negative falling anchor + positive falling tag (27 instances)

(46) (6)

M: The 'trouble is there's 'nothing to get \up for, | \is there?

(The Archers 1 April 2020: 1:06)

F: You're 'missing \work, | \aren't you?

M· Yeah

(47) (6)

M: I just didn't realize.

F: You 'didn't 'stop to | ask, | \did you? (The Archers 2 April 2020: 7:24)

(48) (6)

M: Hev. Farren.

F: Yeah.

M: Is this place definitely back to being called "Bulna"?

F: That's right.

M: Another's taken up a stupid sign down.

F: Oh, yeah. 'Didn't last \long, | \did it? (The Archers 2 April 2020: 8:28)

M: "There was nothing to hang in there" aura.

(49) (6)

M: There was nothing we can do about.

F: Oh. Still (it) makes me angry.

M: There's 'no \point though, \is there? (The Archers 6 April 2020: 7:40)

(50) (6)

M: You got to be realistic.

F: I am.

M: No! Only a couple of weeks ago you told me, "you wanted a divorce."

F: I changed my mind.

M: But 'nothing else has \changed, | \has it? (The Archers 6 April 2020: 10:59) All the reasons we split up are all still there.

F: But if we love each other....

M: It's not enough.

(51) (6)

M: Look at the time already. They get back soon.

F: With shame.

M: Yeah. But 'hotel isn't 'gonna 'working it\ $\underline{\text{self}}$, | $\underline{\text{is}}$ it?

(The Archers 8 April 2020: 5:44)

F: Are there many bookings?

M: Um. Not as many as we'd like.

(52) (6)

F₁: God! Why is Harris doing a callout to anyone who wants to offer a goal?

'That's not I get a 'winning 'cricket \team, | \is it? (The Archers 9 April 2020: 2:15)

F₂: Ambridge is a winning team.

(53) **6**

F: How about we allow the shopping together? And I'll drive you over to Grey Gables. You 'wouldn't 'want to let 'Linda \down, | \would you?

(The Archers 9 April 2020: 4:14)

M: Oh, but I was thinking of bringing her bed downstairs and....

(54) (6)

F: 'That 'didn't 'take \long, \did it? (The Archers 12 April 2020: 5:59)

M: No.

F: Not with a help of a young man like you.

M: Well, it's actually very light.

(55) (6)

M: And you'll be brilliant, Shula? The best thing you can do now is relax and look forward to.

F · Relax!

M: You're 'not ex'pected to 'know \/everything, | for otherwise, you 'wouldn't 'need the \training, | \would you? (The Archers 15 April 2020: 5:25)

F: No. I suppose not.

(56) (6)

F: No, it's very sweet of you. But it's not that.

M: Then, what?

F: It's the personal interview about me, what I'm really like. You know, strength and weaknesses. 'That's not the 'sort of 'thing you can re\vise for, | \is it?

(The Archers 15 April 2020: 6:45)

(57) 6

M₁:and Emma are meant to be together.

M₂: Yeah, ex'cept it's 'not \working, | \is it? (The Archers 15 April 2020: 10:48)

M₁: You could make it work.

M2: No, I can't.

(58) (6)

M₁: I'll talk to her.

M₂: When?

M₁: Oh. You 'never \know, | \do you? (The Archers 15 April 2020: 12:38)

M₂: When?

M₁: This week. Okay? Sometime this week.

(59) (6)

F: Come on then. Robert, we 'wouldn't 'want to $\mbox{\sc miss}$ it, $|\mbox{\sc we}|$ we? (The Archers 16 April 2020: 2:54)

M: That's my Lindie.

(60) (6)

M: He could end up pinning all blame on himself instead.

 $F \colon He \text{ 'won't 'let that } \setminus \underline{hap}pen, \mid \setminus \underline{will} \text{ he? He'll have to say}.$

(The Archers 19 April 2020: 5:16)

M: Yeah. But that's Philip, though.

(61) (6)

F: Justin and I would fight like cats in a soccer if we didn't get away from each other now and again.

M: I \can't get 'away though, | \can I? (The Archers 19 April 2020: 6:50)

F: Darling, you could surely for a while.

(62)(6)

F: I know that if justice is done, you'll be completely exonerated. But it does not 'always \work like that, | \does it? (The Archers 20 April 2020: 1:03)

M: Those things are outside our control, right?

(63) (6)

M: He has to have a roof over his head.

F: He 'hasn't exactly been \sensible about all this, | \has he?

(The Archers 20 April 2020: 11:19)

(64)(6)

M: He's just a kid, really.

F₁: Why? Even so.

M: I 'couldn't just \leave him, | \could I? I have a responsibility.

(The Archers 20 April 2020: 11:25)

F₂: Exactly.

(65) (6)

M: I'll go back to help Jolene.

F: 'That's not \ruthless then, | \is it? (The Archers 21 April 2020: 7:51)

M: I wasn't trying to be ruthless. I was trying to help.

(66) (6)

F: Sign him up, Harrison.

M₁: I'd love to, ma'am. \(\text{Only}\), \(\text{you're not 'living in \Ambridge, \|\are you?}\) (The Archers 21 April 2020: 11:58)

M₂: I may quite a bit.

 $(67) \ \ (6)$

M₁: Anyway, there's no al\ternative with Blake, | \is there? I can't get him wrong, Gaff. (The Archers 22 April 2020: 1:05)

M₂: Isn't there?

(68) (6)

M: Saying a few words to someone whether it's sincere or not. Well, it's \nothing, | \is it? (The Archers 23 April 2020: 7:55) Not if it matters so much to Linda.

(69)(6)

M: As it turns out, most people are here. But we 'didn't \know that, | \did we? (The Archers 28 April 2020: 6:02)

(70) (6)

F: You must have done it by accidents, then, on your new phone.

M: I swear. I've got no memory of doing anything like that.

I mean, I 'couldn't even 'find \anything the next day, | \could I?

(The Archers 28 April 2020: 11: 49)

F: Oh. I don't know. And I don't care.

(71) (6)

 $F \colon Sorry, \, sorry. \ \ I \ don't \ mean \ to \ sound \ horrible.$

But she's 'not in the \work, | \is she? (The Archers 29 April 2020: 1:56)

M: She feels, we both feel if we're gonna have to open again, which we are....

F: Why though?

(72) (6)

F₁: If those units happened to get snapped up by the kind of business you prefer.... F₃: Well, sustainable business, cooperatives....

F₁: And then you really can't com\plain, | \can you? (The Archers 30 April 2020: 6:16)

7 Reverse polarity: positive falling anchor + negative rising tag (5 instances)

(73) (7)

F: People do, I suppose, they do stupid things. That's what accidents are.

M: Yeah, 'but I 'mean, it's \basic, | /isn't it? (The Archers 19 April 2020: 2:24)
That's fumes about. You don't just light a grill, especially the one that size.

(74) (7)

M: Don't hide your light under a bushel. 'That's \biblical, | /isn't it? (The Archers 20 April 2020: 6:14)

F: It is. Yes.

(75)(7)

 M_1 : We lo'cate po'lice \station, | /didn't I? (The Archers 22 April 2020: 1:56) M_2 : Yeah.

(76) (7)

F: Hey, that's for men. That'll \do. | /won't it? (The Archers 30 April 2020: 3:44) M: Yeah, (it) looks like a good one in all.

(77) (7)

M: They did say concussion take time to develop after a head injury.

F: But you're \fine, | /aren't you? (The Archers 30 April 2020: 7:12)

M: No, I'm not.

8 Reverse polarity: negative falling anchor + positive rising tag (8 instances)

(78) (8)

F: I said she could (stay).

M: What?

F: I said I wanted to see her. And the nurses agreed the nail polish was fine.

You 'don't think we 'd have \done it otherwise, | /do you?

(The Archers 2 April 2020: 5:55)

(79) (8)

F1: Welcome, Linda. You look....

F₂: 'Let's not 'stand on \ceremony, | /shall we really? (The Archers 13 April 2020: 0.53)

(80) (8)

M: I've just had a text. Freddy's Art project is finished at last.

F: Oh, fantastic. You 'haven't \seen it, | /have you? (The Archers 15 April 2020: 1:56)

M: That was a picture, yeah.

(81) (8)

M: Uh, you 'haven't 'seen \Shula, | /have you? (The Archers 16 April 2020: 0:48)

F: Yes. She's down at the air-con table.

(82) (8)

M₁: 'Talking of 'ugly 'hats, 'you weren't there for the bonnet an\nouncement, | /were you? (The Archers 16 April 2020: 10:02)

M2: Um.

(83) (8)

M₁: They're 'not 'cause us \trouble, | /are they? (The Archers 26 April 2020: 1:14)

M2: No. They've got enough on their plate with Linda's injuries. Believe me.

(84) (8)

M₁: What the hell is that?

M₂: It's a mobile home.

M₁: I can see that. You don't \travel with this, | /do you?

(The Archers 29 April 2020: 5:34)

M₂: Eh?

(85) (8)

F: There's still so much to do when we get this place shipshape.

M: There's 'no \rush, | /is there? (The Archers 30 April 2020: 1:33)

(9) Constant polarity: positive rising anchor + positive rising tag (0 instances)

(11 instances)

(86) 10

M: Shall I open some wine?

F: Oh. 'That's your i'dea of \help, | /is it? (The Archers 5 April 2020: 9:42)

M: It helps me.

(87) (10)

F1: It is a game, though.

F2: A game?

F1: I mean, they do it for fun.

F2: So you're one of 'these "'nothing 'matters" \merchants, | /are you?

(The Archers 15 April 2020: 2:51)

F1: No, not really.

(88) 10

M: 'Man goes all \right, | /does he? (The Archers 16 April 2020: 2:12)

F: Oh, yes. Sounds so grown-up on the phone.

 $(89) \ \ (0)$

M: And Billy has also cleverly managed to spell out a complete word.

And 'this is a 'Billy's \word, | /is it? (The Archers 16 April 2020: 11:16)

(90) 10

M: There you go.

F: Oh, Robert, you're back.

M: All is well. 'Back at \base, | /is it? (The Archers 19 April 2020: 9:00)

F: You are perfectly well.

 $(91) \ (10)$

F: You 'took \Monty, | /did you? (The Archers 19 April 2020: 9:04)

M: Yeah.

(92) (10)

F: So this is 'all your in\vention, | /is it, Philip? (The Archers 20 April 2020: 3:40)

M: Absolutely.

(93) (10)

M₁: So what's the point of this evening, then?

M₂: The point.

M₁: It's just, uh, spon\taneous, | /is it? (The Archers 20 April 2020: 4:20)

M₂: No. I said, "to talk wedding plans."

 $(94) \ (10)$

F: It was worse than the apprentice.

M: No. They're all 'crying the ap\prentice, | /are they? You didn't cry.

(The Archers 23 April 2020: 8:21)

F: Don't worry. No tears were shed.

(95) (10)

M₁: Here's Alistair here.

M₂: I haven't seen him.

F: Oh, he's \coming too, | /is he? I wanna talk to him. More fitness training for the cricket team. (The Archers 26 April 2020: 6:01)

M₁: Oh, I'm not sure if he'd be in cricket mood.

 $(96) \ \ 10$

M₁: What did he say?

F: He said, "no!"

M₂: You're kidding.

M₁: He has been \watching, | /has he? (The Archers 27 April 2020: 9:13)

F: Although Gav does live in the village.

- (1) Constant polarity: negative falling anchor + negative falling tag (0 instances)
- (2) Constant polarity: positive falling anchor + positive falling tag (3 instances)

(97) (12)

M: You're kind. You're always thinking of others.

F: Kind? Well, 'kind to \you just now, | \was I? (The Archers 20 April 2020: 6:44)

M: No, no, true. That was very cruel.

(98) (12)

M₁: As long as you're telling the truth....

M₂: If it is his interest to do that.

M₁: Are you freaky though, Dad? We can be as careful as we like.

That's e'xactly we're now $\setminus \underline{on}$, $| \setminus \underline{is}$ it? (The Archers 22 April 2020: 2:14) M_2 : Blake can do what he is told.

(99) (12)

 $F_1\hbox{: You are my sister and I love you. We 'want our 'kids to be $$\underbrace{\tt strong}$, $| \underline{\tt do}$ we? $$ (Archers 27 April 2020: 11:47)$

F2: No. You say "nine nails".

F₁: They need to be independent.

(原稿受付 2020年10月28日)

〈研究ノート〉

古文における文の構造の図解

阿久津 智

要旨

本稿では、古文における文の構造の図解について考えた。文の構造の分析・図解については、大きく分けて、係り受けを中心とするものと、階層構造を中心とするものがあるが、ここでは、古文の読解に役立つことを考えて、主に、古典学習用の文法書に多く見られる階層構造中心の立場をとり、文の解釈にとって重要な部分を中心に、文の構造の図解を試みた。その図解では、文の構成要素に、文節・連文節を基本に、さまざまなレベルのものを用い、必要に応じて、機能・意味・関係の表示を行った。

キーワード:文節,連文節,文の成分,古文,図解

1. はじめに

本稿では、古文における文の構造の図解について、考えてみたい。

ここでは、学校文法における文節・連文節に相当する言語単位レベルを基本に、文の構造について見ていく。このレベルを基本にするのは、(1)これらの単位が、古典を含む国語学習で広く使われていること、(2)他言語、とくに漢文との対照に便利な単位であること {日本語の文節は、主に、漢文や英語における語(word)に相当する} (阿久津 2020: 6)、などによる。以下、本稿では、まず、学校文法(口語)における文の構造のとらえ方を概観するとともに、本稿での立場を述べ(2節)、つづいて、古典学習・

指導用の文法書や参考書類を参考に、古文における文の構造の図解について考えていきたい(3節)。

2. 学校文法(口語)における文の構造のとらえ方

学校文法(口語)において、文の構造に関して、文節・連文節をどうとらえるか、とくに、文節・連文節と「文の成分」との関係をどう見るかについては、複数の見方があり、教育現場で問題になっているようである(山室 2008: 42-43、中村 2011: 282、伊坂 2013: 101)。そこで、まず、文節・連文節・文の成分に関する見方について、大まかにまとめておきたい。

中村(2011: 290), 伊坂(2013: 92-93) などによると, 文節・連文節・文の成分の関係のとらえ方には, 大きく分けて, 2 つの立場がある。1つ(「立場 A」と呼んでおく) は, 文節間の関係と文の成分とを(別個に)扱うもので, この場合, 連文節は, 主に文の成分(直接構成要素)として現れる(この立場には, さらに, 文の成分のうち, 文節のものを「一語」,連文節のものを「一部」と呼んで, 両者を別扱いするものと, いずれも「一部」と呼んで1つに扱うものとがある)。この立場からの, 文の構造の図解例を挙げる。例 01 は, 文節間の係り受け関係を示すものであり, 例02 は, 文の成分(直接構成要素)間の係り受け関係を示すものである(伊坂 2013: 93)(→は係る文節・連文節, ←は受ける文節・連文節。原著で縦書きのものを、横書きに直して示す。以下同様)。

この場合、個々の(文節間における)文節の機能、個々の文の成分(直接構成要素)の機能は示されるが、両者が別々のものとして扱われ、その結びつきが示されないという点が問題になる。

もう1つ(「立場 B」と呼んでおく)は、文節・連文節間の関係を中心に扱うもので、この場合、各文節・連文節が文の成分となる(「文の成分 = 文の直接構成要素」というわけではない)。これは、文節間の関係から始まり、文節・連文節間の関係、さらに、連文節間の関係へと、順次段階を上げて、文の構成をとらえていくというものである。筆者による図解例を挙げる{例 03 のような、「矢印付きの傍線を次々と結びつけていく方式で、最後には二つの組み合わせで終わるもの」は、「伝統的な、文部省『中等文法』の取り扱いの流れを汲むもの」(中村 2011: 282)という}。



この場合、「文節→連文節→文」という構成が示されるが、(例 02 のような) 文の成分(直接構成要素)を示すことができないという点や、語順によって、連文節間の関係の現れ方が変わってしまう {たとえば、「緋のマントを一人の少女がメロスに捧げた」の場合、途中段階(「一人の少女が/メロスに捧げた」)が「主・述」の関係になり、最終段階(「緋のマントを/一人の少女がメロスに捧げた」)が「修飾・被修飾」(目的語・述語)の関係になる という点などが問題とされる(中村・碁石 2012: 28-29)。

文節・連文節を提唱した橋本進吉の考えは、立場 B に近いようであるが(橋本 1953: 14-15)、現行の中学校国語教科書(平成 24 年度版)では、立場 A が主流のようである(伊坂 2013: 102-110)。

以上の2つの立場は、言語学の統語論(構文論)の観点からは、次のように位置づけられるであろう(表1){例には、日本語(漢文訓読文)と漢文とを挙げる}。

表1

言語	学校文法	単語	文 節	連文節	
単位	言語学	形態素	誑	句	
	立場 A: 依存関係	例:	************************************	± B **	
文構造	(係り受け) 中心	日本語: そ/の/馬/胡 /の/駿馬/を	#	其馬 将 胡駿馬	
の 分 析 立場 B: 階層構造	階層構造	/ 将いる 漢文: 其/馬/将/ 胡/駿/馬	*		
	(句構造) 中心		其 馬 将 胡 駿馬		

「係る要素 (言語単位)」 受ける要素 (言語単位)」を表す。 各要素の機能は、以下の略号で示した (「-部」は、「-語」で代表させる)。 主:主語,述:述語,修:修飾語,被:被修飾語,目:目的語 (学校文法の「修飾語」のうち,「目的語」を別に扱った)

表1からは、各要素(言語単位)の機能と語順については、立場 A の 図解のほうが見やすく、一方、主語や述語(あるいは、目的語)の内部構造については、立場 B の図解のほうがわかりやすい、ということがいえるように思う。

本稿では、古文の読解に役に立つことを優先して、文の構造の図解について考えたい。古文の読解につながるものであれば、立場を問わず、用いていきたいと考える。

たとえば、一般に、構造的あいまい文(両義性をもつ文)の解釈には、立場 B のような分析が有効かと思われるが(柴谷ほか 1982: 167-170)(例 04)、場合によっては、立場 A における文節間の係り受けの表示で済むこともあり(例 05)、単語(形態素)レベルでの分析が必要になることもあ

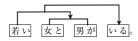
る (例 06)。あるいは、省略された部分を補うことが必要になる場合もある (例 07)。

(04) 若い女と男がいる。

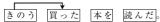




b. [若い女] + [若い男]



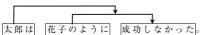
- (05) きのう買った本を読んだ。
 - a. 本を買ったのがきのう



b. 本を読んだのがきのう



- (06) 太郎は花子のように成功しなかった。
 - a. 花子は成功しなかった



b. 花子は成功した



- (07) 太郎が 好きだ。
 - a. 誰かが太郎を好いている

(誰かが_(津体))太郎が好きだ。

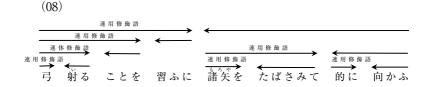
b. 太郎が誰かを好いている

太郎が(誰かを(対象)) 好きだ。

以上を踏まえて、次節では、古文の文の図解について見ていく。

3. 古文の文の図解

古典学習・指導用の文法書や参考書類には、文の構造(構成)について 説明を行うなかで、図解を用いるものが多い。これらでは、階層構造中心 (立場 B)の図解が比較的多く見られるようである。いくつか例を挙げる。 例 08 は、高校生向けの文法書にある図解で、例 03 の方式をとってい る。同書には、「文は、一つの文節から成る小さな成分同士が結び付いて、 より大きな成分を構成し、その大きな成分がまた他の成分と結び付いてさ らに大きな成分を構成するというように、いくつかの段階をたどって構成 される」(北原 1992: 135)とある。同書では、文節・連文節を問わず、 「- 語」を用いている。



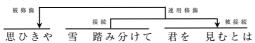
例 09~例 13 も、高校生向けの文法書にある図解で、文節(連文節)間の関係によって、線や矢印の使い方を変える「図示法」を用いている。これらは、「複雑な構造の文」、「特殊な構造の文」の例である(市川・山内 2018: 142-143)。同書では、文節・連文節を問わず、「- 部 | を用いている。



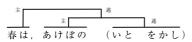
(10) 重文(並立)



(11) 倒置のある文



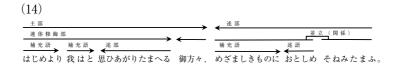
(12) 省略のある文



(13) 挿入句のある文



例 14 は、「学校で文法を教える先生のための文法講座」に見られる「文 の成分の係り受け法 | である(飯田 2016: 36)。例 03 や例 08 とほぼ同様 の方式であるが、文の成分に、「述語が要求する格関係を補う成分」(学校 文法では、「修飾語」に含まれる)である「補充語・補充部」を設けてい る。



つづいて、係り受け中心(立場 A)の例を挙げる。

例 15 は、長年に渡り文法教科書の編集に携わった(山室 2008: 219), 佐伯梅友(佐伯文法)による図解である(佐伯2019:65-66)。「佐伯文法 の最大の特徴は、語句の係り受けを最重要視すること」(佐伯 2019: 490 小 田勝「解説」)で、「語句」(「文節のようにはっきりしたものでなく、短いのや非常に長く続くのやがあ」る)の関係を「→→ という矢印で表わす」方法を用いている(佐伯 2019: 15, 65)。

(15)
神無月のころ、来栖野といふ所を過ぎてある山里に尋ね入ること 侍りき。
神無月の ころ
来栖野といふ所を過ぎてある山里に尋ね入る こと
来栖野といふ所を過ぎて ある山里に 尋ね入る
来栖野といふ所を過ぎて ある山里に 尋ね入る
来栖野といふ所を 過ぎて
来栖野といふ所を 過ぎて

これらは、それぞれ、「語句」と「語句」との間の係り受けを示すもので、「文節→連文節」のような、階層的な構造を示すものではない。

例 16 は、佐伯文法の系統に連なる文法学習(指導)書にある図解である(中村・碁石 2012: 40)。同書では、「述部を中心とした意味上のまとまりという視点」から設定された「文の成分」(「文を直接構成する要素」)によって、文の構造をとらえようとしており(中村・碁石 2012: 29-30)、文の成分によって、線の種類を変えている(例 16 の下段の図解)。文の成分には、「述部の要求する格関係を補う成分」である「補充部」も加えられている(中村・碁石 2012: 35)。

(16) 秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる

秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる

また、中村・碁石(2012: 118-143)では、「古典語特有の文の構造」として、12種の構文を挙げている。この中には、文に表れていない要素(助詞や形式的な名詞など)を補ったり、機能や意味を表示したりすることで、解釈がしやすくなるものも多いようであるが(例17・例18。いずれも、下段は筆者による)、中には、文の解釈に、図解が効果的だと思われるものもある。例19~例23は、同書が挙げる例文について、筆者が、主に立場 Bから、(矢印付きの)折れ線を用いて図解したものである(□で囲んだ要素には、さまざまな言語単位のものがあるが、「-語」を用いておく)。

(17) 格助詞非表出の構文

海〔ガ〕荒ければ、舟〔ヲ〕出さず。

海 荒ければ, 舟 出さず。 ^{迷語} 迷語 出きず。

(18) 準体法の構文

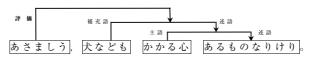
老いたる〔ヒト〕〔ガ〕あり、若き〔ヒト〕〔ガ〕あり。

老いたる あり、若き あり。

(19) 同格の構文



(20) 評価を表す構文



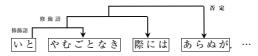
(21) 挿入の構文



(22) 対偶中止の構文 (対偶否定法)

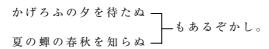


(23) 極端さを打ち消す構文



例 22 は、「カゲロウが夕方を待たずに死んだり、夏の蟬が春や秋という季節を知らないで死んだりする(という短命な)ものもあるのだよ」(中村・碁石 2012: 132)という意味である。小西(2016: 442)は、このようなものを「ならびの修飾」と呼び、この文を、次のように(「待ち」を「待たぬ」に書き改めて)、図解している。

(24)



この文を「カゲロウが夕方を待つし、夏の蟬が春と秋を知らないようなのもあるのだ」(小西 2016: 441) と (誤って) 解釈すれば、次のような図解になるだろう。



例 23 は、「そんなに高貴な身分でない方で、…」(中村・碁石 2012: 143) という意味である。これとは異なり、「いと」が「はなはだ」という意味で用いられる場合は、例 26 のように、「いと」が否定句(「尽きせず」)に係る(中村・碁石 2012: 143 にある例の、筆者による図解)。



例 26 は、「お泣きになるお姿は、まことに限りなく優艶な感じである。」 (『新編 日本古典文学全集 21 源氏物語 2』小学館 1995: 179) という意味 である (例 23 とは異なり、「は」が使われていない)。

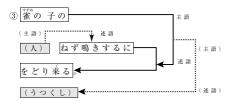
さて、以上の図解例から、古文読解のための文の図解は(ことさら新しいことではないが)、階層構造を中心として、次のように行うべきだと考える。

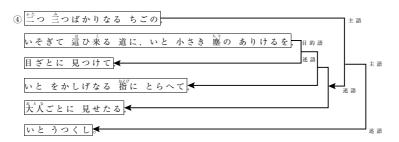
- ・文の解釈にとって重要な部分を中心に行う。
- ・文の構成要素(佐伯2019の「語句」)には、文節・連文節を基本に、さまざまな言語単位レベルのものを用いる。
- ・必要に応じて,要素の機能・意味の表示や,要素間の関係の表示を行う。

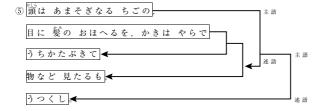
これを踏まえて、『枕草子』の「うつくしきもの」(前半部分)と、『徒

『枕草子』「うつくしきもの」(前半部分)

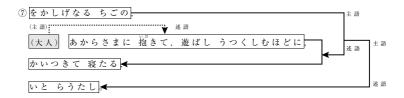




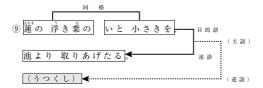


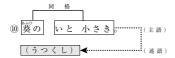






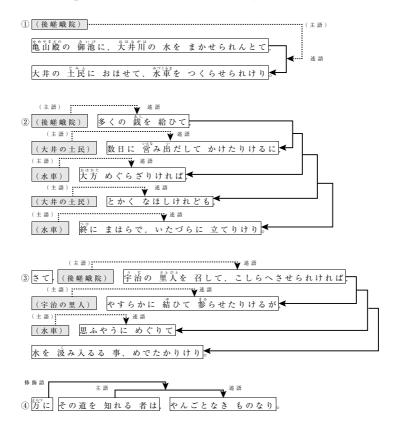
⑧難の調度。







『徒然草』「亀山殿の御池に」(第51段)



4. おわりに

以上、古文における文の構造の図解について見てきた。

古文の図解を試みて、改めて思うのは、文の基本的な構造に、「主語-述語」構造があり、その文中に主語が現れないことが多い、ということ である。受験参考書などで、「主語を見定める」ことが「古文を読んでい

く上で最も大きな課題 | (武田・鞆森 2017: 122) とされるのも、首肯でき る。なお、本稿では、学校文法に従い、文の成分に「主題」 | 中村・碁石 2012: 94-97 の「主題部」(「一文の主題となる事柄を取り立てて提示する 成分 |) | を立てることはしなかった。

参考文献

- 阿久津智(2020)「漢文訓読と連文節」『拓殖大学 語学研究』拓殖大学言語文化 研究所 pp. 1-33
- 飯田晴巳(2016)「古典解釈のための文法指導:古文の読み方・教え方」中山緑 朗・飯田晴巳監修、沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一編『品詞別 学 校文法講座 第八巻 古典解釈のための文法』明治書院 pp. 1-52
- 伊坂淳一(2013)「文の成分」中山緑朗・飯田晴巳監修、沖森卓也・山本真吾・ 木村義之・木村一編『品詞別 学校文法講座 第一巻 品詞総論』明治書院 pp. 92-117
- 市川孝・山内洋一郎監修(2018)『古文読解のための 標準古典文法 三版四訂』 第一学習社(初版 1995)
- 沖森卓也編著、山本真吾・永井悦子著 (2012) 『古典文法の基礎』朝倉書店
- 小田勝(2020)『古代日本語文法』 筑摩書房(初刊2007)
- 北原保雄編(1992)『古典にいざなう 新古典文法』大修館書店
- 小西甚一(2016)『国文法ちかみち』 筑摩書房(初版 1959. 改訂版 1973)
- 佐伯梅友(2019)『古文読解のための文法』筑摩書房(初刊1995)
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓(1982)『言語の構造 理論と分析 意味・統語篇』 くろしお出版
- 武田博幸・鞆森祥悟(2017)『読んで覚える 古文攻略マストアイテム 76〈常 識・文法・和歌〉』桐原書店
- 中村幸彦(2011)「いま、文の成分はどう捉えられているか」会田貞夫・中野博 之・中村幸弘編『学校で教えてきている 現代日本語の文法 改訂新版』右 文書院 (初出 1999) pp. 267-292
- 中村幸彦・碁石雅利(2012)『日本古典 文・和歌・文章の構造』新典社
- 橋本進吉(1953)「文節による文の構造について(講演要旨)」『国語学』13 国 語学会(1944 講演) pp. 12-19
- 山室和也(2008)『文法教育における構文的内容の取り扱いの研究』溪水社

(原稿受付 2020年10月27日)

台湾語"有+VP" ----「言語主体位相の叙述」説の検証

浅 井 澄 民

要旨

台湾語 "有+VP (形容詞句,動詞句)"の"有"の機能については、従来さまざまに議論されてきた。本稿ではこの"有"の機能がチベット語存在動詞の文法化用法「言語主体位相の叙述」と類似していることを、樋口靖2000のテキストを用いて検証する。

キーワード:台湾語 "有", 言語主体位相, チベット語, 存在動詞の文法化, アスペクト

0. はじめに

筆者は浅井 2014, 2015a, 2015b, 2016 において、『(旧本) 老乞大』句 末の"有"やモンゴル語存在動詞の文法化用法が、チベット語存在動詞の 文法化用法「言語主体位相の叙述」に類似していることを指摘した。

一方, 台湾語 "有 + VP (形容詞句, 動詞句)" の "有" の機能について は. 従来さまざまに議論されてきた⁽¹⁾。

本稿では台湾語 "有+VP" の "有" がやはりこの「言語主体位相の叙述」に類似していることを, 樋口靖 (2000) のテキストを用いて検証してみたい。

1. チベット語の「言語主体位相②の叙述」

山口瑞鳳 2002 によると、チベット語は「表現主体位相の叙述」(表現主体「話し手」「書き手」の主観的な叙述)と「対象位相の表現」(他の表現主体による叙述の伝聞も含めて、事象が客観的な状態や動作として記述的に表現される。)の二つの位相を区別して表現され、特に存在動詞 ^yööにはこの「表現主体位相」を表す機能があるとしている。

また、星泉 2003 (p6) によると、チベット語の文法化した動詞である 述語動詞 $^{(3)}$ (存在動詞を含む) は次のような話し手の叙述態度や事態に対する知識、捉え方(アスペクトを含む)を表す機能を担う、としている。

A 話し手の叙述態度

話し手の叙述態度には、「自称モード」と「他称モード」という語りのモードが認められる。話し手は、叙述内容に応じてこの二つのモードを切り替えて語る。

「自称モード」とは、話し手が自分自身の個人的なことを語る、あるいは他者について、自分との関係を前面に押し出して語るというモードであり、また、自分の経験上よく把握していること、自分の個人的な見解であること、自分の管理下に置いていること、自分の意思で決定したことなどを表に出して述べる語り方を指す。

「他称モード」とは、話し手が他者について、単なる事実認定である、あるいは、一般的な判断であるという態度で語るモードであり、また、話し手自身についても、客観的な事実であるということを前面に押し出して語るモードである。

B 話し手の事態に対する知識

話し手が事態に対してどのような知識に基づいて語るかという違

台湾語 "有+VP" — 「言語主体位相の叙述 | 説の検証 (浅井) — 259 —

いが述語動詞の選択に反映されることがある。その知識の違いは「定着知」と「観察知」の二つに分けられる。

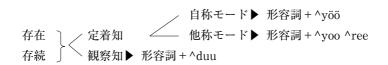
「定着知」とは、話し手が語ろうとしている事柄が話し手にとって既に把握し、定着している知識のことである。定着知に基づいて述べるということは、話し手が既にもっている知識に基づいて述べることを指す。

「観察知」とは、話し手が語ろうとしている事柄が話し手にとって観察・知覚して得た新しい知識のことである。観察知に基づいて述べるということは、話し手が叙述する事態を自らの感覚で見たり、感じたりして得た新しい知識に基づいて述べることを指す。

ここでは主に星泉 2003 の分析に基づき、台湾語 "有" の文法化用法 "有+VP" の用例を見ていきたい。

2. 台湾語の「有+形容詞述語文」(4)

星泉 2003 によると、現代チベット語(ラサ方言)の形容詞述語文における三つの存在動詞 ^yöö / ^yoo ^ree / ^duu の機能を次のように分析している(例文は星泉 2010 による)⁽⁵⁾。



- ① ´n a ´shetraa ´kipu **^yöö**.私 非常に 幸せ 「私はたいへん幸せです;定着知・ 自称モード」
- ② `thönkyee 'shänpo = cää, ^drurii ¬konpo **^yoo ^ree.**

作柄 不良な 穀類 僅少な 「(客観的事実として)作柄が悪く、穀物もあまりとれない;定着 知・他称モード

③ ´mi ´yako ´shipu-ci **^duu**.人 良い 非常に 「本当にいい人だ;観察知」

樋口靖 2000 中の「有+形容詞述語文」は全 13 例であり、上記の分析に 従って分類すると次のようになる。

A "有+形容詞+無?"(計5例) — "有"(計3例)

- (1) 學臺灣話有趣味無?(112)台湾語の勉強は面白いですか?
- (2) **一有**, 學臺灣話眞趣味_{有意思}。 ⁽⁶⁾(112) ええ, 台湾語の勉強はとて も面白いです。[定着知・自称]
- (3) 幼稚園有好損(妊娠) 無? (237) 幼稚園は楽しいかい?
- (4) 一有, 眞好損。(237) うん, とても楽しいよ。[定着知・自称]
- (5) Hia_{新儿}的肉 kap_和青菜**有**鮮無? (257) そこの肉や野菜は新鮮ですか?
- (6) **一有**, 眞鮮。(257) ええ, とても新鮮です (よく把握している)。 [定着知・自称]
- (7) 臺北的物件_{东西}有俗_{便宜}無? (76) 台北の品物は安いですか?
 一臺北的物件無啥_{什么}俗。(76) 台北の品物はあまり安くありません。[定着知・自称]

(8) 睏著_{睡着}有好無? (213) よくお休みになれましたか? [聞き手の 定着知(自称)を尋ねる]

B"有+形容詞句"(計5例)

- (9) 我來 chia 这儿有較比較利便方便。(123) ここ(会社)へ来るのはわりに便利です。[定着知・自称]
- (10) 我的 chiah _オ有準。(165) 私の(時計)こそ合ってます。[定着知・自称]
- (11) 今仔日_{今天}早起_{早晨}有較凉一點仔_{一点儿}。(213) 今朝は少し涼しいですね。[観察知]
- (12) 價數_{价钱}**有**較貴一點仔。(231)(売り手が)値段は少し高いです。 [定着知・自称]
- (13) Che _这較有通_{合算}哦。(231)(売り手が)これはわりにお得ですよ。「定着知・自称」

「有+形容詞述語文」(計13例)のうち半数以上が、"有+形容詞句+無?"形式の疑問文とその答え"有"となっている。"有+形容詞句+無?"形式の疑問文は、聞き手の定着知(自称)を知りたくて(期待して)このような形式で尋ねる、もしくは、話し手の新たな観察知を得るための疑問文という解釈も成立する。また肯定文では話し手がよく把握している事柄[定着知・自称モード]か話し手の観察知となっている。

これらの例で見る限り、台湾語の「有+形容詞述語文」はチベット語の存在動詞 ^yöö / ^duu を用いた形容詞述語文と同じように「言語主体位相の叙述」を表していると言えそうである。

3. 台湾語の「有+動詞述語文」

星泉 2003 (p 16) によると、チベット語の動詞述語文とアスペクトの 関係を次のように分析している。[本動詞(-接辞)+述語動詞]

	非継続	継続
非完了	Vnpf-ki + ´yin Vnpf-ki + ^ree	Vnpf-ki + ^yöö Vnpf-ki + ^yoo ^ree Vnpf-ki + ^duu
完 了	Vpf-pa + ´yin Vpf-pa + ^ree Vpf + cun Vpf + son	Vpf+^yöö Vpf+^yoo ^ree Vpf+^duu

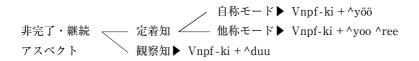
表1 チベット語における動詞述語と各アスペクトの関係

上表から、チベット語の3つの存在動詞 ^yöö / ^yoo ^ree / ^duu は (非完了・完了) 継続アスペクトに表れることが分かる (7)。以下にこれらの各アスペクトに基づいて台湾語の「有+動詞述語文」について詳しく見ていくことにする。

3.1. 非完了・継続アスペクト

星泉 2003 ではこのアスペクトについて「話し手が事態を完了にいたっていないとして捉え、かつ事態を何らかの継続状態にあると捉えていることを表し、持続的、断続的な継続状態や、準備段階の継続状態(いわゆる近接未来)を表すことができる」と説明しており、その意味機能について次のように分類、分析している。

^{※ (}Vnpf…動詞非完了形, Vpf…動詞完了形)



- ④ ^shäälaa ⁻tshanma ^nää ´so-ki ^yöö食事 すべて 私 作る「食事はすべて私が作っています;定着知・自称モード」
- ⑤ ¬khoran ´no ¬tsha-ki **^yoo ^ree** 彼 恥ずかしい

「彼は恥ずかしく思っているのです;定着知・他称モード」

⑥ 'naa ^thinträä 'se-ki **^duu** 私 そのように 言う

「私にこんなことを言っている; 観察知」

樋口靖 2000「有+動詞述語文」中、上記のタイプに相当するものとして以下の7 例が考えられる⁽⁸⁾。

- (14) 風蒒有定定_{常常}來無? (213) 台風はよく来ますか?
 一年來幾仔 pái л次。 (213) 一年に数回来ます。[定着知・自称 « 習慣 »]
- (15) 楊文郎也**有** beh_要去唔_不? (163) 楊文郎君も来ますか? —是。(163) ええ。[定着知・自称 « 近接未来 »]
- (16) 汝有 bat 认识 hōⁿ 了? (115) あなたは (あの人達を) 知っているのですね?
 - 一我 bat。(115) 私は知っています(よく把握している)。[定着

知・自称]

- (17) 會使_{可以}申請提款卡無? (247) カードも申し込めるんでしょうか?
 - 一有。(247) ええ(よく把握している)。[定着知・自称]
- (18) 一暗_晩两千箍_元, 唔 koh_{不过}有拍一點仔折。(268) 一泊二千元ですが、多少割り引きさせていただきます。[定着知・自称]
- (19) 汝(有) 愛看電影無? (102) あなたは映画を見るのが好きですか?
- (20) **一有**, 我**有**真愛看電影。(102) はい, 私は映画を見るのがとても 好きです。「定着知・自称]

ここでは、[非完了・継続アスペクト、定着知・自称モード]の例が確認できる。このタイプについて、星泉 2003 では「話し手の自らの意志で遂行している継続性の事態を表すのに用いられる。また、話し手の意志でコントロールできない事態(他者の行為も含む)でも、話し手がその事態についてよく把握している持続性の事態を表す場合に用いられる」と説明しているが、上記の例はほぼこのタイプの中での解釈が可能である。

また、上記全 6 例のうち、5 例までが "有+動詞句+無/唔/ $h\bar{o}^n$?" 形式の疑問文やその答えの中で現れている。なお、中国語ではこれらの例は通常アスペクトには含まない。

3.2. 完了・継続アスペクト

星泉(2003)ではこのアスペクトについて「話し手が事態を既に完了したものとして捉え、かつ完了後に何らかの継続状態にあると捉えているこ

とを表す。」と説明しており、その意味機能について次のように分類、分析している。

自称モード▶ Vpf+^yöö 完了・継続 定着知 他称モード▶ Vpf+^yoo ^ree アスペクト 観察知▶ Vpf+^duu

- ⑦ ¬khoo ¬nää `naa ¬shaa ¬yöö彼 私 頼む おく「彼には私から頼んであります; 定着知・自称」
- (8) ~khasan ^cintaa = k ää ^thukloo ~saapa `trää ^yoo ^ree
 先日 あるじ 服 新しい 与える
 「(あなたは) 先日あるじに新しい服を与えられているのです; 定着知・他称モード」
- ⑨ 「kipu 「tansa ^pää-ti `khan ^tää ^duu 楽しむところ すっかり 一杯になる いる「(以前中国に行った時) すっかり歓楽街だらけでした: 観察知」

これに従って樋口靖2000の例を分析すると、次のようになる。

- (21) 林先生有 tī leh 在着無? (97) 林さんはいらっしゃいますか?一無,伊他無 tī leh。 (98) いえ,彼はいません。 [定着知・自称]
- (22) 郭先生有 tī leh 無? (159) 郭さんはいらっしゃいますか?
- (23) **一有** tī leh。(160) おります。[定着知・自称]
- (24) 有著4賣魚無? (257) 魚も売っていますか?
- (25) ― 賣是有著賣, … (257) 売っていることは売っていますが, …

[定着知・自称]

- (26) **有** chhun_剩位_{坐位}無? (265) 席は残っていますか?
- (27) ----, 有。(265) …, ございます。[定着知・自称]

この完了・継続アスペクトは中国語の持続アスペクトに相当すると考えられる。台湾語の進行・持続アスペクトマーカーである "著 / leh" ⁽⁹⁾がついていることからも窺える。

ここでは [完了・継続アスペクト,定着知・自称モード] に分類できそうである。星泉 2003 ではこのタイプについて「話し手が自らの意志で遂行したことで,その結果が継続している状態,または話し手の意志の及ばないところで起こったが,その始まりから結果まで話し手がよく把握している状態について述べるのに用いられる」と説明している。上記の例は主に後者のタイプであると考えられる。

また、上記全7例がすべて、"有+動詞句+無?"形式の疑問文とその答えの中で現れている。

3.3. 完了・非継続アスペクト

<表 1 >で見る限り、このアスペクトにおけるチベット語の存在動詞 v v o o

このアスペクトについて、星泉 2003 では「話し手が事態を既に完了したものとして捉え、かつ、事態を継続的でなく、一回性の、あるいはひとまとまりのこととしてとらえていることを表す。」としている。中国語の「完了」「経験」アスペクトに相当すると考えられる。

台湾語 "有 + VP" — 「言語主体位相の叙述」説の検証 (浅井) — 267 —

- (28) Lín (条元) 有看無? (184) あなた方は(映画を)見ましたか? 一無。(184) いいえ。[定着知・自称]
- (29) 汝昨昏_{昨天}**有**去學臺灣話抑_啊無? (184) あなたはきのう台湾語を習いに行きましたか?
 - 一無。(184)いいえ。「定着知・自称]
- (30) 汝有食早起��� (抑嘔) 無? (184) あなたは朝食を食べましたか?
- (31) **一有**,我**有**食早起。(184) はい,朝食を食べました。[定着知・ 自称]
- (32) 昨昏_{昨天}暗_{晚上}**有**落雨,所以…(213) 昨晩雨が降ったので,…[定 着知・自称]
- (33) 汝**有**食過臺灣料理無?(188) あなたは台湾料理を食べたことがありますか?
- (34) 一有 ah, 臺灣料理我有食過幾仔 pái。(188) ありますよ。台湾料理なら何度も食べました。「定着知・自称]

全7例のうち、やはり半数以上が、"有+動詞句+無?"形式の疑問文とその答えの中で現れている⁽¹⁰⁾。

3.4. 小結

台湾語の「有+動詞述語文」はチベット語の「非完了・継続」「完了・ 非継続」「完了・継続」の三つのアスペクトで現れる;〈表1〉参照。[非 完了・継続] アスペクトの例は中国語では通常アスペクトに含めないが、 チベット語のアスペクトの概念に当てはめると、台湾語の「有+動詞述語 文」とアスペクトの関係を比較的うまく説明することができる。また更に定着知、観察知などの意味機能と結び付けると、台湾語の「有+動詞述語文」⁽¹¹⁾ が「言語主体位相の叙述」を表すという仮説はほぼ妥当であるという結論にいたる。もちろん、今回検証した例は、樋口靖 2000 のテキストに限られており、更により多くの台湾語の口語資料にあたる必要があることは言うまでもない。

4. おわりに

以上、台湾語の"有+VP(形容詞句、動詞句)"について、樋口靖2000のテキストを用いて、「言語主体位相の叙述」説が当てはまるかどうか検証してみた。

結論として、この仮説がほぼ妥当であることが実証できたと考えている。現在、台湾語の"有+VP(形容詞句、動詞句)"の"有"について、アスペクト標識説、モダリティ標識説等が有力な説とされているが(遠藤雅裕 2013)、「言語主体位相の叙述」説はこれらの説とも矛盾しない。

今回は限られた資料でのささやかな試みであり、今後さらに多くの資料で検討していく必要があると考えている。また、客家語にも "有+VP(形容詞句,動詞句)"と似た用法が出ており、視野にいれていきたい。

また、この仮説が妥当と想定された場合、チベット語(やモンゴル語) との歴史的な因果関係(言語接触)に起因するかどうかについても、今後 検討する必要があると考える。

《注》

- (1) 現在, アスペクト標識説, モダリティ標識説が有力な説となっている; 遠藤雅裕 2013 参照。
- (2) 言語主体位相:山口瑞鳳 2002 の表現主体位相と同義。筆者の言い換えによる。

- (3) 星泉 2003 (p5) によると、現代チベット語 (ラサ方言) の動詞は機能上、述語動詞と本動詞に分けることができ、名詞、形容詞、本動詞の後に付いて文を終止させ、述語を形成することのできる文法化した動詞のことを述語動詞と呼ぶ。
- (4) 樋口靖 2000 では、この "有" について「形容詞の前に、性質・状態の存在を確認する助動詞 "有 ū" が添えられることがあります。その打ち消しは "無 bô" を用います。疑問文は "有 ū" と "無 bô" を用いた A -or-not A式になります (p77)」と説明している。
- (5) 定着知・自称モードおよび観察知が「言語主体位相の叙述」と考えられる。
- (6) 例文の中の普通語の注釈は筆者による。また例文最後の数字は樋口靖 2000のページ数を表わす。
- (7) これら存在動詞の助動詞用法にはその他未来推定の用法がある;星泉 2006 参照。
- (8) 完了・継続、完了・非継続アスペクト以外の例はすべてこのタイプに分類した。
- (9) 樋口靖 2000 では、leh は "著 teh" の訛ったものであり (p 98)、"著" は動詞句の前に置いて動作の進行を表す (p 129) としている。
- (10) 樋口靖 2000 では、このタイプの "有"と "無"について「動作・行為の有無を確認する助動詞」(p 185) と説明している。

参考文献

- 浅井澄民 2014:「『(旧本) 老乞大』句末の"有"とチベット語の句末助動詞 崎 ^yöö/崎 ^duu の類似性 存在動詞の文法化と言語主体位相の叙述」拓殖大学語学研究、No. 130
- 浅井澄民 2015a:「『(旧本) 老乞大』句末の"有"と現代モンゴル語句末助動詞 "байна"の類似性 I — 存在動詞の文法化と言語主体位相の叙述」拓殖大学 語学研究, No. 132
- 浅井澄民 2015b:「現代モンゴル語「VP + 6aŭx」構文の意味と機能 5 種のモンゴル語教材から 」 拓殖大学語学研究、No. 133
- 浅井澄民 2016;「『(旧本) 老乞大』句末の"有"と現代モンゴル語句末助動詞 "байх"の類似性 II —— 『(旧本) 老乞大』の「VP + 有」構文と現代モンゴル語「VP + байх」構文」拓殖大学語学研究、No. 135
- 浅井澄民 2018;「台湾語 "有(ū)" "無(bô)" の文法化とその周辺(資料篇) 樋口靖著『台湾語会話(第二版)』に基づいて」拓殖大学語学研究,

No. 137

遠藤雅裕 2013:「南方漢語のアスペクト体系と「有」―― 台湾海陸客家語を中心 に」中日理論言語学国際フォーラム

樋口靖 2000;『台湾語会話 (第二版)』東方書店。

星泉 2003;『現代チベット語動詞辞典(ラサ方言)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

星泉 2010 ; 「14 世紀チベット語文献『王統明示鏡』における存在動詞」『東京大学言語学論集』 29 号

山口瑞鳳 2002;『概説チベット語文語文典』春秋社。

(原稿受付 2020年10月30日)

〈解題・翻訳〉

翻訳:オネジモ・テオトニオ・アルメイダ著「ヴェラ・クルース島」から「ブラジル」へ

浜 岡 究

要 旨

ブラジル産の木(pau Brasil)に由来するブラジルという名前が土地に付けられたことは、神話的なブラジル島の名前の形成過程に関する知見がないと理解しがたい。ブラジルという名前の決定的な固定化について、現在、推論が可能な限度において再検討をするものである。(著者オネジモ・テオトニオ・アルメイダによる)

キーワード: ブラジル, バウ・ブラジル, ヴェラ・クルース, ハイ・ブラジル, ブラジル島 解 題

魅惑的な島への航海

浜岡 究 著

はじめに

オネジモ・テオトニオ・アルメイダは、アソーレス諸島サン・ミゲル島 出身で、米国ブラウン大学教授を務める。哲学博士。出身地アソーレス諸島の研究を重ね、アソーレス文学講座をアメリカでいち早く創設した。ポルトガル国立アヴェイロ大学名誉博士。訳者浜岡の学問的友人、そして恩人である。毎年、世界各地で講演や講義を多数行い、論文や著作は驚異的に多い。代表作を挙げるにとどまるが、哲学の分野からポルトガル詩人フェルナンド・ペッソア⁽¹⁾、ポルトガル人のアイディンティー⁽²⁾、アソーレス諸島⁽³⁾、そしてポルトガル海外進出⁽⁴⁾ などと研究分野は多岐に亘る。哲学者の見地からアプローチしており、今回訳出した『「ヴェラ・クルース島」から「ブラジルへ」』⁽⁵⁾ も、オネジモ・テオトニオ・アルメイダの幅広い知見を活かした特徴ある論文である。

1500年のブラジル発見当初は、「ヴェラ・クルース」と呼ばれていて、そこで産出される木の名前 Pau-Brasil から「ブラジル」となったことが定説となっていた。オネジモ・テオトニオ・アルメイダは、「ブラジル」という名前について再検討するもので、すでに定着しており違和感のない事柄に関して、幅広い視野から再考する刺激を与え、広く学術の発展に貢献する意義があると考える。

1. ヴェラ・クルース(真の十字架)

ポルトガル王室は、トルデシーリャス条約の地球分割線を確認するためにドゥアルテ・パシェコ・ペレイラをカーボ・ヴェルデ諸島に派遣し、そこからさらに大西洋を南西に航行し始めたのが1498年11月であった。赤道を南下して、同年12月にかけて、南米大陸の最北東部にあたるブラジルのマラニャンとアマゾン川の河口付近を探検した⁽⁶⁾。したがって、実際のところ、ブラジルは1498年末にポルトガル人が到達し、「発見」されていたと言える。しかし、1500年が通説である。

ドゥアルテ・パシェコ・ペレイラがリスボンに帰還後、南半球に大陸が 存在するという情報をマヌエル国王に報告すると、1500年3月9日、リ スボンからインドへの第2回目の艦隊が出発した。計13隻をペドロ・ア ルヴァレス・カブラル司令官が率いていた。4月21日火曜日、ペドロ・ アルヴァレス・カブラルの書記官ペロ・ヴァス・デ・カミーニャによる と.「ボテーリョーまた「ラボ・ダズノ」と船乗りが呼ぶ長い草を多く見 つけたのである。これはバルトロメウ・ディアスやヴァスコ・ダ・ガマら が実践した探検航海の経験から大海の真只中にあるものではなく、どこか に陸地があることの兆しとして知られていた。南緯17度の地点で喜望峰 に向かう風を十分受けることができたはずであるが、ペドロ・アルヴァレ ス・カブラルは慎重に土地を探し始めた。4月22日の朝、「ミズナギ鳥 (フラブショ)を見つけ、夕刻、15時から日没頃に陸地を見た、つまり、 最初に高い、丸い山を、そしてその南に低い山脈、よく木が茂った平らな 土地を見た。カピタンは、高い山にはモンテ・パスコアル(復活祭の山) と、そして土地にはヴェラ・クルース(真の十字架)の陸地と名付けた。| と書記官ペロ・ヴァス・デ・カミーニャは記録している(7)。その後、ブラ ジルと呼ばれるようになった。「ブラジル」は、次に言う、「木」によるこ

とが言われてきた。

2. パウ・ブラジル Pau-Brasil (ブラジル木)

1502 年 9 月から 10 月にかけて、商人組合の 4 隻からなる艦船がリスボンを出港し、ポルト・セグーロに到達した。赤色染料の原料になる材木パウ・ブラジル、先住民を奴隷として捕獲して積み込み、1503 年の半ばにリスボンに戻った。ブラジルの地理・商業の開拓はフェルナン・デ・ロローニャが指揮する商人組合に委託されており、王室の艦船はブラジルに行かずに、賃貸契約者の艦船がブラジルとポルトガルの間の大西洋を往復していたのだった。ブラジルに商館フェイトリーアを建設し、先住民の協力を得て材木を伐採し、ポルトガルの船が来航するとフェイトリーアに保管しておいた材木を直ぐに積載できる効率の良いシステムを作り上げた。ヨーロッパのスペインやフランスにおいては、ブラジルの人々や自然の話が広まりながら書物となって広まっていた⁽⁸⁾。

3. 魅惑的な島への航海

今回, 訳出したテキストで, オネジモ・テオトニオ・アルメイダは, 次のように述べる。

「島々が知られていたから地図に現れたのではなくて、島々に関して、噂、本や伝説などを基礎にした。基本的にいかなる歴史的厳密さもなく、流行っている文献などにしたがっていた。実際のところ、架空の話と真実を区別する厳格な基準もなかったので、島々を探し求めて帆船が出航していた。存在すべき場所に島を発見できなかった時には、地図製作者たちはその島の位置を移動させていた。したがって、

架空の位置を探す事は、試行錯誤の精神で航海者たちの想像を掻き立ててしまい、既存の地図を修正していった。そして、決して発見されなかった島々から徐々に遠ざかっていくことになり、したがって、決定的に架空であると見なされるに至った。|⁽⁹⁾

具体的な例を挙げると、ピジガーノの描いた1424年の地図にはアソーレス諸島の左側に四つの島を置いた。サタナゼス島と言われたが、それは「悪魔」を意味し、夕方になると海中から大きな手が出現し、船や人々を握って海の底に沈める伝説があった⁽¹⁰⁾。しかし、地理的好奇心で接近できるような島々ではなく、このような島々の名前の源は、古典作家のほか、中世になると天地学、小説などの文学に探されるべきだという⁽¹¹⁾。ヴァイキングの海上活動、11世紀以前のヨーロッパ北部の航海者たち、15世紀の海外進出の影響も少なからずあるだろうが、神話と空想のレベルでこそ、地図が存在し、島の名前が現れる⁽¹²⁾。

まず、魅惑的島々の伝説が存在して、その島の実際の発見よりも、その 伝説の島が「ブラジル」として地図に記された。すなわち、1500年の南 米の「ブラジル」発見以前に、「ブラジル」という名前で地図に存在した。 「1367年以降の地図では、アイルランドの西方に「ブラジル」または「ハ イ・ブラジル」の島が描かれた。| (13)

歴史家ルイース・デ・アルブケルケは次のように述べる。「マルコ・ポーロは、〈グラン・ブラジル grão brasil〉について話し、サマトラでは、その植物がどのように栽培されていたのかを示す。そこから、それを生産する大西洋の土地があるのかもしれないという考えが生まれたのだろうか。それとも、〈ブラジル〉という言葉は、航海者たちが霧の向こうに少しの間見たと主張した、一種の快楽に満ちた魅惑的な島を意味するケルト語から来たのであろうか。」(14)

1500年の「南米ブラジル」発見前から、「南米ブラジル」意外の地域に

おいて染料が採れるブラジルと名前の言う「木」が存在していた。したがって、船乗りたちが、「ブラジル木」を地球規模で積載、輸送していたので、どこか特定できないけれども、魅惑的な島に付けられるようになったのではなかろうか。

南アメリカ大陸のブラジルの場合は、ヨーロッパ人が追い求めながら航海を続けた結果、ポルトガル人が発見した時、これこそが数世紀の間、伝説と空想に基づいた地図にはあったけれども発見されなかった魅惑の島、幸せなブラジルであった。

おわりに

オネジモ・テオトニオ・アルメイダは、興味に駆られてヨーロッパの人々が出航していったことを述べているに留まっているけれども、ポルトガルは地理戦略として、自国西側に大きく接した大西洋、自国と自国以外の河川や港湾を利用し、大西洋航路を築き上げた。ポルトガル王室の最終目標は宗教と帝国の拡大であったが、その実際は商業と宗教の拡大、軍事的優越、科学的興味、冒険などが交わったポルトガル王室独自のイデオロギーの実践であった⁽¹⁵⁾。

しかし、今回、オネジモ・テオトニオ・アルメイダは、ポルトガル王室独自のイデオロギーの実践とは距離を置いて、「ブラジル」の名前の由来にアプローチした。9島から構成されるアソーレス諸島出身の哲学者オネジモ・テオトニオ・アルメイダが、魅惑的島を探し求めることは、様々な理由で島を出た人々が自分のアイディンティーを求めて10番目のユートピアの島(16)を探し求める事と交差しているのではないかと信じて止まない。

《注》

- (1) Onésimo Teotónio Almeida, *Mensagem Uma Tentativa de Reinterpre-tação* (Prémio de Ensaio Roberto de Mesquita), Secretaria Regional da Educação e Cultura dos Açores, Angra do Heroísmo, SREC, 1987. 更 に *Pessoa, Portugal e o Futuro*, Lisboa, Gradiva, 2014.
- (2) Onésimo Teotónio Almeida, A Obsessão da Portugalidade, Lisboa, Quetzal, 2017.
- (3) Onésimo Teotónio Almeida, *Açores, Açorianos, Açorianidade Um Espaço Cultural*, Ponta Delgada, Signo, 1989, 2ª edição alargada, Angra do Heroísmo, Instituto Açoriano de Cultura, 2011. 第 2 版では、訳者を日本人のアソーレス研究者として言及した。
- (4) Onésimo Teotónio Almeida, Século dos Prodígios A Ciência no Portugal na Expansão, Lisboa, Quetzal, 2018. Prémio Gulbenkian Portugal no Mundo, Academia Portuguesa de História, 2018; Prémio D. Diniz, Solar Casa de Mateus, 2019.
- (5) Onésimo Teotónio Almeida, From "Ilha de Vera Cruz" to Brazil", in Navegação no Atlântico XVIII Reunião Internacional de História da Náutica, Coordenação de Francisco Contente Domingues e Susana Serpa Silva, CHAM Centro de Humanidades (Universidade Nova de Lisboa e Universidade dos Açores), novembro de 2019, pp. 365-380. 2020 年 2 月 20 日, 日本語独占翻訳許可取得済み。同雑誌には、英語版が掲載されている。本稿は、著者より特別に送付されたポルトガル語原稿 De "Ilha de Vera Cruz" a "Brasil" より翻訳。
- (6) Jorge Couto, A Construção do Brasil, Edições Cosmos, Lisboa, 1997, pp157.
- (7) 浜岡究「スペイン・ポルトガルの大西洋制海権争い」, 『武蔵大学人文学会雑誌』第39巻第3号,2008年1月,153頁-157頁。更に,浜岡究訳「翻訳:ジョルジェ・コウト『ヴェラ・クルースの発見』」in Anais, XXXIV (2001), AJELB (日本ポルトガルブラジル学会),2004年,89頁-91頁。その他,浜岡究『「ブラジルの発見」とその時代 大航海時代・ポルトガルの野望の行方』,現代書館,2006年,15頁-18頁参照。
- (8) 浜岡究「ポルトガルのブラジル植民政策」,『武蔵大学人文学会雑誌』第 39 巻第 4 号, 2008 年 3 月, 80 頁-81 頁。
- (9) Onésimo Teotónio Almeida, From "Ilha de Vera Cruz" to "Brazil", p. 372.
- (10) Onésimo Teotónio Almeida, "Plutarco e as ilhas Santanazes do mapa de

- 1424", in O Século dos Prodígios A Ciência no Portugal na Expansão, Lisboa, Quetzal, 2018, p. 311.
- (11) Ibidem, p. 318.
- (12) Ibidem.
- (13) Onésimo Teotónio Almeida, From "Ilha de Vera Cruz" to "Brazil", p. 375.
- (14) Luís de Albuquerque, *Introdução à História dos Descobrimentos Portugueses*, 4ª. ed., Mira-Sintra Mem Martins, Publicações Europa-América, 1989, p. 156. そこでは、" Marco Polo fala "do grão brasil" e indica até como a planta se cultivava em Samatra." とあり、a planta「植物」とあることから o grão brasil は、「植物」、「植生」を示すと理解できる。
- (15) 浜岡究「ポルトガルの大西洋進出に関する考察」,『武蔵大学教職課程研究年報』2012年5月,第26号,63頁。
- (16) オネジモ・テオトニオ・アルメイダは、アメリカに移住した人々の文化アイディンティティーに特に関心を抱いた。その多くの研究はポルトガル語の論文や書籍である。「第10番目の島」を探し求めても見つからない移住者たちのユートピアとして扱った代表的な書籍として以下がある。Onésimo Teotónio Almeida, *L (USA) lândia A Décima Ilha*, Angra do Heroísmo, Colecção Diáspora, Secretaria Regional dos Assuntos Sociais e Direcção dos Serviços de Emigração, 1988. 異文化への同化の困難さを論じた興味深い論文として Onésimo Teotónio Almeida, "Estruturas Culturais Profundas? a propósito do duplo regresso dos emigrantes", in *Revista da Semana Cultural de Velas*, Velas, São Jorge, 1992. がある。

「ヴェラ・クルース島」から「ブラジル」へ

De "Ilha da Vera Cruz" a "Brasil"*
por Onésimo Teotónio Almeida

オネジモ・テオトニオ・アルメイダ 著 浜岡 究 訳

ずいぶん前からいかなる疑問も起こさせない事柄について、何かの新規な仮説を考えることは、軽率、無謀であるように思われるかもしれない。つまり、「ブラジル」という名前についてである(1)。このテーマについては

^{*2019} 年 5 月 28 日, ポルトガル海軍アカデミーにおける講演会で口頭発表された 論文。

⁽¹⁾ 海軍アカデミーにおける私の講演の発表の終了時に、ブラジル人学者ジョゼー・パウロ・カヴァルカンチが私に次のような注釈を渡した。「ブラジル」は、赤色染料が採取できる木 pau-Brasil にその名前が由来するという説が広く受け入れられ続けている。しかし、諸説がある。

^{1.} 遠くに見るといつも航海者たちから遠ざかっていた神秘的な島。Hy-Brazil (Eduardo Bueno, 1998)

^{2.} 祝福する意味の英語の動詞 bless の起源になったケルト語 bress に由来する。この語は、「祝福・加護された土地」を意味したのではないか。(Eduardo Bueno, 2013) 単に、その材木商人たちが brasileiros と呼ばれていたので、島ではなくて、木材への結びつきが優位になった。

^{3.} ヘブライ語 barzel, つまり berzel, ferro (鉄) を起源とする。pau-brasil は、"apu-ferro"の類義語ではないか。

^{4.} ヘブライ語学者たちは、国の名前とヤコブの4人の妻の間で相関関係があるのではないかと信じる。その妻たちは聖書にBila, Rachel, Zilpa, Lea の名前で現れる。ブラジルという単語の子音部分B-R-Z-Lと一致する。この国は、遥か昔から、ヤコブの子供たちの祖国だったのであろう。

多くのことが書かれているので、既知の事を繰り返すことは、私はかろうじて回避する。けれども、私は、以前からこの問題に好奇心をそそられ、 長年の間、収集してきた全ての情報を関係書類一式として積み上げていった。それらの幾つかは興味深い。例えば、「ブラジル」という名前の起源について次のような説明がインターネットで出回っている。

「ブラジルという名前は、Beth Israel (A casa de Israel イスラエルの家) という名前からとられた事をあなた方は知っていましたか。

そうです。本当です。パウ・ブラジル pau Brasil(ブラジルの染料が採れる木)を発見したのは、カトリック異端審問所によって強制的に改宗させられたユダヤ人の服の仕立屋でした。先住民がパウ・ブラジルを用いて体を赤色に染めているのを見た時、そのユダヤ人仕立屋は服を染めるために試す事を決断しました。すると、結果は成功したので、ユダヤ人仕立屋は、その木に Beth Israel(casa de Israel)の名前をつける事に決めました。彼がユダヤ人である事の疑念を巻き起こす可能性があるので、ユダヤ伝統に従ってフレーズの文字を抜き出すことに決めました。最初の4文字 ISRA = RASI(ヘブライ語は右から左に書くこと暗示し、タッリート(ユダヤ教の礼拝の時に男性が着用する布製の肩掛け)とツィーツィート(世界の果ての四箇所を表す四つの紐)を意味する。そして、彼は、Eを Beth の B と代えるとBRASI となった。そしてLは元の位置に残しておいて BRASIL となった。アラム語で DIO(DEUS 神)を意味する、創造主 EL の名前を無駄に置かないために、彼は Eをとった事に留意してください。」⁽²⁾

⁽²⁾ https://blog.lusofonias.net/?p=793

私の講演のこのテーマをフランシスコ・コンテンテ・ドミンゲス教授 に、少々おずおずと提案した時、彼がこのテーマについてすでに書いてい たかどうか尋ねた。次のような説明を返答として受け取った。

「いいえ。私は何も書いていません。しかし、興味をそそる事があります。明らかに、想像上の島ブラジルは、1500年の発見以降になってから、地図製作において現れています。その不思議な島は、1500年以降になってから新しい土地として命名されたのではないかという考えが、無分別なものでないように私には思われます。大航海時代の「動機」のひとつが、これらの想像上の島々を探すことであったと、毎年、私の学生たちに気づかせているからです。時々、島々を探す目的で、出航していた事を報告するジョアン・アフォンソ・ド・エストゥレイトの遠征の目的のような、客観的証拠があります。そのことに関して、偶然にも私は何かを書いていたようです。よく覚えていますが、この程度の考えであり、これ以上は発展させなかったようです。

私の知っているところでは、それらの「動機」の重要な要因として想像上の地理に言及している唯一の歴史学者は、ルイース・デ・アルブケルケであり、その著書は1959年刊行の『大航海時代の歴史への導入』です。」⁽³⁾

すでに述べたように、この問題に関する私の関心は以前からあった。コロンビア、ボゴタにおけるポルトガル大航海時代に関する国際学会にて、ブラジルの名前についての解釈は如何なるものか、私は、歴史家ルイー

^{(3) 2018}年9月18日付メール。

ス・フェリペ・トマスに対して質問した。彼はとても精通しているので、 彼が考えるところを要約して書き、私に渡してくれた。その文書を以下に 引用する。

「ブラジルという名前はイタリア語 verzino に由来する。verzino はブラジル木を意味し、アラビア語 warsi から派生する。warsi は「wars の色の」の意味で、イエメンの植物から抽出された黄色染料の名前である。もし、私が間違っていなければ、ツルムラサキ科のMemoxylum (または Memecylon?) tinctorium の一種である。

- warsi > verzino. brasil(確実に、真っ赤な炭火 *brasa* の混成)
- 一ブラジルという名前は、pau de sapão パウ・デ・サパン(12世紀 以降ヨーロッパの市場で現れる南西アジア原産の豆科の Caesalpinia sappan スオウ)と言われた、アジア・ブラジル木 pau brasil asiático に適用されはじめた。
- 一クリストファー・コロンブスが、第2回目の航海で、イスパニョーラ島(サントドミンゴ島)西部海岸にて、そして3回目の航海で、パリア湾(ベネズエラ)にて、pau brasil に遭遇した。つまり、brasilete または brasil-açu(高い木なのでトゥピーガラニー語で"brasil grande"大きい木)と呼ばれた Caesalpinia brasiliensis のことである。これからは、質のよくない染料が出た。
- 一アメリコ・ヴェスプッチが 1501 年から 1502 年にかけてブラジルに 向けて航海した時、より良い質の染料が採れる木の種類の存在を発 見した。それは、灌木としては大きな部類に属する棘のある小ぶり の樹木 *Caesalpinia equinata* であり、"pau de Pernambuco" ペルナンブーコ木と呼ばれ、直ちに商業化され、その地方の名前となる

に至った。|⁽⁴⁾

ジョエル・セラン編『ポルトガル歴史事典』における Brasil の項目は、名前の起源の問題について触れていない ⁽⁵⁾。フランシスコ・コンテンテ・ドミンゴゲス編『ポルトガル海外進出事典 1415 年-1600 年』の中で、ジョルジェ・コウトは、"Pau-Brasil" についての項目を次のような主張とともに終えている。

「1500年代半ば以降、パウ・ブラジルの経済的優位性は、砂糖と綿の輸出によって次第に減少していった。1500年代後半20年が過ぎた頃、アフォンソ・デ・アルブケルケからマヌエル国王に宛てた手紙と、マルティニの地球儀(1512)にも「ブラジル」という言葉が、ポルトガル領アメリカを示すために初めて浮上し、正式名称であった「サンタ・クルース(聖なる十字架)の土地」、イタリア名称の「オウムの土地」または「ゴンサーロ・コエーリョの土地」などより優勢になった。キリスト受難のシンボルが、「布を染める木」に替わったことは、16世紀後半になると、「悪魔の仕業」だとして、ジョアン・デ・バロス、ペロ・マガリャンイス・デ・ガンダーヴォによって厳しく批判されることになった。」(6)

「ブラジル」の名前についての私の書類集の中のメモには、ダニエル・

^{(4) 2013}年4月25日、コロンビア、ボゴタ、ロス・アンデス大学における手書きメモ。

⁽⁵⁾ 執筆者の署名は J. A. G. de M., pp. 373-382.

⁽⁶⁾ Jorge Couto, "Pau-Brasil", in *Dicionário da Expansão Portuguesa*, direcção de Francisco Contente Domingues, vol. 2. Lisboa: Círculo Leitores, 2016, pp. 619-620.

デ・サー⁽⁷⁾がポンタ・デルガーダ文化研究所に向けて書いた記事の一節がある。それを引用する。

「ブラジル brasil という言葉. そして複合語パウ・ブラジル pau-brasil は、とても古い時代からポルトガル語の中に存在する。ガスパール・ デ・レモスがマヌエル国王に運んだブラジル発見の知らせの書簡を締 めくくるときに、書記官ペロ・ヴァス・デ・カミーニャは次のように 書いた。「本日、1500年5月1日金曜日、国王陛下のヴェラ・クルー ス(真の十字架)の島のこのポルト・セグーロ(安全な港)より。| (マヌエル国王がカトリック両王に宛てた手紙では、新しい土地を発 見したこと、ブラジルがサンタ・クルースの土地の名前になることを 知らせることになった。) 寄港する土地の地理的状況を決定するため にポルトガル艦隊に随行した天文学者ジョアンもまた。マヌエル国王 に書簡を送り、その中で次のように述べた。「国王陛下、この土地の 場所については、ペロ・ヴァス・ビザグードが携えている世界地図を 持ってくるように、御命令を下されますようお願い申し上げます。地 図を通じて、この土地の場所をご拝見なさることができるでしょう。 しかし、その世界地図はこの土地に人が住んでいるかどうかをお知ら せするものではございません。それは昔からの地図で、そこには国王 陛下は、アフリカ沿岸にあるミナを発見されるでしょう。昨日、私た ちは、ここは島であり、その数は四つだと理解しました。そして、彼 らとの戦闘と捕虜の捕獲のために、他の島からここに丸木舟がやって 来ました」。その書簡の最後には、ジョアンは次のように書いた。 「1500年5月1日、ヴェラ・クルースにて署名」。したがって、あの 推測に基づいた島は古い地図に言及されてきたことは確信できるとし

⁽⁷⁾ アソーレス諸島の作家、歴史研究者(1944-2013)。

ても、それらの地図の中で島に名前が付けられていなかった。数年後 になってやっと浮上する「ブラジル」という名前が、偶然にも、古い ケルト伝説の中の迷信によるものであったならば、確かに、広大な領 域の最初の名前であるブラジル島 Ilha Brasil であったのであろう。 ジョアン・デ・バロスは、その著『10年紀』(1552)の中で、次のよ うに述べた。「あの土地から、沢山のブラジルと呼ばれる赤色の木が もたらされ始めたので、その名前が人々の口に留まるようになり、サ ンタ・クルースの名前が失われた。我々が救われるキリストが流した 血の色で全てのサクラメントに色彩を与える木よりも、布を染める木 の〈名前〉の方が、どれほど重要になったことだろうか 。そして、 次の世紀になると、最初のブラジル史の著作者であり、ジョアン・ デ・バロスの作品を読んでいる可能性のあるヴィセンテ・ド・サル ヴァドール修道僧が記述した。「また、この世で多くのものを失うこ とを恐れながら、人間性を失い、十字を切ることをしない悪魔のよう に、最初のサンタ・クルースの名前を忘れ、ブラジルの名前を維持す ることをもたらした。[]⁽⁸⁾

ジョゼー・マヌエル・ガルシアによれば、ブラジルという名前は、アフォンソ・デ・アルブケルケがマヌエル国王に宛てた1512年4月1日付け書簡の中で、初めて現れる⁽⁹⁾。しかし、ブラジルという名前は、材木であると思われるものに言及するためであるけれども、その土地と結びついて浮上する。ドゥアルテ・パチェコ・ペレイラは、自著『エズメラルド・

⁽⁸⁾ この問題に関する私の書類集のメモ。このテーマについてダニエル・デ・サーと長い間議論をした。彼が必要な時にこそ、彼があまりにも早く逝くとは想像もしてなかったので、このテキストの出所を詳細に記録していなかった。

⁽⁹⁾ José Manuel Garcia, *A Descoberta do Brasil por Pedro Álvares Cabral*, vol. 8 da série Descobrimentos, Lisboa, Jornal Público, 2015, pp. 91.

デ・シトゥ・オルビス』(1505-8?) 第1巻の第2章冒頭で述べた。「南極に対し28度の緯度で、同じ昼夜平分圏の前述の沿岸に沿って屈曲しながら行くと、多くの素晴らしいブラジル木が、他の多くのものと共に見つかり、複数のポルトガル王国の船がそれらを沢山積載してやって来た。」(10)

ブラジルという用語は、コニマタの土地に言及したヴァスコ・ダ・ガマの航海についてのアルヴァロ・ヴェーリョ著『航海記』に現れる。コニマタの土地では、「戦闘に使う数千頭の象がいる。そして、沢山のサファイアとブラジル木が存在する。」(11) そして、もっと後になって、「ブラジル木の1キンタルの値段は、10クルザードである」(12) と説明する。1箇所以上のところにブラジル木があったことを示すので、この詳述は無意味ではない。この特殊な場合において、南米ブラジルの土地の言及を取り扱っていないことは明白である。というのも、テキストで述べてきているように、象が沢山いる土地として挙げていることが明白であるし、その上に、ブラジルという領域はまだ「発見」されていなかったからである。同じタイプの木がまた存在するそれらの他の場所は、ブラジルという名前を得ていなかった。そのことは、私たちに疑問点を構成することになる。

私たちは、現在、ブラジルという土地から、ブラジル木の商業についてのとても多くの情報を所有している。調べてみると、随分早くから始まった。『ポルトガル史電子ジャーナル』に刊行されたカメロン・ドッジの論文「ブラジル木の忘れられた世紀:砂糖危機後のブラジル貿易」は、ブラ

⁽¹⁰⁾ Duarte Pacheco Pereira, *Esmeraldu de Situ Orbis.*, Lisboa, Imprensa Nacional, 1892, cap. 2°, p. 49.

⁽¹¹⁾ Álvaro Velho, Roteiro da Viagem de Vasco da Gama em MCCCCXCVII, 2ª. Ed., correcta e augmentada de algumas observações principalmente philologicas por A. Herculano e o Barão do Castello de Paiva, Lisboa, Imprensa Nacional, 1861, p. 113.

⁽¹²⁾ Ibidem. p. 115.

ジル木の商業について初期にまで遡る。1502年、リオ・グランデ・ド・ノルテからパラナー沿岸に沿って航行したゴンサーロ・コエーリョ司令官の艦船に、アメリコ・ヴェスプッチが乗船し、<無限の量のブラジル木(パウ・ブラジル) > (13) を見つけたことに言及した後に、ドッジが述べる。

「ブラジル木 (パウ・ブラジル) の商業は、16世紀初頭に、ポルトガル人のブラジルへの最初の航海と共に始まった。ヨーロッパの国によるブラジル発見を成したペドロ・カブラル司令官の艦隊が、初めてポルトガルに向けてブラジル木を輸出した。1500年4月、ペドロ・カブラルの艦隊は、将来のバイーア州のポルト・セグーロに到達した。1週間の滞在の後、艦隊の大部分は、航海の当初の行先であったインドの方角である喜望峰沖に向けて航行を続けた。しかし、マヌエル国王に新しい領域の発見を知らせる目的で、艦隊の補給船にて、ガスパール・デ・レモス艦長をリスボンに帰還させるように命じた。レモス艦長の艦船は、ヨーロッパ人の短い滞在中にブラジル先住民によって伐採され、しっかりと準備されたブラジル木の積荷を運んでいた。

ブラジル発見の知らせ、そして、はじめてブラジル木の積荷がリスボンにもたらされたことに直面して、マヌエル国王は、カブラルが到着した新しい土地の探査を続ける目的の第2派遣隊を急いで派遣した。この派遣隊は、その領域に存在する<無限の量のブラジル木>の知らせを齎し、そして勿論、赤く着色する木の新たな積荷をリスボンに運んできた。

これらの2つの航海はブラジルにおけるブラジル木の量と、その領

⁽¹³⁾ Amerigo Vespucci, "Carta de Américo Vespúcio a Lourenço dei Medici", in Janaína Amado e Luiz Carlos Figueiredo (org.), *Brasil 1500: Quarenta Documentos*, São Paulo, Editora da Universidade de Brasília, 2001, pp. 273-283.

域の潜在的経済価値をポルトガル王室に対して明らかにする結果を得た。1502年,第2派遣隊が帰還後,ポルトガル王室は,初期にブラジル木商業に出資を申し出た個人商人に対し、その領域での交易支配権を付与し始めた。

商業活動の数十年間、ポルトガル王室の承認は、個人または合同企業に認可された独占契約の形態であったので、その時から、その商業に携わる者たちは、ブラジルから直接ブラジル木輸入の排他性を得るに至った。すでに随分前、15世紀の間、ポルトガル人がアフリカの大西洋沿岸を南に向けて徐々に海路を開いて行くに従って、アフリカ西岸の領域における交易支配権に関して、ポルトガル王室は似たような独占契約を実現していた(Sousa、1978: 58)。16世紀のブラジル木の契約は、新世界に向けて、ポルトガル帝国の伝統的商業実践の単なる延長であった。

マヌエル国王は、フェルナン・デ・ロローニャによって指揮されるリスボンの商人たちの合同企業に対して、はじめての契約を与えた。契約の最初の3年間に関して、ポルトガル王室は、ロローニャと彼の仲間たちに、次の事を定めた。ブラジル木を商業化するために、毎年、ブラジルに向けて6隻の船を派遣させること。各派遣の間、その土地の沿岸部300レグア以上の範囲を探査すること。沿岸部に要塞を建設して管理すること。要塞建設とその守備隊の維持を含めて、これら全ては商人たちによって費用が支出されなければならなかった。その上、商人たちは、利益の合計の一部を王室に支払う義務があった。1年目は支払い無し。2年目は6分の1を、3年目は4分の1を支払う。契約の期間が増大するに従って、契約の目的も本質的に非常に経済的になり、そして取引が許されたブラジル木の量もより明確になった。

1505年以降, 商人たちは, 毎年, 2万キンタルのブラジル木を輸入

することを許可され、その特典として、毎年、4000 ドゥカードスを 支払わなければならなかった。

非常に重要なことは、競合するアジア産の染料を出す他のいかなる 木も輸入を禁じることに、ポルトガル王室が同意したことである。

基本的に、この方策は、ロローニャと彼の仲間たちがリスボンに運んでくるブラジル木が、レヴァントを通じて別の輸送経路からやってきていたものを除いて、ヨーロッパで使用できる唯一の染料の木となったことを意味する。

ロローニャの合同企業は 1502 年と 1503 年にブラジルへの遠征隊を組織し、ポルトガル国王に対する商人たちの義務と、そのグループの独占権のお陰で得られた利益に関して、素晴らしい結果を得た。最初の遠征では、カーボ・デ・サン・ロッケからポルト・セグーロまでの、ブラジルの広大な沿岸エリアを地図として記録する結果を得た。その航海では、ブラジル木と先住民奴隷の積載を実施し、リスボンに持ち帰った。」(14)

さて、ここで、用語に関して、はじめての使用の問題から離れて、時を超えてみよう。南半球で発見された土地が当初はヴェラ・クルースと名付けられていたのが、豊富なブラジル木の存在によって、19世紀までにその土地の名前がブラジルとして定着した。そして、アイルランドの西方に位置する島が記載された古い地図が発見され始めたが、その名前は年月を経るに従って様々な相違があり、場所も変貌していった:Breasail、Breasil、Brazi、Brazi、Brazi、Brazi、Brasil。それらの地図を調査すると、その島は「ケ

⁽¹⁴⁾ Cameron J. G. Dodge, "A Forgotten Century of Brazilwood: The Brazilwood Trade from the Mid-Sixteenth to the Mid-Seventeenth Century", e-Journal of Portuguese History, Vol. 16, number 1, June 2018. Tradução de José Francisco Costa.

ルトの奇跡的噴火」であると認めている。パウロ・フェレイラ編『ポルトガル魅惑的場所百科事典』(15)) によると、14世紀の第1四半期以来、航海地図に現れる。たとえ、名前に多様性があり、常に厳密に同様の位置になくても、同じ島を示しているように思われる。実際のところ、ブラジルと呼ばれる島は、例えば、1325年-1330年のカタルーニャの地図、1339年のドゥルセルトの地図、ベネチアの地図製作者アンドレア・ビアンコの地図の中に既に現れる。ベネチアの地図製作者ズアネ・ピジガーノと、有名ではないがワイマールと呼ばれる者の地図の中にも現れる。両者とも1424年のものであるが、ちなみに、この地図には、同じ様にアソーレス諸島と、アンティリア、サタネーゼス、サヤ、ワイマナの島々が現れる。ジェノヴァ人バティスタ・ベカリオの1435年の地図に、同じ島々が同一の様相で現れる。地図には、<新しく最近発見された島々>との補足表現を通じて、伝説の島々が明白であり、絶対に実際のアソーレス諸島と同一視される。同様のことは、1455年のバルトロメウ・パレトの地図、1470年と1482年のグラシオーゾ・ベニンカーザの地図について言える。

現在、O'Brasil は、Hy Bressail または O Brazil に由来するアイルランドの苗字(おそらく加護・祝福された島を意味する)であり、言葉の乱れから Brasil、Bracil、Bracir ともなった。その島は、デモニオス島(16)の他、アーサー王物語のアヴァロン島、サン・ブランダン島、グロネランディア島などと共に地図に現れる。前述の百科事典が記述する様に「困惑したクリストファー・コロンブス」を含めて、その島は熱心に探された。島の探索に焦点を当てると、地図製作者たちは、彼らが発見した島々を

⁽¹⁵⁾ Paulo Ferreira, *Enciclopédia dos Lugares Mágicos de Portugal*, Volume 8, Lisboa, 2006.

⁽¹⁶⁾ Onésimo Teotónio Almeida, "Plutarco e as ilhas Satanazes do mapa de 1424", in O Século dos Prodígios. A Ciência no Portugal da Expansão, Lisboa, Quetzal, 2018, pp. 311-320.

地図に載せたのではなく、島々のことを仄めかされたのであった。少しずつ、あてもなく地図に載せ始め、徐々に、地図制作法に取り入れられたが、船乗りたちの経験により伝えられたものではなく、空想上の島々であったので、より複雑になり、それぞれ相違した島々を描く様になった。島々について、聞いたり、読んだり、伝承されただけで描いていたので、実際に、見つけられた島ともまた相違していた。「架空の・神秘的な」島は、形が曖昧な一方で、すでに発見された島々は、厳格な沿岸線などで正確な再生に努めた。

繰り返しになるが、島々が知られていたから地図に現れたのではなくて、島々に関して、噂、本や伝説などを基礎にした。基本的にいかなる歴史的厳密さもなく、流行っている文献などにしたがっていた。実際のところ、架空の話と真実を区別する厳格な基準もなかったので、島々を探し求めて帆船が出航していた。存在すべき場所に島を発見できなかった時には、地図製作者たちはその島の位置を移動させていた。したがって、架空の位置を探す事は、試行錯誤の精神で航海者たちの想像を掻き立ててしまい、既存の地図を修正していった。そして、決して発見されなかった島々から徐々に遠ざかっていくことになり、したがって、決定的に架空であると見なされるに至った。

最も典型的な例はアンティリアの島であり、偉大な地図製作者アンルマンド・コルテザンは、その実際の位置がアメリカ大陸の可能性を示唆した大きな論文を書いた。周知のように、アンティル諸島は他に選択の余地がなくてその名前を受けることになった。即ち、どのあたりにもアンティリア島を見つけた者がいなかったので、南アメリカの北西にあるあの諸島のどこかのひとつであろうと思われ、実際にアンティル諸島として知られるようになった。ジブラルタル海峡を超えたところにある島々にギリシャ人が付けた名称であるマカロネシア(幸福な島々)は、同じような経緯でその名前を受けたに違いない。相違としては、フェニアキア人もギリシャ人

でさえ、少なくともカナリア諸島を知っていた可能性が大きいことである。他の諸島(マデイラ、アソーレス、カナリア、カーボ・ヴェルデ)が 現れるにしたがって、その名前マカロネシアは不動となり、現在でも地理 において、四つの諸島が一体となってマカロネシアという名前を共有する。

ギリシャ人とジブラルタル海峡の向こうにある島々に関して、ジェームズ・S・ロンムが述べる。

「実際のところ、通常はジブラルタル海峡の入り口に存在するふたつの岩に関連している名前である「門・柱」もしくは「ヘラクレスの柱」は、すでに親しまれていた地中海と未知の大海の間を唯一連結させた。内部と外部、ふたつの世界の間の出口もしくはバリケードの生き生きとしたシンボルとなった。基本的に、航海者たちがそれ以上先に進まないようにする知らせとして、〈ノン・プルス・ウルトラ〉禁止された場所としてギリシャ人の空想の中に留まった。例えば、ピンダロスは、勝ち誇ったアスリートに対する祝福において、人間の果敢の限界の指標としてこの陸標を採用した。例えば、セロンが、自分の偉業において、全ての力の限界に達した時、ヘラクレスの柱に触れた。博学でも無知の人間でも、誰しも向こうにあるものに近づくことはできないだろう。もしもそれを試みるならば、それは即ち馬鹿者だ。」(17)

ジョン・ギリスは、その著『心の島々』において、島々に関して次のようにとても鋭い主張をしている。

⁽¹⁷⁾ James S. Romm, *The Edges of the Earth in Ancient Thought*, Princeton, NJ, Princeton University Press, 1992, p. 17.

「島々は、どのような他の陸の形成よりも非常に広大な感情の連続的な変化を引き起こす。島々に、我々は最も激しい願望を投影する。島の中では、我々は尋常でない自由を感じる。しかし、閉じ込められた感じも得る。」⁽¹⁸⁾

ギリスのその著書の別の記述は引用に値する。

「14世紀と15世紀頃には、ヨーロッパ大陸の空間は、かなり高い精度で地図に記載されていた。しかし、もしも、地理が大陸の中で新たな生命を得ようとしていたならば、地理はその再生を大海に得た。中世の港湾海図帳が、次第に大きな明確さを生み出していった一方、漠然とした大海が、思索に向けて残った。知られなかった事は全て島であると想像した。そして、中世の終わりに、広大で連綿としたひとつの大陸だけを描いたマッパ・ムンディ(世界地図)は、沿岸から遠く離れた島々に限って集中する新しいタイプの地図作成法と競わなければならなかった。イゾラリオとして知られた、これらの島々についての記録は、ベネチアにて大量の数が生産された。ベネチアこそ島々の上に建設された街であり、そして、地中海全域に進展した島嶼帝国の拠点であった。」(19)

ギリスは、主張しながら続ける。

「<イゾラリオス>または<インスラリオス>は, 航海を目的としていなかった。P.D.A.ハーヴェイは, それらを, 個人の見解, 口述

⁽¹⁸⁾ John R. Gillis, *Islands of the Mind. How the human imagination created the Atlantic World*, New York, Palgrave Macmillan, 2004, p. 3.

⁽¹⁹⁾ Ibidem, p. 42.

物語から得た事実,作りごと,空想と歴史起源の多様性の乱雑な混合物として描写した。(…) 15世紀に,島々は,ヨーロッパの空想の中で特別な位置にすでに到達していた。<イゾラリオス>の並外れた人気によって証明された事実である。」(20)

ギリスの著書の次の章は、「大航海時代における空想の飛び石としての 島々」と題するもので、次のように主張して始める。

「ヨーロッパ人が、陸地が見えなくなるほど遠くの海を彷徨う冒険をした頃よりも随分前、彼らは、決して航海したことのない大海が、見たこともない島々で満ちていると想像していた。心の動きが、常に、体の動きに向けて道筋を準備する。想像された自然に基づいた目的と探索すべき陸地の想像内容が無いままでは、どのような探索・冒険事業も始まらないと、ジョン・アレンは、我々に告げる。」⁽²¹⁾

これら全ては、綿密に言って、新規なことでは無い。プラトンが言い出した島・大陸、即ちアトランティダに関する典型的なケースはよく知られている (22)。中世において、ギリスは、著書の一章を全て捧げたテーマく islomania アイロマニア> (23) が流行したのだと主張する。例えば、サン・ブ

⁽²⁰⁾ Ibidem.

⁽²¹⁾ John L. Allen, "Lands of Myth, Waters of Wonder: The place of Imagination in the History of Geographical Exploration", in *Geographies of the Mind: Essays in Historical Geography*, ed. David Lowenthal and Marilyn Bowden, New York, Oxford University Press, 1976, p. 43. からの引用。

⁽²²⁾ このテーマについて筆者は以下のテキストを書いて口頭発表した。"Gaspar Frutuoso, um espírito moderno voltado para a experiência – a sua crítica a Platão", texto apresentado na Academia das Ciências de Lisboa.

⁽²³⁾ 用語は以下の著書から現れた。Lawrence Durrell, Reflections on a Marine

ランダン島は、その当時にヨーロッパに驚くべき大きな魅惑を与えた。

しかし類似した特徴がある違う例は、コロンブスによるインドの思い込みの発見である。バハマ諸島は、コロンブスが上陸したと判断した、知られた土地の名前を受けた。つまり、インドである。あの土地はインドではなかったと確かに証明された後になってから、その名前は変更されたが、まだ同じ状態を保っている。つまり、西インド諸島である。

同様の現象がブラジル島のケースにも発生していたに違いない。興味を引かれるのだが、ジョン・ギリスもジェームズ・S・ロンムも、彼らの著書の中でその島ブラジルに言及しない。しかし、ダブニー家によってアソーレス諸島に招待されピコ島の山に登ったトーマス・ウエントワース・ヒギンソン⁽²⁴⁾ は、1899年の自著『魅力的島々の話』の中に、ブラジル島に関して小さな章「キルワンの Hy-Brasil または Hy-Brasile の探索」をすでに含めていた。ヒギンソンは、反意接続詞「または」に続けてHy-Brasile を書いている。ヒギンソンは、アイルランドから出発してブラジル島に行ったと考えられる若いキルワンの旅の話を語る。キルワンは祖父からその島のことをよく聞いていた。しかも、アイルランドの全ての高齢者たちはその島を遠くに見たことがあると断言していた。その記述は、次のように終わる。

「若いキルワンに関して、彼の仲間の何人かは彼について意見を表明することを躊躇わなかった。彼らの言葉によれば、キルワンは、常に、かつて聞いたことも無い程の大嘘つきものだった。」(25)

Venus: a companion to the landscape of Rhodes, London, Farber & Farber, 1953.

⁽²⁴⁾ アメリカ人 (1823-1911)。エミリー・ディキンソンの教師。ダブニー家の招待でアソーレス諸島に一時的に滞在した。

⁽²⁵⁾ Thomas Wentworth Higginson, Tales of the Enchanted Islands, 1899.

ヒギンソンは続けて、その章を締め括る。

「確かなのは次の事だ。ブラジル島、または Hy-Brasail は、アイルランド近くに位置するものとして 1367 年以降の日付のある地図に現れる。100 年後、その島を発見しようとブリストルから多くの船が出港がした。1636 年頃、沿岸から遠くに見えたとの言及がある。そして、やがて 1850 年以降、ロンドン海軍省海図には、ブラジル・ロックとして現れる。多くの人が、その土地を見つけようとしても失敗したならば、どうしてキルワンは試みて、成功していなかったのだろうか。魔法使いや魅力のある城などを話に付け加えながら、彼が話を少し誇張した事実については、当時、同様のことを試みるような航海者がいなかった。」(26)

ドナルド・S・ジョンソンは、自著『大西洋の幻の島。存在しなかった 7島の伝説』の中で、大西洋の地図に挿入された想像上の島々について個別の章を設けている。章のひとつは、Hy-Brazil、キリスト教信者の著者らが書いてきた、恐らく「理想の幸福な島」、または「喜びの島」についてである。ジョンソンが述べる。

「その島は、数多くの名前を持つだけでなく、ブラジルという名前は、様々で相違する島に対して、同じ地図の中で、しばしばつけられる事が頻繁な事だった。1367年のピジガーニの地図には、<Brazir>は、明白に、アイルランドの南西沿岸の沖合に位置する、丸い形の島につけられている。同時に、アソーレス諸島中央グループのひとつの

p. 132-133.

⁽²⁶⁾ Ibidem, p. 133.

島が、 < Insulla de Brazir > と呼ばれている。1385 年のソレリオの地図では、 < Brazil > が二つ現れている。ひとつは、アイルランドの西方で < Insula de Brazil > 、もうひとつは、アソーレス諸島の中で、 < Brazil > とある。1470 年のベニンカーザの地図、そして、1455 年のバルトロメオ・パレトの地図もまた、アソーレス諸島の島(現在のテルセイラ島)を < Isola de Brazil > と < Insulla de Brazil > と示す。」 (27)

「Hy-Brazilへの旅」の章において、ジョンソンは、イギリスのブリストル港について述べる。ブリストルとアイルランド、スペイン、ポルトガルとの密な交易、数々の極東に向けて試みて失敗した旅など。そして次に、付け加える。「もしも Hy-Brazil が見つかれば、それは好適な作戦基地として機能を果たすであろう。」⁽²⁸⁾ そして、さらに述べる。

「誰かが、神話に強固に基づいて、Hy-Brazil を見つける希望を本当に持つ事ができることを信じることは難しい。それにも拘らず、この魅惑的な島を発見するために非常に大きな努力が展開された。その確信があまりにも強く、1480 年に、<80 トンの艦船が、アイルランド西方の Brazil 島が位置していた遠方に向けて、ブリストルから出航した $>^{(29)}$ 。ウィレルムス・ボトナー(ウィリアム・オブ・ワーセスター、1415-84)の著書の中のこの遠征の描写は、<イギリス全土で最も熟練した船乗り>ジョン・ジェイ・Jr. トマス・ライドの指揮下、

⁽²⁷⁾ Donald S. Johnson, *Phantom Islands of the Atlantic. The legends of seven lands that never were*, New York, Avon Books, 1996, pp. 114-115.

⁽²⁸⁾ Ibidem. p. 115.

⁽²⁹⁾ Henri Harrisse, *The Discovery of the North America: A Critical, Documentary, and Historic Investigation*, London, Henry Stevens, 1892, p. 659.

あまりにも遠い < Insulam de Brasylie > $^{(30)}$ への航海に出発した。9 カ月間大海を巡った後に、島を見つける事なく、幾多の嵐が理由でその追求を諦めなければならなかった。 $^{(31)}$

ジョンソンは続ける。

「この失敗にも拘らず、翌年には、トリニティー号とジョージ号の2隻の艦船で、第二回目の遠征隊が組織され、Ilha do Brazil の名前を持った確かな島を探して見つける目的で出航した。出発した時、船倉に大量の塩を積んでいた。そのことは、漁場に向かっていた事を良く示すものである。この遠征でも結果は出なかった。1480年と1481年の探検に続いて、他の航海者たちが探索を続けたが、以前のものよりも得るものはあまりなかった。[32]

我々の議論のこの部分を終えるために、ジョンソンの以下の記述をさら に続けよう。

「1498年、駐ロンドン・スペイン特使ペドロ・デ・アヤラが、ブラジルとアンティリアの島を見つける意味において、ブリストル商人たちによって展開された努力に関して情報を報告した。6年間、2隻から4隻の艦船が毎年派遣された。1498年に、ジョン・カボットが5隻の艦船で300人の乗組員と共に出発した時、アイルランド西方のブラジルを探しに行く彼の目的があったことは明らかであった。もし

⁽³⁰⁾ Ibidem.

⁽³¹⁾ Donald S. Johnson, *Phantom Islands of the Atlantic. The legends of seven lands that never were*, New York, Avon Books, 1996, pp. 115-116.

⁽³²⁾ Ibidem, p. 116.

も、その島を見つけたとすれば、その島は東洋への航路の中継地として利用できただろう。コロンブスが、アンティリアの島に関連して、極東への<自分の>航路を考えていたことは、まさにこのことだった。」⁽³³⁾

そして、ジョンソンは結論する。

「ブラジル島を見つける試みは、カボットの航海で終わったように 思われる。それにも拘らず、その島の存在を信じることは、非常に強 く残った。後の世紀には、魅惑的な島の見聞の知らせが続いた。| (34)

ジョンソンの著書の次の章は、興味深い事に「名前の問題の真実の歴史」と題されている。1351年のラウレンティアの港湾海図帳には、ブラジルと読める文字があるが鮮明ではないと言及する。しかし、1367年のピジガーニ兄弟に地図では、そのブラジルという名前はしっかりと読めるけれども、その呼び方は、アイルランド西方の90から100海里のところにある島に付けられている。そして、更に、イギリス海峡西方の三つ目の島にもその名前が付けられるが、地図では頻繁にマン島と呼ばれている。後になって、アソーレス諸島テルセイラ島が、Braçir、Brazilの名前で浮上し、1455年のパレトの地図では、Insula de Brazilとして現れた。ジョンソンは、ブラジルという名前はブラジル木にも用いられ、このようにブ

⁽³³⁾ Ibidem.

⁽³⁴⁾ Ibidem, p. 117. ジョンソンは, ブラジルの他に, 7年ごとに現れていた他の魅惑的な島々について言及する。私が子供の頃, サン・ミゲル島カリェッタスの北の海に面した家に住んでいた祖母から聞いたことを記憶している。リベイラ・グランデの北にあるアグア・デ・パウ山脈の先端のそばに, 7年ごとにひとつの魅惑的な島が現れていた。

ラジルと呼ばれて地図に現れる様々な島々は、可能性としてブラジル木を 産出する土地である。その後、土地の幾つかに言及する。最初として知ら れているのは、982年に既に述べられているウダド・アル・アラムの地理 本(35)である。1193年にも、ふたつのイタリア市都市間の通商条約の中で、 グラナ・デ・ブラジル grana de brasill という用語が現れる。ジョンソン によって言及されている場所のひとつは、アソーレス諸島テルセイラ島で ある。その島は、既に述べられたように、はじめてブラジルの名前と共に 幾多の地図に現れる。ジョンソンによれば、<明らかに、テルセイラ島 は、大西洋におけるその貴重なブラジル木の源であった>。しかしなが ら、〈ブラジル〉は〈パステル〉と類義語で、当時非常に流通していたア ソーレス諸島の染料の産物を除いて、私は、アソーレス諸島におけるそう した生産について決して聞いた事が無い。結局、私の認識する限りでは、 アソーレス諸島におけるその産物は、<ブラジル>ではなく、常に<パス テル>として特定された。その上、ブラジルという名前は、島が発見され る随分前の1385年の地図にテルセイラ島に付けられて現れる。このこと は、発見の前に場所の名前が付けられるもうひとつのケースであり、した がって、最初は、想像上の島の名前を取り扱っていた。周知のように、ポ ルトガル人は、最初はテルセイラ島をイエスの島 Ilha de Jesus と読んだ が、ブラジルという初期の呼び方は、永遠にテルセイラ島に残った。とい うのも、主要都市アングラ・ド・エロイズモの湾を取り囲む山はブラジル 山と名付けられた。

したがって、航海者たちは、ある時期になって、あれがブラジル島で あったと信じることを諦めて、その島を求めて更に南に向かい続けたので あろう。いつのことかは判らないが、可能性として、航海者たちは、<サ

⁽³⁵⁾ 翻訳は V. Minorsky による。 *The Regions of the World; A Persian Geogra- phy*, Edited by C. E. Bosworth, London, Luzac, 1970.

ンタ・クルース島>が、最終的に、随分探してきたブラジル島であったと納得してしまった。当然のことながら、そこで豊富なブラジル木を見つけたが、すでに示したように、ブラジル木は地球上の他の多くの場所にある。それでも、いかなる場所でもブラジルという名前を決定的に授けられなかった。私にとって理解できるように思われるのは、ふたつの要因が交差したことである。昔から探された島、アイルランド西方に向けてヨーロッパの人々の想像を掻き立て始めた島。想像の中を旅させて、更に南へと移動させた。アソーレス諸島を超えて、アンティリャス諸島南部で終わるに至った。決して見つけられなかったもうひとつの伝説の島アンティリア (36) の名前を同様に受けた。

要するに、ブラジルという名前は、「発見」の事業における想像力のもうひとつの証明になるであろう。マカロネシア、アンティリア、西インド諸島、これら全ては実際の発見に先行する名前である。伝説の力が常に激しく働き、真実だと確信された魅惑的で幻影の場所の存在に関する古い物語が、中世ヨーロッパ人が創作した土地を求めて、15世紀、16世紀の航海者たちを導いた。

冷静に考えてみると、ブラジルの場合は、多大な力がなかったのかもしれない。しかし、ヨーロッパの想像上の島々のこの全体の背景の中で、完璧な意味をなすようになったと私は信じる。そこにブラジル木 Pau-Brasil を見つけたという理由だけならば、その土地の名前は、単にブラジルBrasil である代わりにパウ・ブラジル Pau-Brasil となっていただろう。したがって、ふたつの要因が交差したという論拠は、私には理にかなっているように思える。神話であった、そして殆ど2世紀の間熱心に探されたブラジル島は、あまりにも多くのブラジル木を有した南アメリカ大陸のあの

⁽³⁶⁾ アンティリアに関して、以下を参照されたい。Gregory MacIntosh, *The Piri Reis Map of 1513*, Athens and London, University of Georgia Press, 2000.

土地の中で、ポルトガル人の前にやっと現実となって現れたに違いない。

参考文献

- AL-ÂLAM, Hudûd (1970), *The Regions of the World: A Persian Geography*, translated by V. Minorsky, Edited by C. Bosworth. London, Luzac.
- ALLEN, John L. (1976), "Lands of Myth, Waters of Wonder: The Place of Imagination in the History of Geographical Exploration", in *Geographies of the Mind: Essays in the Historical Geography*, ed. David Lowenthal and Marilyn Bowden, New York, Oxford University Press.
- ALMEIDA, Onésimo Teotónio (1990), "Plutarco como possível origem do nome das Ilhas Santanazes do mapa de 1424", in *Boletim do Instituto Histórico da Ilha Terceira*, vol. XLVII, pp. 75-84. Reprinted in Onésimo Teotónio Almeida (2018), *O Século dos Prodígios A Ciência no Portugal da Expansão*, Lisboa, Quetzal.
- CORTESÂO, Armando (1954), The Nautical Chart of 1424 and the Early Discovery and Cartographical Representation of America; a study on the history of early navigation and cartography, Coimbra, University of Coimbra.
- COUTO, Jorge (2016), "Pau-Brasil", in *Dicionário da Expansão Portuguesa*, direcção de Francisco Contente Domingues, vol. 2, Lisboa Círculo de Leitores.
- DODGE, Cameron J. J. (2018), "A Forgotten Century of Brazilwood: The Brazilwood Trade from the Mid-Sixteenth to the Mid-Seventeenth Century", in *e-Journal of Portuguese History*, Vol. 16, number 1.
- DURRELL, Lawrence (1953), Reflections on a Marine Venus: a companion to the landscape of Rhodes, London, Farber & Farber.
- GARCIA, José Manuel (2015), A Descoberta do Brasil por Pedro Álvares Cabral, vol. 8, série Descobrimentos, Lisboa, Jornal Público.
- GILLIS, John R. (2004), *Islands of the Mind. How the human imagination created the Atlantic World*, New York, Palgrave Macmillan.
- HARRISSE, Henri (1892), The Discovery of North America: A Critical Documentary, London, Henry Stevens.
- HIGGINSON, Thomas Wentworth (1899), *Tales of the Enchanted Islands of the Atlantic*, New York, The Macmillan Company.
- JOHNSON, Donald S. (1966), Phantom Islands of the Atlantic. The legends of

- seven lands that never were, New York, Avon Books.
- MCINTOSH, Gregory (2000), *The Piri Reis Map of 1513*, Athens & London, University of Georgia Press.
- PEREIRA, Paulo Jorge Garcia (2006), Enciclopédia dos Lugares Mágicos de Portugal, Lisboa, Jornal Público.
- PEREIRA, Duarte Pacheco (1892), Esmeraldu de Situ Orbis, Lisboa, Imprensa Nacional.
- ROMM, James S. (1992), *The Edges of the Earth in Ancient Thought*, Princeton, Princeton University Press.
- SOUSA, Bernardino José de (1978), *O Pau-brasil na História Nacional*, 2ª ed., São Paulo, Companhia Editora Nacional.
- VESPUCCHI, Americo (2001), "Carta de Américo Vespúcio a Lourenço dei Medici", in Janaína Amado e Luiz Carlos Figueiredo (orgs.), *Brasil 1500: Quarenta Documentos*, São Paulo, Universidade de Brasília.
- VELHO, Álvaro (1861), Roteiro da Viagem de Vasco da Gama em MCCCCX-CVII, 2º ed. correta e augumentada de algumas observações principalmente philologicas por A. Herculano e Barão do Castello de Paiva, Lisboa Imprensa Nacional.
- WESTROPP, Thomas Johnson (1912/1913), "Brasil and the Legendary islands of the North Atlantic: Their History and Fable. A Contribution to the "Atlantis" Problem", in *Proceedings of the Royal Irish Academy: Archeology, Culture, History, Literature*, Vol. 30, pp. 223-260.

(原稿受付 2020年5月7日)

拓殖大学研究所紀要投稿規則

(目的)

第1条 拓殖大学(以下,「本学」という。) に附置する,経営経理研究所,政治経済研究所,言語文化研究所,理工学総合研究所,人文科学研究所,国際開発研究所,日本語教育研究所および地方政治行政研究所(以下,「研究所」という。)が刊行する紀要には,多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し、研究活動の促進に供することを目的とする。

(紀要他)

- 第2条 研究所の紀要は、次の各号のとおりとする。
 - (1) 経営経理研究所紀要『拓殖大学 経営経理研究』
 - (2) 政治経済研究所紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
 - (3) 言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』
 - (4) 理工学総合研究所紀要『拓殖大学 理工学研究報告』
 - (5) 人文科学研究所紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』
 - (6) 国際開発研究所紀要『国際開発学研究』
 - (7) 日本語教育研究所紀要『拓殖大学 日本語教育研究』
 - (8) 地方政治行政研究所紀要『拓殖大学 政治行政研究》
- 2 研究所長は、次の事項について毎年度決定する。
 - (1) 紀要の『執筆予定表』の提出日
 - (2) 投稿する原稿(以下,「投稿原稿」という。)及び紀要の『投稿原稿表紙』の 提出日
 - (3) 投稿原稿の査読等の日程

(投稿資格)

- 第3条 紀要の投稿者(共著の場合,投稿者のうち少なくとも1名)は,原則として研究所の専任教員,兼担研究員および兼任研究員(以下「研究所員」という。)とする。
- 2 研究所の編集委員会が認める場合には、研究所員以外も投稿することができる。
- 3 研究所の編集委員会は、前項に規定する研究所員以外のうち、講師(非常勤) の投稿について、年度1回を限度に認めることができる。

(著作権)

- 第4条 投稿者は、紀要に掲載された著作物が、本学機関リポジトリ(以下「リポジトリ」という。)において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。
- 2 共同執筆として紀要に掲載する場合には、共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し、投稿代表者に承諾書を提出しなければならない。投稿代表者は、共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

(執筆要領および投稿原稿)

- 第5条 投稿原稿は、研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。
- 2 投稿原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。
- 3 学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、紀要 に投稿することはできない(二重投稿の禁止)。

(原稿区分他)

第6条 投稿原稿区分は、次の表1、2のとおり定める。

表1 投稿原稿区分:第2条に規定する理工学総合研究所を除く研究所

(1)論文	研究の課題,方法,結果,含意(考察),技術,表現について明確であり,独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2)研究ノート	研究の中間報告で、将来、論文になりうるもの(論文の形式に準じる)。新しい方法の提示、新しい知見の速報などを含む。
(3)抄録	本条第 5項に該当するもの。
(4)その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿(公開講座記録等)については、編集委員会において取り扱いを判断する。また、編集 委員会が必要と認めた場合には、新たな種類の原稿を掲載することができる。

表 2 投稿原稿区別:理工学総合研究所

(1)論文, (2)研究速報, (3)展望・解説, (4)設計・製図, (5)抄録 (発表作品の概要を含む), (6)その他(公開講座記録等)

2 投稿原稿区分は、投稿者が選定する。ただし、紀要への掲載にあたっては、査

読結果に基づいて、編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。

- 3 紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿 した原稿のキーワードを3~5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の 使用あるいは引用は、認めない。
- 4 研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表(原稿)の投稿原稿区分は、 原則として論文とする。
- 5 研究所研究助成を受けた研究所員が、既に学会等で発表した研究成果(原稿) は、抄録として掲載することができる。

(投稿料他)

- 第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。
- 2 投稿者には、抜き刷りを30部まで無料で贈呈する。但し、査読を受けた論文 等に限る。

(リポジトリへの公開の停止及び削除)

第8条 投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合また は編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には、 リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

(その他)

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、編集委員会の議を以て決 定する。

(改廃)

第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附則

この規則は、令和2年3月1日から施行する。

拓殖大学言語文化研究所紀要『拓殖大学語学研究』執筆要領

1. 発行回数

『拓殖大学語学研究』(以下,「紀要」という)は、原則として年2回発行する。 その発行のため、以下の原稿提出締切日を厳守する。

- (1) 原稿は、6月末日締切-10月発行
- (2) 原稿は、10月末日締切- 3月発行

2. 使用言語

用語は、日本語又は日本語以外の言語とする。ただし、日本語以外の言語での 執筆を希望する場合は、事前に言語文化研究所編集委員会(以下、「編集委員会」 という。)に申し出て、その承諾を得たときは、使用可能とする。

3. 様式

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿(A4 用紙を使用し、横書き、1 行 33 字×27 行でプリント)2 部を編集委員会宛に提出する。

- (1) 数字は、アラビア数字を用いる。
- (2) ローマ字 (及び欧文) の場合は、ダブルスペースで 32 行。1 行の語数は日本語 33 文字分。
- (3) 投稿原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、以下のとおりとする。

1	日本語論文による原稿	20,000字(1行33字×27行)以内	A4 縦版・
2	日本語以外の言語による原稿	20,000字 (ダブルスペース, 20枚) 以内	∫横書

上記分量を超えた投稿原稿は、編集委員会で分割掲載等の制限をおこなうこともある。

投稿者の希望で、本紀要の複数号にわたって、同一タイトルで投稿することはできない。ただし、編集委員会が許可した場合に限り、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で全体像と回数を明示しなければならない。

(4) 上記以外の様式にて、投稿原稿の提出する場合には、編集委員会と協議する。

4. 投稿原稿

(1) 原稿区分は、「拓殖大学 研究所紀要投稿規則」に記載されている種別のいずれかとするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。

- (2) 投稿原稿の受理日は、編集委員会に到着した日とする。
- (3) 投稿は完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿原稿数の関係で、紀要に掲載できない場合には、拓殖大学言語文化研究 所長(以下「所長」という)より、その旨を執筆者に通達する。

5. 図・表・数式の表示

- (1) 図・表の使用は、必要最小限にし、それぞれに通し番号と図・表名を付けて、本文中に挿入位置と原稿用紙上に枠で大きさを指定するする。図・表も分量に含める。
- (2) 図および表は、コンピューター等を使って、きれいに作成すること。
- (3) 数式は、専用ソフトを用いて正確に表現すること。

6. 注・参考文献

- (1) 注は、本文中に(右肩に片パーレンで)通し番号とし、執筆者の意向を尊重して脚注、後注とも可能とする。
- (2) 引用・典拠の表示は各言語の一般的な方式に従うものとする。

7. 執筆予定表の提出

紀要に投稿を希望するものは、『拓殖大学 語学研究』執筆予定表を、指定された期日までに研究所に提出する。

8. 原稿の提出

投稿原稿と一緒に、『拓殖大学 語学研究』投稿原稿表紙に必要事項の記入、「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し、原稿提出期日までに添付する。

9. 原稿の審査・変更・再提出

- (1) 投稿原稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が決定する。編集委員会は、原稿の区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 出された投稿原稿は、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (3) 編集委員会は、投稿者に若干の訂正あるいは書き直しを要請することができる。
- (4) 編集委員会は、紀要に掲載しない事を決定した場合は、所長名の文書でその

旨を執筆者に通達する。

(5) 他の刊行物に既に発表された、もしくは投稿中の原稿は、紀要に投稿することができない。

10. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4版用紙 (縦版、横書き) にプリントした完成原稿1部と電子媒体を提出すること。

電子媒体の提出時には、コンピューターの機種名と使用 OS とソフトウェア名 及びバージョン名を明記すること。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿のデータを保管しておくこと。

11. 校正

投稿原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、編集委員会と所 長が三枚を行う。この際の校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追 補は認めない。

校正は、所長の指示に従い、迅速に行う。

校正が、決められた期日までに行われない場合には、紀要に掲載できないこと もある。

12. 改廃

この要領の改廃は、言語文化研究所会議の議を経て、所長が決定する。

附則

この要領は、平成26年4月1日から施行する。

附則

この要領は、平成29年4月1日から施行する。

付記:「その他」の区分・定義について

1	調査報告:	専門領域に関する調査。
2	資 料:	原稿区分の範疇以外で教育・研究上有用であると考えられるもの。
3	書 評:	専門領域の学術図書についての書評。
4	紹介:	専門領域に関するもの。

執筆者紹介(目次掲載順)

伊藤 知子(いとう・ともこ)商学部助教 朝鮮文学、文学

居村 啓子(い む ら・け い こ) 外国語学部准教授 第二言語学習得、TESOL

大野 英樹 (お お の・え い き) 外国語学部准教授 機能的統語論, 語用論

小野寺美智子(おのでら・み ち こ)政経学部教授 日本語教育、認知言語学

小林 孝郎 (こばやし・た か お) 外国語学部教授 日本語、日本語教育

先川 暢郎 (さきかわ・の ぶ お) 拓殖大学名誉教授 英文学 比較文学

中山慎太郎 (なかやま・しんたろう) 商学部非常勤講師 フランス近現代詩、フランス文学

矢ヶ崎邦彦 (やがさき・くにひこ) 政経学部助教 応用言語学. 社会言語学

渡辺 勉(わたなべ・つとむ)外国語学部教授 英語音声学、言語学

阿久津 智(あくつ・さとる)外国語学部教授 日本語学

浅井 澄民(あ さ い・すみたみ)外国語学部教授 中国語学、中国語史

浜岡 究(はまおか・き わ む)言語文化研究所非常勤講師 ブラジル植民史 ポルトガル語学

拓殖大学 語学研究 第 144 号 ISSN No. 1348-8384

2021年(令和3年)3月19日 印 刷 2021年(令和3年)3月25日 発 行

編 集 拓殖大学言語文化研究所編集委員会

編集委員 佐野正俊 阿久津智 岩崎光一 大野英樹 小林敏宏 末延俊生 永江貴子 平山邦彦 廣澤明彦 藤本淳史 村上祐紀 渡邉俊彦 本橋朋子 濵松法子 中村かおり

発 行 者 拓殖大学言語文化研究所長 佐野正俊

発 行 所 拓殖大学言語文化研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4番地14号

Tel. 03-3947-7595

印刷 所 株式会社 外為印刷